金沢市 北安江遺跡

金沢勤労者プラザ建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

石川県立埋蔵文化財センター

金沢市 北安江遺跡

金沢勤労者プラザ建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、昭和57年と昭和59年の２次にわたって発掘調査を実施した、金沢市北安江町所在の北安江遺跡の調査報告書である。

2　本調査は、石川県商工労働部職業安定課の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査担当者は、昭和57年度（第１次）— 垣内光次郎・三浦純夫・戸澗幹夫・谷内尾晋司、昭和59年度（第２次）— 垣田修児・越坂一也・芝田悟である。

3　調査にあたって、次の諸機関および個人の指導と協力を受けた。記して謝意をのべる
石川考古学研究会、金沢市教育委員会、金沢市北安江町会、日本国有鉄道、石川県水産会館、金沢平安閣、田中孝典、栃木英道、宮本哲郎、倉直志、広多清一、増山仁、坂倉有、金子信之、山崎智男、中島雄二、西川修一、福岡憲章、浅水洋司、西川繁男、東二三郎、黒田正一、新村時雄、八田与三郎、渡辺栄吉、中西清男、比良弥之助、山本覚之助、最里健太郎、宮田ハル、村田清子、西川愛子、中栄ミユキ、北野スイ、坂田アヤ子、山田綾子、田中たまき、高村正雄、高村松子、高柳美代子、高崎春子、高崎道子、北村芳子、竹山くに子、高村緑、

4　遺物の整理は石川県埋蔵文化財協会に委託した。(担当－小屋玲子、米沢富士枝、波佐間節子、馬場正子、新谷由子、戸澗かがり、正木直子、大藤雅男、勝島栄蔵、荒木繁行、滋井真)

5　本書の作成にあたっては、次のように分担執筆し、編集は各担当者の協議のうえ、栃木・谷内尾が担当した。

第１章・第２章・第３章Ⅰ・第４章Ⅰの２～５・第５章Ⅱ……谷内尾
第３章Ⅱ……越坂
第４章Ⅰの１・第５章Ⅰ……栃木
第４章Ⅰの３……垣内
第４章Ⅱ……山本直人
遺物観察表……横川浩将・栃木

6　本書の遺構・遺物挿図の指示は次のとおりである。

(1)　挿図の縮尺は図内に明示した。
(2)　方位はすべて磁北を示す。
(3)　グリッド名称は北東隅杭で代表する。
(4)　水平基準線のレベルは海抜高を示す。

7　本遺跡の遺構・遺物の実測図・写真、出土遺物は石川県立埋蔵文化センターが保管する。

目　　次

第１章　調査の経緯……1
　Ⅰ　第１次調査……1
　Ⅱ　第２次調査……1
第２章　遺跡の環境……2
　Ⅰ　位置と地理的環境……2
　Ⅱ　歴史的環境……2
第３章　遺構……4
　Ⅰ　第１次発掘調査の検出遺構……4
　　(1)　発掘調査区と検出遺構……4
　　(2)　溝状遺構……5
　　(3)　Ｃ16溝……6
　　(4)　Ｃ17溝……11
　　(5)　掘立柱建物跡……12
　　(6)　竪穴状遺構……13
　　(7)　土坑状遺構……14
　Ⅱ　第２次調査の遺構と遺物……15
第４章　遺物……17
　Ⅰ　土器……17
　　1　Ｃ16溝出土土器……17
　　2　Ｃ17溝出土土器……31
　　3　その他の遺構出土土器……32
　　4　包含層出土遺物……33
　　5　その他の土器……34
　Ⅱ　石器と木器……70
　　1　石器と石製品……70
　　2　木器と木製品……75
第５章　考察……86
　Ⅰ　北安江遺跡出土の月影式土器について……86
　Ⅱ　北加賀出土の布留系土器について ― 北安江遺跡出土の布留系甕の分析から ― ……91

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡分布（１：50,000）…3
第２図　発掘調査区……5
第３図　北安江遺跡全体図……7
第４図　Ｃ16溝実測図……9
第５図　Ｃ17溝実測図……11
第６図　１号掘立柱建物跡……12
第７図　２号掘立柱建物跡……12
第８図　３号掘立柱建物跡……12
第９図　４号掘立柱建物跡……13
第10図　５号掘立柱建物跡……13
第11図　竪穴状遺構実測図……13
第12図　Ｄ１号土坑……14
第13図　Ｄ２号土坑……14
第14図　Ｄ３号土坑……14
第15図　Ｄ４号土坑……15
第16図　Ｄ５号土坑……15
第17図　Ｄ６号土坑……15
第18図　Ｄ７号土坑……15
第19図　Ｄ８号土坑……15
第20図　第２次調査出土土器……16
第21図　Ｃ16溝出土甕形土器（Ａ・Ｂ類）形式分類一覧図……18
第22図　Ｃ16溝出上甕形土器（Ｃ～Ｅ類）形式分類一覧図……20
第23図　Ｃ16溝出土壺形土器形式分類一覧図……23
第24図　Ｃ16溝出土高杯・器台形土器形式分類一覧図……26
第25図　Ｃ16溝出土鉢形・小型土器形式分類一覧図……28
第26図　Ｃ16溝出土蓋形土器形式分類一覧図……30
第27図　土器各部の名称……34
第28図　Ｃ16溝上層出土土器……35
第29図　Ｃ16溝上層出土土器……36
第30図　Ｃ16溝上層出土土器……37
第31図　Ｃ16溝上層出土土器……38
第32図　Ｃ16溝上層出土土器……39
第33図　Ｃ16溝上層出土土器……40
第34図　Ｃ16溝上層出土土器……41
第35図　Ｃ16溝上層出土土器……42
第36図　Ｃ16溝上層出土土器……43
第37図　Ｃ16溝上層出土土器……44
第38図　Ｃ16溝上層出土土器……45
第39図　Ｃ16溝上層出土土器……46
第40図　Ｃ16溝上層出土土器……47
第41図　Ｃ16溝上層出土土器……48
第42図　Ｃ16溝上層出土土器……49
第43図　Ｃ16溝上層出土土器……50
第44図　Ｃ16溝上層出土土器……51
第45図　Ｃ16溝下層出土土器……52
第46図　Ｃ16溝下層出土土器……53
第47図　Ｃ16溝下層出土土器……54
第48図　Ｃ16溝下層出土土器……55
第49図　Ｃ16溝下層出土土器……56
第50図　Ｃ16溝下層出土土器……57
第51図　Ｃ16溝下層出土土器……58
第52図　Ｃ16溝下層出土土器……59
第53図　Ｃ16溝下層出土土器……60
第54図　Ｃ16溝下層出土土器……61
第55図　Ｃ16溝下層出土土器……62
第56図　Ｃ17溝出土土器……63
第57図　Ｃ17溝出土土器……64
第58図　Ｃ17溝出土土器……65
第59図　その他の遺構出土土器……66
第60図　その他の遺構出土土器……67

第61図　包含層出土遺物……68
第62図　その他の土器……69
第63図　石器実測図……71
第64図　管玉・勾玉実測図……72
第65図　金沢平野における打製石斧出土遺跡分布図……74
第66図　木器・木製品実測図……79
第67図　木器・木製品実測図……80
第68図　木器・木製品実測図……81
第69図　木器・木製品実測図……82
第70図　木器・木製品実測図……83
第71図　木器・木製品実測図……84
第72図　柱穴内出土礎板実測図……85
第73図　北安江遺跡出土布留系甕口縁部形態分類図……91
第74図　布留系甕各種……92

表　目　次

第１表　Ｃ16溝出土土器器種別構成比……17
第２表　石器一覧表……70
第３表　管玉一覧表……72
第４表　弥生時代～古墳時代前期の打製石斧出土遺跡一覧表……73
第５表　木製品一覧表……77
第６表　北加賀における甕形土器変遷表……98

図　版　目　次

図版１　北安江遺跡俯瞰
図版２　遺跡の全景（遺構検出時 ― 東より）、遺跡の全景（遺構検出時 ― 西より）
図版３　遺構の検出状況（東部）、遺構の検出状況（西部）
図版４　遺構検出後の全景（南東より）、遺構検出後の状況（東より）
図版５　Ａ８溝・Ａ9 溝・Ａ10溝・Ｃ16溝全景（北西より）、Ｂ溝群全景（北より）
図版６　調査区北西部（Ａ11溝・竪穴状遺構 ― 南より）、竪穴状遺構（南より）
図版７　１号掘立柱建物跡とその柱穴
図版８　Ｃ16溝土器出土状態（下層）、Ｃ16溝堆積土層断面
図版９　Ｃ16溝遺物出土状態
図版10　Ｃ16溝遺物出土状態
図版11　Ｃ17溝全景（南より）、Ｃ17溝遺物出土状態
図版12　第２次調査区表土除去作業風景（東より）、第２次調査区第１地点検出の近世溝（北より）、第２次調査区第２地点弥生中期土器出土状況、第２次調査区第２地点遺物出土状況（東より）
図版13　Ｃ16溝出土土器
図版14　Ｃ16溝出土土器

図版15　Ｃ16溝出土土器
図版16　Ｃ16溝出土土器
図版17　Ｃ16溝出土土器
図版18　Ｃ16溝出土土器
図版19　Ｃ16溝出土土器
図版20　Ｃ17溝出土土器
図版21　Ｃ16溝・Ｃ18溝・竪穴状遺溝・Ｃ１溝・包含層出土土器
図版22　須恵器・珠洲焼・越前焼、中・近世の陶磁器類
図版23　打製石斧、磨石・敲石、管玉・勾玉
図版24　穂摘具形木製品、鍬・すりこぎ状木製品等、手網、火鑽臼・火鑽棒

第1章　調査の経緯

I　第1次発掘調査

金沢市北西部の市街地、いわゆる駅西地区において金沢市による大規模な土地区画整理事業が実施されており、北陸線の高架化、金沢駅西口の開設予定と合せ、同地区は金沢の副都心として生まれ変わろうとしている。石川県においても、駅西地区における公共福祉施設の充実と勤労者の労働福祉の向上と健康保持を図るため、教養・文化・スポーツの総合センターの同地区での建設が計画された。昭和57年度に、石川県、金沢市、雇用促進事業団との共同事業により実施されることが決定。昭和59年度完成をめざし、同年10月着工を目途に準備が進められた。北安江町地内に約12,000㎡の建設用地が確保され、建物の基本設計ができあがった同年７月の時点で、事業の直接の窓口となった商工労働部職業安定課から、建設予定地に対する埋蔵文化財分布調査の依頼が県立埋蔵文化財センターに提出された。

これを受けて、同年７月19・20日の２日間にわたって分布調査を実施した。この結果、建設予定地のほぼ全域に埋蔵文化財包含層が存在することが判明した。予定地は、かつては工場用地等に使用され、かなり土層が攪乱されていることが予想されたが、工場基礎により東側の一部が損壊されていたにとどまり、南東部を中心に比較的濃密な包含層の分布が確認された。このため、事前の発掘調査が必要である旨を回答した。新発見の遺跡であったので、職業安定課長から同年７月19日付けで「遺跡発見通知」が提出され、「北安江遺跡」として命名された。事前協議により、建物基礎等に係る約3,100㎡を発掘調査の対象とすることとし、同年８月９日から約3ヶ月間の予定で発掘調査が実施されることとなった。調査は県立埋蔵文化財センターが担当した。

発掘予定地には約50～120㎝ほどの盛土が施されていたため、重機を導入して包含層までの土砂を除去した。多量の土砂盛土のため、この作業に約10日間の日数を費した。遺構等の検出作業が終了したのは10月中旬であり、土器等を多量に廃棄した溝状遺構が発見されるなど予想をうわまわる作業量があり、実測・写真撮影などのすべての現場作業が完了したのは昭和57年11月24日である。第１次発掘調査の整理・報告書刊行事業は昭和58・59年の２ヶ年度にわたって実施した。

II　第2次発掘調査

金沢勤労者プラザ修景工事に伴ない、昭和59年度に第２次発掘調査を実施した。主として、車庫、自転車置場、池、テニスコート等の付随施設に関わるもので、約400㎡を発掘調査の対象とした。調査は昭和59年７月９日から開始し同年８月２日に現場作業を完了した。

なお、遺物整理は、石川県埋蔵文化財協会に昭和57・58・59年度の３ケ年度にわたって委託し、これを実施した。

第2章　遺跡の環境

I　位置と地理的環境

北安江遺跡は金沢市北安江町71街区１番外に所在する。北安江町は市街地の西北部、国鉄金沢駅の北に位置。南端は金沢駅構内に接し、東端は浅野川に並行して走る県道安江町向粟崎線で区切られる。従来は浅野川下流左岸に広がる沖積平野の田園地帯であったが、交通の便が良いことから、工場・住宅等が進出、市街化されたため、現況ではほとんど当時の自然環境を窺うことができない。さらに、金沢市による大規模な土地区画整理事業（駅西開発）が実施されており、現在計画されている北陸本線の高架化、金沢駅西口の開設と合せ、金沢の副都心として生まれ変わろうとしている。特に遺跡の位置する南部は金沢駅に近いため、国鉄の体育館・宿舎・保線区などの国鉄関係の施設のほか、労済会館、石川県水産会館など公共関係の施設が多く所在している。

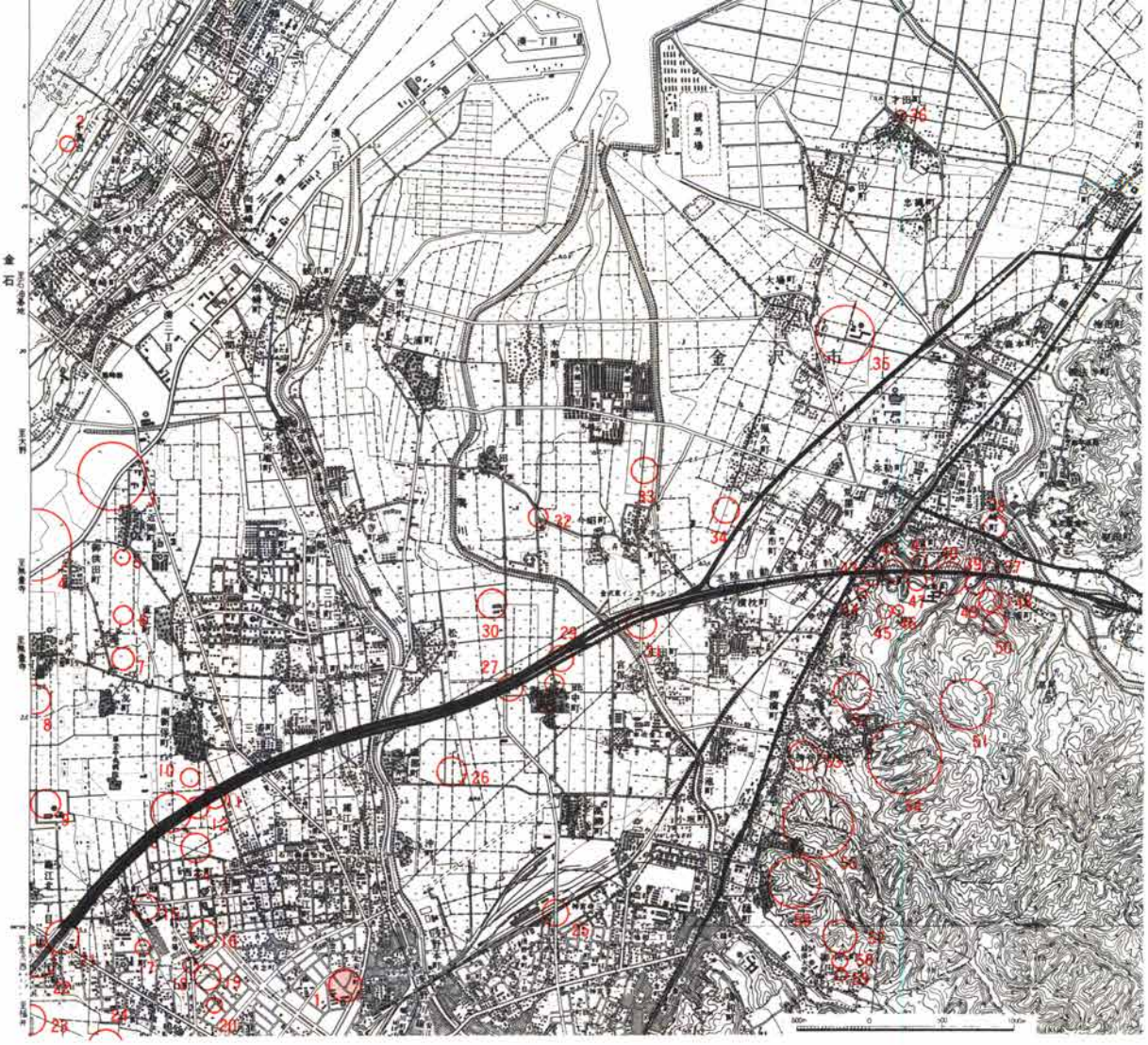
II　歴史的環境

遺跡周辺は、浅野川および犀川が運び出した比較的粘性の高い土壌が堆積する沖積平野で、かては自然湧水地帯であった。また、平野海岸線における砂丘の発達は、その背後に内陸湖や、低湿地帯を形成している。こうした自然環境は初期水田経営にあたっての好条件を提供したものと考えられ、これらの低湿地帯縁辺部を中心に多くの農耕集落が営まれている。特に自然条件に依拠することが多かった弥生中期から古墳時代初期にかけての集落遺跡が濃密に分布し、寺中遺跡、戸水Ｂ遺跡、畝田遺跡、南新保三枚田・Ｂ・Ｃ・Ｄ遺跡、西念・南新保遺跡、無量寺遺跡、金石東遺跡、二口六丁遺跡など発掘調査が実施されたものだけでも列挙にいとまがない。しかし、これらの遺跡群も短期間で廃絶・移動している場合が多く、自然条件にふりまわされた当時の複雑な生活環境を物語っている。それはまた、この地域に安定した乾田農耕が容易に導入しえなかった要因ともなっており、古墳時代中期以降の農耕集落の立地は極めて希薄である。こうした可耕地開発の停滞に基因する生産性の脆弱さは古墳の分布に反映されている。周辺の古墳群としては、金腐川流域の丘陵に立地する小坂古墳群（円墳10基・方墳４基）、御所八ツ塚山古墳群（円墳５基、方墳４基）、犀川左岸の微高地に立地する北塚古墳群（円墳約10基）などが知られるにすぎない。

この荒廃の低湿地帯に人々が再度生産の意欲を燃えたたせるのは律令期に入ってからである。この期の遺跡としては、畝田・無量寺遺跡、藤江Ａ・Ｂ遺跡、大友遺跡、西念・南新保遺跡、金石東遺跡などが知られる。中には相当規模の建物群を持ち、墨書土器等を伴出する有力集落も多い。また大野川河口の大野湊は古代・中世を通じて日本海沿岸の要港として知られ、加賀郡津かとみられる戸水Ｃ遺跡や、中世港湾集落の普正寺遺跡などが発掘調査されている。

参　考　文　献

『角川日本地名大辞典17　石川県』角川書店　1981他



1 北安江遺跡
2 大根布古墳
3 近岡遺跡
4 戸水C遺跡
5 近岡ナカシマ遺跡
6 近岡カンタンボ遺跡
7 大友遺跡
8 戸水オモテ遺跡
9 戸水B遺跡
10南新保C遺跡
11南新保D遺跡
12南新保B遺跡
13南新保三枚田遺跡
14西念・南新保遺跡
15二口六丁B遺跡
16西念ネジタ遺跡
17二口六丁A遺跡
18西念クボ遺跡
19二口シミズ遺跡
20二口町遺跡
21藤江B遺跡
22藤江A遺跡
23出雲じいさまだ遺跡
24薬師堂遺跡
25乙丸遺跡
26勝願寺跡
27田中A遺跡
28田中C遺跡
29田中B遺跡
30松寺遺跡
31千木
ヤシキダ遺跡
32木越光徳寺跡
33千木遺跡
34福久遺跡
35大場遺跡
36才田御亭山
古墳
37塚崎古墳
38塚崎タカキ遺跡
39塚崎大谷遺跡
40吉原七ツ塚遺跡
吉原七ツ塚古墳群
41吉原親王塚古墳
42吉原大門山遺跡
43百坂A遺跡
44百坂B遺跡
45百坂あらや遺跡
46松陵高校
グランド遺跡
47吉原法華堂古墳
48塚崎横穴群
49塚崎・塚崎中世遺跡
50塚崎1号古墳
51御屋敷城跡
52法光寺古墳群
53神谷内A遺跡
54神谷内古墳・横穴群
55小坂古墳群
小坂1号古墳々頂中
世墳墓・経塚
56野間神社裏古墳群
57御所八ツ塚山古墳群
58御所二条館跡
59御所遺跡

第 1 図　周辺の遺跡分布　1：50,000　（国土地理院1：25,000「金沢」「粟崎」分載）

第3章　遺　　構

Ⅰ　第1次発掘調査の検出遺構

(1)　発掘調査区と検出遺構

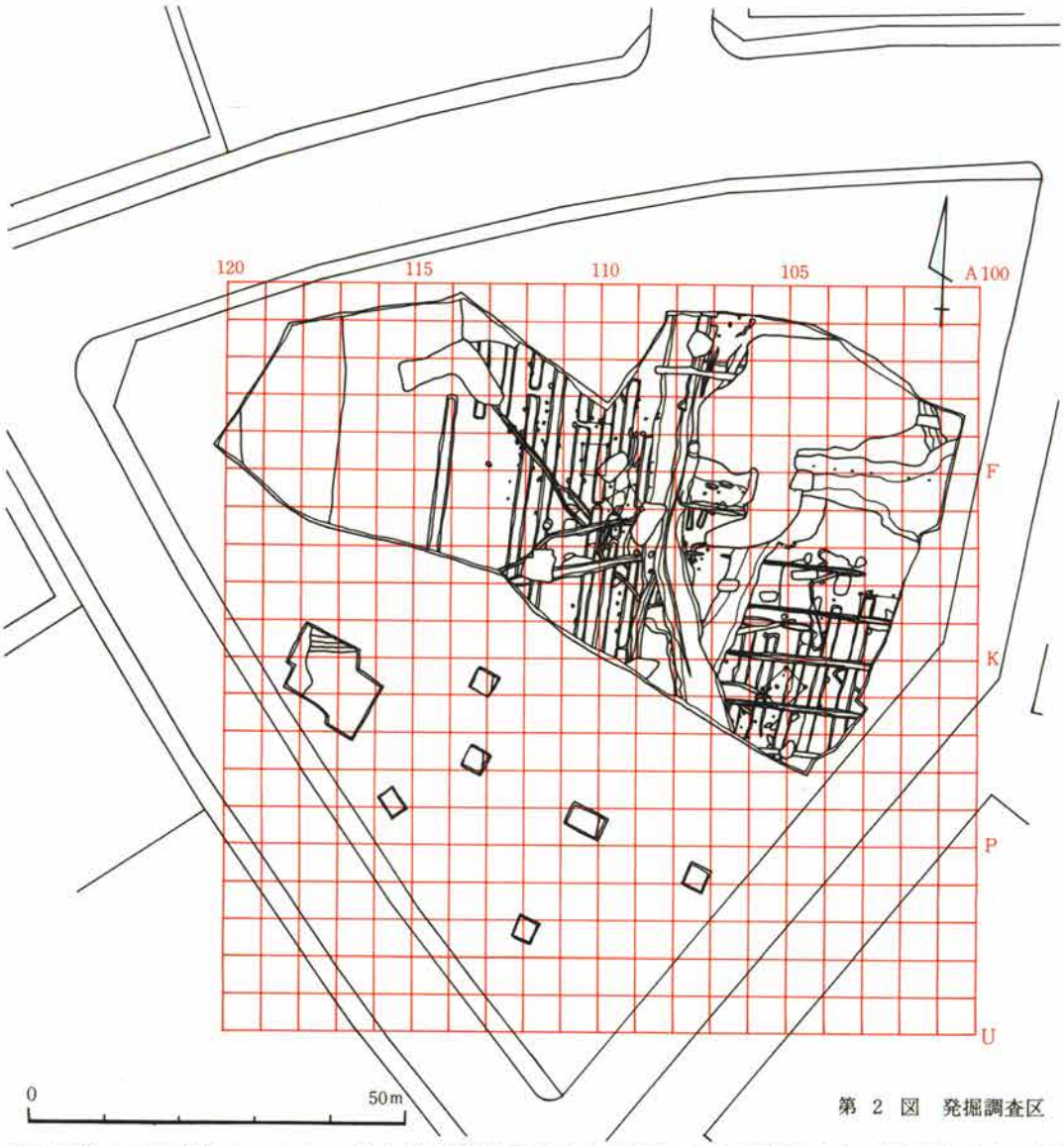
調査区の設定　発掘調査対象範囲を直接構造物基礎などに係る部分に限定した。建設用地は一辺約130ｍ前後の略三角形を呈し、建物本体はその北部に設計されているため、第2図に示した範囲に調査区を設定した。また、建物付随施設などは第1次調査段階ではまだ流動的であったため調査対象から除外した。調査区はやや不整形なＬ字状を呈し、東西約100ｍ、南北約50ｍ、延面積約3,100㎡の規模である。調査にあたって、調査区北東端を基準にして、一辺5ｍ方眼を単位とするグリッド区画割を100ｍ四方にわたって設定した。区画軸は磁北とし、東西軸を数字、南北軸をアルファベットで表示する。

調査区の層序　調査地点はかつて工場用地等に使用され、地表面にコンクリートの基礎や、その残骸がいたるところに露呈し、土層の攪乱が著しいものと予想された。工場敷地造成の際の客土は、地形的に高い南東部で約50㎝前後、地形的に低所にあたる北西部で100㎝前後である。客土するにあたって、高所にあたる南東部では水田耕土を一部除去しているが、北西半部では水田面に直接盛土している。このため、南東部では客土工事の際に一部地山面まで削平されるなど攪乱が著しい。しかし、西半部では観察可能であり、その基本層序は、旧水田耕土および床土直下に暗灰褐色土層が堆積し、本遺跡の基盤層（地山）とした黄褐色弱粘質土層に達する。遺構は暗灰褐色土層上面と地山面の2面から掘り込まれるものがあり、重複関係にあったが、南西部との層序関連から地山面で検出作業を行った。時期的には、古墳時代前期以前のものは地山面で検出され、平安時代以後のものは暗灰褐色土層上面で検出可能であった。地山面の標高は、南東部で海抜約6ｍ、北西部で海抜約5.3ｍを測り、地形的には北西部方向に約0.7ｍの比高差をもってゆるやかに傾斜している。

攪乱状況　調査区北東部から中央部（Ｆ107・Ｈ106区）にかけて、長径約30ｍ、深さ約4ｍの大攪乱穴が拡がっている以外は、工場基礎とみられる10㎡前後の長方形攪乱が一定間隔をおいて東半部を中心にみとめられる程度で、当初予想したほどではなく、遺構の検出が可能であった。

遺構の分布　検出遺構は、溝状遺構（42条）、掘立柱建物跡（5棟）、竪穴状遺構（1棟）、土坑状遺構（8基）、柱穴状遺構（約150個）である。その分布は、溝状遺構がほぼ全域にみとめられる以外は、調査区中央部より東に集中している。特に古墳時代前期以前の遺構は地形的に高位にあたる東半部に限定され、本遺跡の主体は東側に存在したものと推定される。また、Ｃ16溝より本遺跡出土の9割以上の遺物が出土しており、この溝より西側での遺物の出土がほとんどなかったことから、この溝で集落の範囲が画されていた可能性が強い。

検出遺構の主体である溝状遺構は、伴出遺物をもつものが少なく、時期決定が難かしいが、相互の重複関係から、東西に規則性をもって走る溝を中心にＡ溝としたものは昭和期の所産であり



第 2 図　発掘調査区

調査対象から除外した。また、柱穴状遺構約150以上を検出したが、建物跡として抽出しえたのは5棟にすぎなかった。掘込み形状の不定形なものが多く、覆土も昭和期の攪乱土に近いことからそのほとんどは小規模な攪乱穴であると思われる。土坑状遺構も同様で、比較的形状が整い覆土も良好な8基を遺構として抽出するにとどめた。

(2)　溝状遺構（第3図・図版5・6）

A8溝・A9溝　調査区のほぼ中央部をやや西側に湾曲しながら南北に走る溝である。A8溝は、幅約6m、深さ約0.6mのなだらかな断面U字状をなし、南部でC16溝を切っている。A9溝はA8溝の中央部を掘り返した溝で、幅約2m、深さ約0.8mを測る。遺構の重複関係や、底面近くから近・現代の土器が出土していることから、昭和期まで存在した溝と考える。

A11溝　調査区北東部を東西に走る溝状をなす落込みで、幅は調査区東壁で約15m、攪乱部よりで約6mを測り、急激に幅を減じている。底面近くより、中・近代の遺物が出土している。

B（1～14）溝　調査区のほぼ全面を占めて、南北に平行する14条の溝である。約1.8m前後の

間隔を保って平行し、幅約1.5m前後、深さ約15cm前後の規模をもち、底面は平坦に整えられている。溝内よりの出土遺物は極めて乏しいが、近・現代遺物の出土はなく、中世陶磁器の細片が少量出土をみていることから、中世期の所産である可能性が強い。

C1溝・C2溝　調査区中央部南よりに位置し、ほぼ東西に平行して走る溝である。C1溝は幅約1.5m、深さ約15cmの比較的浅い断面U字状を呈する。C2溝は幅約0.8m、深さ25cmを測り断面逆台形を呈する。他の溝との重複関係はB（1～6）溝に切られ、C3溝を切っている。伴出遺物より13世紀前半の所産と考える。

C3溝・C4溝・C5溝・C13溝　調査区中央部を南東から北西方向に横切る溝で、他の遺構に分断されているが、C3溝・C5溝・C13溝は元来は同一溝であり、C4溝はF112区あたりでC3溝に合流している。規模は合流点付近で幅約60cm前後、深さ20cm前後を測る。時期判定しうる伴出遺物は皆無であるが、重複関係よりC1溝・C2溝に先行する時期の所産と考える。

C6溝　調査区中央部南側で検出された溝でほぼ南北に走る。幅約1.5m、深さ約25～30cmを測り、断面はゆるやかなU字状をなす。ほぼ全域から土器細片を出土。若干の須恵器細片を含むがこれはC5溝などの重複による混入品であり、C6溝そのものは月影期の所産と考える。

C7溝・C9溝・C10溝・C11溝　いずれも溝状をなす浅い掘込み遺構で、削平および攪乱されており形状は不明。C11溝などの伴出土器から古墳時代前期の所産であろう。

C8溝　ほぼ直角に折れL字状を呈する。長辺約9m、短辺約7mを測る。上部が削平されているため幅約1m、深さ約15cm前後、断面はゆるやかなU字状を呈する。竪穴状遺構に先行する。

C12溝・C14溝　東側よりC16溝に流入する細長い溝で、東端はいずれも削平されている。C12溝は西端で幅約60cm、深さ約15cmを測り、断面はU字状を呈する。時期は古墳時代前期。

C15溝　調査区南東端に位置する。長さ約450cm，幅約80cm、深さ25cmを測る。

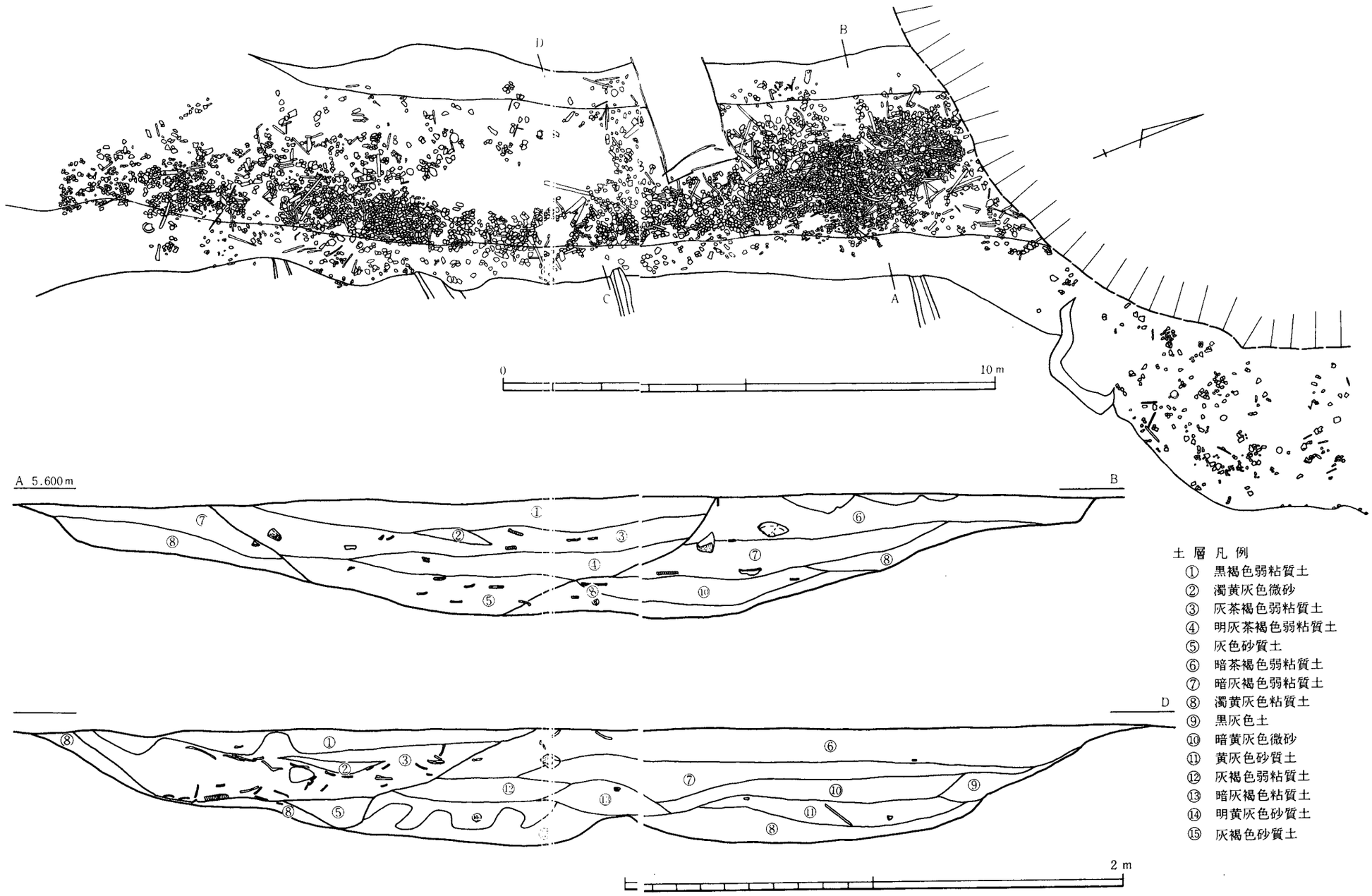
C18溝　西側の一部を残すのみで他は攪乱され形状は不明であるが、その位置からC16溝の北延長の一部と推定される。C16溝と同じく土器が多量に投棄されている。

(3)　C16溝（第4図・図版8～10）

規模と形態　北は大規模な攪乱穴で、南はA8溝で切り取られているが、N－25°－E方向に走る溝である。少なくとも過去3回以上にわたって掘り返しが行われているが、現状検出地山面での規模は幅約450cm前後、深さ45～50cmを測る。断面はゆるやかなU字状を呈する。北部東岸の落込み部がゆるやかで、やや東側に広がっているため、上面プランは不整形であるが、底部軸線はほぼ直線的に延びている。

層序と遺物出土状態　土層観察用ベルトをA－BおよびC－Dラインの2地点に設定。A－Bラインでは溝底断面はなだらかなU字状を描くが、C－Dラインでは溝底中央部がやや盛り上り、溝底断面はW字状となる。この中央部の起伏を境として堆積層序の変化が看取され、溝が東側に掘り広げられていることが層序の切合い関係からわかる。拡張前の溝をⅠ期の溝、拡張後の溝をⅡ期の溝とする。Ⅰ期の溝の規模は幅約250cm前後、深さ約45cm前後であり、また、Ⅱ期の溝は現状の検出規模に近いものであったと想定しうる。このⅡ期の溝が完全に埋没した後、やや東側に

第 3 図　北安江遺跡全体図


D
B
C
A
0
10 m
A 5.600 m
B
D
2 m
土 層 凡 例
① 黒褐色弱粘質土
② 濁黄灰色微砂
③ 灰茶褐色弱粘質土
④ 明灰茶褐色弱粘質土
⑤ 灰色砂質土
⑥ 暗茶褐色弱粘質土
⑦ 暗灰褐色弱粘質土
⑧ 濁黄灰色粘質土
⑨ 黒灰色土
⑩ 暗黄灰色微砂
⑪ 黄灰色砂質土
⑫ 灰褐色弱粘質土
⑬ 暗灰褐色粘質土
⑭ 明黄灰色砂質土
⑮ 灰褐色砂質土

第 4 図 C16溝実測図

偏って幅約200cm、深さ約50cm前後の断面V字形に近い溝が掘られており、これをIII期の溝とする。各溝の堆積土層は、I・II期の溝が比較的粘性の弱い黄灰色あるいは灰褐色の砂質土を主体としているのに対して、III期の溝は灰茶褐色あるいは黒褐色系の弱粘性土が堆積する。

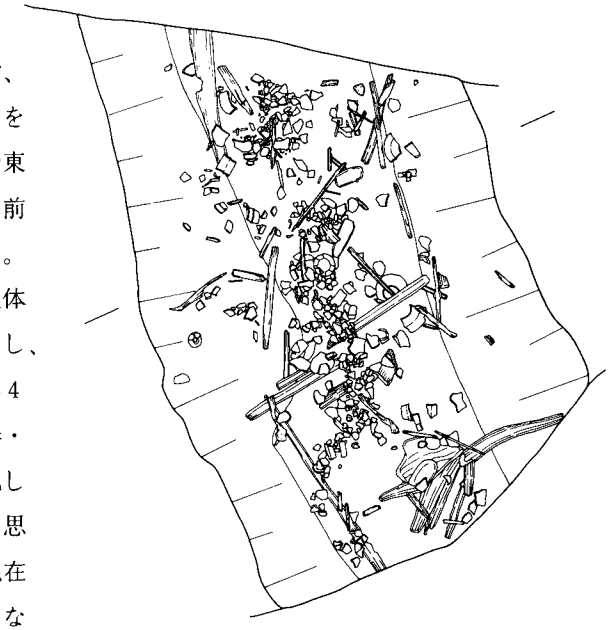
遺物はそのほとんどがIII期の溝から集中して出土している。第3層とした灰褐色弱粘質土層が最も遺物を包含する。またその出土状態は溝東側に集中する傾向を示し、そのほとんどが、東側からの投棄によるものと思われる。II期の溝では、第6・7層から遺物の出土をみるが希薄であり、I期の溝からはほとんど遺物の出土はなかった。

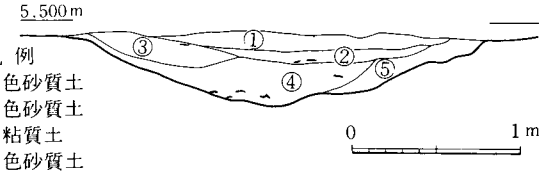
溝は少なくとも3時期にわたっており、遺物の取上げもその層序に従うべきであったが、平面発掘ではその識別が困難であり、便宜上2回に分けて行った。上位出土のものを上層出土、下位出土のものを下層出土としたが、層序の事実関係に基づいたものではない。出土土器は、弥生時代後期から古墳時代前期（高畠期）にわたっており、高畠期に最終的に廃絶したものと推定される。

(4)　C17溝（第5図・図版11）

規模と形態　調査区北東隅で検出した溝で、南部がA11溝で切取られており、延長約6mを確認したにすぎない。N－20°－W方向にやや東に湾曲ぎみに延び、幅約250cm前後、深さ45cm前後を測り、断面はゆるやかなU字状を呈する。

層序と遺物出土状態　濁青灰色砂質土を主体に淡灰色あるいは黄茶褐色砂質土が覆土をなし、黒褐色腐蝕土系の堆積はみとめられない。第4層とした濁青灰色砂質土層は土器および木器・自然木を包含する。土器はほとんどが破片化しており、溝の廃絶に伴ない投棄されたものと思われる。土器は月影期から高畠期のものが混在し、C16溝と同様に堆積層序による整合性はない。





土層凡例
① 明茶褐色砂質土
② 黄茶褐色砂質土
③ 淡灰色粘質土
④ 濁青灰色砂質土
⑤ 明灰色粘質土

第5図　C17溝実測図

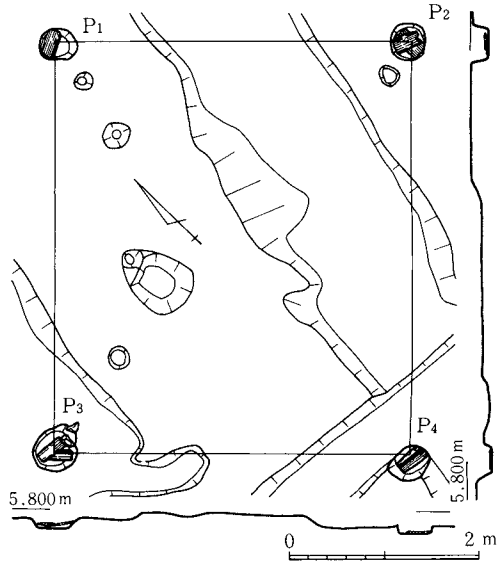
(5) 掘立柱建物跡（第６～10図・図版７）

１号掘立柱建物跡（第６図）　調査区南東部で検出した１間×１間の長方形プランの掘立柱建物である。規模は長辺（桁行）480cm、短辺（梁行）380cmを測る。桁行方位はＮ－45°－Ｅである。柱穴は素掘で底に１枚ないし２枚重ねの礎板を敷く。柱穴は、検出面で径35cm前後、深さは20cm前後を測る。造築時期は、礎板を用いていることや、Ｃ３溝・Ｃ５溝などと方向を同じくすることから、平安期に遡るものと推定される。

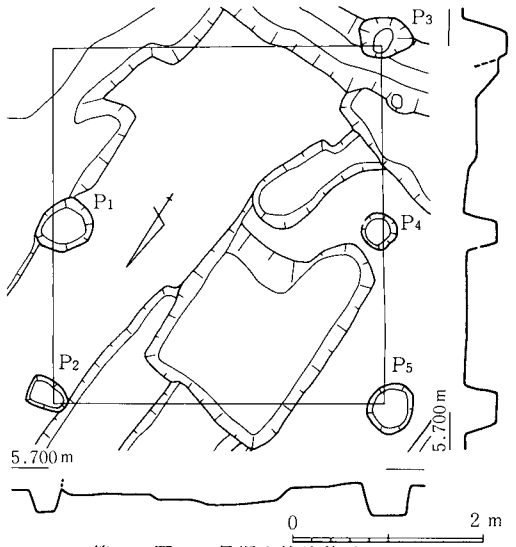
２号掘立柱建物跡（第７図）　調査区中央部で検出した２間×１間の掘立柱建物である。桁行方位はＮ－32°－Ｗ。規模は桁行380cm、梁行350cmを測る。柱穴径は50cmから35cmとやや規格性に欠ける。検出面よりの深さは約40cm前後で、底面レベルはほぼ均一である。１号掘立柱建物跡やＣ３溝と方向をほぼ同一にすることから、同時期の所産である可能性が高い。

３号掘立柱建物跡（第８図）　調査区東部で東壁に接して検出された掘立柱建物で、東に延びる可能性もあるが、２間×１間の建物とした。やや変形した台形プランをとり、北桁行425cm、南桁行430cm、東梁行350cm、西梁行320cmの規模をもつ。南桁行方位はＮ－83°－Ｗ。柱穴は径25～30cm、深さ10cm前後と小さくわずかに痕跡を残す程度である。時期は不明。

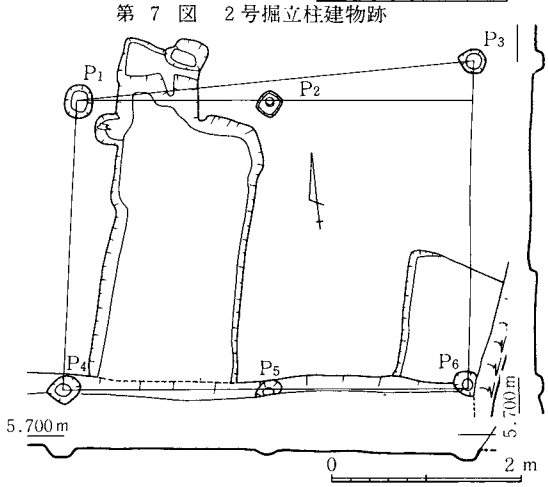
４号掘立柱建物跡（第９図）　２号掘立柱建物跡の北西に位置する２間×１間の掘立柱建物で桁行方位はＮ－3°－Ｅとほぼ磁北。規模は桁行400cm、梁行340cmを測る。柱穴は径35cm前後と小さいが２段に掘込まれている。深さはＰ４柱穴で40cm。造築時期は中世以降と推定される。



第６図　１号掘立柱建物跡

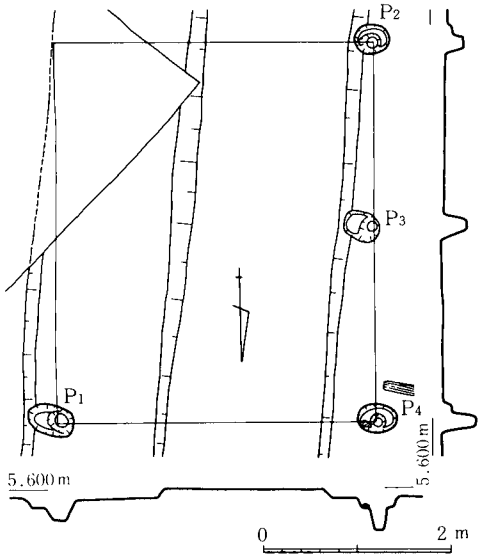


第７図　２号掘立柱建物跡

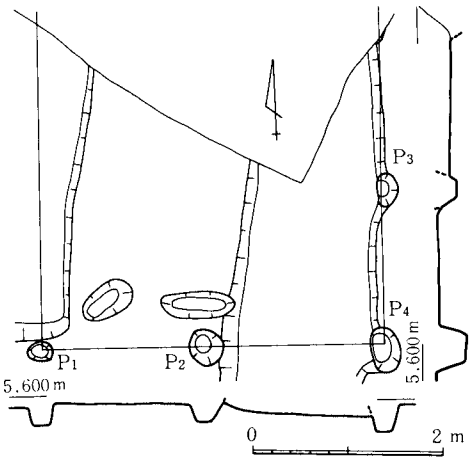


第８図　３号掘立柱建物跡

5号掘立柱建物跡（第10図）　4号掘立柱建物跡の北に桁行方向をほぼ同一にして位置する。北側が調査区外に延びるため、規模・構造は不明。南梁行長は360cmを測る。柱穴は径、深さともにややばらつきがあり、P2柱穴で径35cm、深さ約20cmを測る。時期は中世以降と推定。



第 9 図　4号掘立柱建物跡

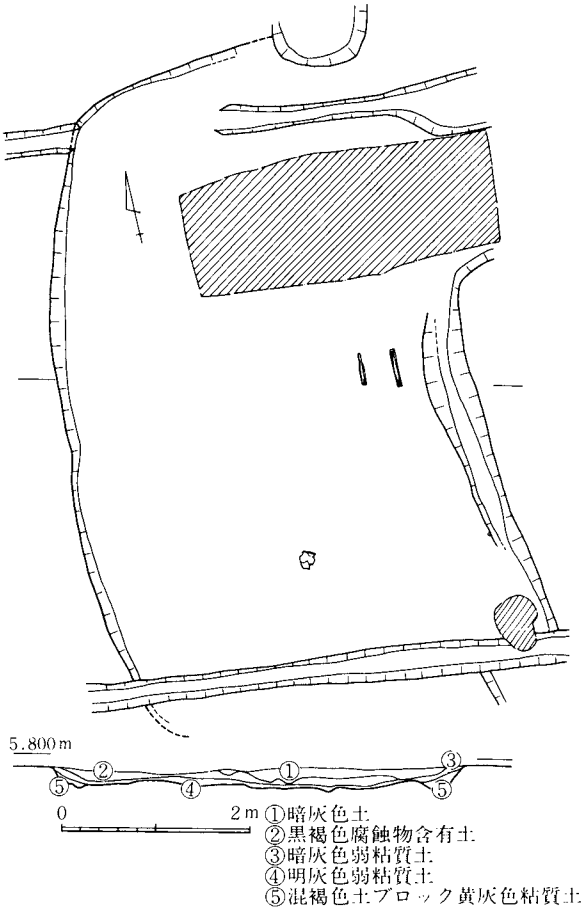


第 10 図　5号掘立柱建物跡

(6)　竪穴状遺構（第11図・図版6）

規模と形態　C16溝の東約3m隔てた地点で検出された竪穴状を呈する落込み遺構である。西辺および北辺の一部を除いては他の遺構の重複または攪乱・削平されているため全体プランは不明である。検出上面での推定形態は、長径約7m、短径約4.5mの隅丸長方形を呈する。東壁で深さ約20cmを測り、床面はやや凹凸があるがほぼ平坦に整えられている。東壁に沿って幅約10cm、深さ3cm前後の不明瞭な溝が一部検出されたが、竪穴周溝と断定しうるものではない。また床面より柱穴および炉跡などの痕跡は検出されなかった。

黒褐色腐蝕物含有層　床面より約5cmほど浮いて、腐蝕物を多量に含有する黒褐色土層の堆積が約350cm×450cmの長方形の範囲にみとめられた。特に下部にお



第 11 図　竪穴状遺構実測図

いては繊維質の腐蝕物が平面的に敷き詰められたような状態で分布し、下の明灰色粘質土層とは容易に分離しえた。本遺構よりの出土遺物は僅少であるが、すべてこの上面より出土しており、本遺構に〝ムシロ〟のようなものが敷かれていた可能性が強い。造築時期は出土土器より高畠期と推定する。

(7) 土坑状遺構

Ｄ１土坑（第12図）　Ｃ２溝の北に位置する円形土坑。西半部をＢ２溝が切る。平面プランは略円形で長径160cm、深さ40cm。

Ｄ２土坑（第13図）　Ａ６溝の北に位置する不整形土坑。平面プランは三角形に近く、長径170cm、短径120cm、深さ約30cm。壁および底面は不整形で凹凸がある。弥生中期初頭の土器片出土。

Ｄ３土坑（第14図）　Ａ３溝の南に位置する不整形土坑。東半部をＢ14溝が切るため全体形は不明。さらに上部が削平されているため、検出面よりの深さは約10cmにすぎない。

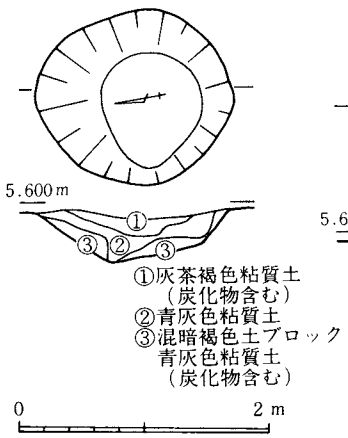
Ｄ４土坑（第15図）　Ｄ３土坑の東に位置する不整形土坑。東部は調査外に延び、西部はＢ14溝が切るため、全体形は不明。検出面よりの深さは約15cmにすぎない。

Ｄ５土坑（第16図）　Ｃ７溝の北に位置する不整形土坑。北半部上面は攪乱されている。検出面での規模は、長径170cm、短径80cm、深さ18cmを測る。上面プランは不整形であるが、底面は平坦に整えられている。

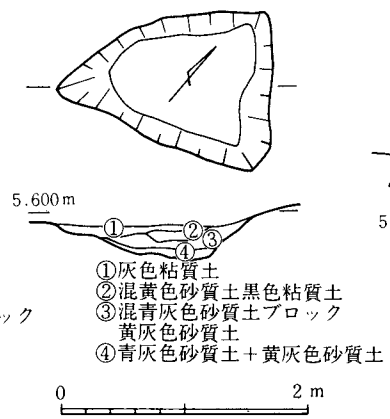
Ｄ６土坑（第17図）　Ａ８溝の溝底で検出された円形土坑。東部は攪乱され、西部はＡ９溝が切るため、全体形は不明であるが、長円形土坑と推定。現存規模は径205cm、深さ30cmを測る。

Ｄ７土坑（第18図）　調査区北部Ａ９溝の東に位置する長方形土坑。上面プランは隅丸長方形を呈し、長径約200cm、短径95cm、深さ32cmを測る。壁および底面は平滑に整えられている。

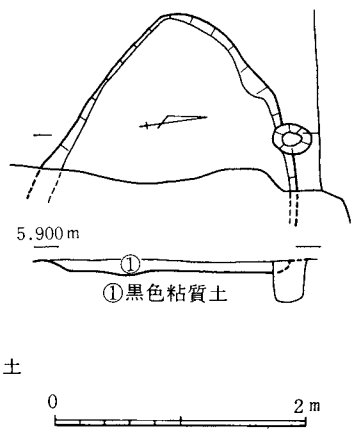
Ｄ８土坑（第19図）　Ａ８溝の溝底で検出された円形土坑。上部はＡ８溝が、東半部はＡ９溝が切る。現存規模は径85cm、深さ約50cmを測る。底面は平坦に整えられ円筒状をなす。



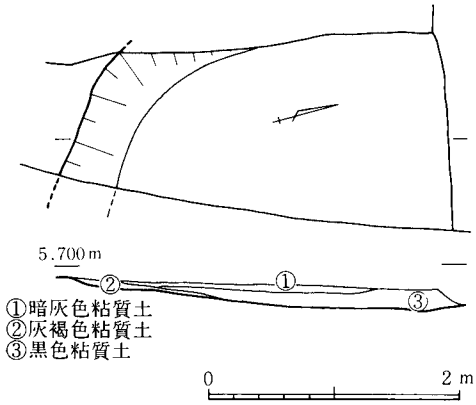
第 12 図　Ｄ１号土坑



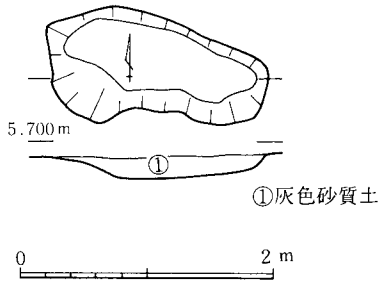
第 13 図　Ｄ２号土坑



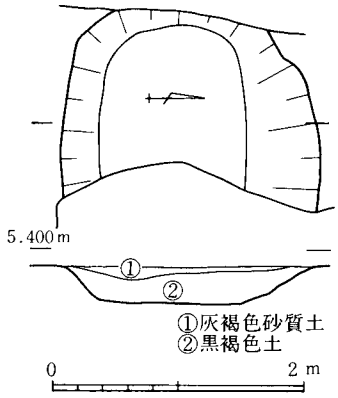
第 14 図　Ｄ３号土坑



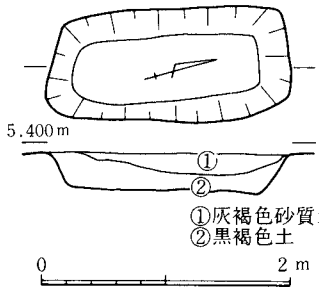
第 15 図　D 4 号土坑



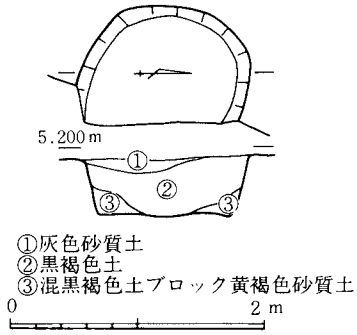
第 16 図　D 5 号土坑



第 17 図　D 6 号土坑



第 18 図　D 7 号土坑



第 19 図　D 8 号土坑

II　第 2 次調査の遺構と遺物

第 2 次調査では池・カスケード・車庫・照明燈建設予定地の 8 地点、面積約200m²(立ち合い調査箇所を除く）を発掘し、8 条の溝状遺構を検出した（第 3 図参照)。いずれも第 1 次調査の際に検出された遺構とつながるものであるが、なにぶんにも小規模で部分的な発掘調査であったためその詳細を明らかにすることはできなかった。なお第 2 地点はグリッド全体が溝状遺構で、おそらく第 1 次調査のＡ 8 号溝と同一のものと思われるが、先の調査で得られなかった弥生中期末の土器が出土している。

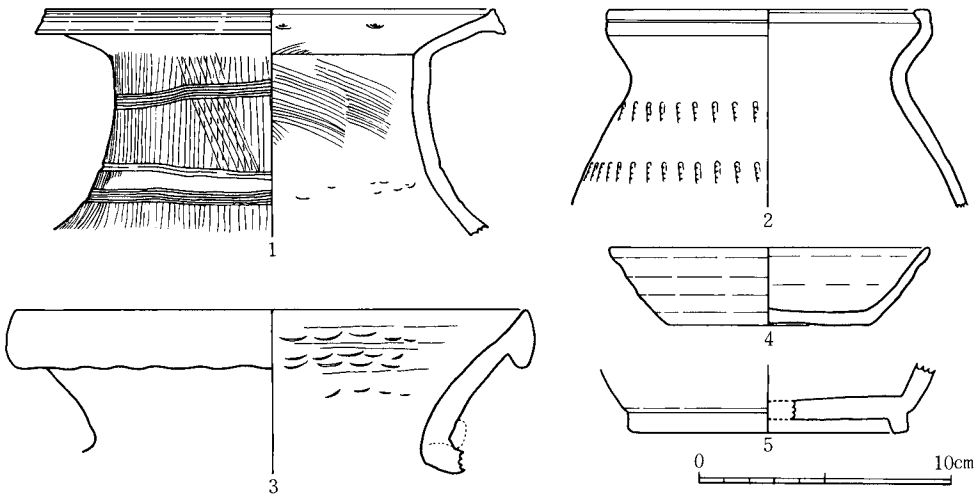
土器は破片総数1,294点におよび、特に第 2・3 地点の遺構から多量に出土している（破片総数の74%)。その内訳は弥生中期末の土器 2 点[1]、弥生後期から古墳前期にかけての土器1,249点、奈良・平安の須恵器 9 点、土師器 1 点、中世陶器 3 点、近世陶磁器30点である。しかしながら破片のほとんどすべてが小片であるためにその内容を明確に把握できるものは第20図に示した 5 点にすぎない。 1 は口縁が頸部から大きく外反する口径18cmの壺形土器で、第 2 地点より出土している。口唇には 3 条の凹線、口縁部には横ナデ調整を施す。頸部には粗いハケ目調整後、 5 条の櫛状工具による沈線文、ヘラ状工具による沈線文を施す。また内面は口縁部に横ナデ調整後、櫛状工具

による扇形文、頸部にハケ目調整を施す。なお頸下部内面には指頭圧痕とその際につけられたと思われる下向きの爪の跡が残されている。にぶい黄橙色を呈し焼成は良好。本土器は弥生中期末の戸水B式に比定される。2は肩部から「く」の字状に外反する口縁を折り込み、端部に面取りを施した受口状口縁をもつ口径12.8cmの小型甕形土器で、これも第2地点の出土。口縁には1条の凹線を、胴上部には4～5条の櫛状工具による刺突文を施す。胴部内面には指頭圧痕が認められる。本土器も戸水B式に比定される。3は肩部から「く」の字状に外反する口縁の先端を外側に折り返した甕形土器で、第3地点の溝状遺構の出土。口径20.4cm、にぶい橙色を呈する焼成不良の土器で、胎土には粗粒砂を多く混入する。口縁の屈曲部には突帯の貼付されていた痕跡が認められる。弥生後期頃のものと思われる。4は口径12.6cm、器高3.1cmをはかる須恵器坏で3と同じ遺構の出土。体部から口縁部にかけてわずかに外反する器形で、横ナデ調整が施される。青灰色を呈し焼成はやや不良、胎土に石英粒を含む。5は灰白色を呈する焼成不良の須恵器有台坏で4と同じ地点より出土。4・5ともに奈良時代末から平安時代初め頃のものと思われる。

第2次調査の結果、北安江遺跡は南側にいくにしたがって遺構密度が希薄になることが判明した。しかしながら第2地点において弥生中期末の戸水B式土器が出土したことは特筆に値し、かってこの周辺に該期の集落が営まれていた可能性が高まった。

註

(1) 器形の判別可能な土器は2点であるが、小片が多いため次の弥生後期から古墳時代初めの土器 1,249点の中に弥生中期末の土器が混入していることも十分考えられる。



第 20 図　第2次調査出土土器

第4章　遺　　物

Ⅰ　土器

1.　C16溝出土土器

C16溝から出土した土器は、実測し得ただけでも上層で224点、下層で178点、計402点を数える。器種は、甕形土器・壺形土器・高坏形土器・器台形土器・鉢形土器・小形土器（手捏ね土器を含む）・その他からなる。図化不能なものを含めた器種別構成比は右表（第1表）のとおりである。なお図化不能なものの個体数は、甕形土器・壺形土器・鉢形土器等については口縁部片を数え、全周の$\frac{1}{4}$程度のものを0.25、$\frac{1}{8}$程度のものを0.125点とし、合計したのち小数点以下第1位を四捨五入した。高坏形土器・器台形土器については、脚上位の屈曲部を含む破片を1個体として数えた。

第1表　C16溝出土土器器種別構成北

器種		構成比(%)	個数	実測個数
甕	A	25.2	310	45
	B	6.1	75	17
	C	6.1	75	43
	D	0.3	4	4
	E	0.2	2	2
甕小計		37.9	466	111
壺		12.5	154	55
高坏		18.7	230	73
器台		9.9	122	31
鉢		7.3	90	34
小型土器		2.8	35	21
蓋		7.2	88	32
その他		3.7	45	45
合計		100.0	1,230	402

(1)　甕形土器　（第28図～第33図・第45図～第48図、第33図67を除く）

甕形土器の分類にあたっては、主として口縁部の形態に注目し、擬凹線有段口縁系のものを甕A、無文(ナデ)有段口縁系のものを甕B、「くの字」口縁系のものを甕C、付加状口縁系のものを甕D、受口状口縁系・「S字」状口縁系のものを甕Eとした。さらに、これら5つのグループのそれぞれについて、甕Aを4小形式に、甕Bを7小形式に、甕Cを10小形式に、甕Dを2小形式に、甕Eを2小形式に細分した。細分類についても、その根拠は主に口縁形態に求めたが、法量が他と明瞭に異なるものは、必要に応じて小型・中型・大型と分類した。

甕A類　（第28図・第29図・第45図・第46図）

有段口縁体外面に擬凹線文を巡らせた甕A類は、外面は頸部を横ナデ、肩部以下をハケ状具によって調整し、内面は口～頸部を横ナデ、肩部以下をヘラ削りによって仕上げたものが大多数を占める。内面の口縁部に指頭圧痕を、頸部にハケ調整痕を残している例もそれぞれ多い。

甕AⅠ　（第45図7・8）

口径11cm前後、器高12cmを測る小型甕である。口縁部は内湾ぎみであまり外傾しない。体部は最大径を胴上半部に置く肩の張らない倒卵型で、不安定な平底をもつ。口端部は7が比較的厚く、8は先細りしている。8は胴部内面にヘラ削り痕のほかハケ調整痕が認められる。

甕AⅡ　（第45図10）

口縁帯の幅が狭いものである。同部は外傾するがほとんど外反しない。内面の口縁上位に指頭

圧痕がみられる。口径18.4cmを測る。

甕ＡⅢ　（第29図14）

口縁部がそれほど外傾・外反しないものである。口端部はやや厚く丸みをおびている。口縁部外面の擬凹線文（４条）は、中位にのみみられる。肩部は外下方へ大きく張り出している。口径17.8cmを測る。

甕ＡⅣ　（第28図１～12・第29図13・15～22・第45図１～６・９・11・12・第46図13～23）

ＡⅣ類は、さらに少なくとも５つ以上に細分が可能だと思われるが、もしそれらを小形式とした場合、その差異が漸次的であるために、中間的なタイプが多くできてしまう。したがって、これら41点をＡⅣ類として一括した。ＡⅣ類は比較的幅広の口縁部が概ね外傾・外反する。体部は最大径を胴上半部に置き、肩の張る倒卵形になると思われる。口径14～24cmと法量的にもややもばらつきが目立つ。以下、特徴的な土器について簡単に説明したい。

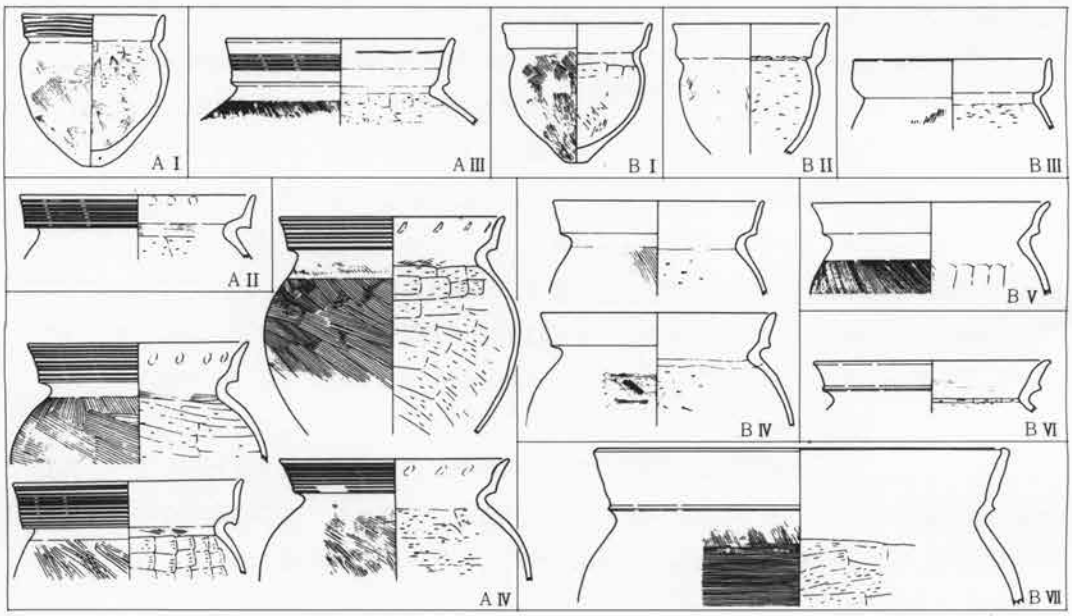
第45図９は、口縁部がやや外傾するもののほとんど外反しない。外面上位には擬凹線文は施されない。肩部外面のハケ調整は、ほぼ縦方向のようである。口径13.6cmとやや小型である。

第29図19・20などは、口縁部内面の屈曲が明瞭で比較的シャープである。口縁部はあまり外反しない。

第29図13・22・第46図14などは、口縁部内面の屈曲部が強いナデによって大きく抉られたように凹み、凹部から端部への境界部分に指頭圧痕を顕著に観察し得る。このことは、口縁部（特に口端部）が外側へ大きく折りまげたように外反することと関係するのであろう。

第46図17・18などは、口縁部内面は凹むもののその度合いは小さく、むしろ「くの字」口縁に近いものである。口縁部全体が外傾・外反しているといってよいかもしれない。

第45図11・第46図13・23は、口縁帯の幅が広く、外反はするがあまり外傾しないものである。



第 21 図　C16溝出土甕形土器（Ａ・Ｂ類）形式分類一覧図

11・23は外面屈曲部に下稜をもっている。

第29図16・17は、口端部が比較的厚く丸みをおびている。第28図２・第29図21は、口縁部外面の屈曲がやや不明瞭で、口縁下位が内湾ぎみのものである。第28図１・第45図１は、口径21～24cmを測り、大型甕としたほうがよいかもしれない。第28図７は、口径15.1cmを測り、第45図９同様ＡⅣ類のなかでは小型である。

甕Ｂ類　（第30図・第47図、第47図30～33・35を除く）

有段口縁体の内外面を（横）ナデ調整によって仕上げた甕Ｂ類は、外面は頸部を横ナデ、肩部以下をハケ状具によって調整し、内面は肩部以下をヘラ削りしているものが多い。

甕ＢⅠ　（第30図26・29・第47図24・34）

ＢⅠ類・ＢⅡ類はともに小型甕であるが、口縁の形態差により２小形式に分類した。ＢⅠ類は口径13cm前後、器高11cmを測り、さほど外傾しない口縁部の外面の屈曲がやや不明瞭なものである。口端部は比較的厚く丸みをおびる。体部は最大径を胴上半部に置く肩の張らない倒卵型で、不安定な平底をもつ。26は外傾度の大きい（あまり外反はしない）口縁部の外面の屈曲が明瞭で、同部には外下方への稜を有し、肩のそれほど張らないものである。甕形土器とするよりも鉢形土器（または小型土器）としたほうが適切かもしれない。

甕ＢⅡ　（第30図30）

口径12.2cmを測る小型甕である。口縁部外面の屈曲が不明瞭で、内面では「くの字」状を呈する。内面頸部には内上方への稜をもつ。体部は最大径を胴上半部に置くが、肩は張らない。

甕ＢⅢ　（第47図26）

口縁体が内湾し、外面の屈曲が不明瞭なものである。口径15.4cmを測る。

甕ＢⅣ　（第30図23・24・28・第47図25・27）

口縁部の外傾・外反の度合いが小さいものである。25・27・28は、口縁部外面の屈曲が明瞭で稜をもち、口端部は先細りしている。口縁部は、25が内湾ぎみで、27は外反するがあまり外傾しない。23・24は、口端部が比較的厚く丸みをおびる。24は全体的に器壁が厚い。体部は28がやや肩が張り、25・27はそれほど張らない。口径14～18cmを測る。

甕ＢⅤ　（第30図27・第47図28・29）

口縁部の外反度の大きいものである。27・28は外傾度も大きい。28・29は口端部が不明瞭ながら面取りされている。いずれも口縁内面は「くの字」口縁に近い。体部は最大径を胴上半部に置くと思われるが、28を除いては肩はあまり張らないようである。27の肩部内面は縦方向のナデ調整をおこなっている。口径14～18cmを測る。

甕ＢⅥ　（第30図25）

口縁部の外傾・外反の度合いが大きいものである。外面の屈曲部には稜をもち、内面ではほぼ「くの字」状を呈する。口径18.8cmを測る。

甕ＢⅦ　（第30図31・32）

口径30cm前後を測る大型甕である。口縁部は全体的には外傾するが、外面で明瞭な外側への稜を有する屈曲部付近から下位は外反し、上位はほぼ直線的にのびるかやや内湾する。口端部は外

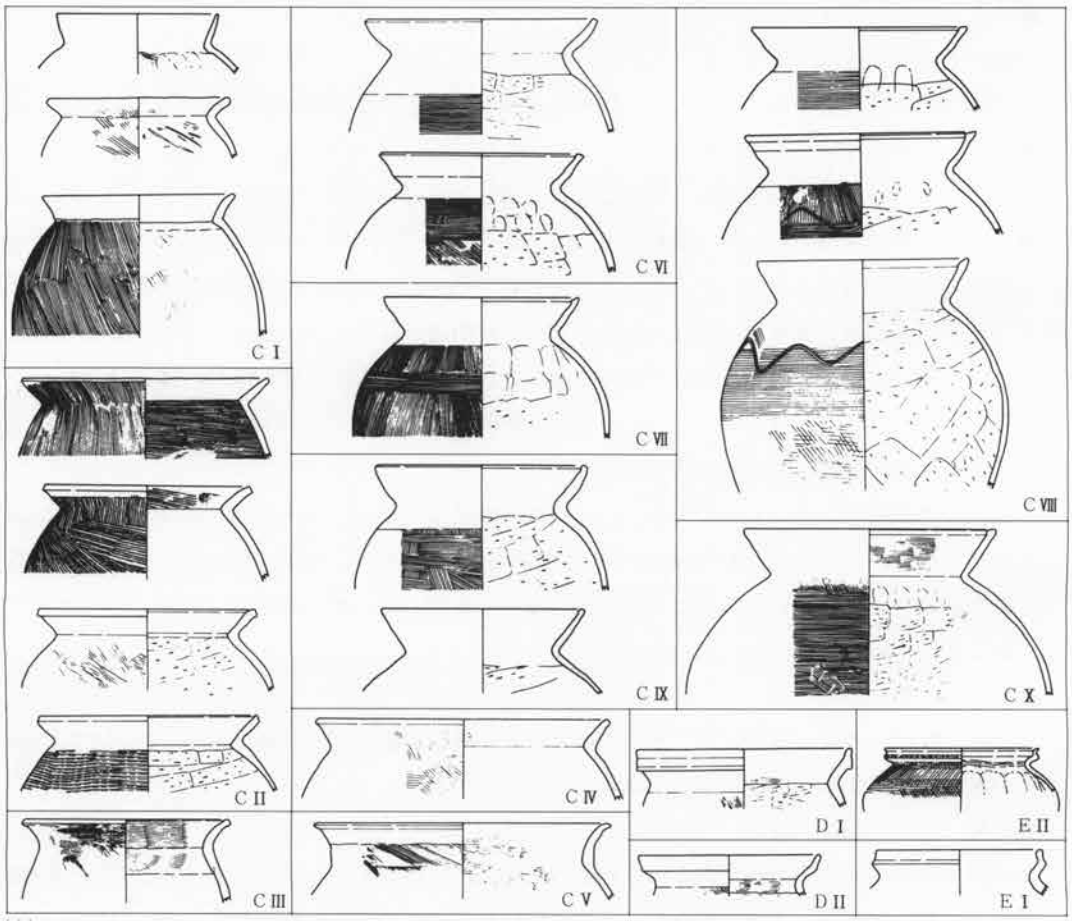
傾する面をもち、その上端は内下方へ跳ねあげ状ないしは鋭角的な肥厚帯をつくりだしている。体部は最大径を胴上半部に置くものと思われる。外面肩部は、横方向のハケ調整（31は上位に縦方向のハケ調整痕を残す）をおこなっている。内面肩部には、指頭圧痕は看取し得ない。32は肩部外面に上下と水平の両方向にやや不揃な斜行列点文を施している。

甕Ｃ類　（第31図～第33図・第48図、第33図67・72を除く）

「くの字」口縁系の甕Ｃ類は、口端部内面に肥厚帯をもたないⅠ類～Ⅴ類と、肥厚帯をもつⅥ類～Ⅹ類とに大別される。Ⅰ～Ⅴ類は、外面をハケ・（横）ナデ、内面をハケ・ヘラ削り・（横）ナデ調整によって仕上げるものが多く、畿内布留式土器の影響を受けたⅥ～Ⅹ類は、外面をハケ（タテ→ヨコ）・横ナデ、内面をヘラ削り・（横）ナデによって仕上げるものが通例であり、内面肩部に指頭圧痕を残すものも多い。

甕Ｃ Ⅰ　（第31図33・35・37・第48図43～45）

口端部に面をもたないものである。33は口縁部が内湾ぎみであり、43～45は口端部がやや厚く丸みをおびる。35・37は口縁体が外反し、口端部は先細りしている。37は外面頸部にかすかではあるが、有段状の稜をもっている。体部は33・35・45がやや肩が張り、37・44はあまり張らず、37は最大径を胴中位に置くようである。33は肩部内面に指頭圧痕を残す。口径13～16cmを測る。



第 22 図　C16溝出土甕形土器（Ｃ～Ｅ類）形式分類一覧図

甕ＣⅡ　（第31図40～43・第48図38～40）

口端部に外傾する面をもつものである。39・41は、口縁部がほぼ直線的にのび（かすかに内湾する）面の幅は狭い。38・42は口縁部が外反している。第31図40・第48図40は、口縁部内面はやや外反するが、外面は部分的には内湾し、口端部下端には稜をもつ。43は40に似た口縁形態をとるが、口端部上端に跳ねあげ状の稜をつくりだし、外面肩部以下はタタキ（左→右）によって仕上げている。淡褐色を呈し、胎土は他と比較しても極めて良好である。このほか、外面肩部以下をタタキで仕上げたものに第33図44～49・第48図41・42があるが、いずれも体部小片であるため器形は不明である。ＣⅡ類の体部は、第48図40は肩がかなり張るようだが、他はさほどでもなく、39は最大径を胴中位に置くものと思われる。口径16～19cmを測る。

甕ＣⅢ　（第31図34・第48図46）

外反する口縁体の端部はやや不明瞭な面取りを施し、その上下両端にはかすかだが稜をもつ。46の肩はあまり張らない。口径15cm前後を測る。

甕ＣⅣ　（第31図38・第48図36・37）

口径20～24cmを測る大型甕である。やや外反する口縁体の端部は、38が丸みをおび、37は不明瞭な面取り、36は下端に稜をもつ面をつくりだしている。37は肩部外面にヘラ削り痕を残す。

甕ＣⅤ　（第31図36・39）

口縁部が外側へ強く引きだされているために、「くの字」口縁特有の頸部の屈曲に鋭さがなく、全体として大きなカーヴを描くものである。口端部は36が上方へ39が外側へつまみだされている。口径18～23cmを測り、39は大型甕でもある。

甕ＣⅥ　（第32図50～52・第48図47）

口端部内面に肥厚帯をもつもので面が外傾するものである。47・50の口縁体は内湾し、肥厚帯は跳ねあげ状であるがほとんど目立たない。51・52の口縁体はほぼ直線的にのび、肥厚帯は内上方へ鋭角的に整形されている。体部は47を除き肩が張るようである。口径16～19cmを測る。

甕ＣⅦ　（第32図53・56）

口端部は少し凹むものの、比較的平坦に内傾面取りされ、肥厚帯が内側へ鋭角的に整形される。口縁体は53がやや直線的、56は内湾する。体部は肩が張るようである。口径16～17cmを測る。

甕ＣⅧ　（第32図54・57～60・第33図61～66）

口端部は内傾する面取りではあるが、面は丸みをもつために、肥厚帯にはそれほどシャープさがない。個体差がかなり認められる。54は水平面取りに近く、逆に61・63などは内傾度が強い。66は口端部上端が鋭角的である。口縁体は内湾するものが多いが、59・63～65などは直線的ないしはやや外反する。61・62の外面肩部には波状沈線が周っている。体部形は、61があまり肩が張らず、逆に57・59・63などは肩が張るようである。口径15～18cmを測る。

甕ＣⅨ　（第33図68～71・第48図48）

口端部に明瞭な面をもたないものである。口縁体は概ね内湾ぎみである。48・69の肥厚帯は跳ねあげ状に整形されるが、上端は丸みをおびる。70・71の肥厚体は丸みをもち、68は不明瞭であ

る。体部は70がやや肩が張り、48・69はさほど張らないようである。口径16～19cmを測る。

甕ＣＸ　（第32図55）

口径19.8cmを測る大型甕である。口縁部の形態は第32図54に近い。体部はかなり肩が張る。

なお、第33図67は壺形土器として分類したので該当項を参照していただきたい。

甕Ｄ類　（第47図30～33）

「くの字」口縁の口端部に粘土帯を貼付したのち面取りし、口縁部を強調した付加状口縁系の甕であるＤ類は、口縁部の内外面を横ナデ、外面肩部以下をハケ、内面肩部以下をヘラ削り調整している。口縁部の形態差を根拠に２小形式に分類した。

甕Ｄ̇Ⅰ　（第47図30・31）

付加部分は、わずかに内傾する比較的幅広の面をもち、外面では外反ぎみとなる。面下端に稜をもち、内面はやや屈曲する。内面頸部の屈曲は明瞭である。口径16～17cmを測る。

甕ＤⅡ　（第47図32・33）

付加部分は外面ではやや外反し、33はほぼ直立、32は外傾する。内外面の屈曲が不明瞭なものである。体部は肩があまり張らないようである。口径11～14cmを測り、33は小型である。

甕Ｅ類　（第33図72・第47図35）

受口状口縁系・「Ｓ字」状口縁系の甕であるＥ類は、それぞれを１小形式とした。

甕ＥⅠ　（第33図72）

口縁体は内傾し外面では外反する。口端部はやや厚く丸みをおびる。口径13cmを測る。一応Ｅ類としたが、小片のため他の器種・形式となる可能性がある。

甕ＥⅡ　（第47図35）

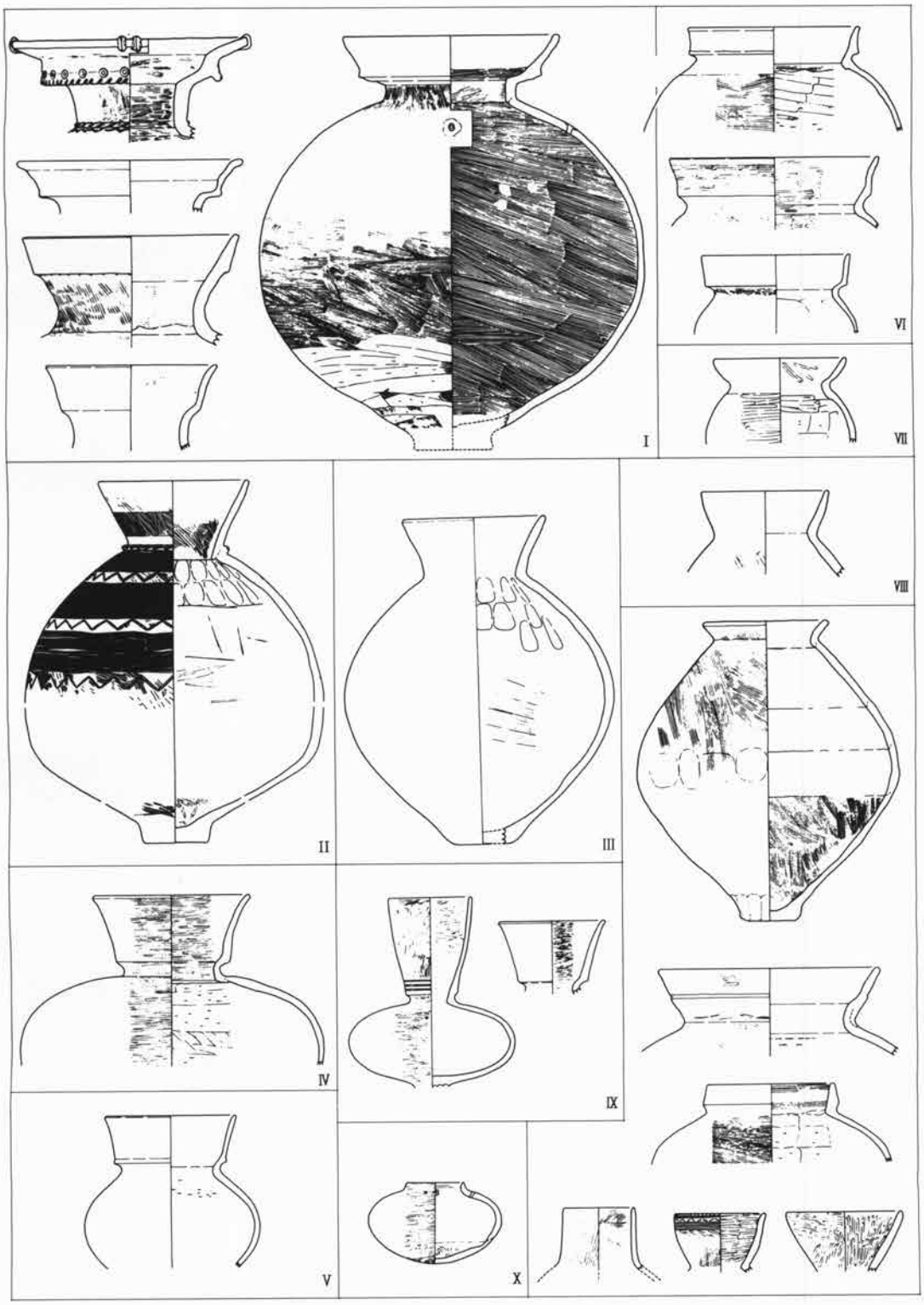
「Ｓ字」状口縁の上段は、わずかに内傾ぎみに立ちあがったのち、小さくしかし鋭く外上方へ折りまげられている。口縁部は強い横ナデ調整によって全体的にシャープに仕上げられたうえ、外面屈曲部には工具によって長楕円形の刻目を連続的に施している。頸部以下は、外面では左下りと右下りのハケののち、頸部と肩部を一部横ハケ調整している。ハケはいずれも粗い。内面は肩部以下をナデによって仕上げている。淡い黄橙色を呈し、胎土はさほど良好とはいえないが、金雲母を含んでいる点が注目される。口径12cmを測る。

(2)　壺形土器　（第33図67・第34図～第37図・第38図112・第49図・第50図62～71）

壺形土器は、口縁部と体部の形態差・法量を根拠に10小形式に分類した。器面は主にヘラ研磨（横）ナデによって調整しているが、ほかにハケ・ヘラ削りなどの手法も用いられている。

壺Ⅰ　（第34図73～77・第35図80・81・88・第49図49・54）

口径12～22cmを測る大型有段口縁壺である。口縁部が大きく外傾する49・73～77と、あまり外傾しない54・80・81・88とに大別される。49・73は、外面頸部に突帯を貼付し斜行刻目を施すなど加飾性に富むものである。75は口縁部が大きく外傾するもののなかでは唯一内湾するもので、内面の屈曲は不明瞭である。74・77は口縁部を強い横ナデによって仕上げるもので、内面屈曲部がかなり凹み、逆に口縁部は外側へ折り曲げられている。76は内面では「くの字」状に大きく外傾している。80・81は、やや外傾・外反する口縁部の有段帯の幅が狭く、口端部を面取りしてい



第 23 図　C16溝出土壺形土器形式分類一覧図

る。54・88の口縁部は外反するもののさほど外傾しない。54は口～頸部の内外面を赤彩している。76・88は他と比較すると小型のようである。75の体部形は最大径を胴中位に置き、縦方向に少し扁平な球形をなす（器高は推定40cm前後)。

壺II　（第37図104）

体部外面に平行櫛描文・山形文を配す大型壺（口径13.8cm、底径6cm・平底、器高は推定35cm前後）である。頸部外面は突帯を貼付し斜行刻目を施している。外傾する無段の口縁部は上位が内湾ぎみとなる。胴下半部を欠くが、体部最大径は同部に位置するであろう。同種の文様を施すものに第37図108～111・第50図65・66がある。これらは104と同一個体を含む可能性があるが、同定するには至っていない。65・104・108・109・111は山形文を赤彩している。

また、第34図79の頸部片（外面赤彩）は、I類・II類のどちらかに属するものであろう。

壺III　（第37図105・第38図112）

口縁部の形態は、II類第37図104に類似するが、体部外面に文様を施さず、最大径を胴中位に置く大型壺（口径13～16cm、112の器高は30.6cm）である。105は外傾する面をもち、下端部に稜をつくりだしている。112の体部形は縦長の楕円形をなす。

壺IV　（第35図83・85～87・第49図58）

比較的幅広の有段口縁帯が外傾・外反する大型壺（口径14～15cm）である。口縁外面の屈曲は明瞭で、稜（85・87）や刻目（86）をもつが、内面の屈曲はやや不明瞭である。83は肩が大きく張りだす。83の外面・86（口縁部）の内外面は赤彩されている。

I類～IV類はいずれも大型壺として扱ったが、II～VI類はI類よりは小型である。

壺V　（第35図89・第49図50・51・55～57）

口縁形態はIV類に類似するが、あまり外傾・外反しない中型広口有段口縁壺（口径10～14cm）である。50・55は口縁外面に擬凹線文を施している。51・89は器壁が薄く、口縁体はほぼ直線的にのびる。体部は最大径を胴中位に置くものが多い。口縁内面に指頭圧痕を残す50は、やや大型でIV類としたほうがよいかもしれない。

壺VI　（第35図84・90・第36図91・92・94・第49図52・53・61）

口径10～19cmを測り、口縁帯の幅の狭い中型広口有段口縁壺である。口縁体の内外面の屈曲が明瞭で直線的にのびる53、内面の屈曲がやや不明瞭で外面中位で外側へ屈曲する84・90～92・94、内面は「くの字」口縁に近く外面では外反する52・61などがある。52は口縁外面に一部擬凹線文が施されている。体部は52・61がやや肩が張り、92はあまり張らない。94は他と比較すると小型である。

壺VII　（第36図95・96）

口径11～12cmを測るやや小型の広口壺である。有段（内湾する）口縁系のものであるが、屈曲は不明瞭であり、96は「くの字」口縁に近い。96の体部は球形に近く、VIII類との関連も見逃せない。95の口縁内外面は赤彩されている。

壺VIII　（第33図67・第36図97・第37図106・第50図63）

口径11～12cmを測るやや小型の壺である。体部は球形に近く、無段の口縁体は内湾ぎみに外上

方へ開く。67は内面口端部に不明瞭な肥厚帯をもつが、体部の形状からⅧ類とした。106の外面・内面の口縁部は赤彩されている。

壺Ⅸ　（第36図100・101・第37図107・第50図62・71）

口径８～10cmを測る細口壺である。長口の62・107と短口の100・101があり、内外面の屈曲は101・107が不明瞭で、62はほとんど屈曲せず、100は明瞭に屈曲する。縦方向に扁平な楕円形の体部をもつ71・107は台付である。107は口縁下位に擬凹線文（３条）が施されている。71の体部外面・100の口縁部内外面・107の外面と内面の口縁上位は赤彩されている。

壺Ⅹ　（第50図64・69）

口径５～７cmを測る無頸壺である。口縁部が直立する小型の69は肩部上位に２孔一対の孔を穿ち、口縁部が内傾する64は注ぎ口をもっている。69の体部は最大径を胴中位付近に置き、縦方向に扁平な楕円形である。64の体部は肩が張る。

このほか、特に小形式を設けなかった壺形土器が10数点出土している。第35図82は大型壺で、外面口縁中位に沈線（１条）をもつ。第49図60は口縁外面が有段状、内面が「くの字」状を呈する。第36図93・98・第49図59・第50図68は、「くの字」状（無段）口縁系の壺で、タイプは異なるものの口端部を面取りしている。第36図99は口縁部が大きく外反し、口端部は外側へ強く引きだされている。第36図102・103・第50図67は小型の壺である。そのうち102は、外面口縁上位に工具による文様が施されている。第50図70は102に類似した文様をもつ。

なお、甕形土器・壺形土器に関わるものとして底部・脚台片がある。底部片では、第38図115～119・第50図78は甕、第34図78・第38図113・114・第50図72・73・77は壺であろう。脚台片では、第50図76が内湾し、第50図74・75は（やや）外反している。第38図122～125・第50図79・80は外反しかつ脚端部を面取りしている。他と比較して背の高い第50図81と、逆に低い第50図82・83は、甕・壺のものとは考えにくい。

(3)　高坏形土器　（第39図・第40図・第41図154～161・第51図・第52図・第53図115～120）

高坏形土器は、完器がほとんど出土していないため、主に坏部の形態差を根拠に６小形式に分類した。器面はヘラ研磨で仕上げるものが圧倒的に多いが、（横）ナデ調整を施す例も多く、一次調整（ハケ状具）痕を残すものも少なくない。脚内面は絞り目（痕）を看取し得るものがあり、工具によるナデ調整をおこなう例も相当数ある。

高坏Ⅰ　（第39図128・129・第40図141・142・152・153・第51図84～87・第52図100・109）

坏部は体部と口縁部との境界で屈曲するが、Ⅱ類のように有段状を呈しないものである。屈曲部に稜をもつ84～86・129と、稜をもたない87・128がある。体部はほぼ直線的にのびるかかすかに内湾する。口縁部はやや外反する。脚上位のくびれの大きい85を根拠に142の脚を、体部との接合のために円盤を充塡したのち、脚内面上位をほとんど二次調整しない128・129を根拠に109・152・153の脚をⅠ類とした。100・141も85・142に類似したものであろう。口径21～25cm、脚部径13cm前後を測る。

高坏Ⅱ　（第39図126・127・130～136・第51図88～94・第52図95）

坏部が有段状を呈するものである。体部と口縁部の長さの比は、内法で１：1.1～1.4程度であ

る。口径は16～31cmと幅をもっている。II類は、口径のわりに坏部高の低い（浅い）89・90・126・127・133と、坏部高の高い（深い）93～95・130・131・136、中間的な88・91・92・134・135の３つのグループに分けることもできるが、その差異は相対的なものである。脚部が窺えるものは132だけであるが、概ねラッパ状に開くと思われる。C16溝出土の高坏の脚は、大半がII類のものと思われる。93・94の坏部内外面は赤彩されている。

高坏III　（第52図96・105・112～114）

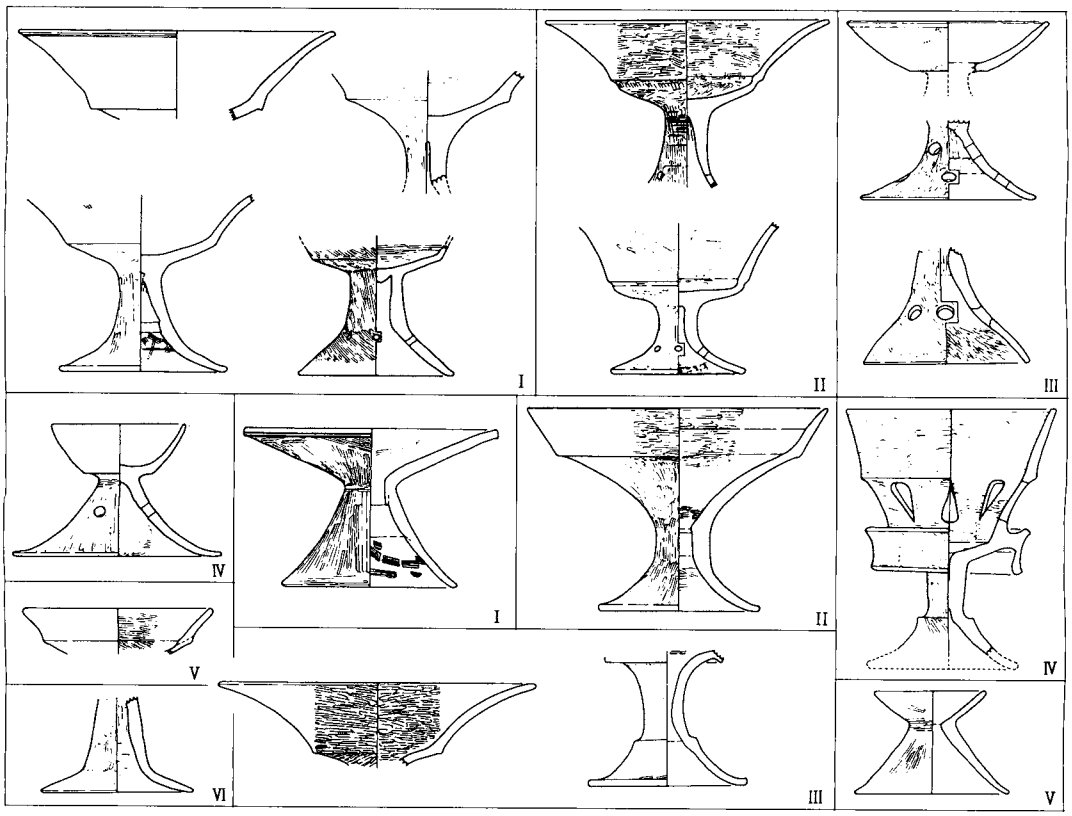
96は坏底部が小さく、口縁部（口径16cm）が内湾するものである。境界部分は屈曲する。脚部には３孔１対の透穴を穿つ105や、脚端部が内湾ぎみの112～114などが対応すると思われる。脚部径は11～15cmを測る。

高坏IV　（第40図137～139・第52図97・98・106）

坏部が逆台形の小型高坏である。屈曲が明瞭で口縁部が外反する97・98・137と、屈曲がやや不明瞭な138・139（内湾している）がある。98の外面屈曲部には刻目が施されている。脚部は大きくラッパ状に開く139と、脚端部のみ大きく開く106がある。口径11～14cm、脚部径15～16cm（139の器高は10.6cm）を測る。

なお、円錐状（わずかに外反する）の脚部をもつ第40図148～149は、III類またはIV類に関係するものと思われる。

高坏V　（第52図99）



第 24 図　C16溝出土高坏・器台形土器形式分類一覧図

口径14.5cmを測り、外反する口縁部は比較的短い。小片のため詳細は不明である。

高坏Ⅵ　（第40図140）

脚部径12.1cmを測る。基本的にはラッパ状に開くが、脚下位で屈曲するものである。坏部を欠いている。

(4)　器台形土器　（第41図162～166・第42図・第53図121～132）

器台形土器は、比較的完器に恵まれているため、それらをもとに5小形式に分類した。器面の調整は、高坏型土器と大差がない。

器台Ⅰ　（第42図167・168）

ラッパ状に開く脚部と、大きく外上方へのびる受部をもつものである。受端部は面取りされ、沈線（1条）が巡っている。受部径17～20cm、脚部径11～14cm、器高10～13cmを測る。

器台Ⅱ　（第41図164・166・第53図121）

外反する脚部に、上段の短い有段状の受部をもつものである。121・164の外面受部上段には擬凹線文が施されるが、ヘラ研磨によって大部分消されている。166は外面・内面受部が赤彩されている。受部径19～24cm、脚部径13cm、器高16cmを測る。

器台Ⅲ　（第41図162・163・165）

脚部と受部は、それぞれ有段状を呈し外反するものである。162の内面受端部・163の外面と内面受部は赤彩されている。受部径25cm、脚部径13cmを測る。

器台Ⅳ　（第42図169～175）

受部径約8cm、脚部径9～13cm、器高6～8cmを測る小型器台である。脚部はラッパ状に開くが、外反する174と、あまり外反しない169・170がある。受部は内湾し端部を丸く仕上げているが、169・170は内湾度が小さく、171・172は大きい。2段に透穴を穿つ173の外面は赤彩されている。。

器台Ⅴ　（第42図177～180・第53図122～124）

体部に雨（涙）滴形透穴を穿つものである。いわゆる装飾器台であるが、有段の脚と受端部に垂下帯をもつ器台に、有段状の鉢が結合したものと考えられ、結合器台（器台結合鉢）と呼称したい。179は口縁部外面に擬凹線文（13条）を施したもので、180は垂下帯に雨滴形透穴（逆立形のみ、10個）をもっている。177・179の（体部）内外面、123・180の外面は赤彩されている。口径16～20cm、受部径12～18cmを測る。

このほか、特に分類しなかった脚のうち、有段の第53図125・128・129は、Ⅲ類かⅤ類のものであろう。ラッパ状の第42図176・第53図130は、それぞれ1小形式となる可能性がある。第53図127・128は類例に乏しい。第53図131はⅣ類のものとも考えたが、つくりがやや大きい。第53図132は高坏形土器としたほうが適切かもしれない。

(5)　鉢形土器　（第43図182・185～187・189・192・193・196・200～202・第44図205・206・第54図133～139・143～147・153・154・第55図155～160・163）

鉢形土器は、器形差を根拠に、機能差を考慮しながら6小形式に分類した。器面はヘラ研磨・（横）ナデによって仕上げるものが多いが、ハケ・ヘラ削りなどの手法も用いられる。

鉢Ⅰ　（第43図189・第54図133～136）

有段口縁鉢である。擬凹線文を施す133・134・189と無文の135・136(口縁体が短い）がある。体部は最大径を胴中位～上半部に置き、下面がやや凹む平底をもつ。器面は（横）ナデ・ハケ・ヘラ削りによって調整している。口径10～13cm、底径１～２cm、器高９～10cmを測る。

鉢II　（第43図182・185・第54図137～139）

内湾する体部と外反する口縁部をもつものである。境界部分は屈曲し138は稜をもつ。口径９～20cmを測る。182はやや小型（器高5.3cm、内外面赤彩)、139はやや大型である。

鉢III　（第43図186・187・193・第54図153・154・第55図155～158・160）

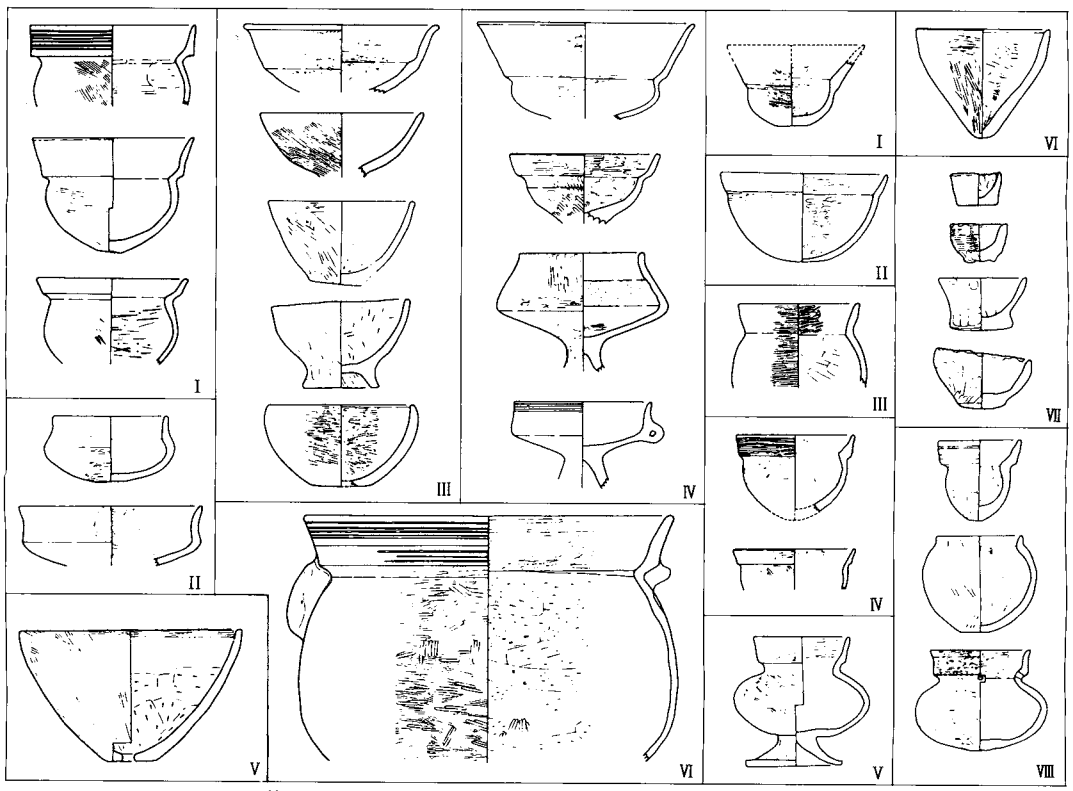
口縁～体部が内湾するものである。155・186は、体部中位が屈曲し口縁部はやや外反する。160・193は、口径のわりに深く椀状を呈する。193は平底、160は短い脚台をもつ。153・154は、口縁部がゆるやかに内傾し、平底である。155の外面は赤彩されている。器面は外面をヘラ研磨、内面をヘラ研磨・ヘラ削りなどによって調整している。小型の153（口径・底径ともに3.3cm、器高4.8cm）除くと、口径11～15cm、底径５cm・器高７cm前後を測る。

鉢IV　（第43図196・200～202・第55図159・163）

台付鉢である。196・202は有段口縁系（202の口縁部は短い)、他は外反する口縁部と体部との境界部分が屈曲するものである。201は屈曲部に刻目がみられる。159・200は把手(１個）をもち、200は外面口縁部に擬凹線文（３条）を施している。口径８～17cmを測る。

鉢V　（第43図192・第54図143～147）

底部穿孔鉢である。口縁部は不明瞭な水平面取りを施し、体部は砲弾形である。平底の143・



第 25 図　C16溝出土鉢形・小型土器形式分類一覧図

144・146と尖底の147・192がある。器面は外面をハケ・（横）ナデ、内面をヘラ削り・（横）ナデによって調整している。口径15～18cm、底径１～９cm、器高10cm前後を測る。

鉢Ⅵ　（第44図206）

口縁～肩上位に、１対の馬蹄形（逆U字形）の把手をもつ大型鉢である。体部最大径を胴下半部に置く。器面はヘラ研磨・ヘラ削りによって調整している。口径29.3cmを測る。

他に、端部付近に孔（径1.3cm）をもつ小片（外面赤彩）が出土している（第44図205）が、鉢形土器かどうかも含めて、器形は不明である。

(6)　小型土器　（第43図181・183・184・188・190・191・194・195・197～199・第44図207・第54図140～142・148～152・第55図161）

(1)～(5)・(7)のどの器種にも属さない小型土器は、手捏ね土器などの文字通り小型品と、坩形土器などの精製された小型品を含む。７小形式に分類した。

小型土器Ⅰ　（第43図197～199）

小型（丸底）坩である。197は不明瞭な平底（径2.6cm）で、199はつくりがやや大きい。器面はヘラ研磨されている。

小型土器Ⅱ　（第43図188）

口径13cm、器高7.1cmを測る、内湾丸底の小型土器である。体部と短い口縁部との境界は屈曲する。器面は薄く、ヘラ研磨が施されている。

小型土器Ⅲ　（第55図161）

口径9.2cmを測る、「くの字」口縁系の小型土器である。器面はヘラ研磨・ナデ調整されている。体部は球形に近く、壺Ⅷ類との関連に注目しておきたい。

小型土器Ⅳ　（第43図181・第54図140）

口径９～10cmを測る有段口縁系（内面では「くの字」状）の小型土器である。181は擬凹線文を施している。体部は肩が張らない。器面はヘラ研磨・ナデによって調整している。

小型土器Ⅴ　（第43図194・195）

口径７cm、脚台径５～８cm、器高11cm前後を測る、脚台付の有段口縁系（内面では「くの字」に近い）の小型土器である。194は体部が縦長、脚台が内湾ぎみ、195は体部が横長、脚台が外反し、面をもつ。器面はヘラ研磨・ナデによって調整され、ともに外面は（194は内面口縁部も）赤彩されている。

小型土器Ⅵ　（第44図207・第54図141・142）

口径10.4cm、器高8.6cmを測る尖底の小型土器である。口縁部は内湾ぎみとなる。器面はハケ・ヘラ削り・ヘラ研磨・ナデによって調整している。

小型土器Ⅶ　（第43図184・第54図148～152）

口径４～８cm、器高３～５cmを測る手捏ね土器である。150・151は平底台形を呈し、他は内湾している。器面はナデのほかハケ・ヘラ研磨によって調整している。

このほか、擬凹線文を施した有段口縁系の第43図183（口径6.2cm、器高6.6cm）、無頸の第43図191（口径6.5cm、器高7.8cm）、小型土器Ⅴ類に似た（ただし脚台はもたない）第43図190（頸部に

1対の孔をもつ、口径7.8cm、器高8.2cm）も小型土器とした。

(7) 蓋形土器　（第44図208～224・第55図164～178）

蓋形土器は、体部・鈕部・口縁部の形差をもとに9小形式に分類した。体部が直線的にのびるか（やや）外反するものをⅠ～Ⅵ類とし、内湾するものをⅦ・Ⅷ類とした。Ⅸ類は口縁部形が特殊なものである。第55図168・169・173の器面に一部ハケ状具痕がみられるほかは、主にヘラ研磨・（横）ナデによる調整が施されている。第44図211・217・第55図167・176は赤彩品である。

蓋Ⅰ　（第55図177）

口径16.7cm、器高7.2cmを測る大型蓋である。体部は直線的にのび、鈕部上面は凹む。

蓋Ⅱ　（第44図208・209・212）

外反する体部をもち、鈕部上面は凹み、端部は面取りされている。209は器面に煤・炭化物が付着している。212はやや小型（口径9.4cm、器高4.2cm）である。

蓋Ⅲ　（第44図218・219・第55図165）

口径8～9cm、器高4cm前後を測り、口径と器高に比較して鈕部（径4cm前後）が大きいものである。体部は219が内湾ぎみ、218がほぼ直線的、165は外反している。鈕部上面は凹む。165は両端が面取りされている。

蓋Ⅳ　（第44図215・216）

口径7～8cm、器高3cm前後を測り、口径に対して器高の低いものである。体部はほぼ直線的にのび、鈕部上面は凹む。口端部は面取りされている。器面は全体的に厚い。

蓋Ⅴ　（第44図210・213・214・217・第55図169～172）

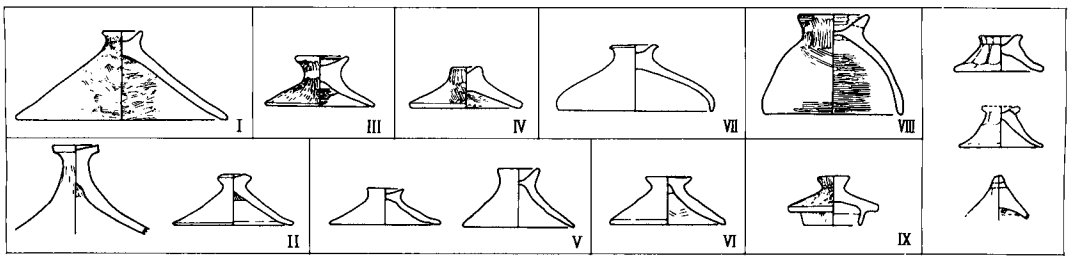
口径9～13cm、器高3～5cmを測る。Ⅰ類～Ⅳ類以外の鈕部上面が凹むものである。体部は外反するものが多いが、169は内湾ぎみである。鈕端部を先細りに仕上げる210・214と、丸く仕上げる170・172、及びその中間的なものがある。169・170・217の口端部は面取りされている。法量的には210がやや大型で、171・172・213は口径に対して器高が高い。

蓋Ⅵ　（第55図166・176）

口径9～11cm、器高4～6cmを測る。体部はほぼ直線的にのび、鈕部上面はあまり凹まない。176は口径に比べて器高が高い。

蓋Ⅶ　（第44図220～222）

体部が内湾し鈕部が凹むもののうち、口径に比較して器高の低いものである。220・221の口端部は内側へゆるやかに屈曲する。221の鈕部はやや小さく、端部は反転したうえ面取りされている。



第 26 図　C16溝出土蓋形土器形式分類一覧図

口径11～12cm、器高５～６cmを測る。

蓋Ⅷ　（第55図167・168・173～175・178）

体部が内湾し鈕部が凹むもののうち、口径に比較して器高の高いものである。167の鈕部は小さく、173は端部が先細りしている。173～178の上面はやや広い平坦面をもつ。168は端部を外側へ引きだしたうえ面取りしている。口径９～12cm、器高５～８cmを測る。

蓋Ⅸ　（第44図223）

鈕部は平担（やや凸）で、体部は直線的にのびる。体部内面に短い口縁帯（やや内傾する）を貼付したものである。体部の突出部は面取りされている。口径4.5cm、器高4.1cmを測る。

このほか、蓋形土器としては、小型品である第44図211・第55図164（164はやや粗製）、鈕部に水平方向の孔をもつ第44図224がある。

他に、(1)～(7)の器種に含めなかったものに、第43図203・第44図204・第55図162がある。203は、「くの字」状の口縁（端部面取り）をもつもので、鉢（あるいは甕）形土器とすべきであろうか。204は無文有段口縁系のものであるが、肩がほとんど張らないなど、甕Ｂ類としては扱いにくい。162は甕Ｅ類とも考えたが、外面をヘラ研磨している点などが特異である。

2.　Ｃ17溝出土土器

わずかな調査面積であったが、約69個体分の土器が出土している。すべて破片であり、溝の廃絶後に捨てられたものと思われる。出土レベルに約40cm前後の高低差があり、やや年代幅があるものと考えられるが、堆積層序での明確な区別は困難であった。器種別個体数は、甕形土器32点、壺形土器10点、高杯形土器10点、器台形土器８点、鉢形土器５点、蓋形土器２点、その他の器種２点である。

甕形土器（第56図１～12・第57図13～18・22～25・第58図26～28）

甕形土器は、擬凹線有段口縁甕（甕Ａ類）16点－23.2%、無文有段口縁甕（甕Ｂ類）２点－2.9%、くの字系口縁甕（甕Ｃ類）13点－18.9%、その他１点－1.4%の割合で出土した。

甕Ａ類はＣ16溝出土土器で甕ＡⅣと分類したいわゆる月影式の甕である。ただＣ17溝出土のものの中には、２・３のように体部径が口縁部径を大きく上まわり球胴化傾向にあるものや、８～12のように口縁内面の強いヨコナデにより指頭圧痕を残さないものなどがみとめられ、全体的に口縁部の外傾度が強く、体部調整がやや乱雑なものが目立つなど、典型的な月影甕と比較してやや新しい様相を示すものが多く含まれている。しかし、退化傾向は看取されるものの、月影甕としての基本的な特徴は失なっておらず、月影Ⅱ式土器の範疇に入れてよいものと考える。

大型の有段口縁甕13はＣ16溝出土土器甕ＢⅦと分類したものである。口唇部の肥厚と口縁帯下端部の突出を特徴とする。甕Ｃ類の布留系甕と同期の所産であろう。

甕Ｃ類には、Ｃ16溝出土土器甕ＣⅥ～甕ＣⅧとした布留系甕14～18・23～28と、口縁端部がヨコナデ面取られる22がある。22は能登の月影併行期にみとめられる甕である。布留系甕には、口唇部の内傾肥厚がそれほど顕著でなく、体部ヨコハケが丁寧な16・26～28などと、肥厚度が大きく、体部調整のやや粗雑な18・23などがあり、若干の時期差があるものと思われる。29は布留系

甕に伴なう山陰系の甕である。

壺形土器（第58図30～35）

30は甕Ａ類と同形態の口縁部をもつ在地系の有段壺である。体部はハケ調整痕を残す。31は月影Ⅱ式の主体をなす在地壺。32の有段口縁壺は畿内系か。33の有段直口壺は口縁帯がやや外傾し段部の稜が不明瞭であり月影期のこの種の壺ではやや新しい傾向を示す。34・35は同一個体の可能性が強く大型の台付壺。器面のヘラ研磨は入念である。

高杯形土器（第57図19・第58図38）

杯部が大きく内湾ぎみに開く38とやや小ぶりの椀形をなす19があり、いずれも東海系と考えられるものである。

器台（第58図36・37）

いずれも小型器台で、受部がやや内湾する36は布留系甕と同時期、直線的な37はやや古式か。

小型精製土器（第57図20・21）

20はわずかに底部に面を残す小型壺で、いわゆる定型化した丸底坩と区別される。21は布留式古段階に伴なう小型鉢形土器か。

3．その他の遺構出土土器

Ｃ６溝出土土器（第59図１～５）

Ｃ６溝からは約200点の土器片が出土したが、すべて２次的流入と考えられる細片で、図化したのは５片にすぎない。月影Ⅱ式土器を主体とする。

Ｃ11溝出土土器（第59図６）

図化しえたのは甕破片１点のみである。口唇部がわずかに内傾肥厚するくの字口縁甕で、Ｃ16溝甕ＣⅦに近い特徴を示す。体上半部のヨコナデは丁寧である。

Ｃ12溝出土土器（第59図７）

口唇部がわずかに内傾肥厚するくの字口縁甕で、体部の張りが大きい。口縁部のヨコナデはやや弱く、外面に指頭圧痕を残す。

Ｃ18溝出土土器（第59図８～10）

８の広口壺は北加賀では類例の乏しいタイプである。体部はほぼ球形に近く、くの字口縁の口唇部に面をもつ。10は蓋形土器とも考えたが、つまみ部が大きいため、鉢とした。月影Ⅱ式期。

竪穴状遺構出土土器（第59図11～13）

３点が出土しているが、すべて口唇部が内肥するくの字口縁甕である。典型的な布留式甕の影響下の所産であるＣ16溝甕ＣⅧと共通する特徴を示す。

Ａ８溝出土土器　（第60図１～11）

１は高台径6.1cmの内面黒色土器で、坏の底部片である。２・３の須恵器は、共に平安時代後期の所産である。２は高台径約10.3cmの高台坏で、３は長頸瓶の頸部片である。胎土は共に灰色を呈して砂粒の含みも少なく焼成も良い。４は美濃焼の天目茶椀である。高台径は3.6cmで高台内の削りは弱く、外面全体に鉄化粧を施こしている。内底の釉は漆黒色を呈して薄い。５～７は唐

津系陶器である。5は高台径5.6cmで、畳付以外を全面施釉したもので、釉下には草文が描かれている。色調は内外面共に灰色を呈して、胎土は暗灰色を呈する。6は高台径4.8cmで、5と同様に畳付以外を全面施釉している。色調は緑灰色を呈して、外面にはハケによる波状文が白く描かれている。7は口径14.4cm、高台径7cm、器高4.9cmの鉢で、口縁部を外面に折り返している。釉はオリーブ黄色を呈して、体部下半まで施され高台近くは釉が削り取られている。素地は灰色を呈して、堅緻である。8・9は珠洲焼の甕である。8は玉縁状の口縁を呈して、外面の叩きは3cm当り8条程と荒い。9は口縁端部が面取りされ、外面の叩きは比較的密である。共に胎土は灰色を呈するが、9の焼成は不良である。15世紀頃の所産と考えられる。10・11は越前焼の甕の底部片と擂鉢である。11は底径10.2cmで、内面の卸し目は10本単位で、右回りに施されている。胎土は赤褐色を呈して、砂粒の含みが少ない。

A11溝出土土器（第60図12～16）

12は底径14.5cmで、底にスダレ状圧痕が残る。調整は外面が荒いハケで、内面はナデによる。胎土は荒く、色調は暗黄橙色を呈する。13は越前焼の甕の口縁部片である。色調は内外共に淡黄褐色を呈して、焼成は不良である。胎土は砂粒の含が少ない。14は口径10.6cmの青磁の香炉である。口縁部は内へ折り返えした後に上端を押えている。体部には内外共にロクロ目を残している。釉は灰色に近く気泡の含みが多いが、口縁内面までに施こされている。素地は灰白色で堅緻である。15は唐津系陶器の鉢である。高台径9cmで、茶褐色の釉が薄く施こされている。素地は底部が灰色で砂粒の含みが多くて、体部は灰色で砂粒の含みが無く堅緻である。焼成は不良である。16は珠洲焼の擂鉢である。内面の卸し目は9本単位で、間隔をおいて施されている。底には糸切り痕が残る。胎土は橙褐色を呈して密である。焼成は良好である。

C|1・8溝出土土器（第60図17・18）

17はC1溝から出土した珠洲焼の片口鉢である。口径は約26.3cmで、口縁部の内側を少し引き出している。ロクロ目は内外面とも弱いながらも残っている。胎土は灰色を呈して、堅緻である。焼成は並である。12世紀後半の所産であろう。18は唐津系陶器で、高台径4cmの碗である。外面は高台近くまで淡灰色の釉が施されるが、内面は緑灰色の釉を施した後に、内底部を蛇目状に削り取っている。素地は灰色を呈して少し荒い。

19は青磁の碗で、高台径4.7cmを計る。外面には鎬蓮弁が巡り、オリーブ灰色の釉が高台畳付までに施こされている。外底には砂が付着している。素地は灰白色で、気泡の含みが多い。

なお、包含層出土土器の中で、中・近世陶器（第61図14～17）は4点図示されている。14は加賀古陶の甕で、15は唐津系陶器、16は珠洲焼の壺、17は土師質の灯器である。特に16は12世紀後半頃のものと考えられる。

4. 包含層出土遺物（第61図1～18）

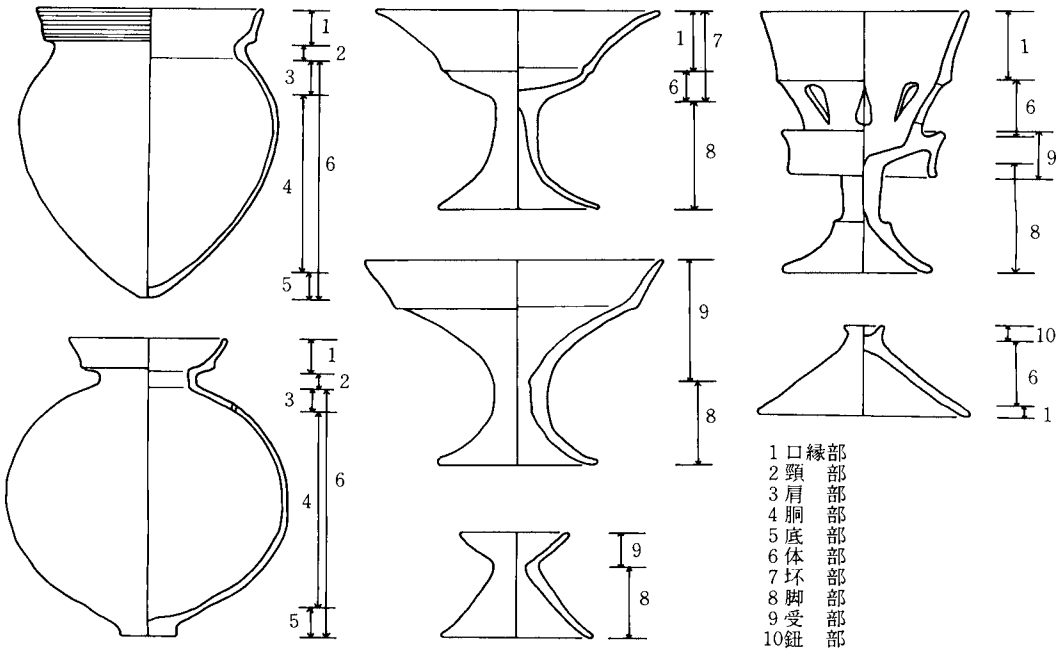
1～9は包含層出土として取り上げたが、ほとんどがC16溝上面より出土したものである。1は体部に入念なヨコハケを残す。2はタタキ痕を残す甕体部片。4の有段口縁壺は口縁帯に竹管によるスタンプ文を連続して施す。7は東海系の高杯であるが，杯部が大きく発達しており、C16溝

高杯Ⅳより一段階新しいタイプで布留系甕に共伴するものであろう。5は月影Ⅱ式の高杯。6は蓋形土器となる可能性もある。9は手捏ねによる雛形土器の蓋。

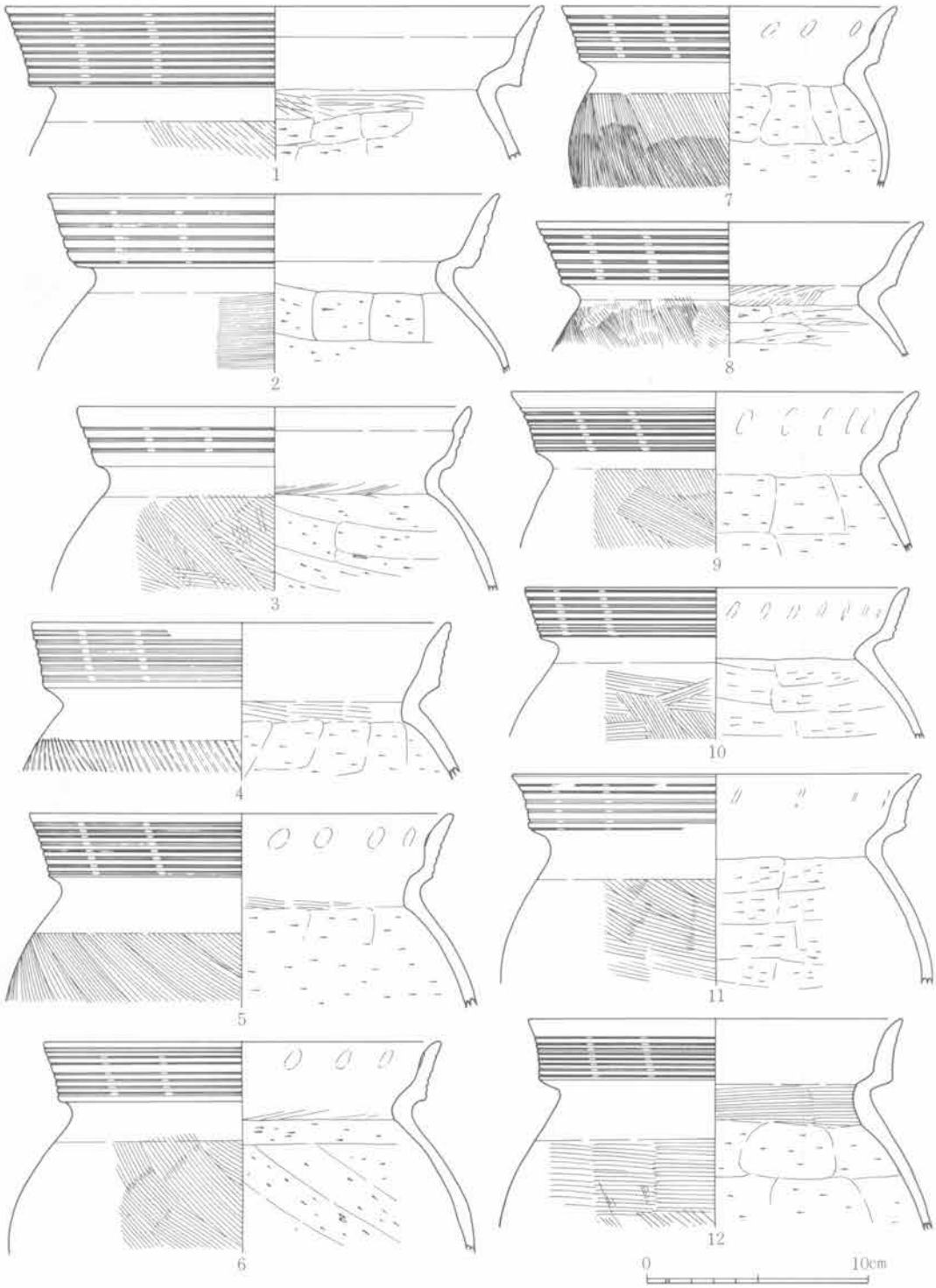
10～13は須恵器杯および杯蓋で、10は古墳時代後期の所産。14～17は中近世陶器類で、17は土師質土器、灯器に使用したものであろう。18は寛永通宝。

5．その他の土器（第62図）

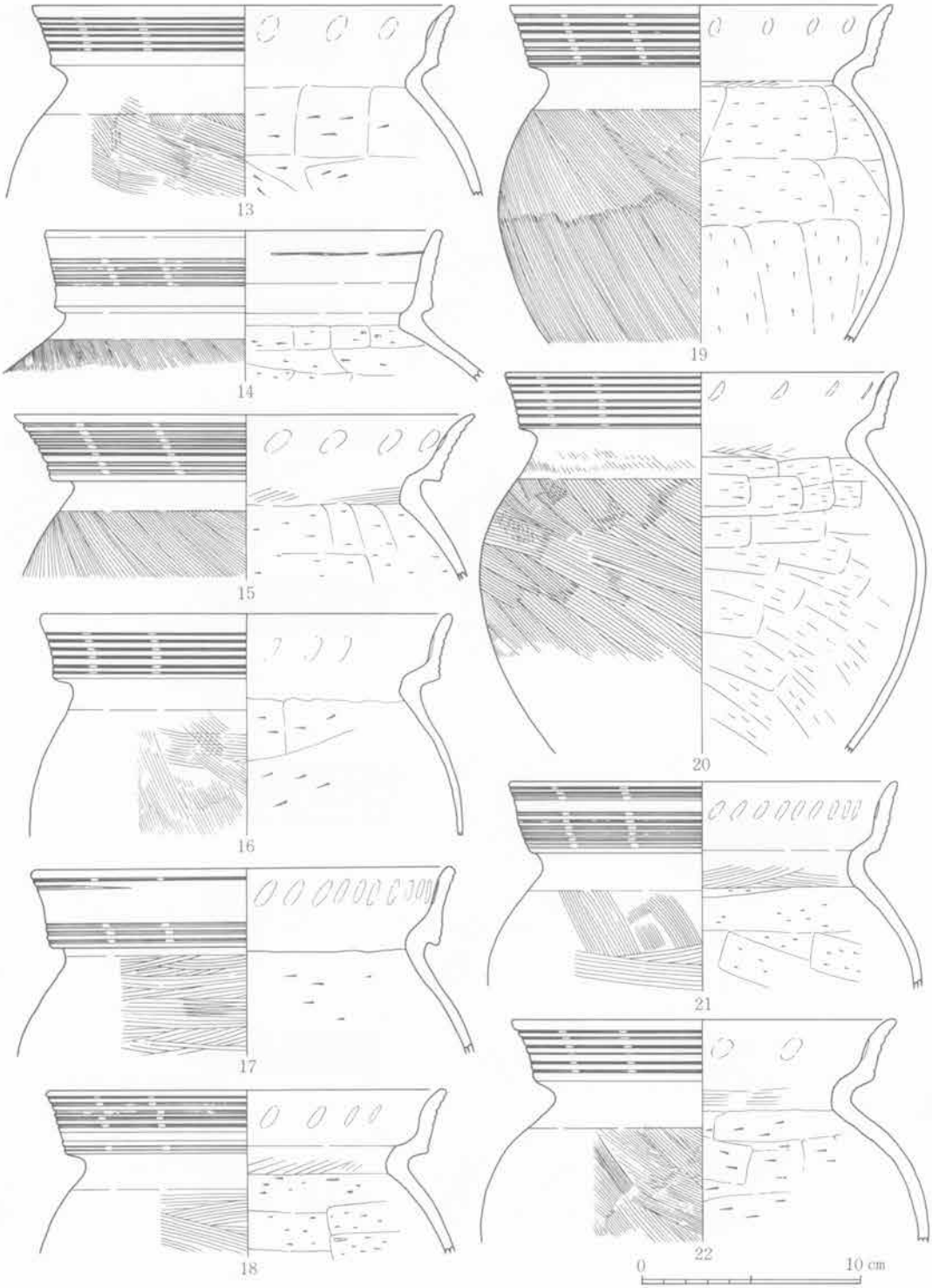
月影Ⅰ・Ⅱ式土器に先行する時期の所産と考えられる土器類をその他の土器として一括した。1～11はC16溝出土、他は包含層出土である。1は口縁帯に2条の凹線が施され、体部にタタキ痕を残す甕である。タタキ痕は比較的粗く右下り、内面肩部はナデ上げられ、指頭圧痕を残す。畿内第Ⅳ様式甕の影響下に在地で製作された甕と考える。4～6・8・11とほぼ同期の所産と考えられ、7・9・10・14はやや先行するものと思われる。11の高杯は戸水B式土器に類例が求められる。12・13は中期初頭におかれる柴山出村期の所産と考える。12は北陸ではほとんど類例はなく、北九州地方との関連性が強いと思われる。



第 27 図　土器各部の名称

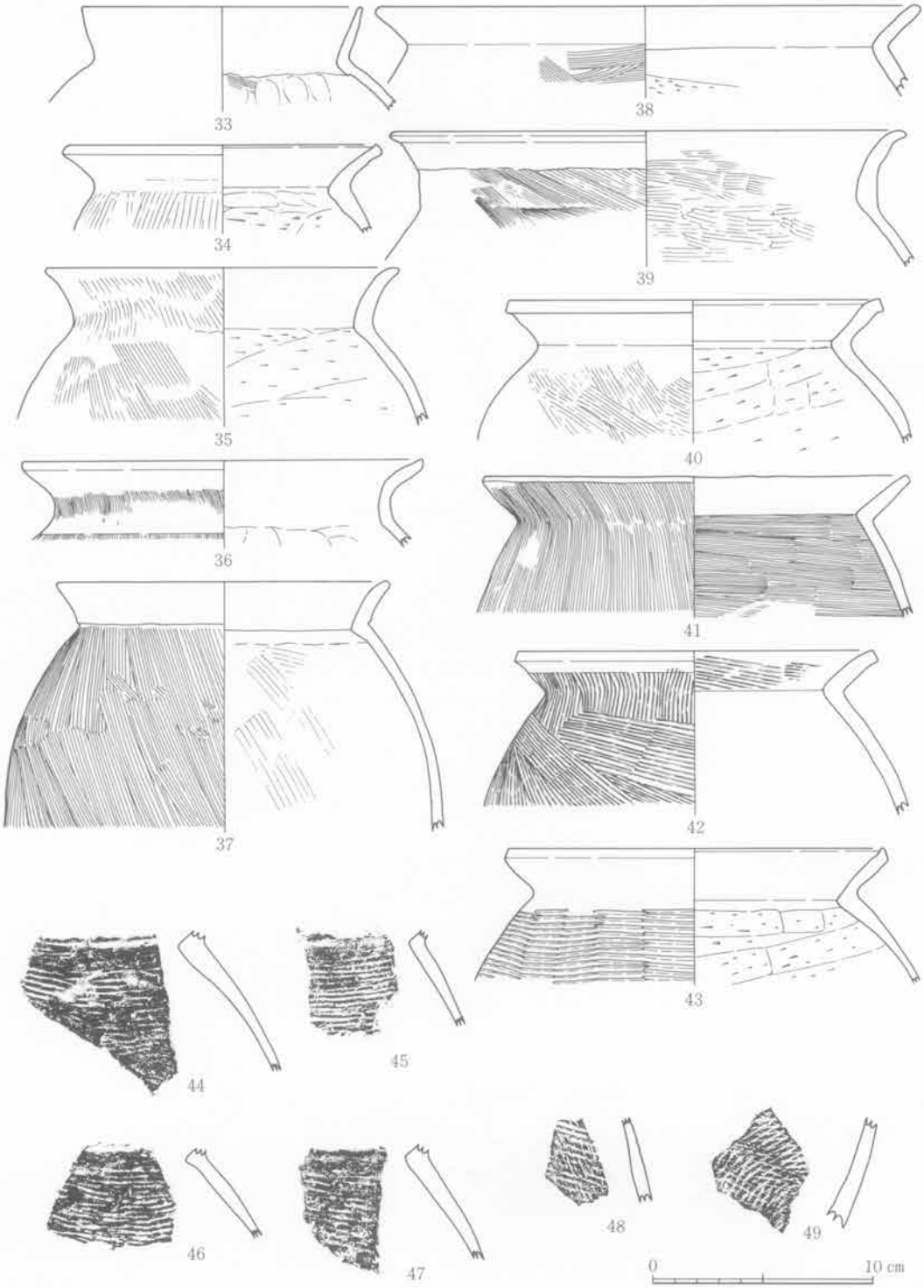


第 28 図　C16溝上層出土土器

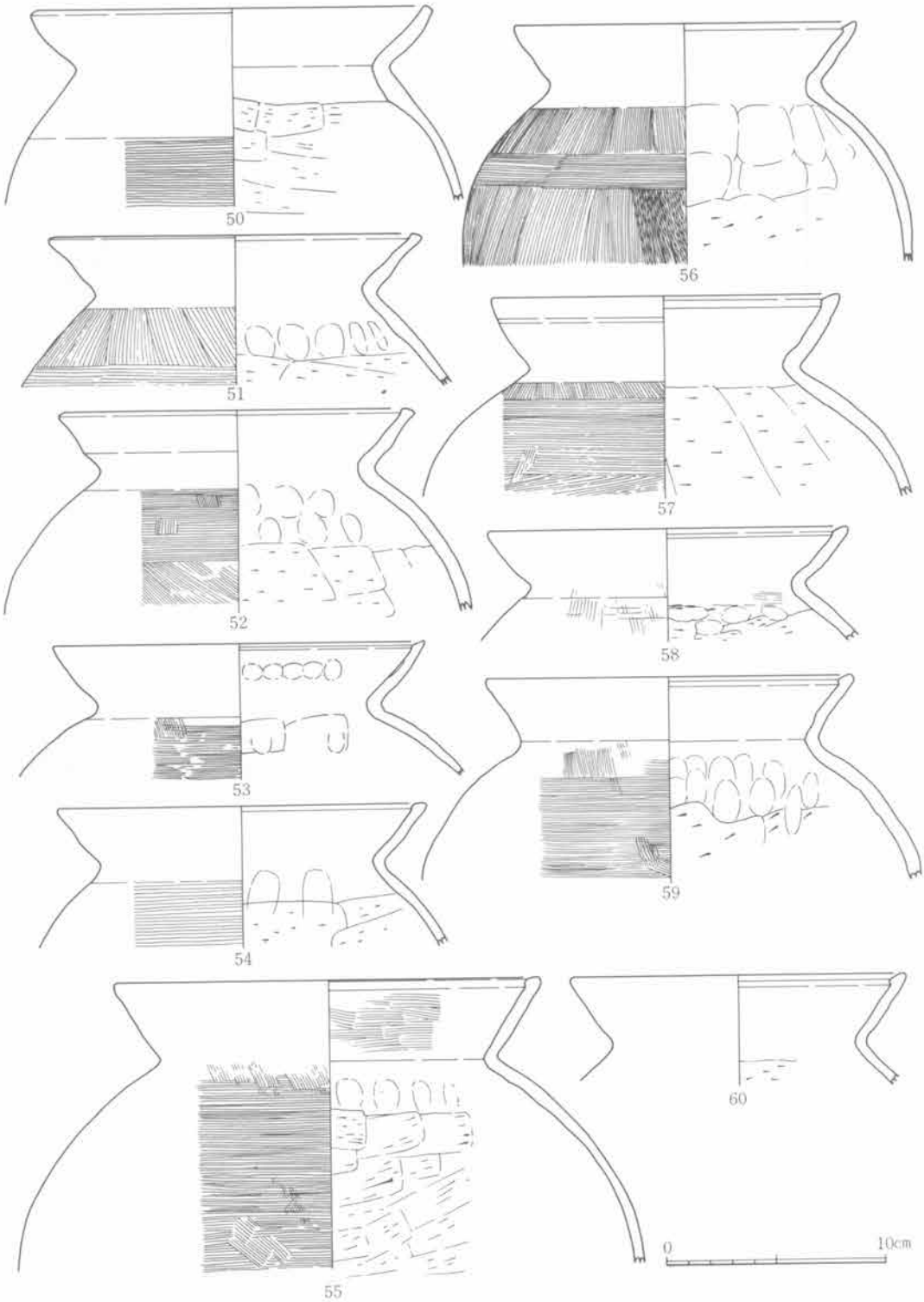


第 29 図　C16溝上層出土土器

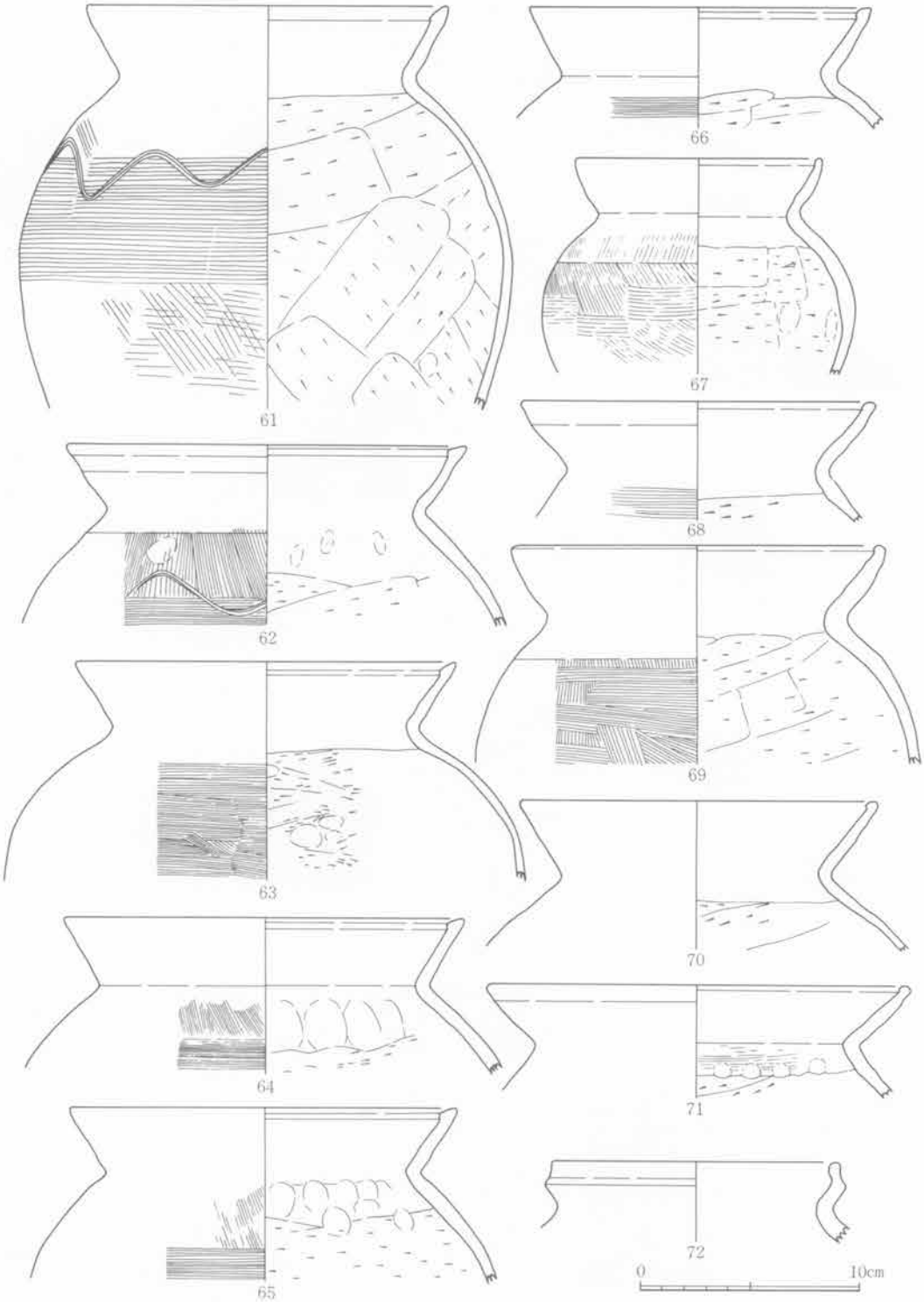
第 30 図　C16溝上層出土土器



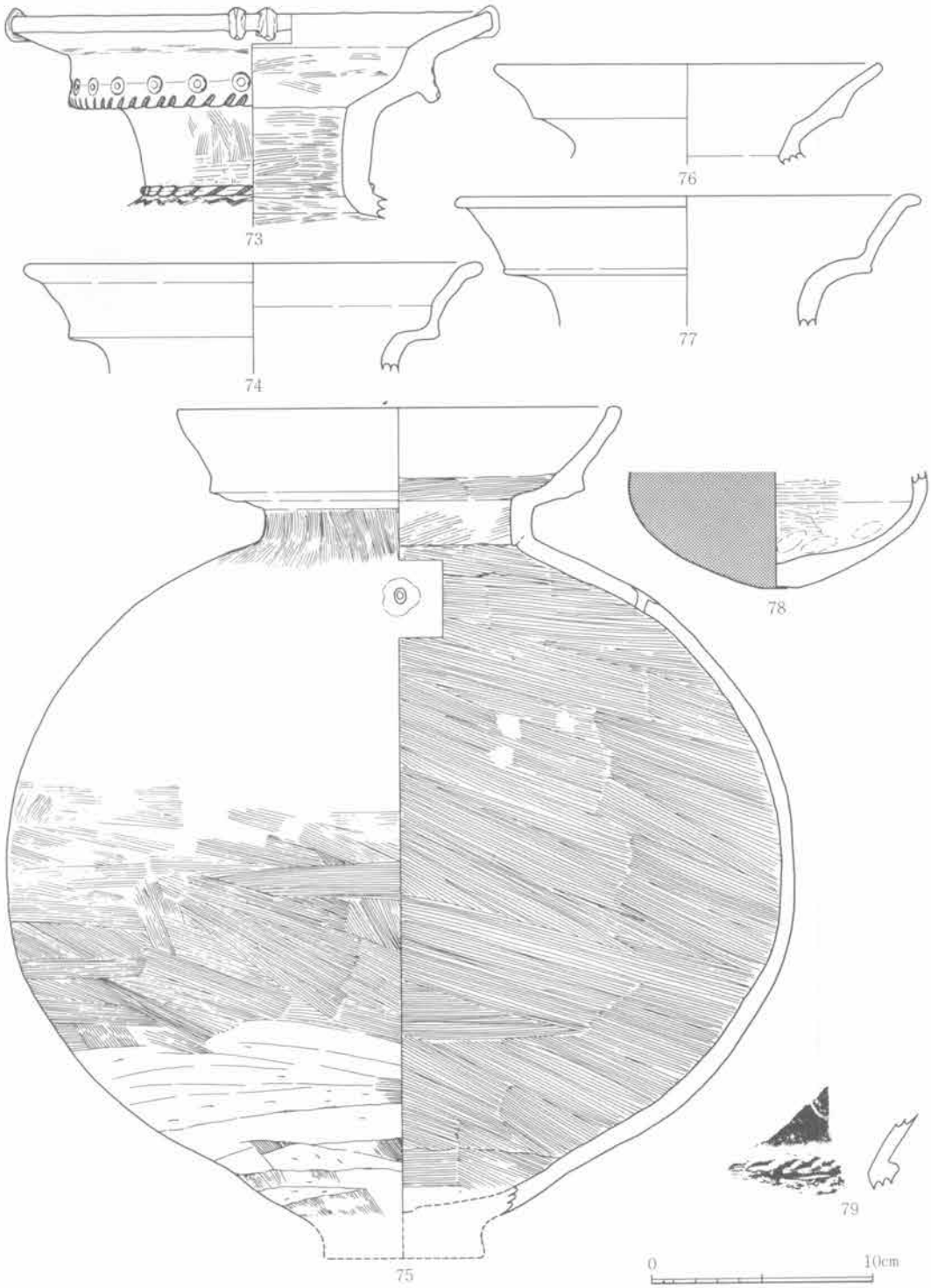
第 31 図　C16溝上層出土土器



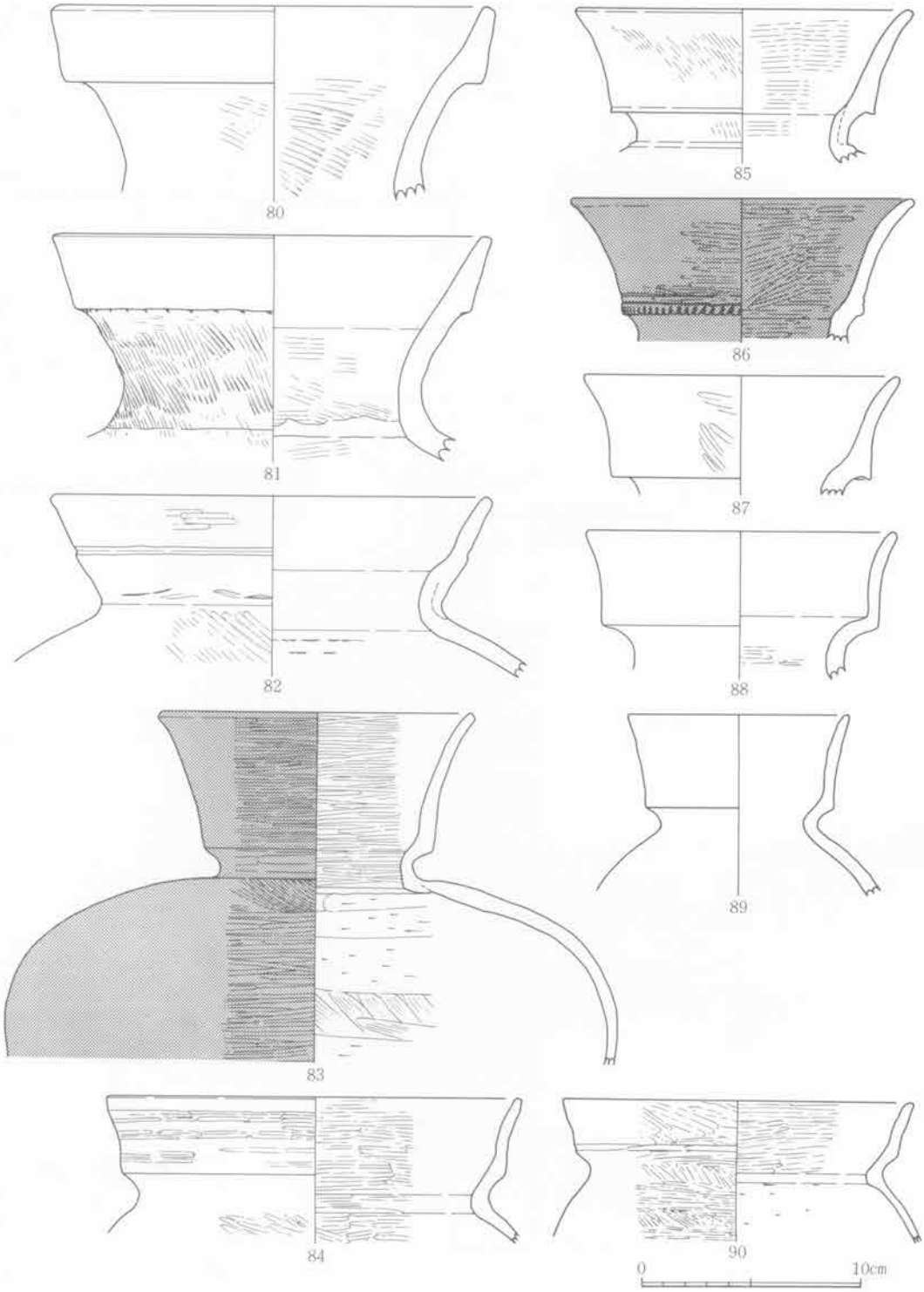
第 32 図　C16溝上層出土土器



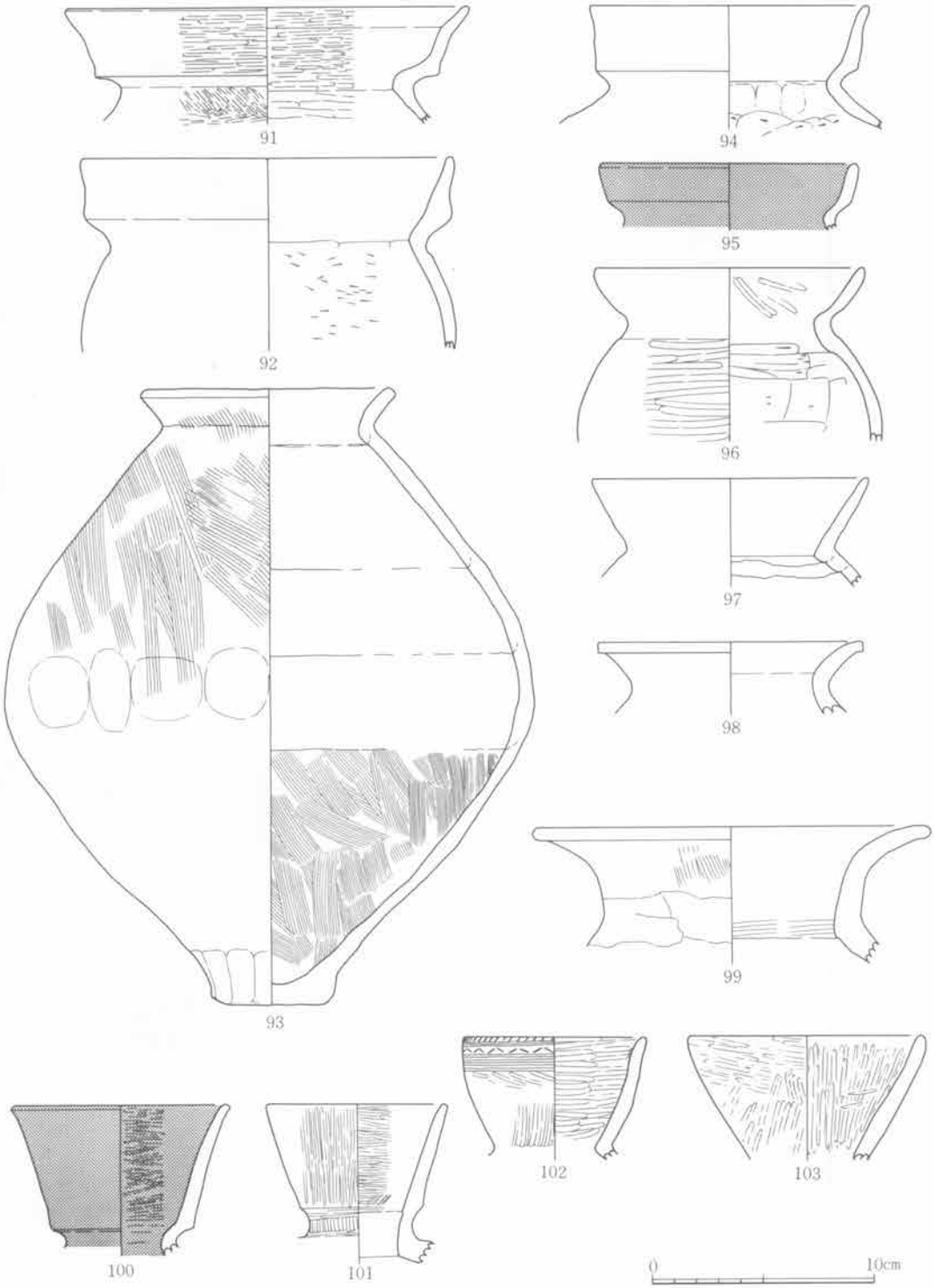
第 33 図　C 16溝上層出土土器



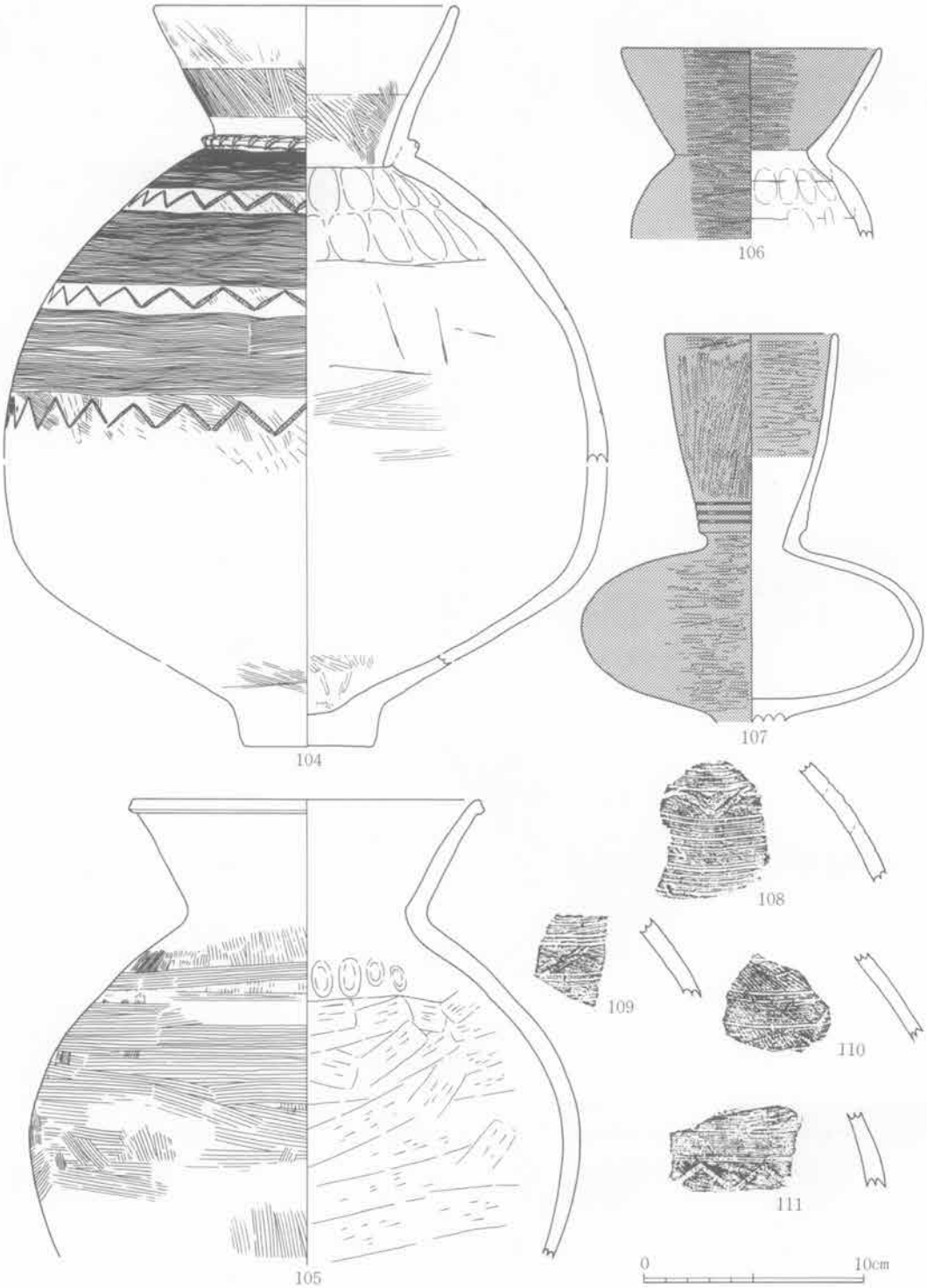
第 34 図　C16溝上層出土土器



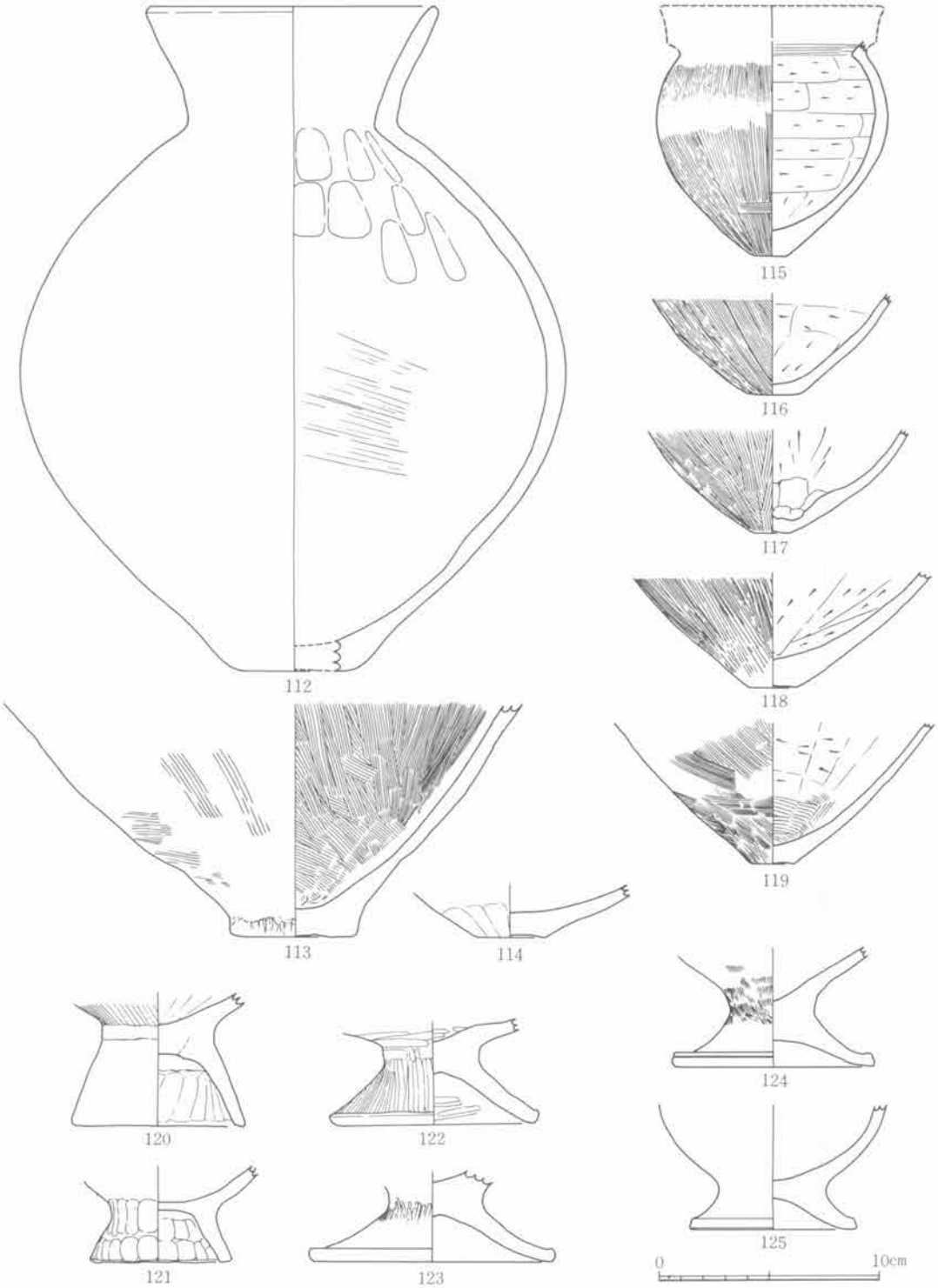
第 35 図　C16溝上層出土土器



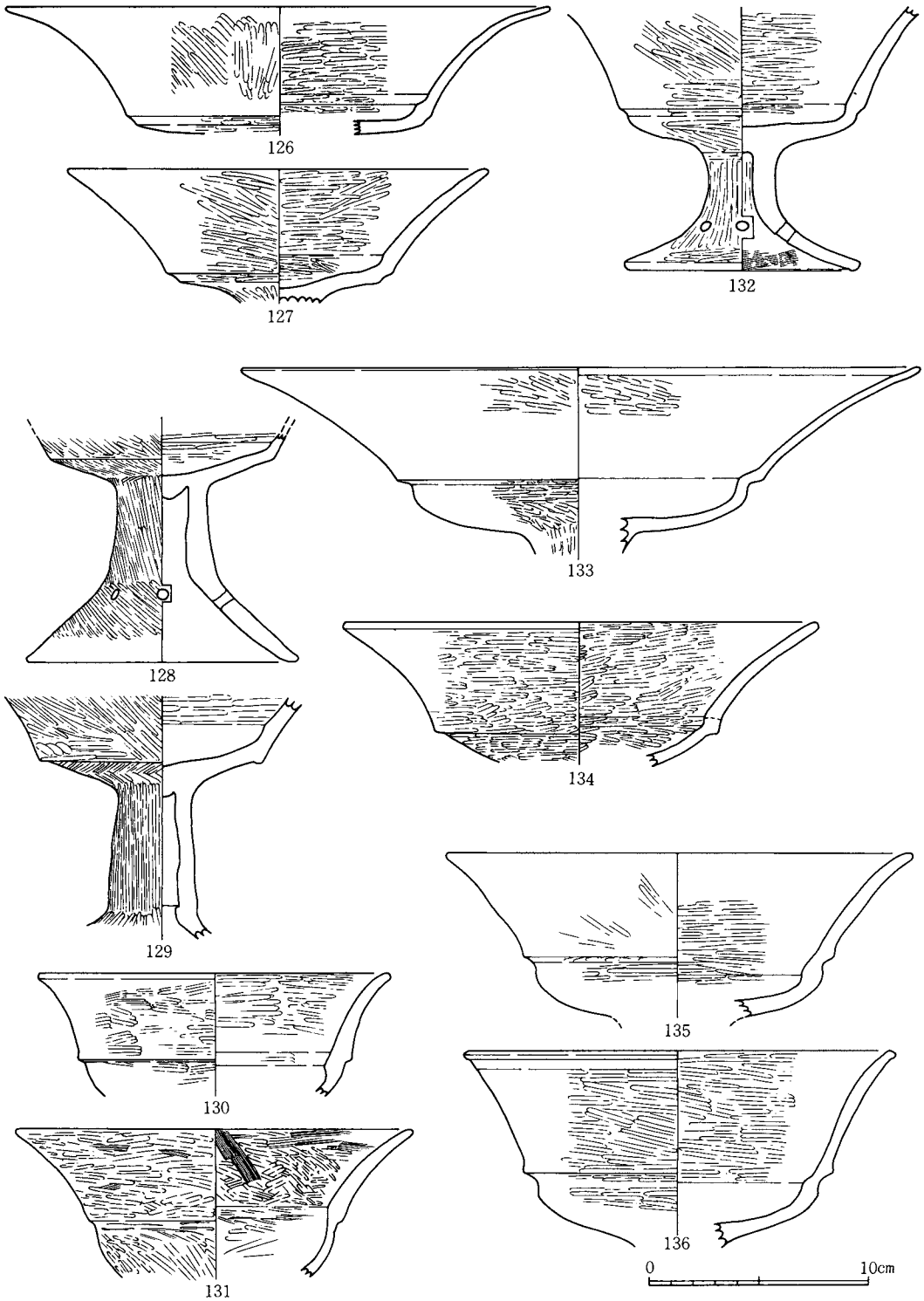
第 36 図　C16溝上層出土土器



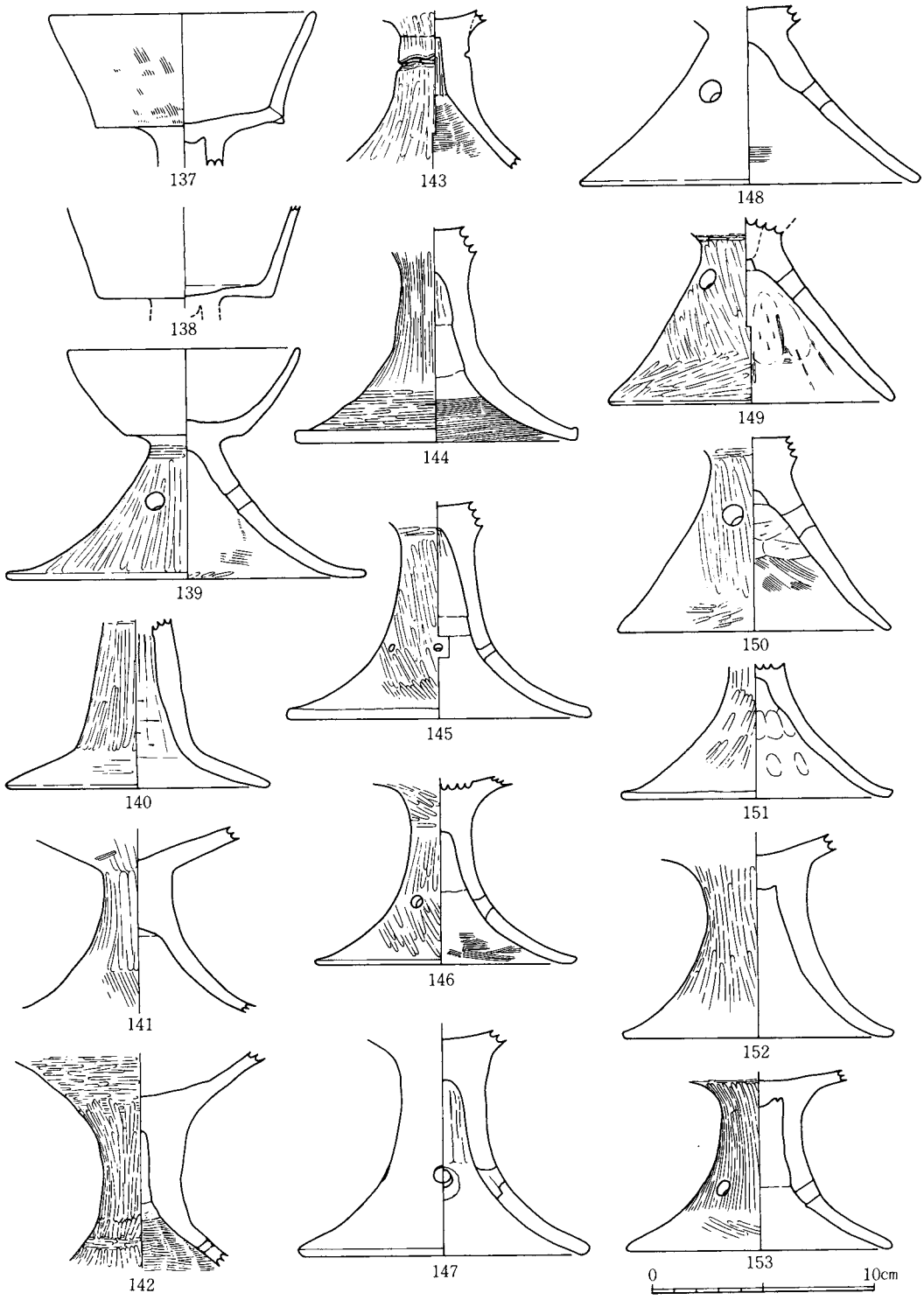
第 37 図　C16溝上層出土土器



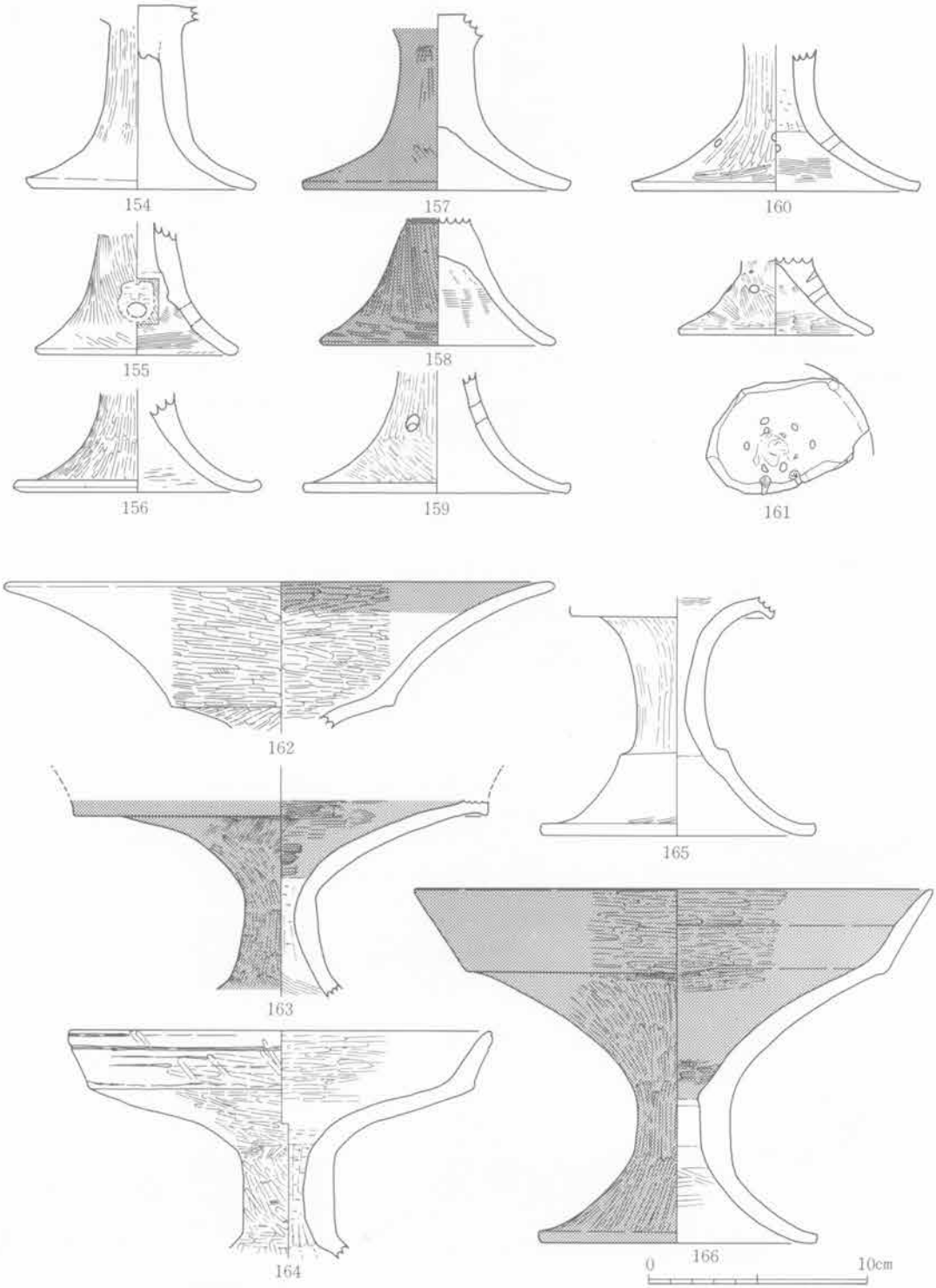
第 38 図　C16溝上層出土土器



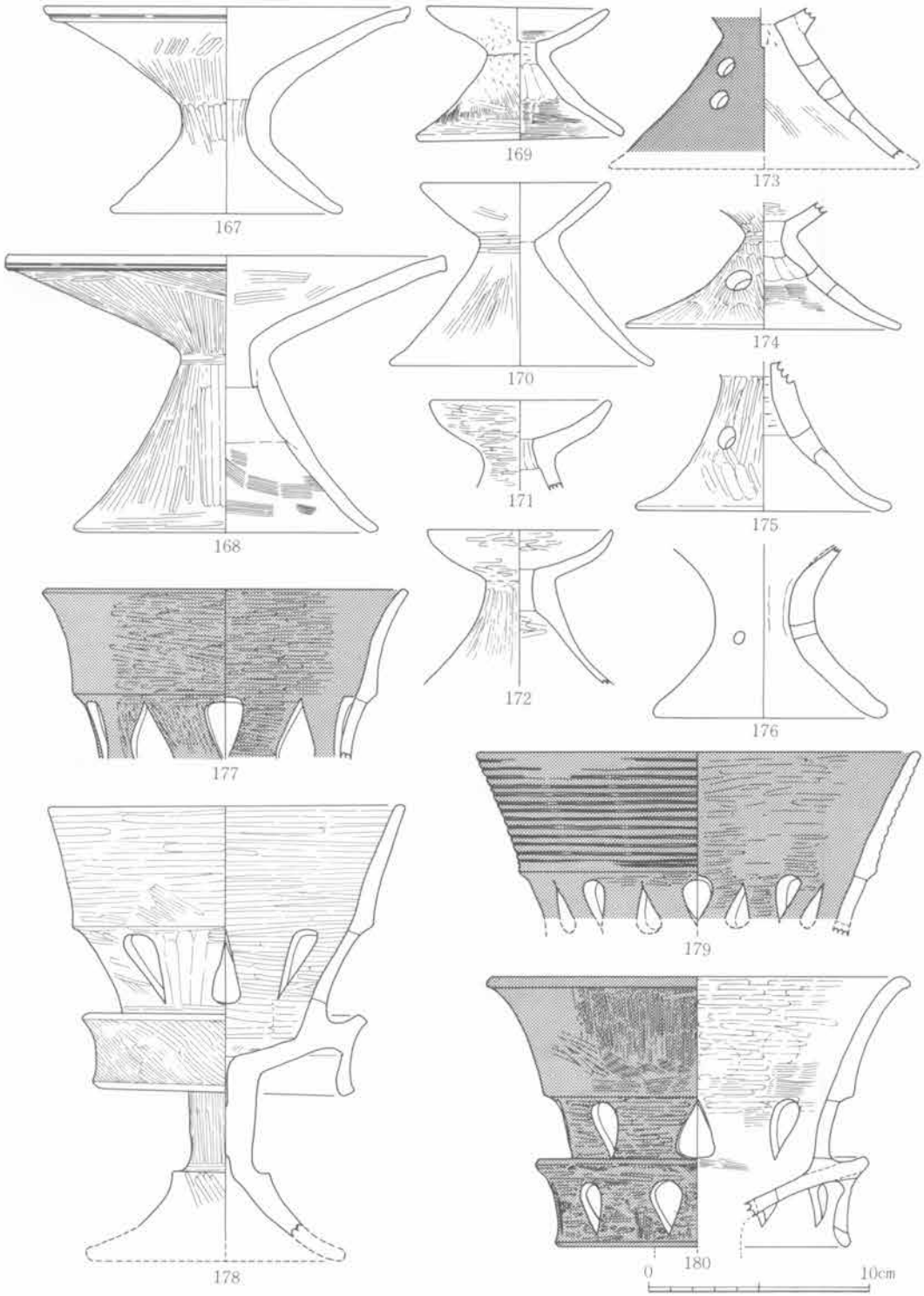
第 39 図　C16溝上層出土土器



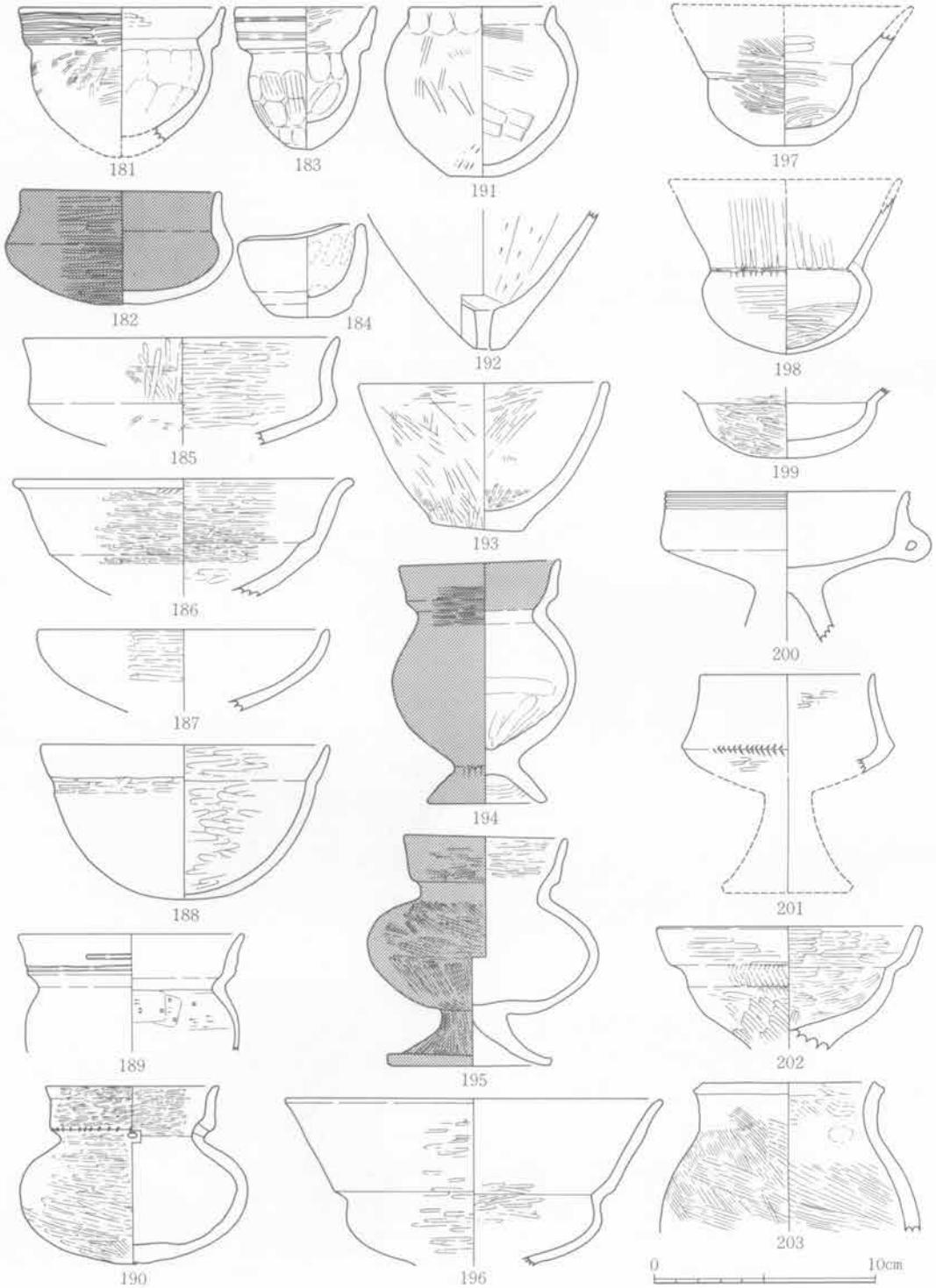
第 40 図　C16溝上層出土土器



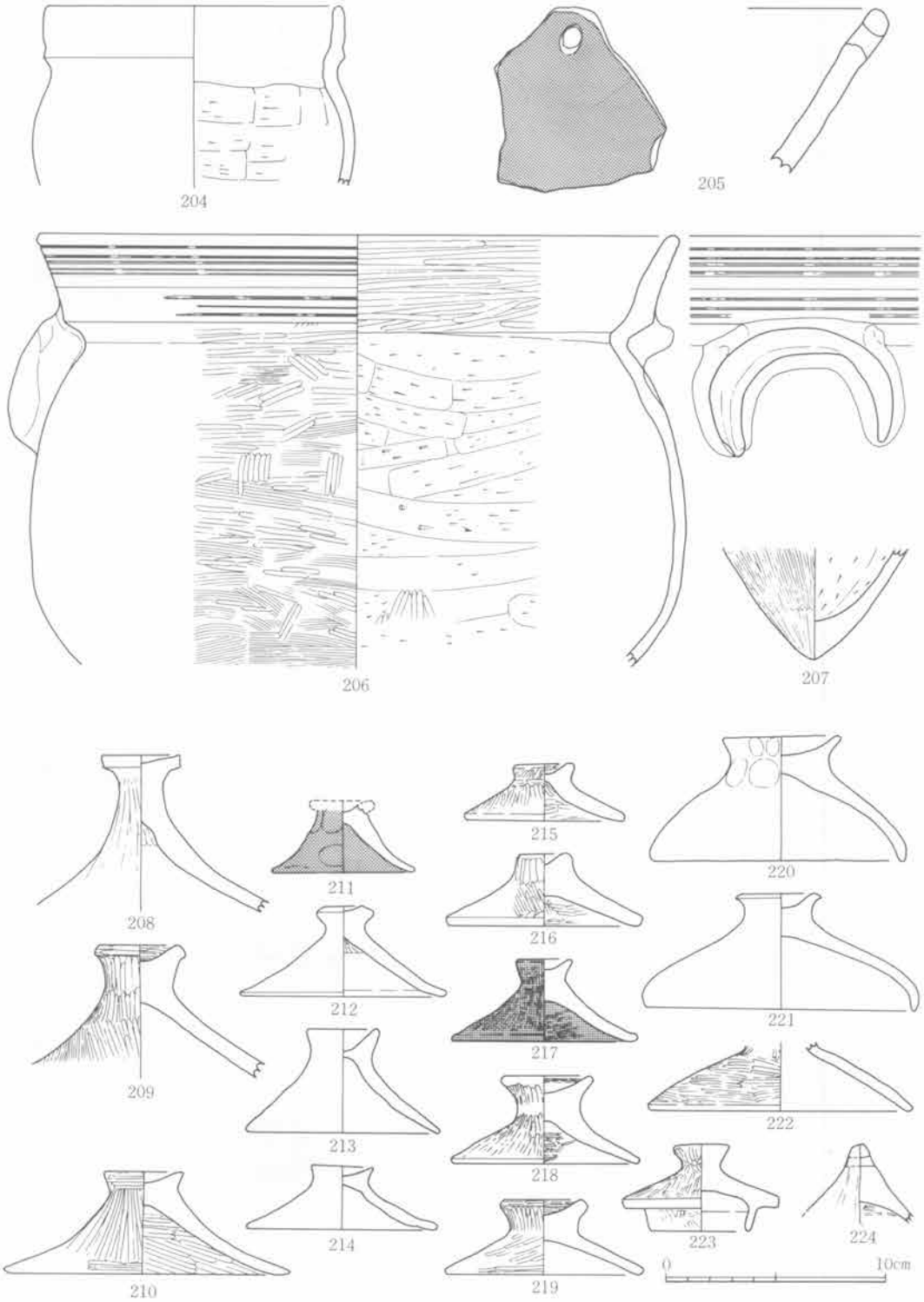
第 41 図　C16溝上層出土土器



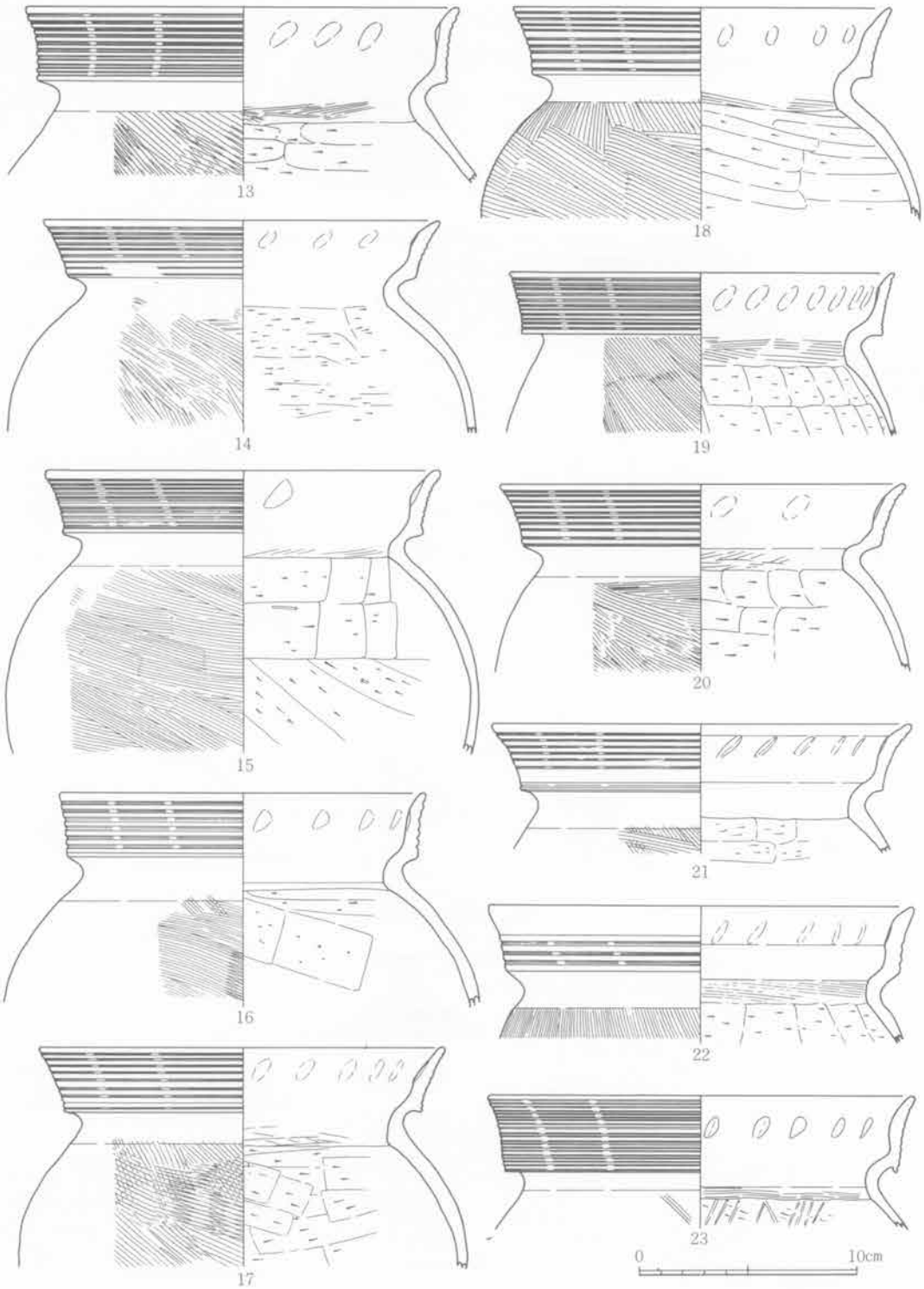
第 42 図　C16溝上層出土土器



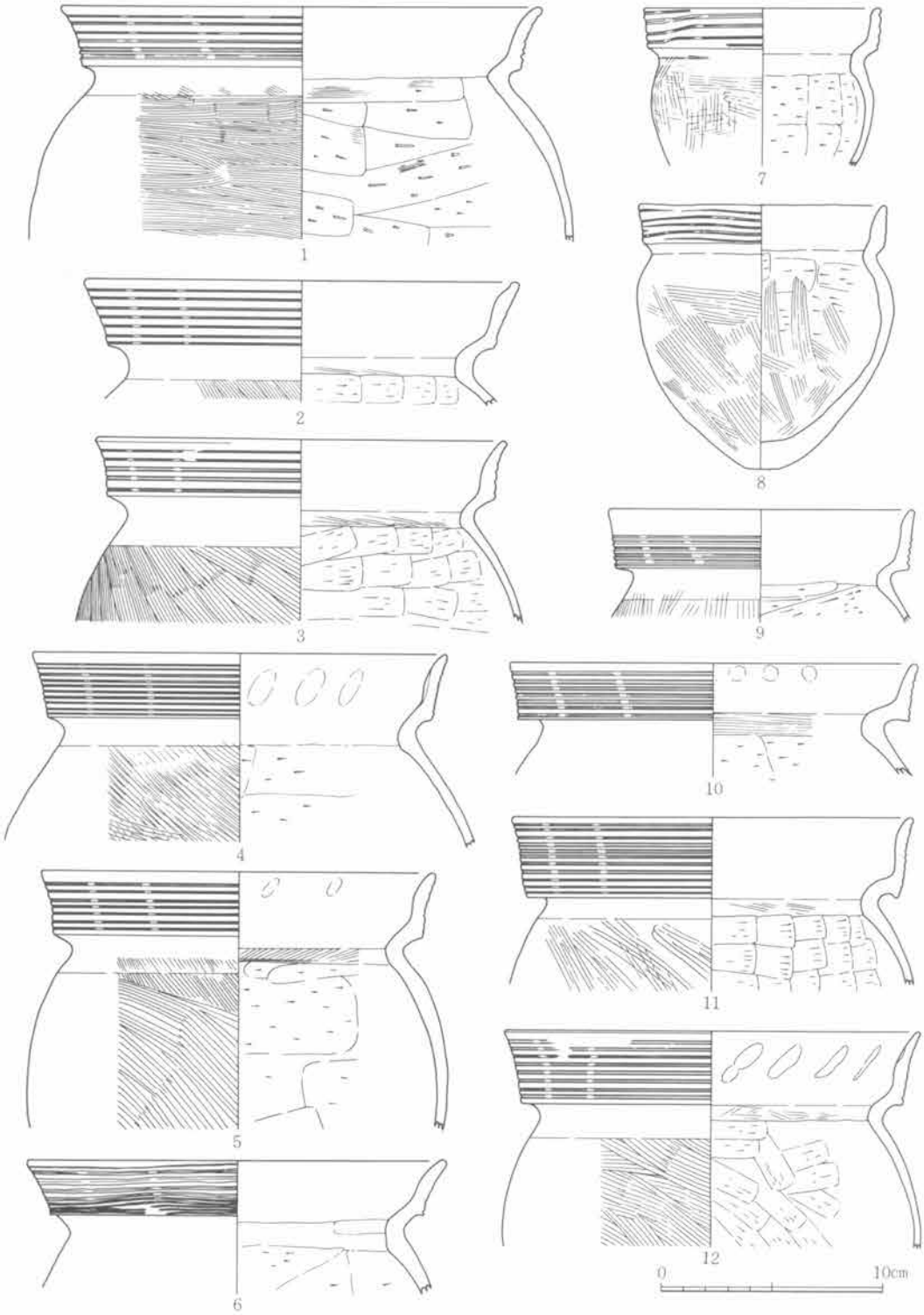
第 43 図　C16溝上層出土土器



第 44 図　C16溝上層出土土器

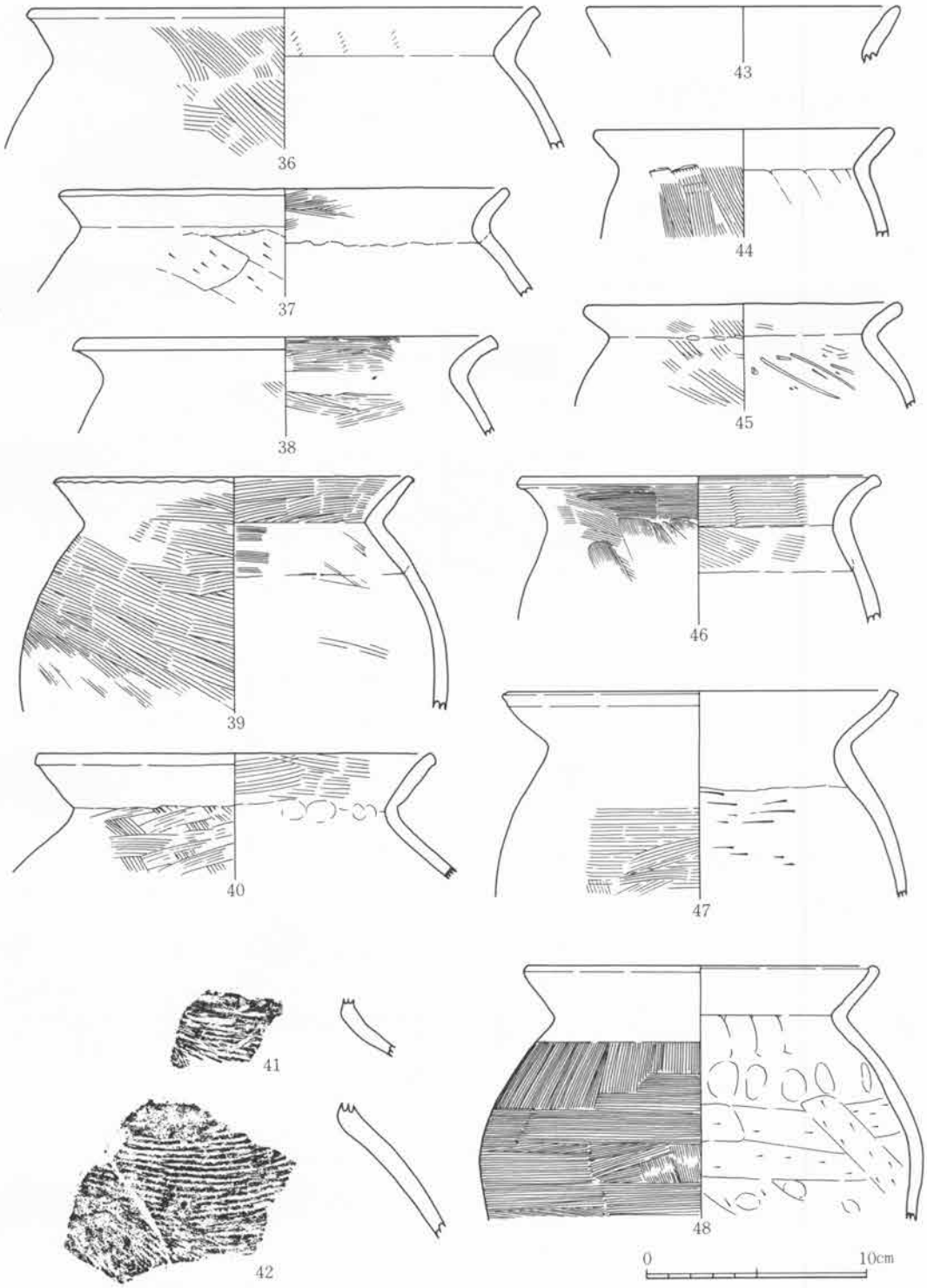


第 46 図　C16溝下層出土土器

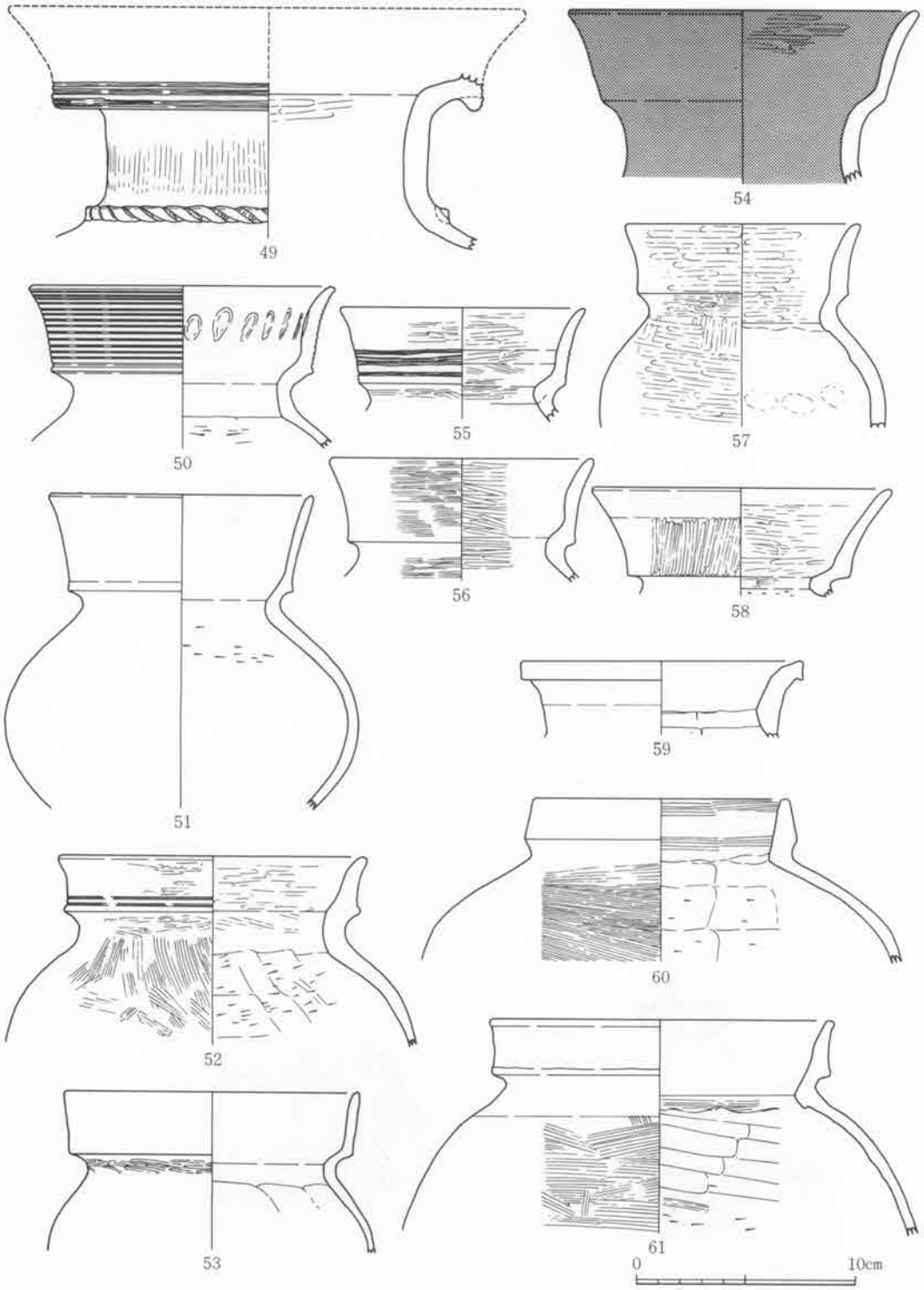


第 45 図　C 16溝下層出土土器

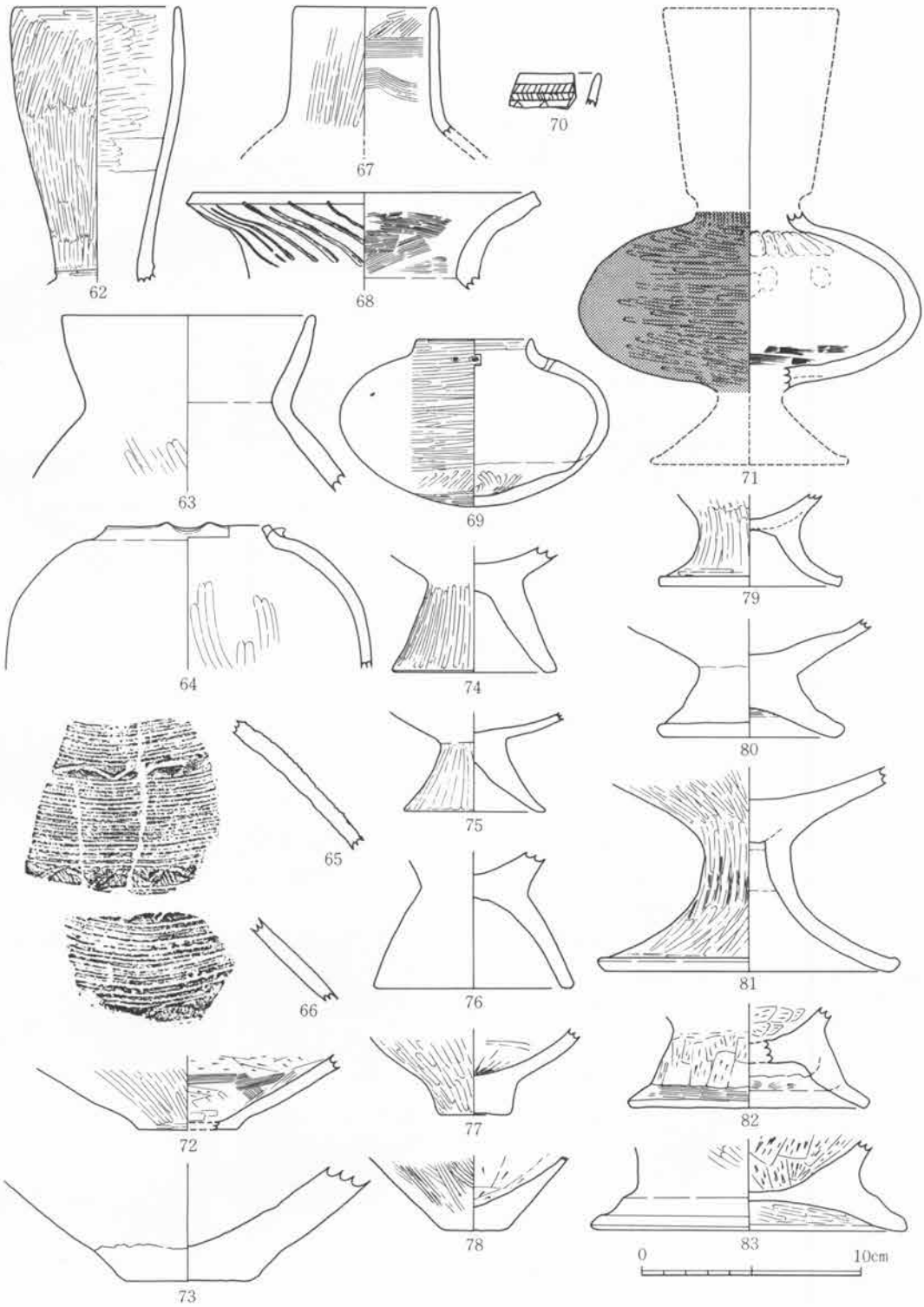
第 47 図　C 16溝下層出土土器



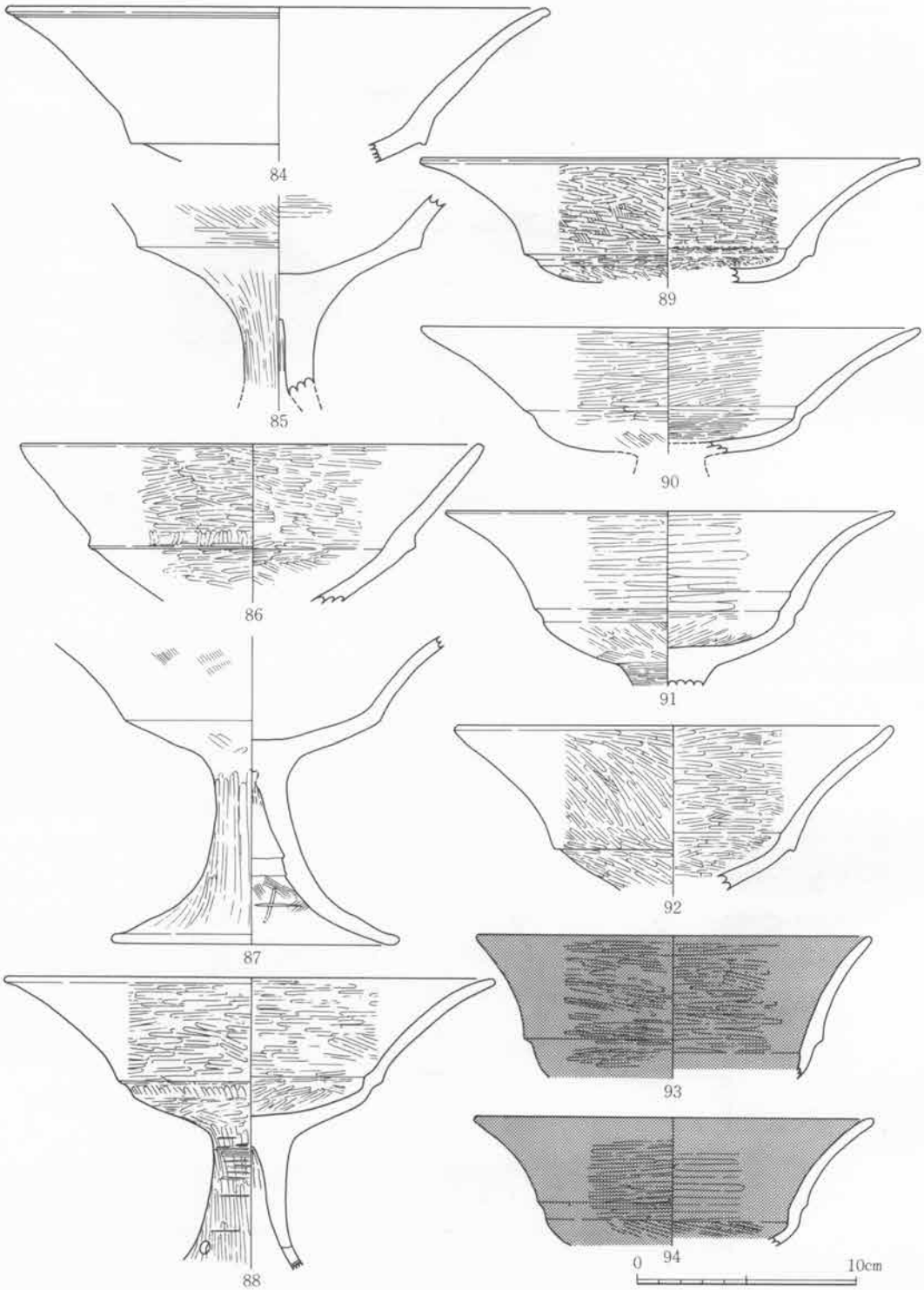
第 48 図　C16溝下層出土土器



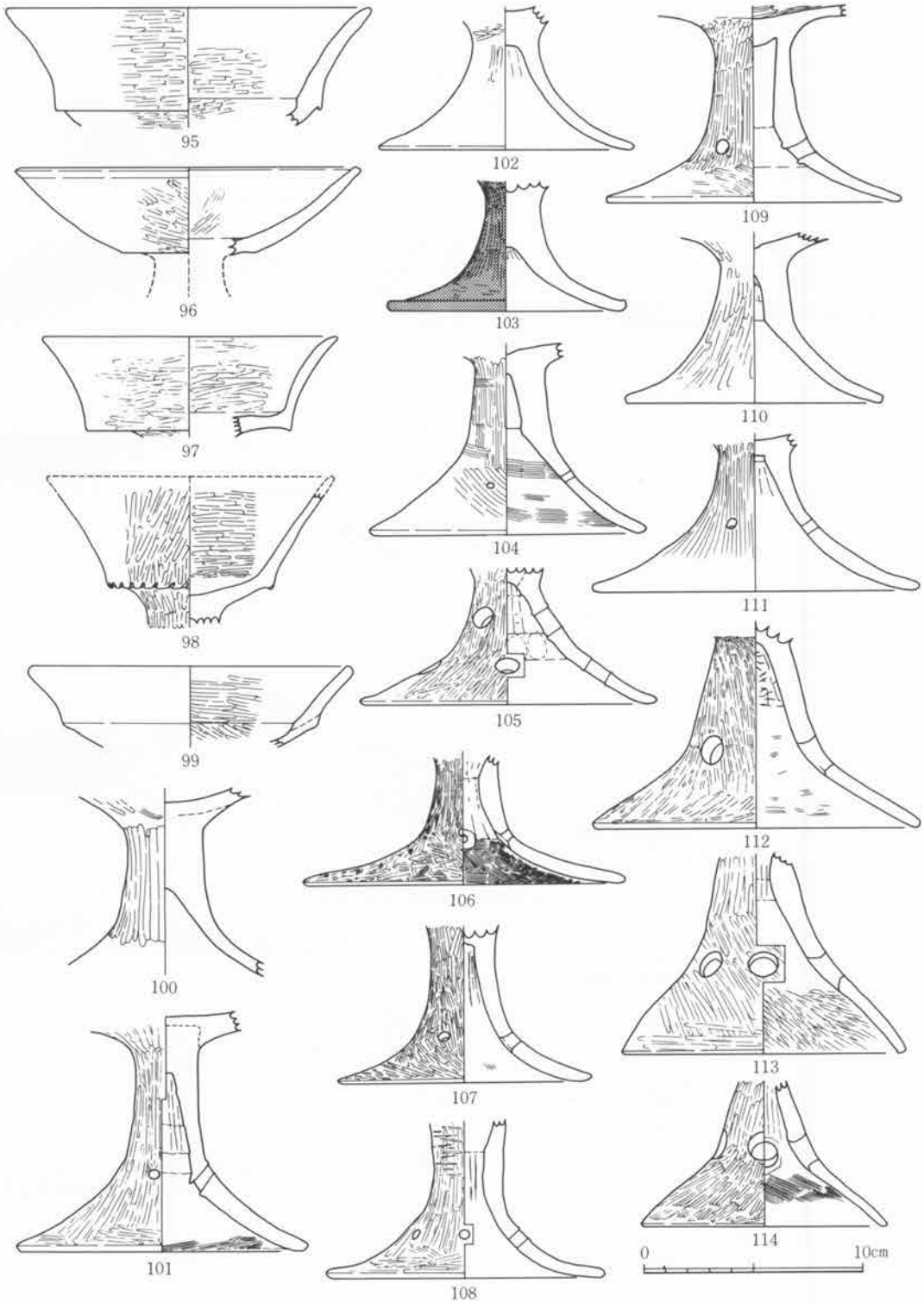
第 49 図　C16溝下層出土土器



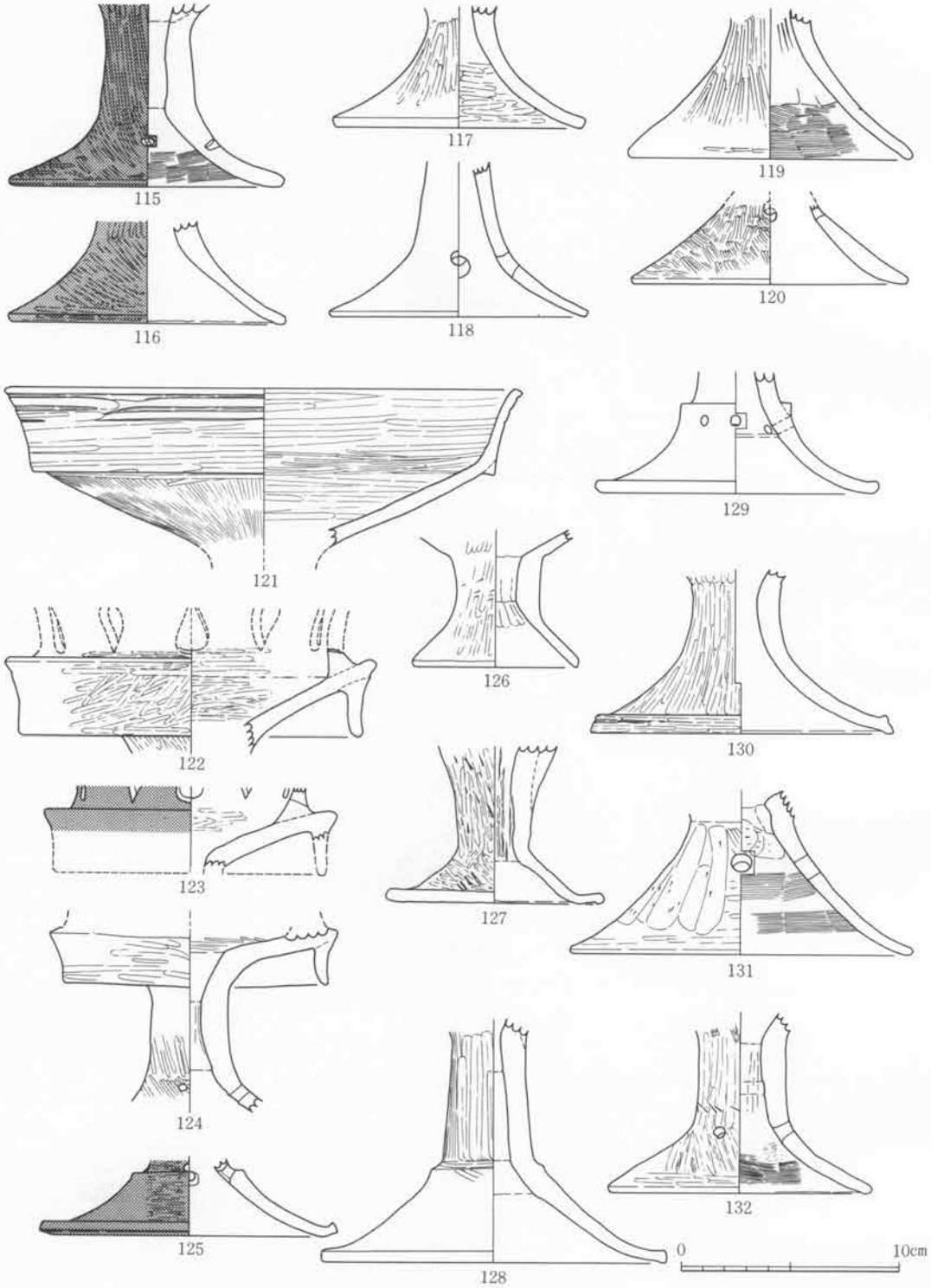
第 50 図　C 16溝下層出土土器



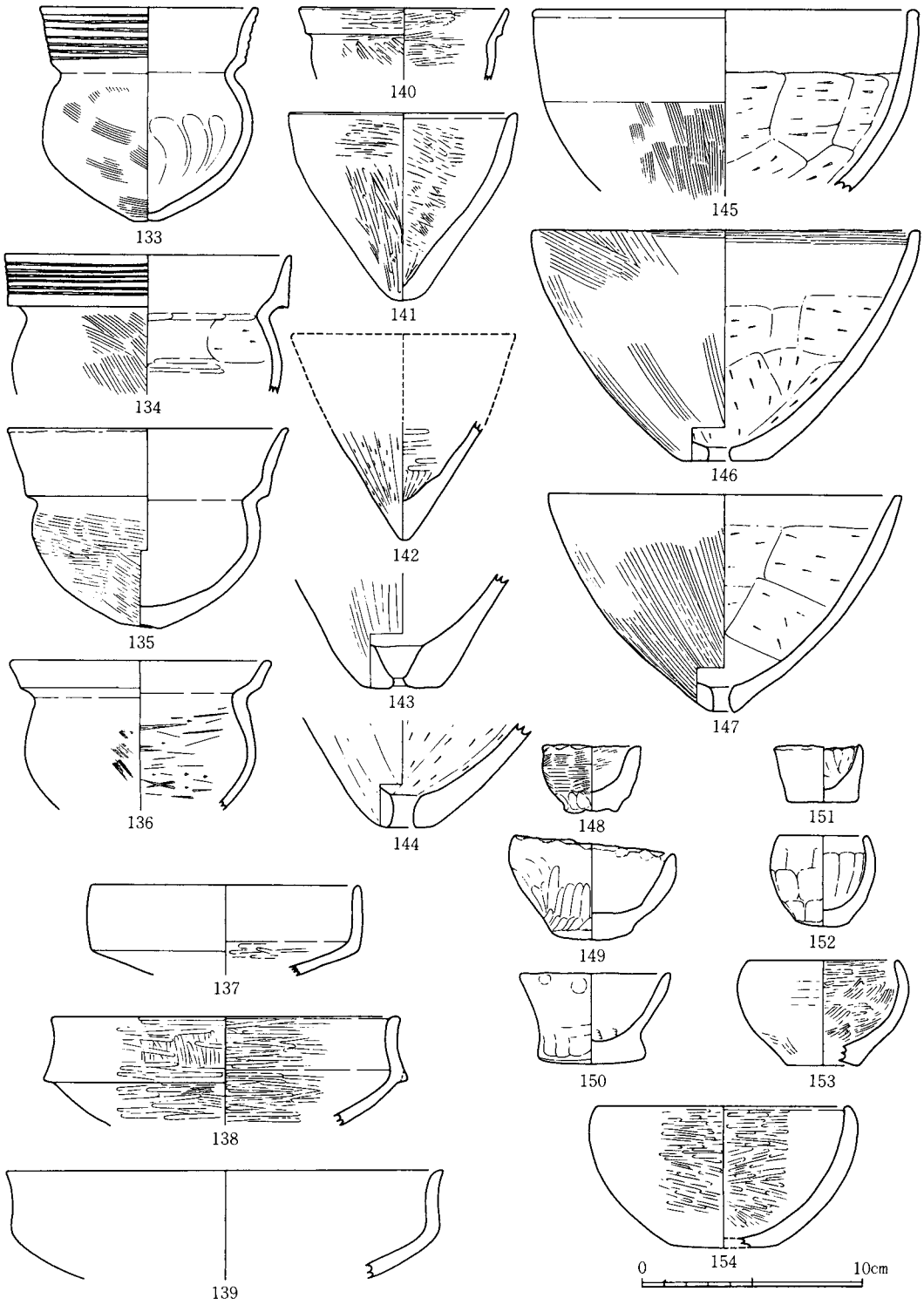
第 51 図　C16溝下層出土土器



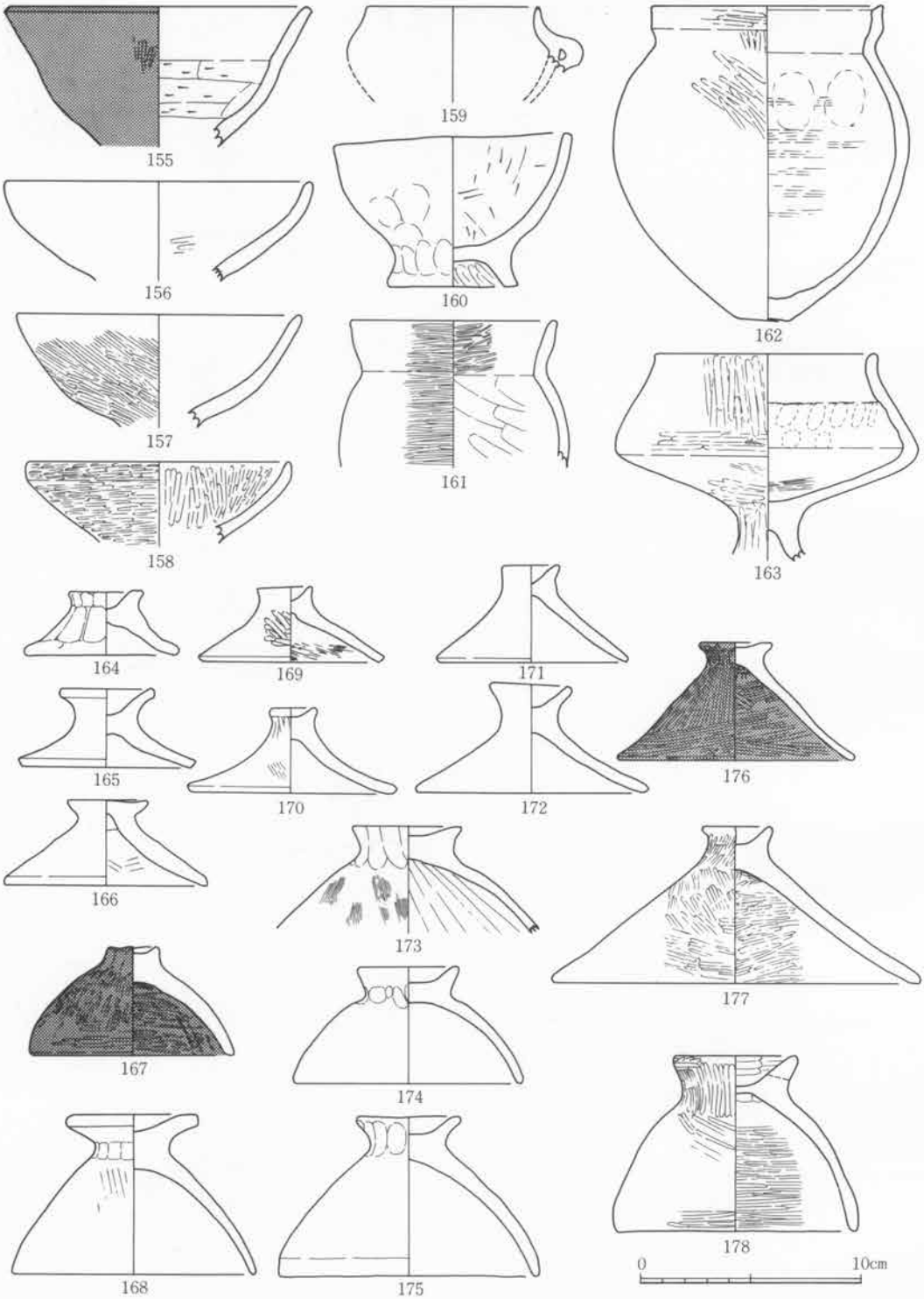
第 52 図　C 16溝下層出土土器



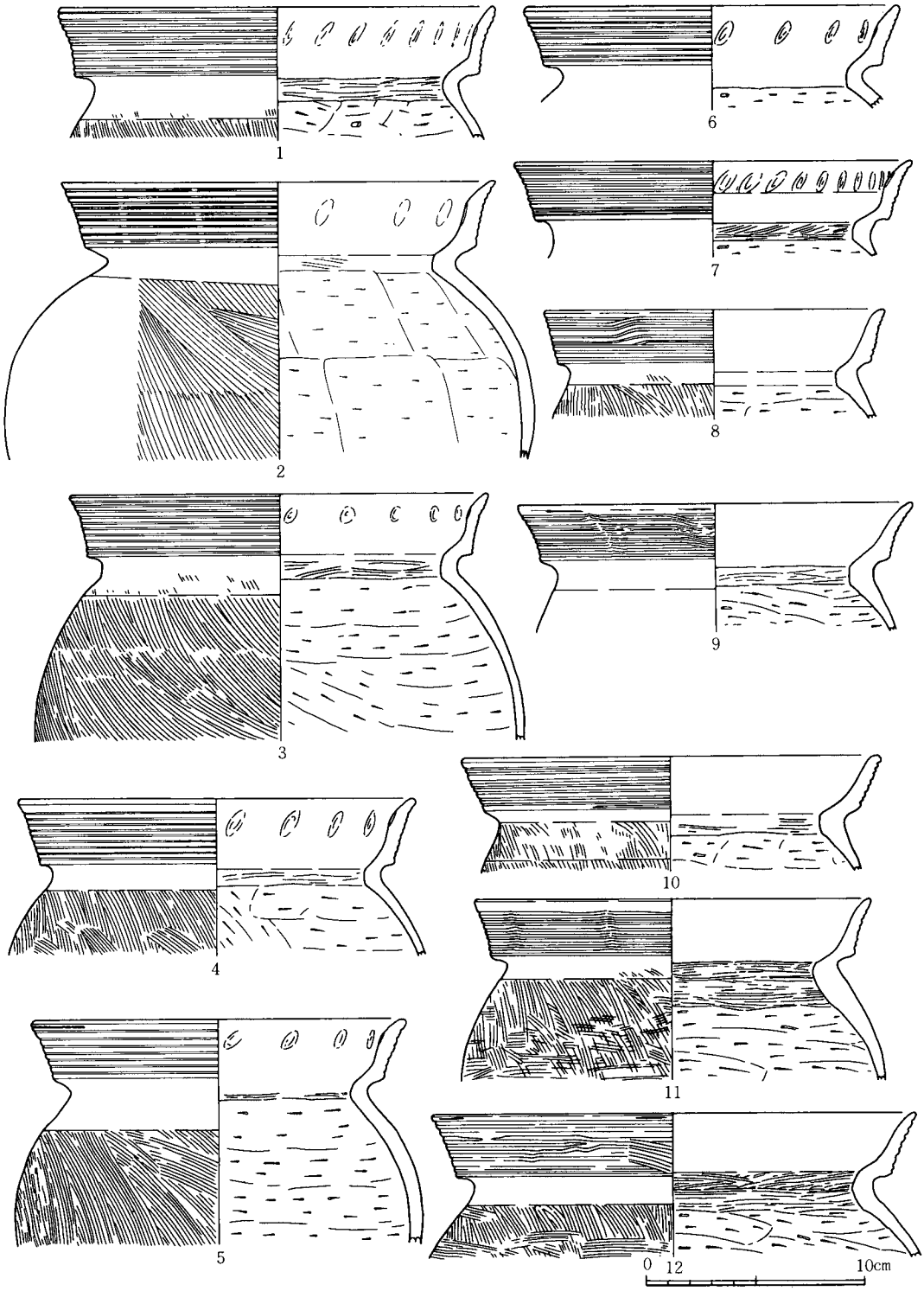
第 53 図　C16溝下層出土土器



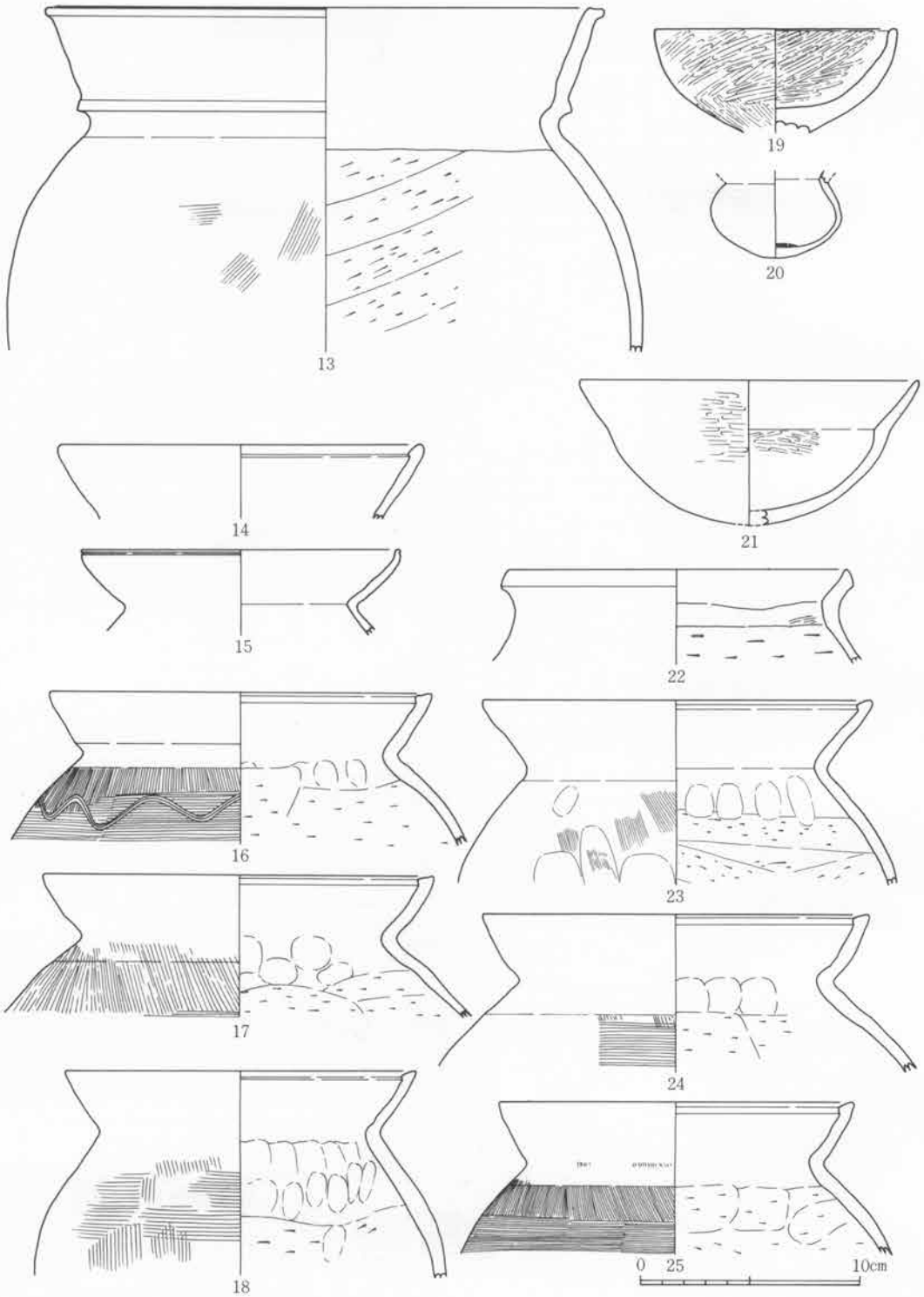
第 54 図　C16溝下層出土土器



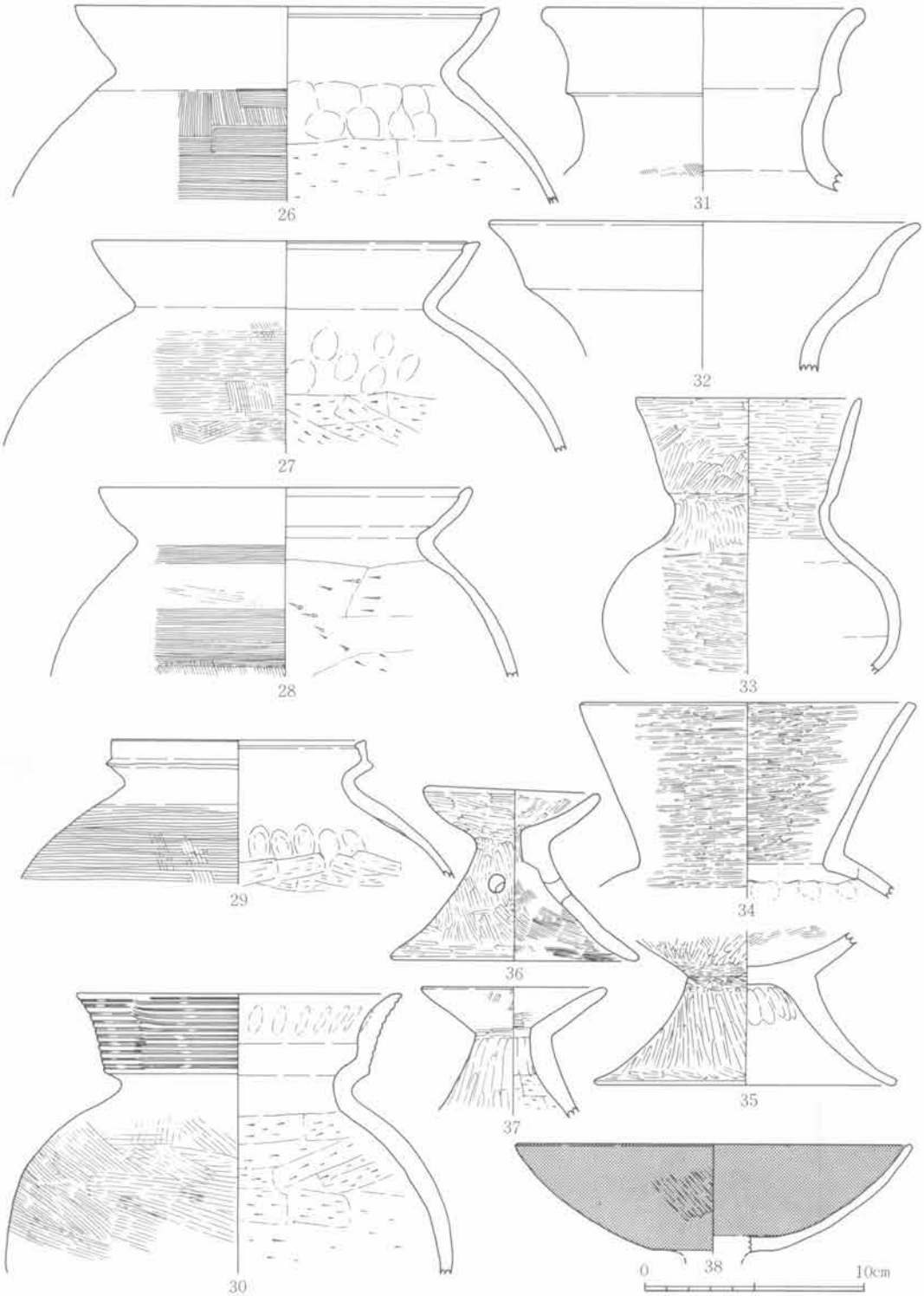
第 55 図　C16溝下層出土土器



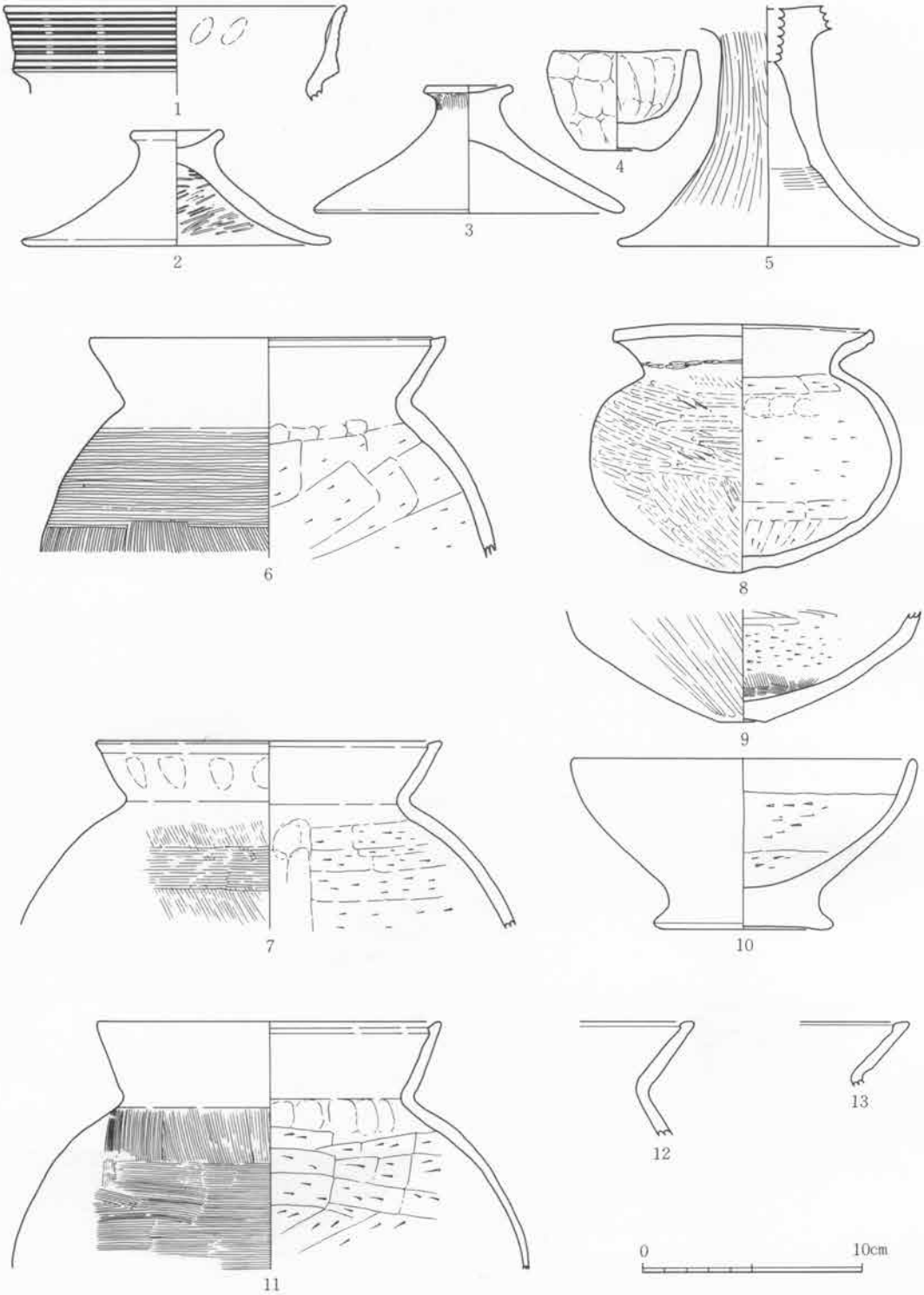
第 56 図　C 17溝出土土器



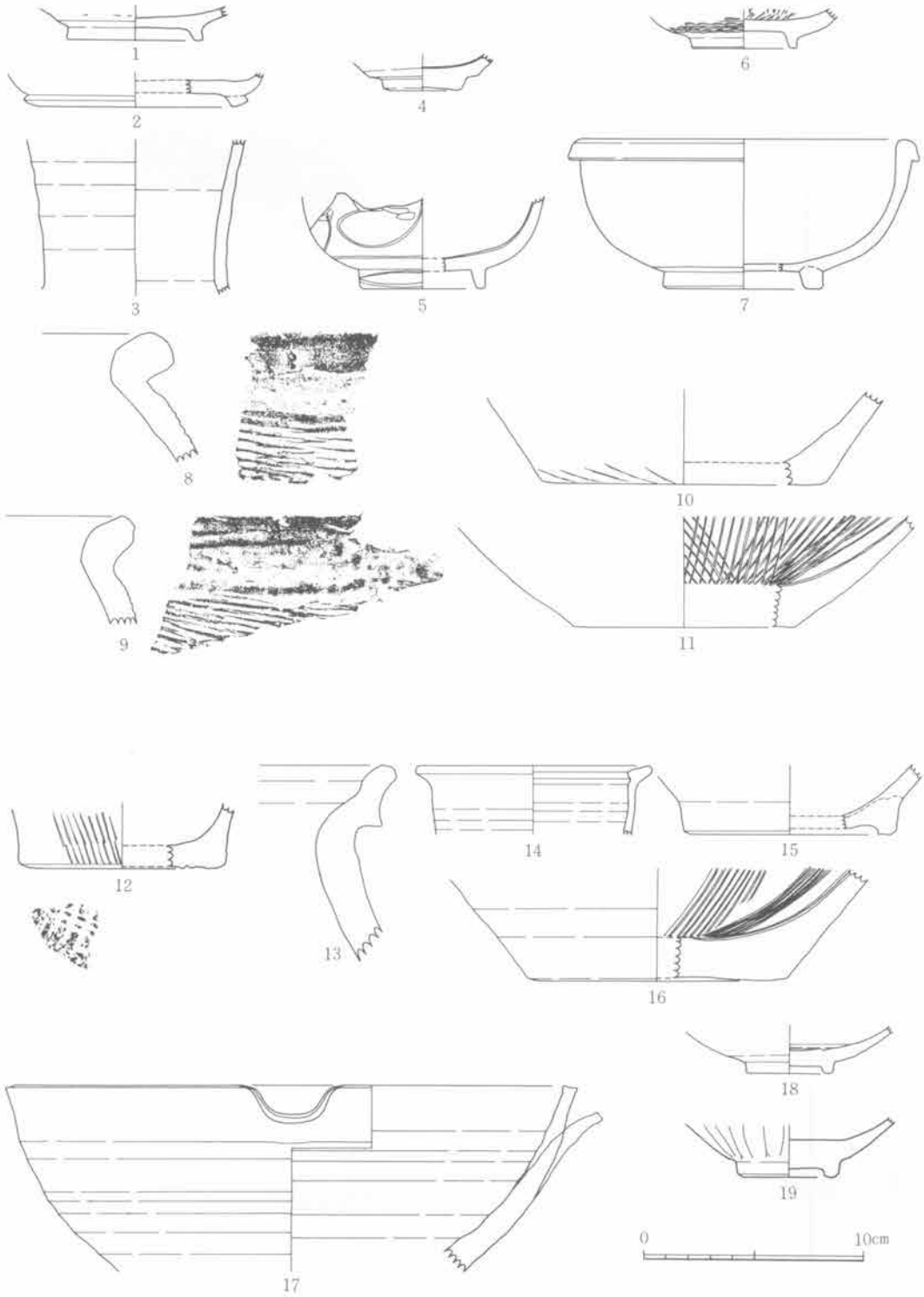
第 57 図　C17溝出土土器



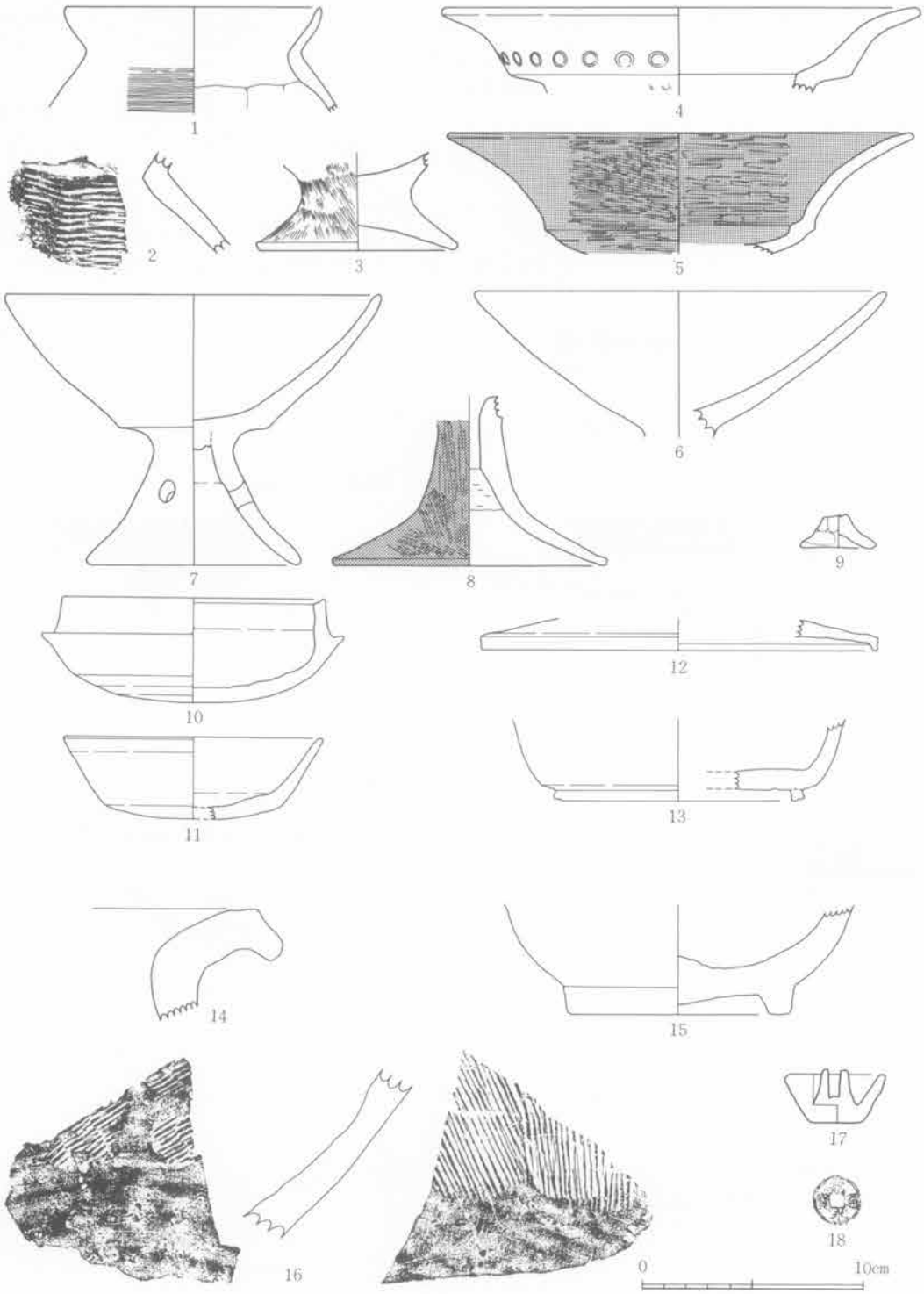
第 58 図　C17溝出土土器



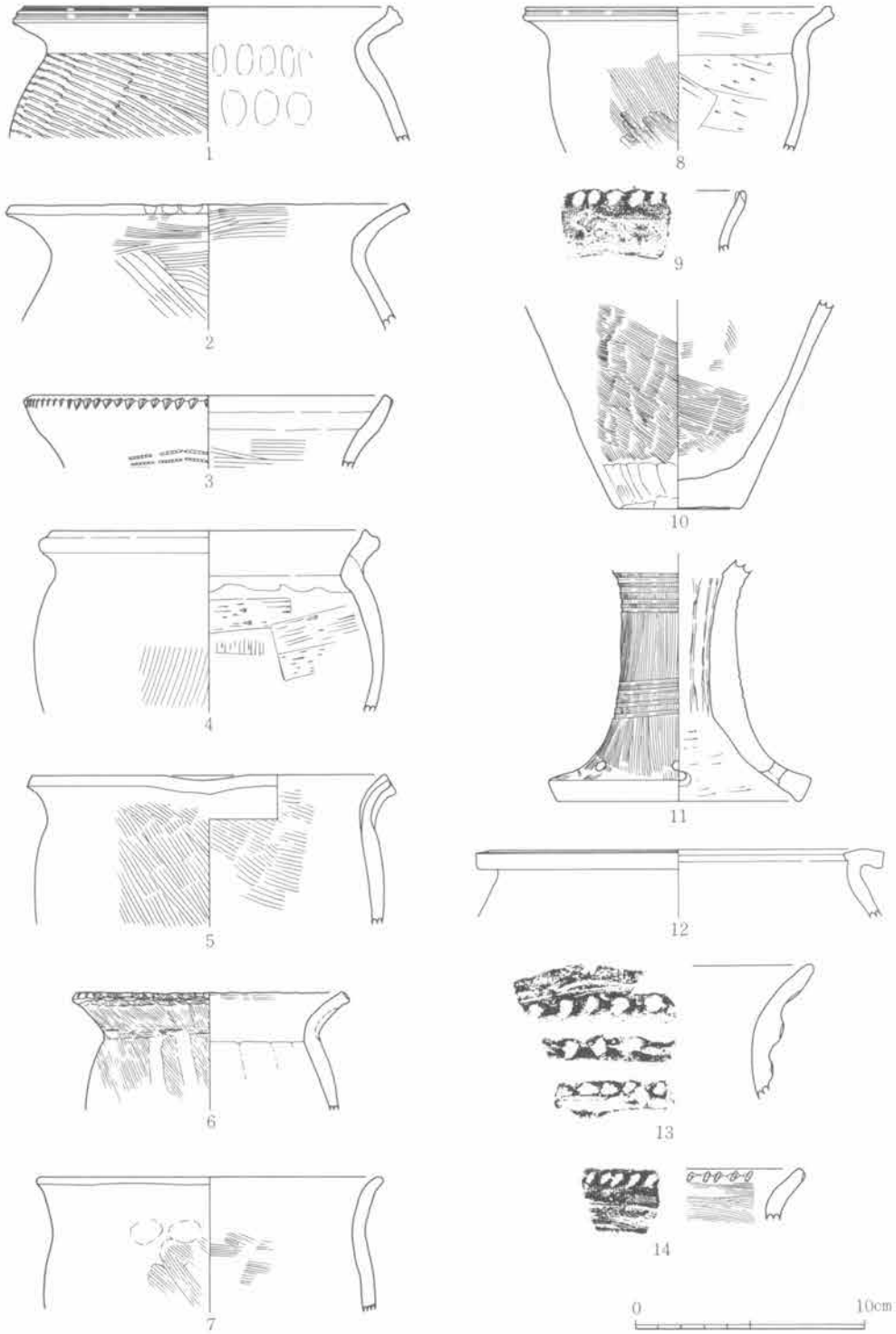
第 59 図　その他の遺構出土土器



第 60 図　その他の遺構出土土器



第 61 図　包含層出土遺物



第 62 図　その他の土器

II　石器と木器

1.　石器と石製品

本遺跡から出土した石器は総数８点を数え(第２表)、器種としては打製石斧・磨石・敲石・砥石が確認された。出土状態については打製石斧１点がD116区の包含量から出土しているほか、他の７点すべてがC16溝から検出され、時期的には月影式～布留式に属するものである。また、石製品では管玉と勾玉が出土し、総数８点である。

第２表　石器一覧表　　(単位はcmおよびｇ．（　）を付したものは現存値を示す)

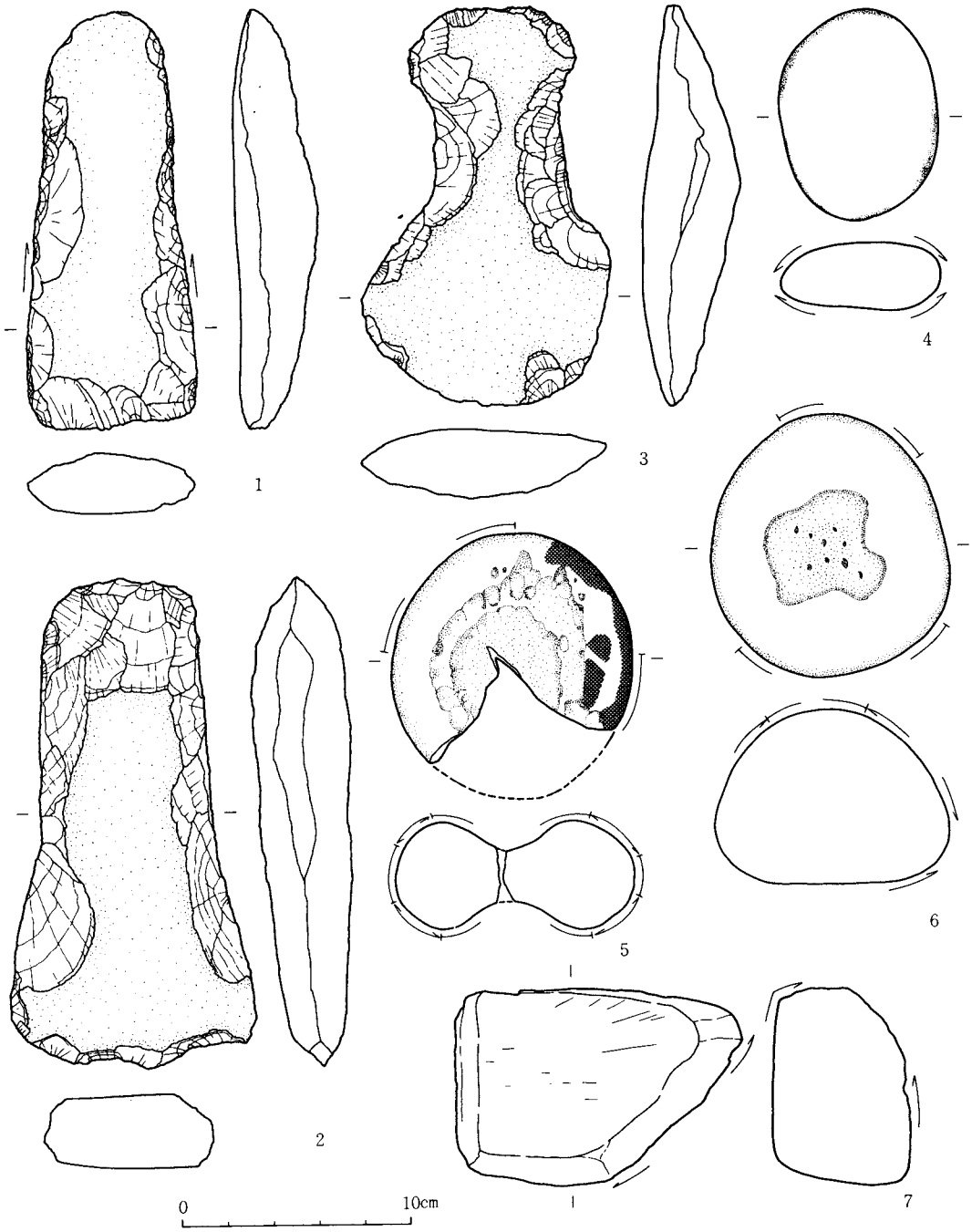
遺物番号	石器名	出土地点	出土層位	遺存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
S15	打製石斧	D116区	包含層	完形	火山礫凝灰岩	18.4	7.5	2.6	507.4	63－1
S11	打製石斧	C16溝	下層	完形	角閃石安山岩	21.5	10.8	3.2	1020.0	2
S18	打製石斧	C16溝	下層	完形	火山礫凝灰岩	17.6	11.0	3.1	635.5	3
S14	磨石	C16溝	下層	完形	石英安山岩	9.3	6.9	3.0	280.3	4
S17	敲石	C16溝	上層	1/4欠	凝灰岩	(10.0)	10.6	4.7	(617.5)	5
S16	敲石	C16溝	覆土	完形	安山岩	11.5	10.3	7.7	1240.0	6
S13	砥石	C16溝	上層	完形	緑色凝灰岩	7.6	8.8	6.0	827.3	7
S9	砥石	C16溝	上層	欠損	緑色凝灰岩	(11.9)	(8.0)	4.5	(517.9)	

打製石斧　３点出土した（第63図１～３)。同図１は形態的にはいわゆる撥形を呈し、頭部から刃部にかけて幅広となり、側縁部はほぼ直線的である。打製石斧の機能は一般的に土掘り具として認められているが、その機能と最も密接に関係があると考えられる刃部の形態は直刃をなしている。また、側縁部においては刃部から胴部中央付近の高さまで使用によるものか磨痕が認められる。同図２もいわゆる撥形としてとらえられるものであり、側縁部がゆるく内曲する形態を呈している。長さが20cmを越え、重さも1000ｇを越える大形品である。刃部ではやや刃こぼれをおこしており、その形態は明瞭でないが刃縁がゆるく外湾する形態のものと推測される。同図３は側縁部が強くくびれるいわゆる弱分銅形をなし、こうしたくびれ部は打製石斧を柄に緊縛する時の紐がかけられた範囲を示しているものと思われる。くびれ部の幅は5.5cmである。これら３点の打製石斧はいずれも表面片方に自然面を残しており、河原石を素材としてそれから剥片をとり、調整を加えて製作されたものと考えられる。３点から本遺跡の打製石斧の平均的な法量を求めてみると、長さは17.5～21.5cm、幅は7.5～11.0cm、厚さは2.5～3.2cm、重さは500～1000ｇに分布している。打製石斧は着柄して使用されたと推測され、胴部のくびれ部幅やくびれていないものについては胴部の最も細い部分の幅が柄の幅と関係あるのではないかと考えられることから、ここではその部位についても計測してみた。第63図１～３はそれぞれ5.7cm、7.1cm、5.5cmとなり、5.5～7.1cmに分布して比較的数値がまとまっている。石質としては、火山礫凝灰岩・角閃石安山岩などの岩石が利用されている。

磨石　C16溝下層から１点出土した（第63図４)。周縁部を除いて両面ともに磨耗痕が認められ、その程度は著しい。石質は石英安山岩である。

敲石　C16溝から２点検出された（第63図５・６)。同図５は凝灰岩の円礫の両面に敲打痕と磨耗痕を、周縁部に敲打痕をもつものである。上・下面ともに表面中央部の敲打痕は推定長径８cm、短径6.5cmの楕円形をなし、中心部に向って深くなっており、凹みの最深部は表面から約1.5cmで

る。磨耗痕はこの敲打痕をとりかこむようにして周囲にめぐっている。周縁部には敲打痕のほか、タール状付着物が帯状に長さ10cm、幅2.5cmにわたって付着している。同図6はほぼ全面に磨耗痕が認められ、下面には4×5cmの楕円形の平担面がみられ、この部分が特に著しい。敲打痕は上面にアバタ状のものがみられ、その広がりは直径4cmの不整円形を呈しており、周縁部にみられ



第 63 図　石器実測図

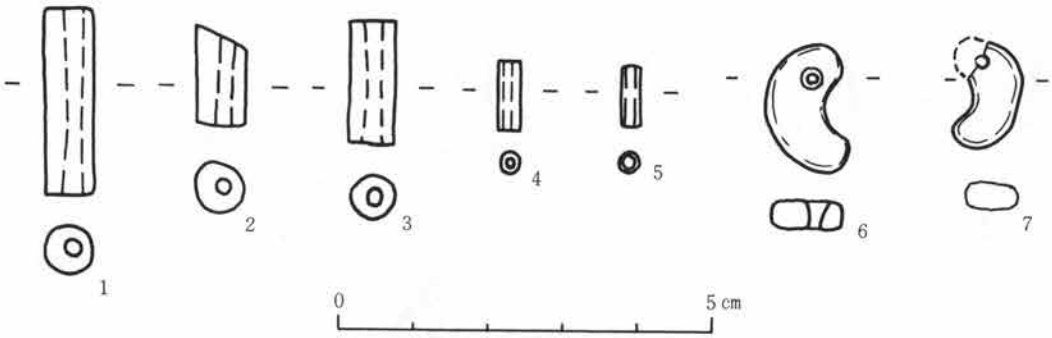
るものは軽い敲打痕を残す程度にとどまっている。周縁部においては長さ7㎝、幅3㎝にわたって帯状にタール状付着物がついている。石質は安山岩である。

砥石　C16溝上層から2点出土しており（第63図7）、両者とも粗粒の緑色凝灰岩である。同図7は5面に磨り面が認められる。上面は全面的に平滑に磨かれており、短い筋状の痕が5本みられる。下面では図示はされていないが、鋭い鉄製品でも砥いだためであろうか、幅2㎜、長さ5～7㎝の3条の溝が走っており、側面でも同様な溝が2条認められる。

第3表　管玉一覧表

〔単位は㎜およびg．（　）を付したものは現存値を示す〕

遺物番号	出土地点	出土層位	遺存状態	石質	長さ	直径	上孔	下孔	重さ	挿図番号
1	不明	不明	完形	緑色凝灰岩	25.0	6.5	2.5	2.3	1.3	64－1
2	不明	不明	欠損	フリント	(13.5)	6.5	(2.0)	2.0	(1.0)	2
3	C16溝	上層	完形	緑色凝灰岩	16.4	6.1	2.4	2.5	0.8	3
4	K108区	地山直上	完形	緑色凝灰岩	9.5	3.0	1.1	0.8	0.2	4
5	I106区・C16溝	覆土	完形	フリント	8.0	2.5	1.4	1.9	0.1	5
6	I109区・C6溝	覆土	完形	緑色凝灰岩	23.0	5.0	2.5	2.5	0.9	



第64図　管玉・勾玉実測図

管玉　6点出土している（第3表、第64図1～5）。出土状況については、C16溝から2点出土し、時期的には月影式～布留式に伴うものである。C6溝からも1点出土しており、これは月影式的に属するものである。また、K108区からも1点出土しており、出土地点・出土層位不明が2点ある。管玉は大きさから2群に分けられ、ひとつは長さ15～25㎜、直径5～6.5㎜の1群であり（第64図1～3）、もう1群は長さ10㎜以下、直径3㎜以下のものである（第64図4・5）。前者では孔の大きさが2～2.5㎜であるのに対して後者では1㎜前後となっている。石質は淡緑色で細粒の緑色凝灰岩と深緑色のフリントであり、これら石材を利用して製作されている。また、フリント製の剥片が1点出土している。

勾玉　2点出土している（第64図6・7）。同図6はC16溝覆土中から出土し、月影式～布留式に伴うものである。光沢のある透明感をもつ緑色を呈しており、硬玉を素材としている。稜線は明瞭でなくて全体的に丸味をもつ。大きさは長さ17㎜、幅9㎜、厚さ4㎜、重さ1.7gを測る。上孔の直径3.1㎜、下孔は1.4㎜であり、上面から下面に向けて一方から穿孔されている。孔に糸を通して垂らすと尾の先端が約2㎜頭部より前に出る。同図7はC6溝から検出されたものであり、時期は月影式期と考えられる。頭部がやや欠損しており、現存長14㎜、幅6㎜、厚さ3.5㎜を測

る。灰色味を帯びた乳白色を呈し、石英質の石材から製作されており、背部では丸味があるが、腹部では稜線がはっきりしている。上孔は1.7mm、下孔は0.8mmでこれも上面から下面に向けて一方向から穿孔されている。

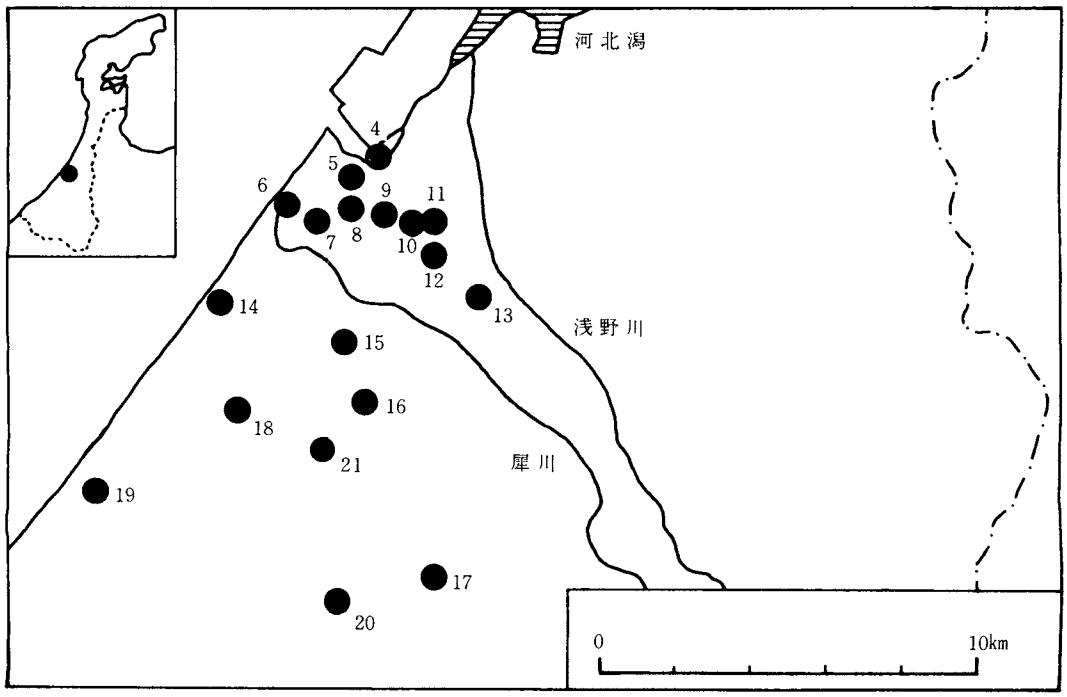
第4表　弥生時代～古墳時代前期の打製石斧出土遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	時期	総数	文献
1	七尾市万行赤岩山遺跡	弥生終末	1	土肥1983
2	七尾市国分高井山遺跡	弥生終末	1	土肥1984
3	押水町竹生野トリゲ山遺跡	弥生中期	1	谷 1976
4	金沢市戸水C遺跡	弥生後期	2	平田1976 栃木1983
5	金沢市無量寺B遺跡	弥生中期～後期	1	出越1984
6	金沢市金石東遺跡	弥生終末	—	戸淵1982
7	金沢市寺中遺跡	弥生中期	4	宮本1977
8	金沢市畝田・寺中遺跡	古墳前期	4	楠 1984 a
9	金沢市戸水B遺跡	弥生中期	1	湯尻1975 a
10	金沢市南新保三枚田遺跡	弥生中期～後期	1	楠 1984 b
11	金沢市南新保D遺跡	弥生終末	1	宮本1981
12	金沢市西念・南新保遺跡	弥生中期～終末	7	山崎1983
13	金沢市北安江遺跡	弥生終末～古墳前期	3	――――
14	金沢市下安原海岸遺跡	弥生中期～終末	4	橋本1975
15	金沢市古府クルビ遺跡	弥生後期～終末	1	増山1984
16	金沢市八日市ヤスマル遺跡	弥生後期～終末	4	清水1975
17	金沢市額谷ドウシンダ遺跡	弥生後期～終末	4	出越1984
18	松任市宮永遺跡	弥生終末	—	中島1978
19	松任市徳光ヨノキヤマ遺跡	弥生中期～後期	2	高 1976
20	野々市町上林遺跡	弥生中期	18	湯尻1975 b
21	野々市町御経塚ツカダ遺跡	弥生終末	4	吉田1984
22	辰口町高座遺跡	弥生終末	3	中島1978
23	小松市高堂遺跡	弥生終末	8	戸淵1982

小結　北安江遺跡から月影式～布留式期に属する打製石斧が3点出土している。石川県内では打製石斧は縄文時代中期前葉以降に一般的な石器であり、本遺跡のように弥生時代～古墳時代前期の時期に属するものが出土している遺跡がみられる。これらの集成を通じてこの時期の打製石斧の様相について概観してみることにする（第4表）。

弥生時代から古墳時代前期の打製石斧は製作技術からみると縄文時代のものと同一系譜上にある。これらが出土する遺跡の地理的分布についてみてみると、北は七尾市万行赤岩山遺跡（土肥1983）から南は小松市高堂遺跡（戸淵1982）までの間に23遺跡が分布している。特に集中する地域は2地域あり（第65図）、ひとつは犀川と浅野川にはさまれた両河川下流域であり、金沢市北安江遺跡など10遺跡がみられる。もうひとつの地域は手取扇状地で野々市町上林遺跡（湯尻1975）など7遺跡認められる。時期的には弥生終末月影式に伴うものが多いという傾向にある。また、時間的に弥生終末月影式～古墳前期まで打製石斧が残り、しかもそれが集中している地域は全国的にみても類例が少なく、金沢平野での当該期の大きな特色のひとつということができるであろう。

次に第4表の23遺跡から出土した75点の打製石斧のうち大きさの測定可能な33点について法量をみてみると、一般的に長さは13.5～18.5cm、幅4.5～8cm、厚さ2.5～4cm、重さ400～700gである。そして縄文晩期後半のものよりもやや大形化している。また、なかには20cmを越えるような大形品もみられ、特に辰口町高座遺跡（中島1978）や野々市町御経塚ツカダ遺跡（吉田1984）の例のように25cmを越えるものもみられる。



第 65 図　金沢平野における打製石斧出土遺跡分布図（番号は第 4 表参照）

引 用 文 献

楠　正勝・南　久和・他（1984 a）金沢市文化財紀要42『金沢市畝田・寺中遺跡』　金沢

———・宮本哲郎（1984 b）金沢市文化財紀要45『金沢市南新保三枚田遺跡』　金沢

清水庄吉・宮岸久司（1975）「金沢市八日市ヤスマル遺跡出土の遺物」『石川考古学研究会々誌』18　93～96頁　金沢

高　一男（1976）『松任市徳光ヨノキヤマ遺跡』　金沢

谷　幸信・西野秀和（1976）「羽咋郡押水町竹生野トリゲ山遺跡」『石川考古学研究会会誌』19　71～79頁　金沢

出越茂和（1984）金沢市文化財紀要44『金沢市額谷ドウシンダ遺跡・金沢市無量寺Ｂ遺跡（II）』　金沢

土肥富士夫・他（1983）『万行赤岩山遺跡』　七尾

————（1984）『国分高井山遺跡』　七尾

栃木英道・戸澗幹夫・他（1983）『金沢市戸水Ｃ遺跡』　金沢

戸澗幹夫（1982）『高堂遺跡－第III次発掘調査概報－』　金沢

中島俊一・浅田耕治（1978）『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』　金沢

橋本澄夫・荒木繁行（1975）「金沢市下安原海岸遺跡の第Ｉ次調査」『石川考古学研究会々誌』18　9～35頁　金沢

平田天秋・東四柳史明（1976）『金沢市・戸水Ｃ遺跡発掘調査概報』　金沢

増山　仁・楠　正勝・他（1984）金沢市文化財紀要47『金沢市埋蔵文化財調査年報』　金沢

宮本哲郎（1977）金沢市文化財紀要11『金沢市寺中遺跡』　金沢

————・他（1981）金沢市文化財紀要26『金沢市南新保Ｄ遺跡』　金沢

山崎智男・宮本哲郎・他（1983）金沢市文化財紀要40『金沢市西念・南新保遺跡』　金沢

湯尻修平・塚野秀章・他（1975 a）『金沢市戸水Ｂ遺跡調査報告』　金沢

————・————（1975 b）『安養寺遺跡群（上林地区）調査報告』　金沢

吉田　淳（1984）『御経塚ツカダ遺跡発掘調査報告書Ｉ』　石川県野々市町

2. 木器と木製品

本遺跡で確認された木器・木製品は76点であり、これらの木器・木製品には各種多様な用具が含まれており、機能・用途の不明確な資料も多い（第５表）。１号掘立柱建物の柱穴内出土の礎板を除いたほとんどの木器・木製品は溝から土器片とともに出土した。17号溝・18号溝からはそれぞれ１点出土したにとどまり、他のほとんどすべてのものが16号溝から出土し、時期的には月影式～布留式の所産である。なお、資料の樹種同定はおこなわれていない。木器・木製品では必要最低限の報告事項であるにもかかわらず、県内では樹種同定・報告された例はほとんどないといった状況である。木取りについては奈良県天理市布留遺跡の報告（金原1981）を参考にした。

穂摘具形木製品　Ｃ16溝から１点出土している（第66図１）。およそ1／3ほど欠損しており、現存値では長さ5.5cm、幅12.6cmである。樹種同定されていないため体積に比重をかけて重さを測定することはできないが、いくらか水分を含んだ状態での重さは46.1ｇを測る。形態的には三日月形を呈し、刃部は直線的であり、その断面においては約40度の角度をもつ刃となっている。孔は両面からあけられており、上面からは1.3cm、下面からは0.4cm穿孔されている。孔の部分が欠損していてその直径は正確には測定できないが、約５mmと推測される。このほかにも表面には錐状工具で穿孔されたと考えられる孔が、上面には７箇所、下面には９箇所観察でき、貫通しているものはわずか２孔だけである。これらの孔の直径は１～４mmと大小さまざまである。背部には加工による稜線が薄く残っているが、全体的には丸味を帯びてなめらかな曲面を描いている。また折れた後に折損部を鉄器か何か鋭利な刃をもつもので荒く削り取り、部分的に丁寧に調整して仕上げ、断面が丸味を帯びた三角形になるようにして刃部を作り出している。そのため刃縁は刃部中心付近で折れて160度の鈍角をなしている。県内の庖丁形木製品の出土例は金沢市近岡遺跡５点（戸澗1984）、羽咋市吉崎次場遺跡１点（福島1983）の合計６点を数える。このうち次場遺跡のものは木取りは本柾目材で刃部と表面の年輪の線は45度の角度をもつように加工されているのに対し、本遺跡の例は本柾目材であるが刃部と表面の年輪の線とが平行するように加工されている。本遺跡で穂摘具形木製品としたものは、一般の石庖丁形木製品と比較して形態、穿孔方法、木取りと加工方法などにおいて相違点があり、それらと同一の機能・用途を有する木製品とすることができない可能性もあり、今後資料の増加を待って検討したい。

鍬　鍬身から剝離した舟形突起である（第66図２）。長さ13.9cm、幅5.9cm、厚さ3.0cmであり、柄の挿入部分は長径4.4cm、短径2.6cmの楕円形を呈している。鍬身と柄の装着角度はこの突起部分から推定する限りにおいては約50度の角度をなす。板目材Ｉの木取りである。

すりこぎ状木製品　１点出土（第66図３）。辺材。折損しており、現存長は16.7cm、幅・厚さともに4.2cmである。先端部分は丸く作り出され、鉄器の工具で加工されたような痕を有しており、稜線はやや磨滅して余り明瞭ではない。

火鑽臼　２点出土した（第66図４・５）。２点とも断面が四角形を呈し、表面に荒い加工を残した棒材の辺材を利用している。焼け焦げた跡のある円孔に関しては、第66図４では１箇所だけであり、直径１cm、深さ0.5cm、断面形態は半円というよりはむしろ隅丸の五角形といった状況で中心部が少しばかりへっこんでいる。第66図５では４箇所認められるがはっきりとしているのは

２孔だけであり、完形の円孔の直径は1.2cm、深さ0.9cmであり、他方の欠損している円孔は推定直径1.2cmである。

火鑽杵　１点出土したのみである。(第66図６)。欠損しており、現存長19.5cmである。先端部は黒く焼け焦げており、この部分は直径１cm、高さ0.4cmの半球状を呈しており、直径１cmという太さは火切臼の円孔のそれが1.0～1.2cmであり、ほぼ合致する数値といえるであろう。

枘孔を有した木製品　４点出土している（第67図１～４）。いずれもC16溝からの検出であり、辺材を利用している。同図１は長さ46.4cm、幅2.4cm、厚さ2.3cmを測る完形品である。両端には周囲をめぐるように溝状の加工を２箇所施し、先端部から中央部にかけてややふくらみをもち、この幅広となった中央部に枘孔があけられている。この枘孔は長さ2.3cm、幅0.9cmである。同図２は両端とも折れており、現存長26.0cm、幅4.6cm、厚さ3.6cmである。表面にはやや加工痕は残ってわずかながら稜線が認められる程度であり、断面はやや角張った楕円形の形状である。枘孔は３×1.6cmの長方形を呈して下面に向ってわずかながら狭くなっていっており、この部位から上端にかけて削られて細くなっている。また下端は段状に加工されてその部位で折れている。同図３は上面の表面が剥離し、上端が欠けているがほぼ完形であり、長さ24.8cm、幅2.7cm、厚さ2.3cmである。枘孔は中央部よりやや上にあけられており、上面では3.1×1.5cmであるのに対して下面では2.0×0.9cmで下面に近づくにつれて孔が狭く、細くなっている。同図４は３個の枘孔を３個もつものであり、上端がやや欠けているが長さは22.8cm、幅2.4cm、厚さは2.5cmである。枘孔の平面形態は細長い楕円形ないしは隅丸方形を呈しており、大きさは上から順に2.1×0.5cm、2.0×0.5cm、2.1×0.7cmである。

杓子状木製品　２点出土（第67図５・６）。厚さ６～７mmの薄い板目材Ｉをはご板形に平面形態を整えたものである。第67図５は長さ17.2cm、幅6.7cmを測り、柄が接合されていたようで端部にはそれがとれた跡がみられる。第67図６は細長い形態を呈して両端が欠損しており、現存長24.9cm、幅5.4cmである。

有頭棒　５点出土している（第68図１～５）。辺材利用の棒状を呈するものであり、体部の断面が隅丸方形・楕円形・円形を呈し、その一端に頭部状のかかりを作り出したものである。同図１は長さ62.6cm、幅2.1cm、厚さ1.5cmを測り、同図２は長さ59.2cm、幅2.3cm、厚さ1.7cmを測る完形品である。同図３～５はその欠損品である。有頭棒の機能の問題としては、河川や湖沼沢地において漁網を張る時に使われた棒状の漁具としての可能性も考えられるのではないかと思われる。

棒状木製品　24点出土し、体部の断面が楕円形もしくは円形を呈するもの（第68図６～12、第69図１～４）とそれが長方形ないし方形を呈するもの（第69図５～17）に分けられる。後者のうち、同図５～８・11の５点は一端を削り出して尖らせており、杭状木製品とでも呼べるものである。また、ほとんどすべてのものが欠損品であり、完形品はわずか１点しかなく（第68図９）、これは長さ59.0cm、幅23cm、厚さ1.1cmであり、有頭棒の頭部が作り出されていないものという表現もできよう。すべて辺材である。

手網　１点出土した（第70図１）。木の幹を柄とし、２又に分枝する枝を枠としている。柄部は長さ38.0cm、直径1.8cmを測り、下端にいくにつれて細くなっている。また手で持ってみると長

第5表　木製品一覧表

〔単位はcmおよびg．（　）を付したものは現存値を示す〕

遺物番号	出土地点	出土層位	木取り	遺存状態	長さ	幅	厚さ	挿図番号
W－14	C16溝	——	本柾目材	欠損	(5.5)	(9.1)	(1.4)	66－1
W－——	C16溝	——	板目材Ⅰ	欠損	(13.9)	(5.9)	(3.0)	2
W－——	C16溝	——	辺材	欠損	(16.7)	4.4	4.2	3
W－——	C16溝	——	辺材	欠損	(51.0)	3.3	1.7	4
W－34	C16溝	——	辺材	欠損	(13.8)	2.4	1.5	5
W－3	C16溝	——	辺材	欠損	(19.5)	1.2	1.1	6
W－152	C16溝	——	追柾目材	欠損	(16.7)	(5.4)	(1.2)	7
W－6	C16溝	——	心持材	完形	10.2	1.5	1.1	8
W－197	C16溝	——	辺材	欠損	(30.4)	2.8	1.9	9
W－244	C16溝	下層	本柾目材	欠損	(8.5)	2.6	0.5	10
W－——	C16溝	——	板目材Ⅰ	欠損	(15.4)	2.4	0.9	11
W－101	C16溝	——	辺材	完形	46.4	2.4	2.3	67－1
W－68	C16溝	——	辺材	欠損	(26.0)	4.6	3.6	2
W－108	C16溝	——	辺材	欠損	(24.8)	2.7	2.3	3
W－171	C16溝	——	辺材	欠損	(22.8)	2.4	2.5	4
W－——	C16溝	——	板目材Ⅰ	欠損	(17.2)	6.7	0.7	5
W－47	C16溝	——	板目材Ⅰ	欠損	(24.9)	5.4	0.6	6
W－198	C16溝	下層	辺材	完形	62.6	2.1	1.5	68－1
W－82	C16溝	——	辺材	完形	59.2	2.3	1.7	2
W－151	C16溝	——	辺材	欠損	(54.4)	1.6	1.2	3
W－183	C16溝	——	辺材	欠損	(27.1)	2.6	1.9	4
W－110	C16溝	——	辺材	欠損	(24.7)	1.6	1.1	5
W－172	C16溝	——	辺材	欠損	(42.8)	1.5	1.3	6
W－19	C16溝	——	辺材	欠損	(38.1)	2.0	1.4	7
W－41	C16溝	——	辺材	欠損	(56.2)	1.5	1.2	8
W－131	C16溝	——	辺材	完形	59.0	2.3	1.1	9
W－139	C16溝	——	辺材	欠損	(19.4)	1.8	0.9	10
W－2	C16溝	——	辺材	欠損	(19.5)	2.0	0.9	11
W－211	C16溝	下層	辺材	欠損	(33.1)	2.0	1.4	12
W－189	C16溝	下層	辺材	欠損	(24.4)	1.3	1.1	69－1
W－149	C16溝	——	辺材	欠損	(28.7)	2.1	1.1	2
W－145	C16溝	——	辺材	欠損	(38.2)	1.9	1.6	3
W－5	C16溝	——	辺材	欠損	(14.4)	(2.3)	(1.8)	4
W－11	C16溝	——	板目材Ⅰ	欠損	(35.1)	2.6	1.8	5
W－176	C16溝	上層	本柾目材	欠損	(26.5)	2.3	1.0	6
W－181	C16溝	上層	本柾目材	欠損	(20.7)	3.4	0.7	7
W－134	C16溝	——	板目材Ⅰ	欠損	(15.5)	2.5	0.7	8
W－136	C16溝	——	追柾目材	欠損	(32.9)	3.2	0.9	9
W－——	C16溝	——	本柾目材	欠損	(20.1)	(3.0)	(0.9)	10
W－248	C16溝	下層	本柾目材	欠損	(23.5)	2.9	1.3	11
W－135	C16溝	——	板目材Ⅰ	欠損	(35.8)	2.9	0.8	12
W－271	C16溝	下層	板目材Ⅰ	欠損	(41.7)	2.4	1.6	13
W－265	C16溝	下層	辺材	欠損	(32.6)	2.1	0.8	14
W－177	C16溝	上層	辺材	欠損	(26.7)	2.3	0.9	15
W－170	C16溝	——	辺材	欠損	(27.7)	1.6	1.5	16
W－133	C16溝	——	辺材	欠損	(18.4)	1.9	1.1	17
W－——	C16溝	——	心持材	欠損	(50.2)	1.9	1.8	70－1
W－4	C16溝	——	辺材	欠損	(15.2)	(1.2)	(1.1)	2
W－112	C16溝	——	心持材	欠損	(62.0)	(2.3)	(1.6)	3
W－1	C16溝	——	心持材	欠損	(25.9)	(2.0)	(1.6)	4
W－——	C16溝	——	心持材	欠損	(39.5)	(1.3)	(0.7)	5
W－30	C17溝	——	板目材Ⅰ	欠損	(26.1)	6.7	0.7	6
W－180	C16溝	上層	板目材Ⅰ	欠損	(20.5)	(9.8)	(0.8)	7
W－182	C16溝	——	追柾目材	欠損	(21.3)	(10.1)	(1.0)	8
W－167	C16溝	——	追柾目材	欠損	15.3	9.5	1.1	9
W－——	C16溝	——	追柾目材	欠損	(11.5)	3.5)	0.6	10
W－229	C16溝	下層	板目材Ⅰ	欠損	28.4	(4.8)	0.7	71－1
W－24	C16溝	——	辺材	欠損	(24.6)	(2.3)	(1.1)	2
W－——	C16溝	——	板目材Ⅰ	欠損	(20.8)	(3.0)	0.9	3
W－——	C16溝	——	不明	欠損	(19.5)	(2.6)	0.5	4
W－205	C16溝	下層	不明	欠損	(18.2)	(6.9)	1.1	5
W－213	C16溝	下層	板目材Ⅰ	欠損	(23.2)	(6.5)	1.3	6
W－——	C16溝	——	追柾目材	欠損	(10.8)	(3.1)	(0.6)	7
W－——	C16溝	——	板目材Ⅱ	欠損	(11.4)	(3.9)	(0.6)	8
W－7	C16溝	——	不明	欠損	(13.7)	(5.8)	1.2	9
W－243	C16溝	——	板目材Ⅰ	欠損	(19.3)	(6.9)	1.1	10
W－——	C16溝	——	本柾目材	欠損	(20.9)	(4.9)	0.8	11

遺物番号	出土地点 出土層位	木 取 り	遺存状態	長さ	幅	厚さ	挿図番号
W － 102	C 16溝 ——	板目材Ⅰ	欠 損	(21.8)	5.5	0.8	12
W － 3	C 18溝 ——	板目材Ⅰ	欠 損	(28.2)	(9.4)	0.7	13
W － 168	C 16溝 ——	辺 材	完 形	29.2	2.6	0.6	14
W － 171	C 16溝 ——	辺 材	欠 損	(40.5)	2.0	1.7	15
W － ——	P－143 ——	追柾目材	欠 損	30.0	12.0	4.8	72－1
W － ——	P－146 ——	板目材Ⅱ	完 形	36.9	12.3	5.7	2
W － ——	P－159 ——	板目材Ⅰ	欠 損	(35.3)	(9.0)	(2.9)	3
W － ——	P－148 ——	不 明	完 形	32.7	16.0	4.3	4
W － ——	P－151 ——	板目材Ⅰ	欠 損	(33.7)	17.0	2.2	5

さ・太さともに手頃な大きさである。枝が２又に分枝する所より上部の幹は切り取られ、枠のつけ根部分では刀子状工具のようなもので丁寧に削られて加工痕をとどめており、断面に年輪が観察される。柄の体部はややわずかであるが湾曲していて表面はきれいに加工されて平滑な曲面をなしており、先端部には平面形態が二等辺三角形をした頭部状のものが作り出されている。枠部は一方がつけね部で折れており、他方も途中で折損している。枠部も丁寧に加工されており、直径1.0cmを測る。

湾曲した木製品　棒状の湾曲した木製品を集めた（第70図２～５）。同図２は先端を削り出して頭部を作り出したものである。同図３は両端ともに欠損しており、半円形に固定化するために火熱処理されたものであろうか、全体的に黒く焦げている。同様に同図４・５も部分的に焼けて炭化している。

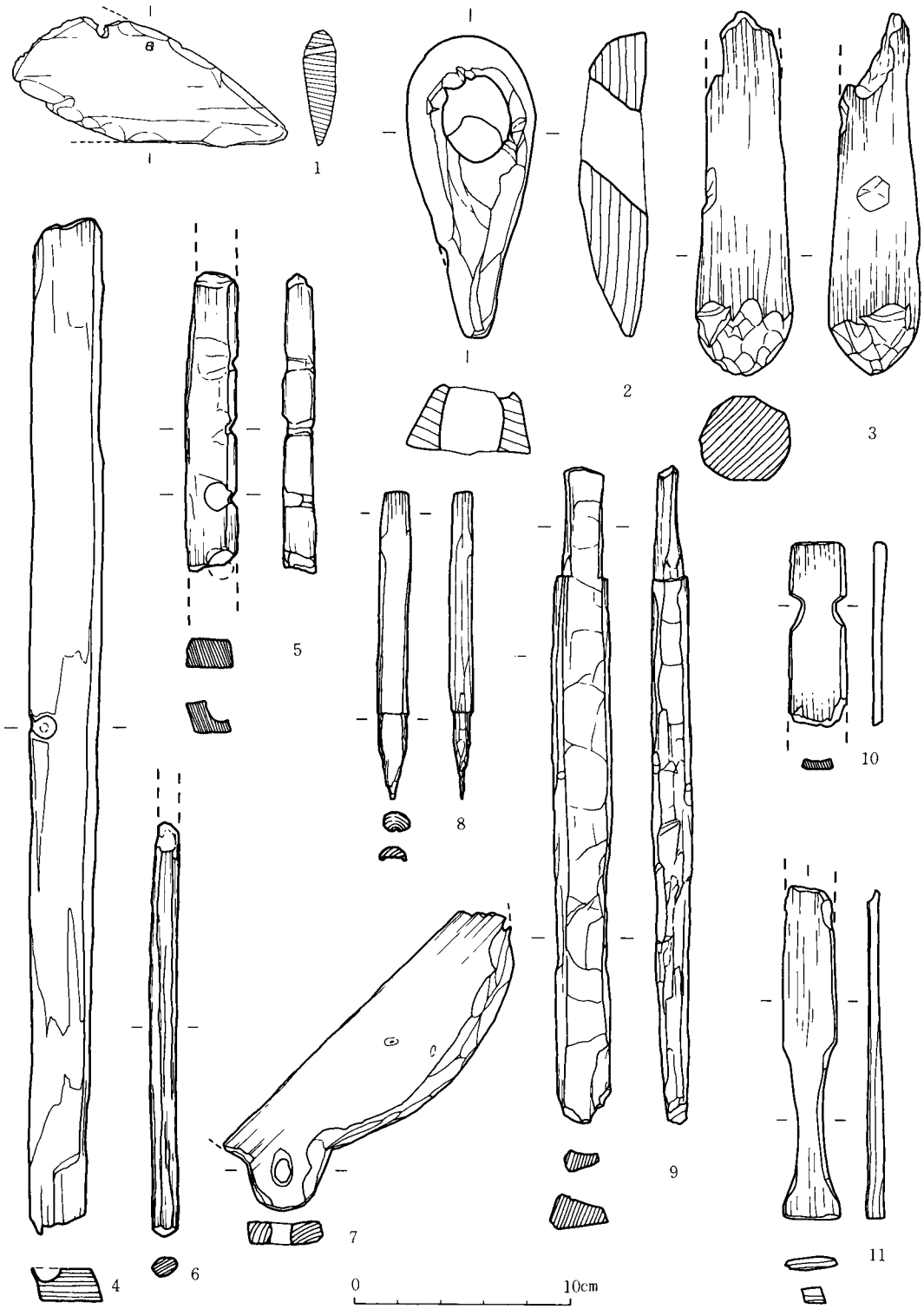
有孔の木製品　孔のあけられている棒材・板材である（第71図１～７）。孔数は１～３個であり、孔の直径は１～15mmである。

その他の木製品　加工されて形の整った木製品や加工痕のある部材である。第66図７は3／4ほど欠損しており、本来は直径約18cmの円形になってそれに張り出し部がつく形態をとるものと推測され、張り出し部には直径0.9cmの円孔があけられている。下面の表面が剥離している。第66図８は細長い棒材の下端部に段をつけて先端を尖らせたものであり、長さ10.2cm、幅1.5cm、厚さ1.1cmを測る。第66図９は経巻具と考えられる資料である。途中で折損し、その部分を荒く加工しており現存長30.4cm、幅2.8cm、厚さ1.9cmである。端部は両側面を削り込んで高さ２mmほどの段がついている。全体に粗雑な加工である。第66図10・11は扁平薄手の板材で側縁部がくびれた形態をなすものである。第71図８・９は周囲を削って丸味をもたせて円形状に仕上げたものであり、同図14は刀子状の形態に整えられた木製品である。また、第70図６～10・第72図10～13・15は加工痕をもつ部材である。

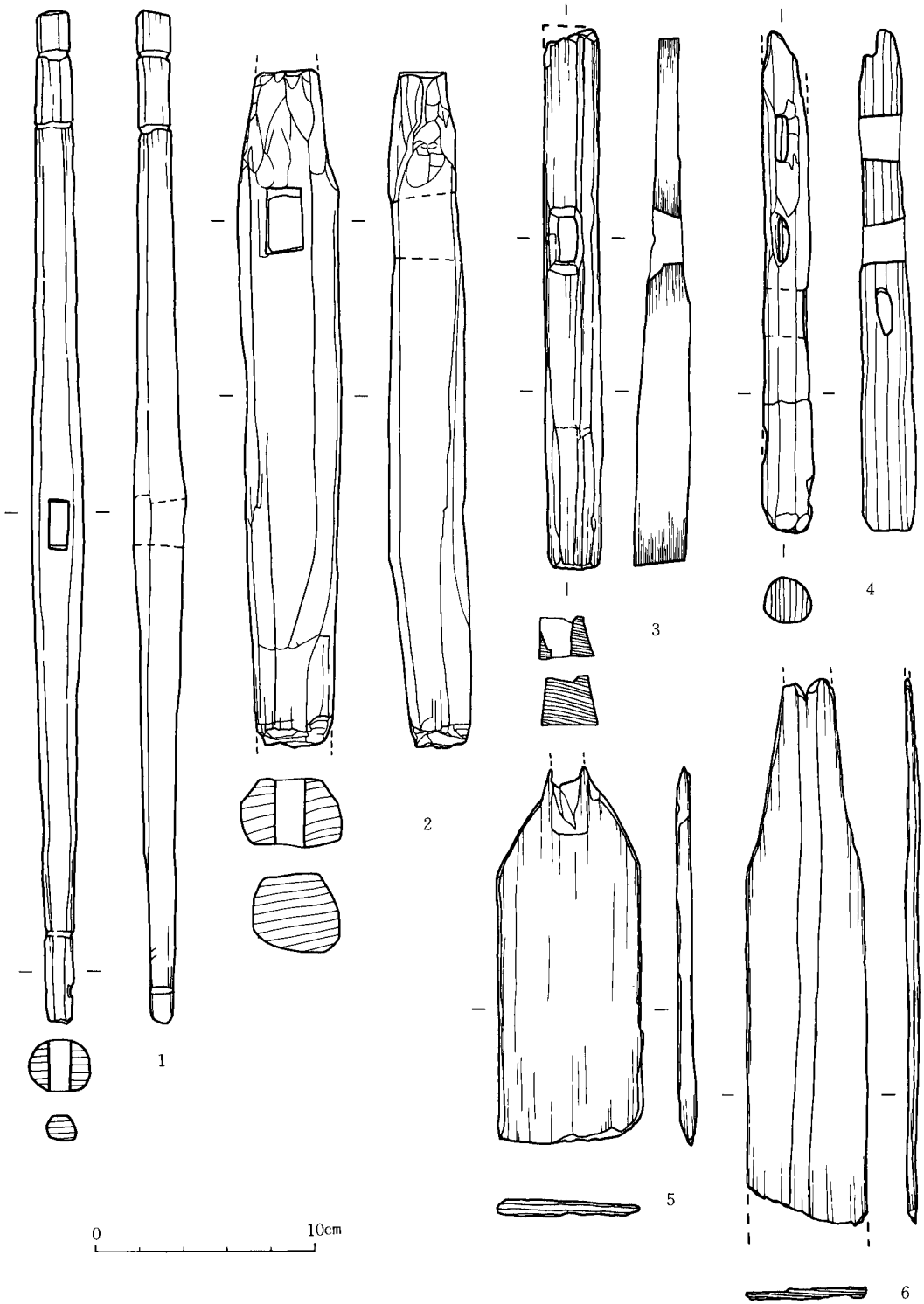
礎板　いずれも柱穴内出土である（第72図）。ピット143・148・151・159は１号掘立柱建物の柱穴であり、同図１・３～５の礎板が出土している。また同図２はピット146内出土である。これらの一般的な大きさを求めてみると、長さ30～37cm、幅12～17cm、厚さ２～６cmである。木取りとしては板目材Ⅰ・Ⅱや追柾目材が利用されている。

引 用 文 献

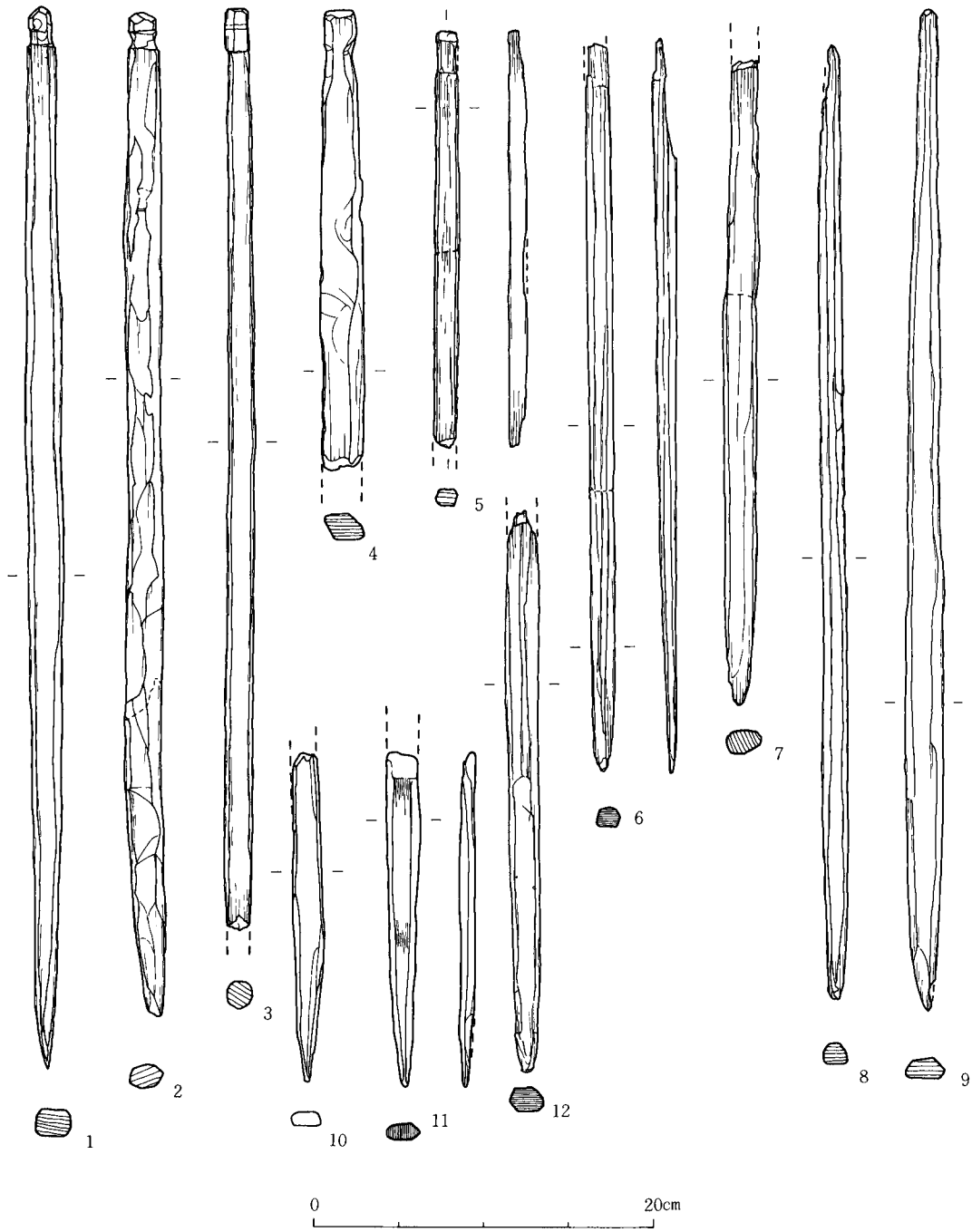
金原正明・嶋倉巳三郎（1981）布留遺跡研究中間報告３『出土木器の樹種と木取りⅠ・Ⅱ』　天理
福島正実（1983）「羽咋市吉崎・次場遺跡」『拓影』11　金沢
戸澗幹夫・栃木英道（1984）『金沢市近岡遺跡』　金沢



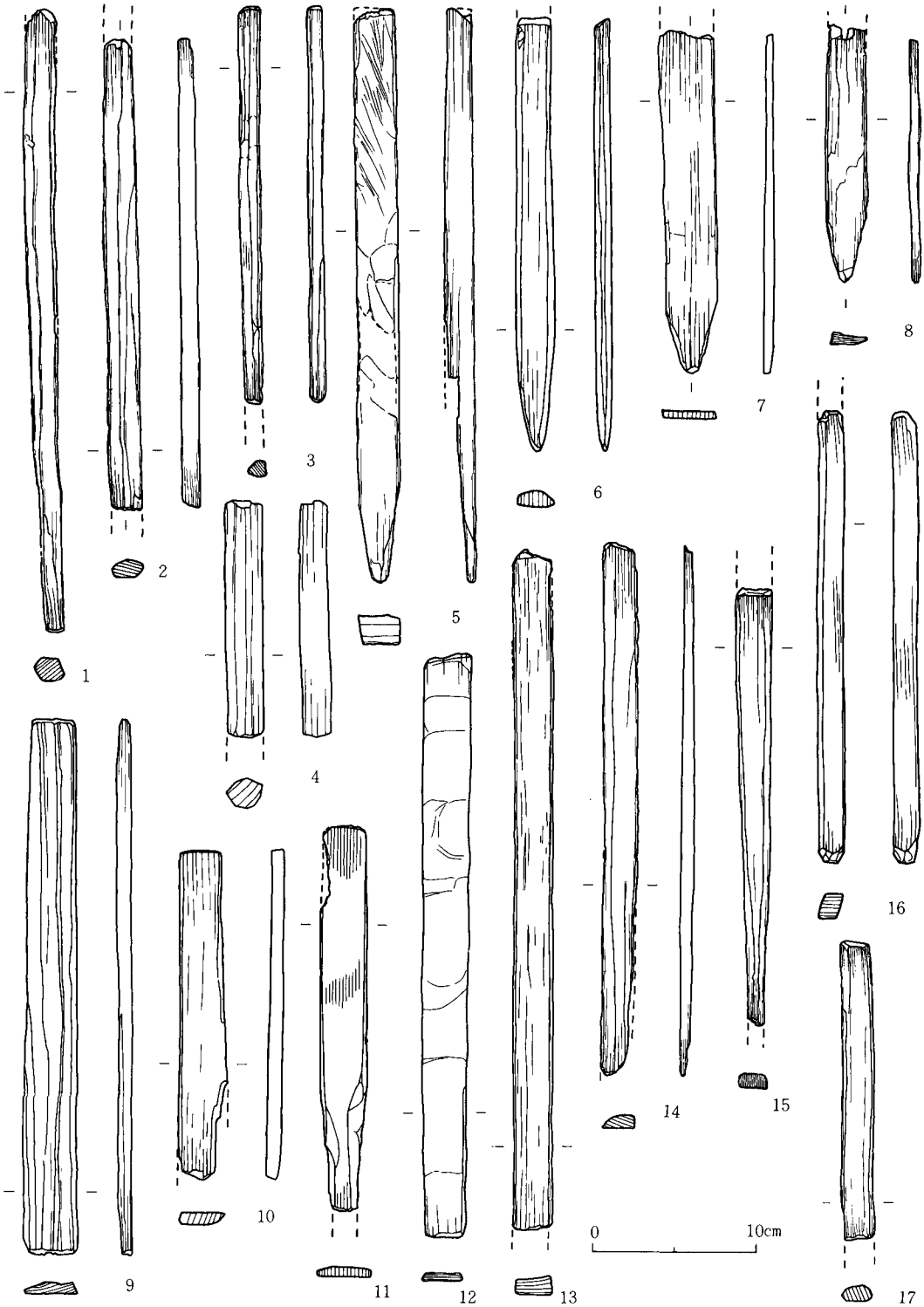
第 66 図　木器・木製品実測図



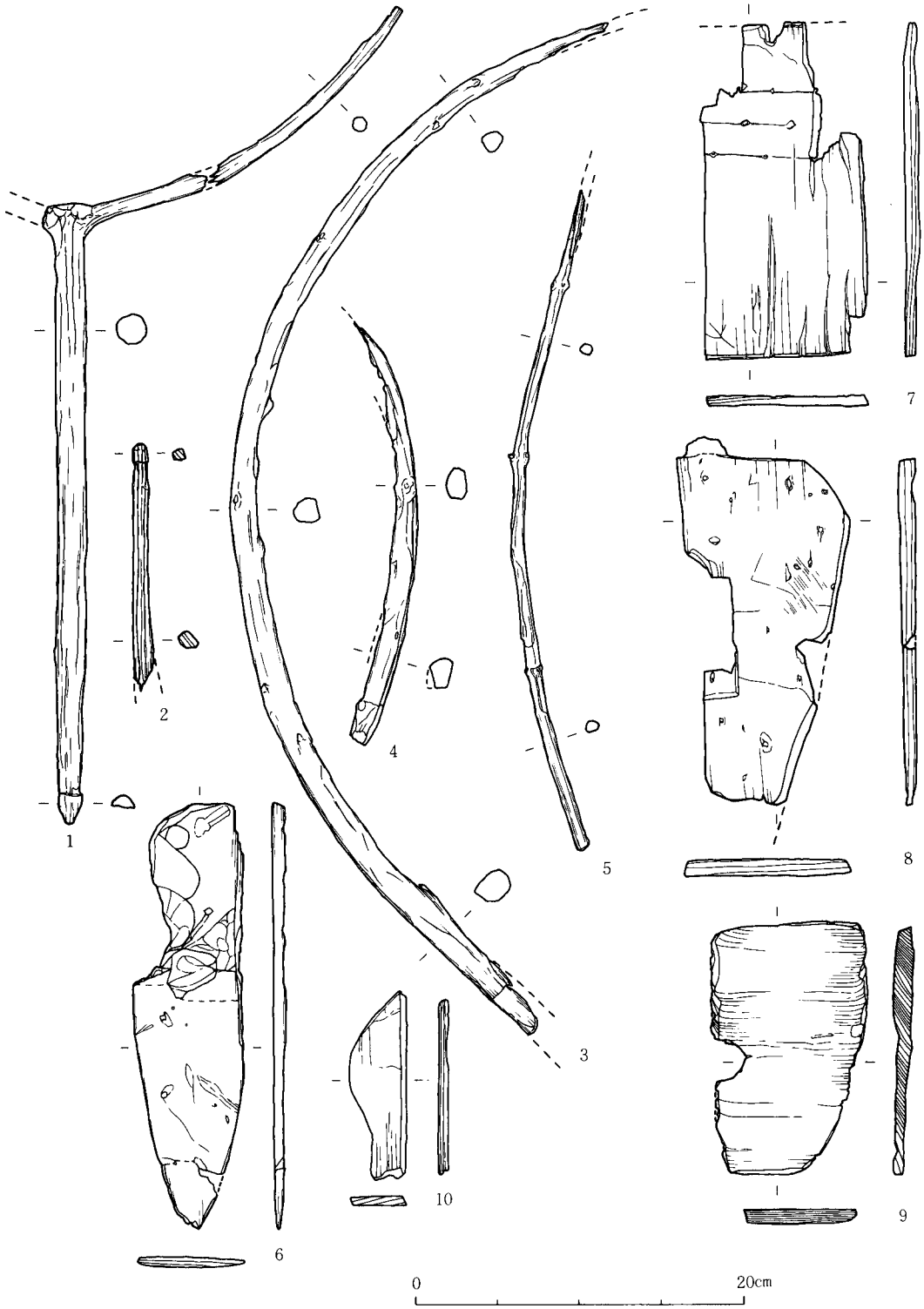
第 67 図　木器・木製品実測図



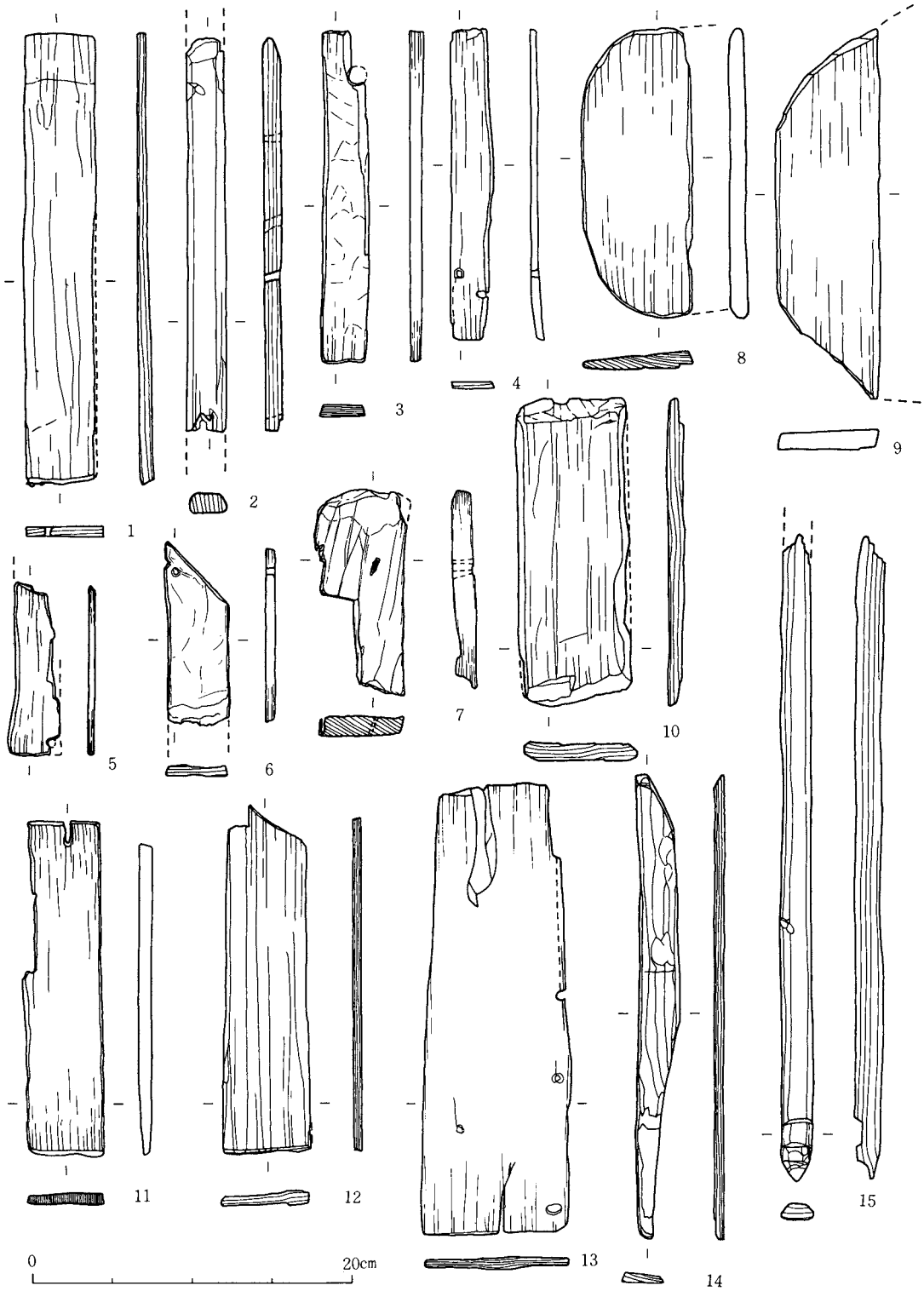
第 68 図　木器・木製品実測図



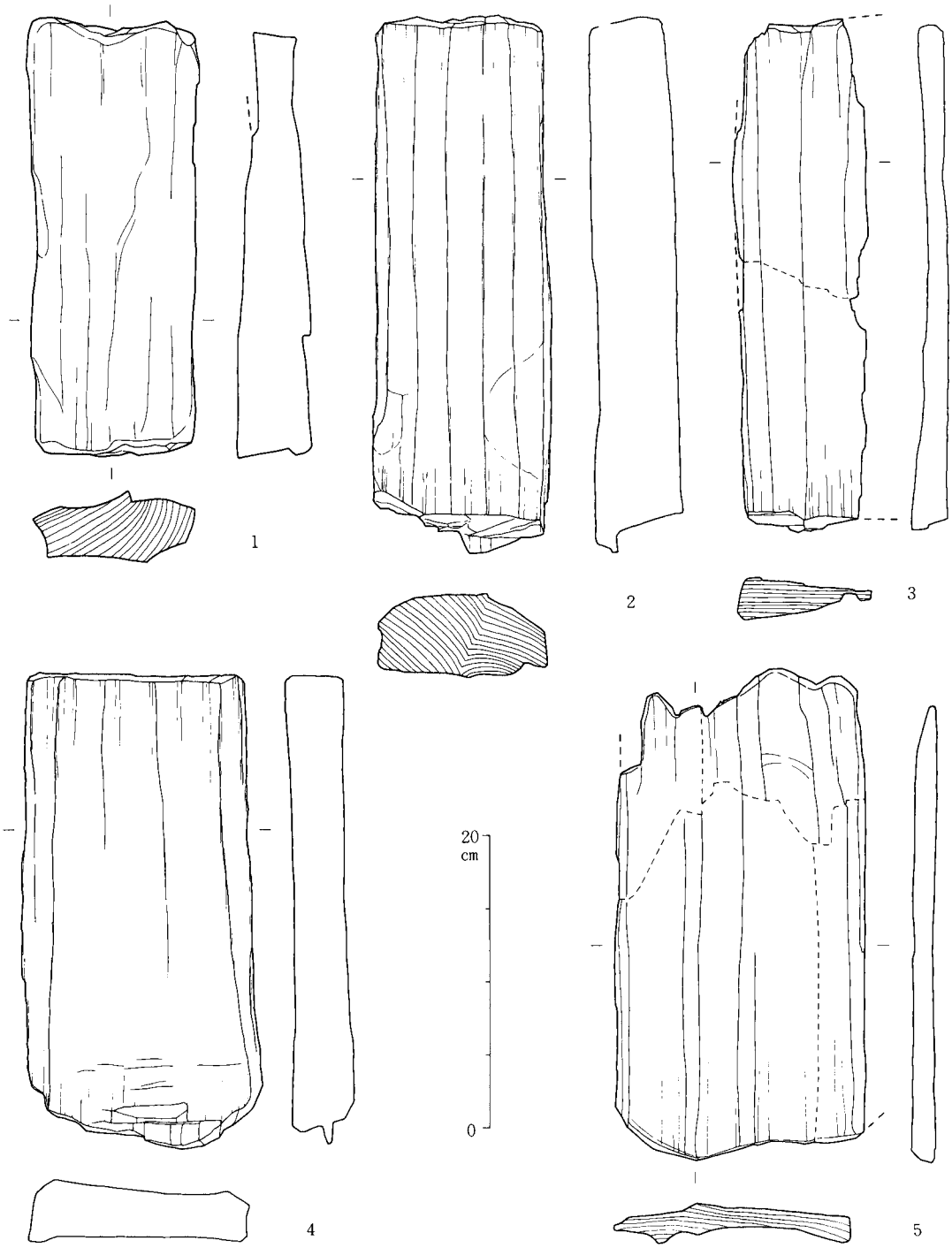
第 69 図　木器・木製品実測図



第 70 図　木器・木製品実測図



第 71 図　木器・木製品実測図



第 72 図　柱穴内出土礎板実測図

第5章　考　　察

Ⅰ　北安江遺跡出土の月影式土器について

ここでは、C16溝出土土器を主たる対象とし、その他の遺構等出土土器は文末で触れることとしたい。

甕A類（擬凹線有段口縁系）は、幅広の口縁体が外傾・外反し、内面では連続的な指頭圧痕を施し、稜をもつものが主流を占める。古府クルビ期に残存するA類相当甕の諸特徴（口縁部内外面の「くの字」化、指頭圧痕の消失、体部の球胴化と外面のハケ調整の乱雑化など）のいくつかにあてはまる個体はあるものの、全体としては谷内尾編年[1]でいう月影Ⅱ式土器の範疇で捉えられるものである。[2] 口端部の外反度が小さく、倒卵形を呈する体部外面を右下りのハケ調整で仕上げる第29図19・20などは幾分古相を示し、球形に近い体部外面のハケ調整がやや乱雑な第29図13・22・第46図14（口縁内面屈曲部が強い横ナデ調整によって大きく凹み、上位に稜をもつ）や、第46図17・18（口縁内面の屈曲が弱く、「くの字」に近い）などはやや後出的な要素をもっている。

甕B類（無文有段口縁系）では、Ⅰ～Ⅴ類が甕A類と同時期のものであろう。[3] 型式論的には、口縁部の外傾・外反度が大きくなり、内（外）面の屈曲が不明瞭となる（「くの字」化が進行する）という点からみれば、Ⅰ→Ⅱ類・Ⅳ→Ⅴ類という流れが考えられる。なお、Ⅳ類の第30図23・第47図27は、口縁部を強い横ナデによって仕上げており（第30図23は外面を2段にナデ分けている）、Ⅴ類に近い手法を用いている。

甕C類（「くの字」口縁系）では、Ⅰ～Ⅴ類が概ね月影Ⅱ期の所産といえよう。Ⅱ類第31図41・42・第48図39は、あまり外反しない口縁部にハケ調整痕が残り、体部内面をハケ・ナデ調整で仕上げており、やや古相をおびる。Ⅲ類第48図46も同様の手法を用いている。また、Ⅰ類第31図35・37は、金沢市南新保D遺跡[4]、同二口六丁遺跡[5]、高松町二ッ屋遺跡[6]などに類例を求め得ることから、後出的な印象を受ける。なお、Ⅱ類第31図43は、面取りした口縁上端に跳ねあげ状の稜をもち、体部外面をタタキによって仕上げるものである。[7] 淡褐色を呈し、胎土は精選され焼成も良好であることから、搬入品の可能性がある。畿内庄内式土器（新段階）と月影Ⅱ式土器との対応関係を考えるうえで貴重な資料といえよう。

甕D類（付加状口縁系）は、地域的には能登に多く出土を見[8]、北加賀では出土例はある[9]が量的には少ないものである。

甕EⅡ類（「S字」状口縁系）は、金沢市南新保D遺跡[10]、同近岡遺跡[11]、同松寺遺跡[12]、同古府クルビ遺跡[13]に出土例がある。第47図35は、口縁内面の屈曲が弱く指ナデが可能であることから、月影Ⅱ期の所産といえよう。[14] 第47図35は体部外面をハケ、内面をナデによって調整し、器壁が薄く、胎土中に在地のものにはみられない金雲母を含むことなどから、搬入品の可能性が強い。

壺Ⅰ類では、外面頸部に突帯と刻目をもつ第49図49が月影Ⅱ式土器を代表する形式である。第

35図80・81・88・第49図54は、口縁部の外傾・外反が弱く、口端部もあまりのびず、やや古相を示している。壺II類は、いわゆるパレス＝スタイルの壺である。外上方へ内湾ぎみに広がる（無段の）口縁をもつものは、愛知県一宮市元屋敷遺跡[15]に類例がみられる。全体的につくりが丁寧であることから、第37図104は月影II期の所産と考えておきたい。外面口端部に平行櫛描文と山形文をもつ第36図102は、壺II類同様東海地方[16]に類品がみられ、瓢（ひさご）形土器といわれる小型壺である。壺II類第37図104と同時期のものであろう。壺IV～VI類は、タイプは異なるが、月影期によくみられる広口壺である。口縁部の外傾・外反が強いものが主流を占める。壺IX類は細口（頸）壺である。脚台付のものが多い。壺X類は無頸壺である。肩部に２孔一対の孔を穿つ小型の第50図69は、南新保D遺跡[17]などに類例がみられる。壺IV～V・IX・X類は月影II式土器として大過あるまい。[18]ただし、壺IX類第37図107・第50図62は口頸部が長く、法仏期の器形が月影期に一部継承されたものと考えておきたい。

高坏I・II類は、系譜的には法仏期以前に遡る。谷内尾氏は、弥生時代後期～末期の高坏に関して、その新旧関係をみるメルクマールとして、坏部の体部長と口縁部長の比をあげられている。すなわち「法仏I式においては２対１、法仏II式においては３対２、月影I式期においては１対１あるいは口縁部がやや長い、月影II式期においては口縁部が体部長をはるかにうわまわるのを一般的な基準とする」。[19] C16溝出土高坏I・II類の同比は（内法で）１：１～1.4程度であることから、月影期の所産といえよう。ところで、坏部が有段（鉢）状を呈する高坏II類は、「有段浅鉢の出現と密接な因果関係のもとに創成された器種」[20]であり、坏部が屈曲するだけの高坏I類とは「系譜上異なる形式に大別される性格のもの」[21]である。高坏II類に相当する月影期の類例をみてみると、辰口町高座遺跡出土高坏[22]（月影I期）は、口径27cm、脚部径15cm、器高18cm前後を測り、口径と坏部の深さの比は４：１程度、南新保D遺跡出土高坏[23]（月影II期）は、口径18cm、脚部径11cm、器高13cm前後を測り、同比は３：１程度である。両者の差異は、前者にたいする後者の全体的な法量の小型化と、坏部の相対的な深坏化（口縁部の外傾度が小さい）といえよう。C16溝出土高坏II類は、大型の第39図133を除けば、口径16～25cm（平均20cm）を測り、法量的には後者に近く、坏部の深いもの（第39図130・131・第51図93・94・第52図95など）が多いが、深坏化があまり進行せず、主として口縁部ののびを強調するもの（第39図126・第51図88～90など）も少なくない。これは同一型式内の時期差（浅坏→深坏・外傾大→外傾小）と理解しておきたい。[24]なお、大型（口径31cm）の第39図133は、有段脚をもつ可能性もあり、古相を示すものといえる。高坏III類は、小さい坏底部に内湾する口縁部をもつもので、月影II期以降に出現するものである。第52図96は、体部と口縁部の境界が明瞭に屈曲しており、古府クルビ期に下ることはないであろう。高坏IV類第40図137・138・第52図97・98は、坏部が逆台形を呈し、口縁部が（やや）外反している。型式論的には、つくりが丁寧で、体部と口縁部との境界が明瞭に屈曲する第52図97・98が古相をおび、やや屈曲の弱い第40図137・138が新しい様相を示すが、ともに月影II式土器の範疇で捉えられよう。

器台I類は、ラッパ状に開く脚部と大きく外上方へのびる受部をもつものである。類例に乏しいが、先行形態として脚上位の屈曲の弱い金沢市塚崎遺跡出土器台[25]をあげられるのではあるま

いか。器台II類は、外反する脚部と上段の短い有段の受部をもつもので、金沢市近岡遺跡[26]・同南新保三枚田遺跡[27]・同吉原七ッ塚遺跡[28]などに類例がみられる。器壁の薄い第53図121、受端部があまりのびない第41図26はやや古相をおびる。器台III類は、有段の脚部と受部が外反するもので、南新保D遺跡[29]・南新保三枚田遺跡[30]などに類品をみる。第41図162・165は脚部の矮小化や受部ののびが顕著であるが、第41図163は受部そのもののつくりが大きい。[31] 器台IV類は、体部に雨滴（涙滴）形透穴を穿つもので、いわゆる有透装飾器台であるが、ここでは器台と鉢の結合せる形式と考え、結合器台（器台結合鉢）とした。結合器台は、月影（II）式土器を代表する形式である。[32] 器種構成上の比率は小さい[33]が、近年類例が増加しつつある。第42図179は、口縁外面に擬凹線文を巡らせたものである。口径（20cm）が比較的大きく、口縁部もあまり外反していない。透穴も16（８組）と多いことからやや古相を示している。第42図180は、口縁部の外傾・外反が強く、端部に反転ぎみの面をもっている。[34] 体部の矮小化とは対照的に口縁部はよく発達し、新しい様相を呈するが、受端部垂下帯にも雨滴形透穴（逆立形のみ）を穿つ点では類例に乏しい。器台Ⅰ～IV類は、概ね月影式土器と考えられよう。

鉢形土器（Ⅰ～VI類）と小型土器のIV～VII類は、既応の成果から月影II期を大きく上下することはないと思われるが、完器に乏しいため、代表的なものについて簡単に触れることとし、個別土器については、今後の類例の増加を待って再検討したい。鉢Ⅰ類第54図135は、口径が小さいわりに深い。鉢VI類第44図206は、把手（逆U字形）付の大型鉢である。ともに南新保三枚田遺跡[35]に類例がみられる。鉢III類第43図193は、椀状を呈し、南新保D遺跡[36]に出土例が多い。小型土器VI類は、尖底土器で、金沢市下安原遺跡[37]などで出土をみている。

蓋形土器は、体部がほぼ直線的にのびるかないしは外反するもの（Ⅰ～VI類）と、内湾するもの（VII・VIII類）に大別できる。大型（口径17cm）の蓋Ⅰ類は、直線的にのびるが、口端部を丸くおさめている。蓋II類は鈕端部を面取りするもので、蓋V類は同部を先細りに仕上げるものである。蓋II・V類は、南新保D遺跡[38]、南新保三枚田遺跡[39]、近岡遺跡[40]、野々市町御経塚ツカダ遺跡[41]などに類例を見い出せるが、金沢市西念・南新保遺跡[42]ではほとんどみられない。比較的器高の低い蓋III・IV類は、上記の遺跡のほかに、金沢市無量B遺跡[43]などでも類品をみる。鈕部上面があまり凹まない蓋VI類も蓋II・V類と同様である。体部が内湾する蓋は、金沢市塚崎遺跡[44]、同額谷ドウシンダ遺跡[45]、同寺中遺跡[46]などで出土しているが、北加賀地域では少ないとされている。[47] 類例からみて、内湾度が大きい（器高にたいして口径が小さい）ものが古相を示し、ややなだらかなカーヴを描いて広がるものが新しい様相をおびるようである。蓋VII・VIII類は後者に属する。蓋IX類は、体部内面に短い口縁帯を貼付するものである。北加賀では無量寺B遺跡[48]、南新保D遺跡[49]、御経塚ツカダ遺跡[50]で出土している。蓋Ⅰ～IX類は、法仏期に遡ることはなく、また古府クルビ期には蓋形土器は残存するに過ぎない[51]ことから、月影期の所産、それも伴出土器から判断して、古相をおびるものは少ないといえよう。

C16溝以外では、C６溝出土土器が月影II期の所産であろう。C17溝では擬凹線有段口縁系甕第56図１～12が、C16溝甕A類に対応する。体部外面のハケ調整の乱雑化、口縁内面の指頭圧痕の消失と「くの字」化の進行がやや目につくが、月影II式土器と考えられよう。第58図38は、C

16溝高坏Ⅲ類に対応する。近岡遺跡[52]に類例がみられる。第57図37は、受部が内湾せず直線的にのびる小型器台である。南新保Ｄ遺跡[53]、南新保三枚田遺跡[54]に出土例がある。第57図37・38も月影Ⅱ期の所産であろう。包含層出土品では、第61図５がＣ16溝高坏Ⅱ類に対応し、同時期のものといえよう。

註

（１）　谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』（『石川考古学研究会々誌』　第26号）石川考古学研究会　昭和58年

（２）　第45図７～10は、月影Ⅱ期甕Ａ類の典型には含めないものとする。

（３）　第30図26は、鉢形（あるいは小型）土器の可能性があり、除外しておきたい。

（４）　宮本哲郎・栃木英道他『金沢市南新保Ｄ遺跡』金沢市教育委員会　昭和56年

（５）　南　久和・森川洋子・栃木英道他『金沢市二口六丁遺跡』金沢市教育委員会　昭和58年

（６）　浜岡賢太郎・吉岡康暢「加賀・能登の古式土師器」（『古代学研究』32）　昭和37年

（７）　口端部の形状、あるいはタタキ手法という点では、南新保Ｄ遺跡（註(４)）などに類例がみられる。

（８）　橋本澄夫・西野秀和・平田天秋他『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　昭和57年

西野秀和・浜野伸雄・平田天秋他『鹿島町徳前Ｃ遺跡（第４次）発掘調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター　昭和58年　他

（９）　註（４）に同じ。Ａ区大溝などより出土。

（10）　橋本澄夫・四柳嘉章・平田天秋他『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団　昭和51年　ＢＧ－20土壙より出土。平田氏の御教示によれば、時期は月影Ⅱ期、在地性が強いとのことである。

（11）　戸澗幹夫・栃木英道『金沢市近岡遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　昭和59年　大溝より出土。時期は月影Ⅱ期、在地性の強いものである。

（12）　調査担当者の出越茂和氏（金沢市教育委員会）の御教示によれば、土壙より出土、時期は月影Ⅱ期、搬入品の可能性が強いとのことである。松寺遺跡の発掘調査報告書は、昭和59年度刊行予定である。

（13）　註（10）に同じ。Ｄ地区下層より出土。谷内尾晋司氏の御教示によれば、時期は古府クルビ期、搬入品の可能性が強いとのことである。

（14）　谷内尾晋司氏の御教示による。古府クルビ遺跡出土例（註(13)）は、口縁内面の屈曲が強く（鋭く）、同部は指によるナデが不可能とのことである。

（15）　澄田正一他『新編　一宮市史　資料編二　弥生時代』一宮市　昭和42年

（16）　加藤安信他『朝日遺跡』愛知県教育委員会　昭和57年　朝日Ⅶ期（弥生時代後期後葉・欠山期）のなかに類例を見い出せる。谷内尾晋司氏の御教示によれば、愛知県安城市中狭間遺跡では、同種の瓢壺が月影系の土器を伴って出土しているとのことである。

（17）　註（４）に同じ。Ｄ区Ｔ－103（溝）より出土。

（18）　壺Ⅵ類第49図61は、甕形土器の可能性もあり、また口縁部内面がほぼ「くの字」化し、外面屈曲部には明瞭な稜をつくりだすなど、甕ＢⅥ類第30図25に類似していることから、古府クルビ期の所産と考えられ、ここでいう月影Ⅱ期壺Ⅵ類には含めないものとする。

（19）　谷内尾晋司「鹿首モリガフチ遺跡出土土器の様相と占める位置」『鹿首モリガフチ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　昭和59年

（20）　註（19）に同じ。

（21）　註（19）に同じ。

（22）　中島俊一・浅田耕治『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』石川県教育委員会　昭和54年　東調査区より出土。

（23）　註（４）に同じ。Ｃ区Ｐ－11－２（土壙）などより出土。

（24）　坏部が比較的浅い高坏Ⅱ類の例として、南新保Ｄ遺跡（註(４)）Ａ区大溝出土高坏（第46図６、口径22cm、脚部径10cm、器高14cm、口径：深さ≒４：１）が考えられるのではあるまいか。

（25）　吉岡康暢・小嶋芳孝他『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団　昭和51年　21号竪穴（塚崎Ⅱ期古）より出土。

（26）　註（11）に同じ。大溝より出土。

(27)　楠　正勝・宮本哲郎『金沢市南新保三枚田遺跡』金沢市教育委員会　昭和59年

(28)　橋本澄夫・谷内尾晋司他『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団　昭和51年　第18号墓周溝内より出土。

(29)　註（4）に同じ。A区大溝などより出土。

(30)　註（27）に同じ。A－5・6区沼状遺構などより出土。

(31)　受部のつくりの大きい第41図163は、塚崎遺跡（註(25)）21号竪穴出土器台（塚崎Ⅱ期古）に類似しており、法仏Ⅱ期に遡る可能性があるが、両端を欠くためどちらとも言えない。

(32)　栃木英道「器台形土器の形態の変遷について」『北陸の考古学』（『石川考古学研究会々誌』第26号）石川考古学研究会　昭和58年

(33)　栃木英道・宮本哲郎「装飾性を帯びた器台形土器（いわゆる装飾器台）について」『註(4)』

(34)　吉田　淳『御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）発掘調査報告書Ⅰ』石川県野々市町教育委員会　昭和59年　類品が81－3D（土壙）より出土している。

(35)　註（27）に同じ。9号土壙及びA－5・6区沼状遺構より出土。

(36)　註（4）に同じ。A区大溝などより出土。

(37)　橋本澄夫「金沢市下安原海岸遺跡の第Ⅰ次調査」（『石川考古学研究会々誌』第18号）石川考古学研究会　昭和50年

(38)　註（4）に同じ。A区大溝などより出土。

(39)　註（27）に同じ。A－5・6区沼状遺構より出土。

(40)　註（11）に同じ。大溝より出土。

(41)　註（34）に同じ。

(42)　宮本哲郎・栃木英道・楠　正勝他『金沢市西念・南新保遺跡』金沢市教育委員会　昭和58年　月影期の遺構等出土品を除いた、弥生後期前半～法仏Ⅱ期のものに限る。

(43)　宮本哲郎他『金沢市無量寺B遺跡』金沢市教育委員会　昭和57年

(44)　註（25）に同じ。

(45)　出越茂和『金沢市額谷ドウシンダ遺跡』金沢市教育委員会　昭和59年

(46)　橋本澄夫・荒木繁行「金沢市寺中遺跡の第Ⅰ次調査」（『石川考古学研究会々誌』第12号）　石川考古学研究会　昭和44年

(47)　南　勉「蓋形土器」『註（42）』　内湾の度合いがわずかである場合は別として、大きく内湾するものは、しばしば鉢形土器（台付椀状）と混同されることがあり、確かに主流を占めることはない（体部が外反するものが主流を占める）にせよ、具体的な比率については再検討を要すると思われる。

(48)　註（43）に同じ。包含層より出土。

(49)　註（4）に同じ。A区大溝より出土。

(50)　註（34）に同じ。80－7住居址より出土。

(51)　谷内尾晋司氏の御教示による。同氏によれば、月影期の蓋形土器は、有段広口壺（C16溝壺Ⅴ・Ⅵ類）や細口（頸）壺（同壺Ⅸ類）と密接な関連があり、器種構成の上からは、同時に姿を消す可能性があるとのことである。

(52)　註（11）に同じ。大溝より出土。

(53)　註（4）に同じ。D区T－104（溝）より出土。

(54)　註（27）に同じ。1号溝より出土。

II　北加賀出土の布留系土器について
―― 北安江遺跡出土の布留系甕の分析から ――

(1)　はじめに

北安江遺跡から甕を主体とした多量の布留系土器が出土した。しかし、前述したように大半がC16溝・C17溝という溝状遺構からの出土で、特にC16溝上層においては月影式土器との混在が著しく、層位的にその区別と関連性を明確に把握することができなかった。溝状遺構という開口遺構にあっては、出土遺物はある程度の時間幅をもって投棄された可能性は強い。ただその時間幅は、明瞭な中間層をおかない場合は、一定期間内での連続的な行為によるものと考えられる。C16溝・C17溝での土器の堆積を、こうした一定時間幅での連続的な堆積と理解することを前提として、月影式土器から布留系土器への転換がいか様であったのかを概観してみたい。なお、その方法として、布留系甕の形式分類をこころみ、それを軸にして北加賀地域の他遺跡での出土状況をふまえ、転換期の段階設定をすることとする。

(2)　北安江遺跡出土の布留系甕の形式分類

形式分類は、全体形を残すものがほとんどないため、口縁形態によった。口縁端部の肥厚度によりI・II・IIIに大別し、さらに端部形態によりそれぞれをA～Dの4形態に細別し、その組合せにより8形式に分類した。その規準は次のとおりである。

I―口縁端部の肥厚がほとんどなく、ほぼ直線的あるいはやや内湾ぎみに外反する。

II―口縁端部の肥厚がわずかにみとめられ、内湾ぎみに外反する。

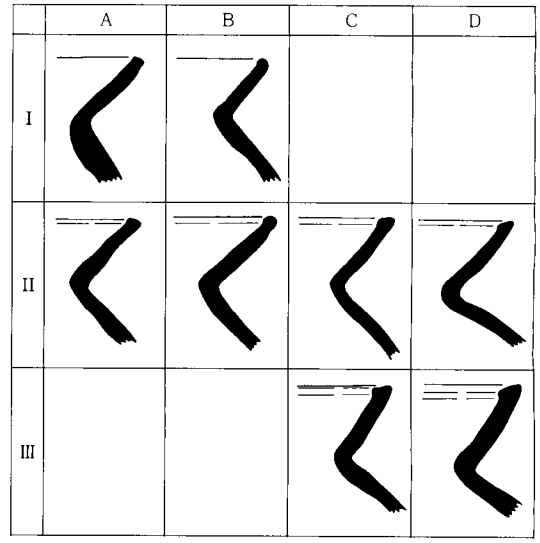
III―口縁端部の肥厚が明瞭で、内湾して外反する。

A―口縁端部が平面あるいはわずかに丸みをもち、外傾する。

B―口縁端部が丸い（内面がわずかに凹み端部が丸くハネ上げ状になるものも含む）。

C―口縁端部が平面あるいはやや凹み、ほぼ水平かやや内傾する。

D―口縁端部が内傾する。

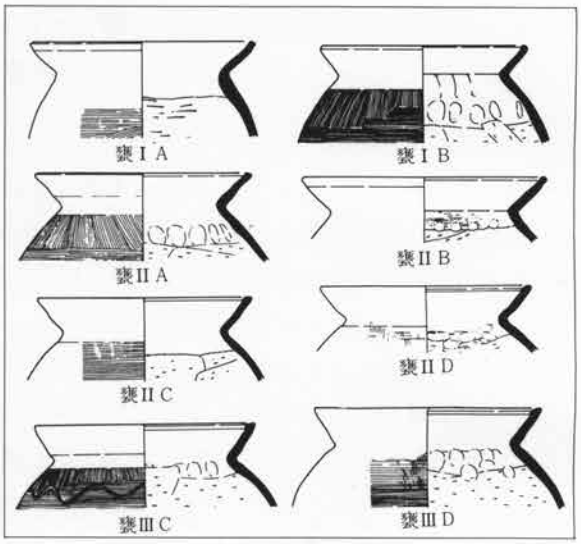


第 73 図　北安江遺跡出土布留系甕口縁部形態分類図

甕ＩＡ　C16溝上下層から各1点出土している。口縁部のヨコナデは極めて入念で、器面は平滑である。体部は長胴となると思われ、肩は張りの少ないなで肩である。体部外面は中位近くまでヨコハケを施した後、肩部はヨコナデされる。内面のヘラ削りは頸部まで達していない。胎土は微砂粒を含むが、この手の甕では最も精良。C16溝分類では甕ＣＶとしたもの。

甕ＩＢ　C16溝下層から1点、上層から2点、C17溝から1点出土している。口縁部のヨコナ

デは入念で、器壁は薄い。体部は甕ⅠAと同じくなで肩。体部外面はタテハケ後中位までヨコハケ調整される。ハケ状具は極めて単位の細いものが使用され、調整は丁寧。内面のヘラ削りは甕ⅠAと同様に肩部までにとどめ、それより上はヨコナデ調整される。C16溝分類では甕CⅨとしたもの。



第 74 図　布留系甕各種

甕ⅡA　C16溝上層から7点、C17溝から5点、C6溝から1点出土している。口縁部の屈曲が強く、体部は球胴をなすものと思われる。口縁部のヨコナデは上部と頸部の2段にわたって強く入念に施されるため、頸部上位に弱い稜を作るものも多い。体部外面の調整はタテハケ後に肩部までヨコハケ調整される。その後さらに肩部がヨコナデされるものもみとめられる。内面のヘラ削りは肩部までで、肩部には指頭圧痕を残すものが多い。胎土にはやや砂粒が目立つ。C16溝分類では甕CⅥとしたものである。

甕ⅡB　C16溝上層から10点が出土、甕CⅨとしたもの。口縁部が比較的長く、頸部での屈曲が強く体部は球胴をなすと思われる。口縁部のヨコナデは入念で体部肩までヨコナデされているものが多い。内面は頸部近くまでヘラ削りされる。胎土は比較的良好で明るく発色するものが多い。

甕ⅡC　C16溝上層から8点、C17溝から3点が出土。C16溝分類では甕CⅧに包括される。頸部の屈曲が強く体部は球胴をなすと思われる。口縁部のヨコナデは入念で、甕ⅡBと同じく体部肩までヨコナデされるものが多い。内面は頸部近くまでヘラ削りされるが、一部指頭圧痕を残すものもみられる。胎土は粗砂粒を比較的多く含む。

甕ⅡD　C16溝上層から7点、C17溝から3点が出土。C16溝分類で甕CⅦとしたもの。頸部での屈曲が強く体部は球胴をなすものと思われる。タテハケ後体部上半部をヨコハケ調整するものが多いが、ヨコハケがさほど顕著でないものもみとめられる。タテ・ヨコともハケ目は細く、調整は丁寧である。内面のヘラ削りは肩部までで、肩部には指頭圧痕を顕著に残す。

甕ⅢC　C16溝上層から24点、C17溝から6点が出土。C16溝分類で甕CⅧとして甕ⅡC・甕ⅢDとともに包括したものである。上方から強くナデあげられるため口縁端部がやや凹み内側に突出肥厚する特徴をもつ。口頸部は入念にヨコナデされるが、体部外面がヨコナデされるものはない。体部はタテハケ後、上半部はヨコハケ調整される。肩部に乱雑なクシ描き波状文が施される例も多い。内面のヘラ削りは頸部までのものは少なく、肩部に指頭圧痕を残す。

甕ⅢD　C16溝から約90点、C17溝を主体としたその他の遺構から約30点と、布留系甕全出土量の約75%を占める。口縁端部の幅・内傾度・肥厚度などなお細分すべき個体差が存在する。しかし長く平面的に内傾肥厚するものは少ない。体部上半部はタテハケ後ヨコハケ調整されているが、頸部まで入念にヨコハケが施されるものやタテハケの痕跡を残すものもみられる。内面のヘラ削

りは、頸部までのものが多いが、肩部に指頭圧痕を残すものも相当量含まれ、画一的ではない。

なおこの分類を、布留式土器の安達・木下分類[1]に対応させるならば、甕ⅠB・甕ⅡB——甕Aa、甕ⅡC・甕ⅢC——甕Ab、甕ⅢD——甕Ac、甕ⅡD——甕Bにそれぞれ対応するものと思われる。初期の布留式甕の特徴として、口縁部が丸く内肥し、その肥厚はわずかであり、口縁部の器壁が薄いことがあげられている。[2] 口縁端部の肥厚がほとんどない甕ⅠA・甕ⅠBは畿内でいう布留傾向甕[3]に近い特徴をもつ。こうしたことから、本遺跡の布留系甕を単純に口縁形態からその変化をみるならば、甕ⅠA→甕ⅡA、甕ⅠB→甕ⅡB、甕ⅡC→甕ⅢC・甕ⅢDと移行したと考えられる。また、本遺跡でみるかぎり、第73図で系列化したとおり、A・B形態ではⅢ形態にゆくものはなく、C・D形態ではⅠ形態にゆくものはない。したがって、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲが時間的な移行を示し、A～Dは個別形態差を示すものと思われる。次に畿内での布留式甕の規準資料とされている各遺跡出土土器といかなる対応関係を示すかみてみたい。

(3) 畿内布留式土器との対応関係

まず、大和では、安達・木下編年[4]と纒向編年[5]、藤井編年[6]などがある。安達・木下編年では、坂田寺下層→上ノ井手遺跡SD031、藤原宮SD912・SD914→上ノ井手遺跡井戸下層→同上層と細分されている。坂田寺下層では甕ⅡB、同時期におかれる平城宮下層溝SD6030[7]でも甕ⅡBが出土している。上ノ井手遺跡SD031では甕ⅡB・甕ⅡCを主体に甕ⅡD・甕ⅢDが出土、藤原宮SD912・SD914でもほぼ同様であり、上ノ井手遺跡井戸下層では甕ⅢC・甕ⅢDが出土甕の主体となっており、本遺跡の形式移行とほぼ同じ傾向を示す。纒向遺跡[8]では、東田地区南溝（北部）中層から甕ⅡDが、東田地区南溝（南部）中層から甕ⅠBが、東田地区南溝（南部）上層から、甕ⅡB、甕ⅡC、甕ⅡDが、東田地区土坑から甕ⅡAが、辻地区土坑4下層から甕ⅠA、甕ⅠB、甕ⅡA、甕ⅡB、甕ⅡC、甕ⅢCが、石塚周溝（西側）下層から甕ⅡDが、辻地区土坑4上層から甕ⅡA、甕ⅡB、甕ⅡCが出土している。編年的には、纒向2式に甕ⅠBが、纒向3式（古）に甕ⅡB・甕ⅡC、甕ⅡDが、纒向3式（新）に甕ⅠA、甕ⅠB、甕ⅡA、甕ⅡB、甕ⅡC、甕ⅡD、甕ⅢCが、纒向4式に甕ⅡA、甕ⅡB、甕ⅡCが伴うこととなる。纒向遺跡では庄内式古段階で布留傾向甕が出現し、庄内新式におかれる3式期には個別形態差の目立つ布留式甕が相当量伴なうと考えてよいようである。また、3式（新）と4式は、小型精製土器の伴出の有無を除けば、甕ではほとんど区別がつかないこととなる。こうしたあり方は奈良県院上遺跡[9]でもみとめられる。

発志院遺跡[10]では、布留Ⅰ式と編年される神築田溝SD50下層より、甕ⅡB、甕ⅢC、甕ⅢDが、方形落込遺構SK15中層より甕ⅡC、甕ⅡDが、布留Ⅱ式（古）とされる神築田溝SD50中層より甕ⅡA、甕ⅡB、甕ⅢC、甕ⅢDが、布留Ⅱ式（新）とされる神築田溝SD50上層より甕ⅡD、甕ⅢDが出土している。布留Ⅰ式とする神築田SD50下層には型式的に新しいと思われる甕ⅢC、甕ⅢDが含まれ、また体部調整が雑なものがみとめられるなど、布留式甕にあっても、新しい傾向が窺え、安達・木下編年の上ノ井遺跡井戸下層式に近いものと考える。

河内では、西岩田遺跡[11] Bトレンチ河川Ⅰが庄内式（新）から布留式（古段階）の土器を多量

に出土し注目される。布留型甕は甕ⅠA、甕ⅠB、甕ⅡA、甕ⅡB、甕ⅡC、甕ⅡDが出土している。甕ⅠA、甕ⅠB、甕ⅡAが主体をなし、甕ⅡBや甕ⅡDは少ない。口縁部が二段に屈曲する小型鉢や小型丸底壺の小型精製土器を伴う。吉備系甕や山陰系甕（秋里Ⅰ、青木Ⅴ・Ⅵ）の出土も顕著である。調査者は、「Ⅴ様式系＋庄内式＋布留式」の共存関係を示すもの（古相）と纒向辻土坑4上層や坂田寺下層と併行するもの（新相）と2分して位置づけ、古相も布留式としている。[12] これらの段階にあっては、庄内系甕が相当量残存することが、馬場川遺跡T地点[13]、菅振遺跡[14]、八尾南遺跡[15]などで確認されており河内ではこうした段階から布留式とする見解が有力となっている。八尾南遺跡の米田編年[16]では、纒向3式（新）併行におくSK10出土甕に甕ⅡBがみとめられ、坂田寺下層併行期におくSE9より甕ⅡB、甕ⅡDが、SE4より甕ⅡAが、SK74より甕ⅡA、甕ⅡCが出土している。また、定型化した布留式土器の標式とされる小若江北遺跡[17]出土甕では甕ⅡB、甕ⅢDが出土している。阪田編年[18]で小若江北式併行とする佐堂遺跡SD6014から甕ⅡA、甕ⅡBが、それより後出的とされるSD6003から甕ⅡB、甕ⅢC、甕ⅢDが出土している。こうしたことから河内においては、小若江北式以前の段階では甕ⅠA、甕ⅠB、甕ⅡA、甕ⅡCが主体をなし、小若江北式併行期では甕ⅡBを主体に甕ⅡA、甕ⅢC、甕ⅢDが、小若江北式以降では甕ⅢCが主体的な布留型甕とみてよいようである。

摂津では柳本編年[19]がある。提示された資料でみると、布留Ⅰ式とされる、穂積遺跡SK44井戸から甕ⅠA、甕ⅡCが、利倉西遺跡第3調査区第3層溝から甕ⅡA、甕ⅡB、甕ⅡC、甕ⅢDが一括出土している。Ⅱ式小若江北併行期とする島田川遺跡資料では甕の実体が不明、Ⅲ式とする北条遺跡資料では、内傾肥厚する甕ⅢDと口縁端部が丸く終るものが出土、須恵器と共伴する前段階のものとしている。

以上、大和・河内地方の資料を中心に、布留型甕の様相を僭越ではあるが北安江遺跡出土の布留系甕の形式分類をもとにみてきた。その結果を整理すると、甕ⅠA、甕ⅠBは布留型甕として定型しえてない布留傾向甕で、Ⅴ様式型甕や庄内型甕と共伴すると理解でき、甕ⅡAもこれに近い特徴をもち、小若江北式期直前まで残存する甕ⅡBは布留型甕では古い特徴をもつもので、小若江北式期では甕ⅢDとともに主体をなす。甕ⅡC、甕ⅡD、甕ⅢCは小若江北式期以前に出現しており、口縁端部形態の定型化以前に個別形態が著しい段階があったことを示すものと理解できる。これらは少量ではあるが小若北式期に残存する。甕ⅢDは内傾幅広肥厚傾向が顕著となり小若北式期以降の布留型甕の主体をなす。

(4) 北加賀での出土状況

南新保D遺跡[20] 金沢市北西の沖積平野に位置する月影期を中心とする集落遺跡。布留系甕は、A区包含層から甕ⅢDが、D区T－102溝から甕ⅠA、甕ⅠBが、D区T－105溝から甕ⅡA、甕ⅡCが出土。甕ⅢDを除いていずれも月影Ⅱ式土器と共存するが、T－105溝は重複関係よりやや新相。

御経塚ツカダ遺跡[21] 野々市町北東の沖積平野に位置する月影期を中心とする集落遺跡。81－1号住から甕ⅠA、甕ⅡCが、81－6D土坑から甕ⅡAが、81－1T溝（南地区）から甕ⅡDが

出土。81－1号住は月影II式（新）土器を伴出。81－1T溝は（北地区）から月影II式土器が一括出土。

無量寺遺跡[22]　金沢市北東の沖積平野に位置。溝状遺構から甕IA、甕IIDが出土。月影II式およびその退化式を主体とする土器と伴出。また、小型器台、庄内系タタキ調整甕（7点）を伴出するが、山陰、東海、近江系土器の伴出はない。

無量寺B遺跡[23]　無量寺遺跡に隣接し同一遺跡となる可能性が大。月影期を主体とした沼状落込み遺構から甕IA、甕IIA　甕IIB、甕IIDが出土。庄内系甕を伴出。

南新保三枚田遺跡[24]　南新保D遺跡の北西に隣接。月影II式期を主体とする1号溝から甕IAが出土。沼状遺構から甕IA、甕IIA、甕IIB、甕IIC、甕IIDが出土。沼状遺構は月影II式期を主体とし、他に庄内系甕、山陰系甕を伴出。

下安原海岸遺跡[25]　金沢市北西の海岸に位置。第2次調査G区上層から甕IA、甕IB、甕IID、甕IIIC、甕IIIDが出土。月影II式およびその退化型式を主体とし、他に山陰系甕、近江系甕を伴出する。

二口六丁遺跡[26]　金沢市北西郊の沖積平野に位置。大溝から甕IA、甕IB、甕IIA、甕IIB、甕IIC、甕IID、甕IIIC、甕IIIDと全種が多量に出土。量的には甕IIA、甕IIB、甕IIC、甕IIIDが多い。月影系甕は少なく、庄内系甕の出土が目立つ。他に山陰系甕・壺、近江系甕を伴う。小型精製土器としては、丸底壺、鉢、器台が小量出土。また、小溝Aから月影系甕とともに甕IB、甕IIDが、第3号ピットから甕IA、甕IB、甕IICが出土。

古府クルビ遺跡[27]　金沢市北西郊伏見川西岸の微高地に位置。古府クルビ式の標式的土器群を抽出した遺跡である。大溝跡と推定される包含層から多量の布留系甕が出土。北安江遺跡で確認したすべての甕が存在する。中でも、甕IIA、甕IIB、甕IIC、甕IIDなど口縁端部の肥厚が目立たない古式のものを主体とする。月影系甕は出土量の約10.4%と少なく、山陰系甕を中心に庄内系甕、東海系甕を伴出する。小型精製器種は丸底壺、鉢、器台があるが定型化したものではない。また、山陰系壺とともに、器面を飾った中型有段壺が多出することが特徴的である。

畝田・寺中遺跡[28]　金沢市北西の沖積平野に位置する方形周溝墓5基、土坑状遺構14基からなる遺跡。1号周溝墓から甕IA、甕IICが、2号周溝墓から甕IIC、甕IID、3号周溝墓から甕IID、4号周溝墓から甕IA、甕IB、甕IIC、甕IIDが出土。山陰系甕・壺の伴出が目立ち、月影系土器は1・2号周溝墓に数点伴出するにすぎない。小型器台を除いて小型精製土器の伴出はみられない。

押野西遺跡[29]　金沢市南西郊外に位置。L－4土坑から甕IB、甕IIA、甕IICが出土。月影系土器は含まず庄内系タタキ調整甕を伴出。

法仏遺跡[30]　松任市南西に位置。大溝から甕IIA、甕IIB、甕IICが月影系甕、山陰系甕・壺とともに出土。古府クルビ式の標式的土器群とされている。

田中B遺跡[31]　金沢市北郊の沖積平野に位置。A・Bトレンチおよび A拡張区では、大きく2層の包含層が存在し、下層とされる黒褐色土層から甕IIB、甕IID、上層とされる灰黒色土層から甕IIIC、甕IIIDが出土。下層から月影系土器が小量伴出、上層は初期須恵器直前までの資料を

含む。

高畠遺跡[32]　金沢市西郊に位置する土坑墓と推定される土坑群からなる遺跡で、玉造関係の資料を伴っている。多量の布留系土器が出土し、高畠式土器が設定された。1次4号土坑から甕IIDが、1次9号土坑から甕IIB、甕IIC、甕IIIC、甕IIIDが、1次10号土坑から甕IIIC・甕IIIDが、1次12号土坑から甕IICが、2次1号土坑から甕IIA、甕IID、甕IIIDが、2次32号土坑から甕IIC・甕IIIDが出土。全体に山陰系甕・壺との共伴例が多く、1次4号土坑から月影系甕が、1次32号土坑から小型精製壺（平底）が、1次9・10号土坑から小型器台とともに畿内型高杯が出土している。また、1次10号土坑に石釧が伴う可能性が強い。高畠式土器の標式とされるのは、1次9・10号土坑、2次32号土坑出土土器と考えられ、1次4・12号土坑はやや先行する可能性が強い。

以上、北加賀の報告書が刊行されている遺跡での布留系甕の出土状況をみた。その結果を整理する。甕IA、甕IBは南新保D遺跡や御経塚ツカダ遺跡例などから月影II式期に少量伴うものと推定される。こうした事実は金沢市近岡ナカシマ遺跡溝上層[33]でも確認される。つづく古府クルビ期にはほぼすべての形態の布留系甕が出揃うが、II類においた肥厚度の小さいものが主体をなす。甕IIB、甕IIIC、甕IIIDは極めて少量である。また、遺構によってはその出土比に傾向差があり、伴出土器の様相差もみとめられることから、新・古相と2分されうる可能性が強い。またこの段階では、定型化した小型精製土器はみとめられなく、脚底部でラッパ状に開脚する畿内型の高杯もほとんどみられない。甕IIB、甕IIIC、甕IIIDは高畠遺跡土坑群では主体をなし、高畠式土器は，この種の甕の多出、小型精製土器の伴出、畿内型高杯の普遍化などの事実によって、古府クルビ式と区別される。こうした結果から、北加賀においても畿内とほぼ同一歩調でもって、在地土器から布留系土器への転換がはかられた可能性が強い。また、転換期にあっては、遺跡や個別遺構単位で、土器相が著しく偏る場合があり、その編年的他置づけは複雑である。こうした実体をふまえ、段階設定と他地域との併行関係を次に考えてみたい。

(5)　転換期土器の編年区分と他地域との併行関係

北加賀における畿内第V様式併行期から布留式併行期にいたる転換期土器の推移は、法仏I・II式－畿内第V様式後半、月影I・II式－第V様式亜式ないしは庄内式、古府クルビ式・高畠式－布留式古段階、の大きく3段階6小期に編年される。[34] この編年案での段階区分の要点を整理し、他地域との併行関係の見通しについて若干述べ、まとめとしたい。

法仏I・II式期　日本海を介して山陰地方と濃密な関係を保ちつつ、北陸独自の地方色が強まる段階。法仏I式土器は、有段口縁甕・壺、器台やスタンプ加飾土器など山陰地方の該期土器（波来浜式・九重式[35]、青木II式[36]）と極めて近似し、姉妹関係にある土器群で、その類似土器の分布も日本海沿岸域を中心に広く分布している。また、法仏II式土器は、広義の「北陸型土器」として定着化の方向性を明確に志向するもので、次段階の月影式土器の祖型をなす土器群である。

月影I式期　法仏I・II式期での汎北陸型ともいうべき斉一性が失なわれ、北陸内部の個別地域差がもっとも顕著化する段階。北加賀では法仏II式土器の直接的系譜下のもとで月影I式土器

が出現する。明確に山陰系土器と訣別した在地性の強い土器群で、遺跡によってはほとんど他地域からの流入土器やその影響を受けた土器を含まないところに大きな特色がある。また、塚崎遺跡[37]や鉢伏ギョウダカ遺跡[38]など、特殊な台地性集落や環濠などの防御機能をそなえた集落がこの期を中心に営まれるなど、社会構造そのものが変動的であり、かつ閉鎖的であったと思われる。他地域との併行関係を示す資料に乏しいが前後の関係から、畿内の都出編年[39]北鳥池下層式～上田町Ⅰ式、纒向編年Ⅰ式～Ⅱ式のある時期、山陰の鍵尾Ⅰ式あるいは青木Ⅳ式、東海大参編年[40]の山中式～欠山式にかけてのある時期と併行するものと考えられる。畿内にあっては高地性集落がこの期に顕現化するという事象[41]や、東海の環濠集落がこの期に集中するという事象[42]とも一致をみる。

月影Ⅱ式期　月影Ⅱ式土器に示されるように在地土器の定型化が極致に達する一方で、外来系土器の流入、在地土器の地域間の移動など、土器の動態が活発化する段階。すなわち、月影Ⅰ式期の段階で顕現化した北陸内部の地域差が、地域集団の再編成過程の中でさらに明確化されると同時に、土器の移動などに示される地域間交流が活発になるが、在地土器そのものの変容はほとんどなく、逆に地域色を強固に主張するところに大きな特色がある。この期における独自の在地性を示すものとして、月影式特有の有段擬凹線文甕の一元的盛行、赤彩・加飾された有透結合タイプのいわいる装飾器台、小型台付装飾壺などの在地祭式土器の盛行がある。

また、集落遺跡の動態でみるなら、塚崎遺跡、額谷ドウシンダ遺跡[43]、西念・南新保遺跡などこの期で廃絶する遺跡と、逆にこの期を契機にして出現する御経塚ツカダ遺跡、南新保D遺跡、田中B遺跡など集落の興廃が大きく二つの動態に分けられる。また、月影Ⅰ式期にみとめられた特殊な台地性集落の消滅、環濠の廃棄なども注目すべき特徴のひとつである。この期で廃絶する遺跡は塚崎遺跡などのように外来系土器をほとんど含まないことが多く、この期に開始される遺跡ときわだった傾向性の違いを示している。それが時期差に基因するものか、遺跡の性格に基因するものか、今後の検討課題として残る。いずれにしても、都出比呂志が「畿内第6様式の社会[45]」として設定した社会構造の段階が月影Ⅱ式期と想定しうる。

他地域との併行関係を示す外来系土器の流入も多く、また北陸系土器も、畿内をはじめ、遠く備後の神辺御領遺跡[46]や北九州の三雲遺跡[47]、東国の千葉県大崎台遺跡[48]や神門5号墳[49]にまでその足跡を残している。こうした事実から、月影Ⅱ式期は、畿内では都出編年上田町Ⅰ式～Ⅱ式期、纒向編年Ⅱ式～Ⅲ式（古）に、山陰では的場式・鍵尾Ⅱ式あるいは青木Ⅴ・Ⅵ式、秋里遺跡[50]8～10区土器群（秋里Ⅰ式）に、東海ではS字状口縁の伴出例から欠山式(新)[51]に併行すると考えられる。

古府クルビ式期　土器の地域色が急速に失なわれ、畿内系土器に同化してゆく過度期の段階。土器相としては、畿内・山陰・東海・近江系土器の影響が濃厚に看取され、その諸要素が複雑にからみあった形で構成されるなど、遺跡単位にその組成は複雑で多様性に富む。このため、在地系土器を純粋に「型式」として、これらの土器相から抽出するのは困難である。中でも在地系土器の変容に大きな影響力を与えたのは、山陰系および布留系土器と思われ、その系譜下におかれる土器の出土比が最も多い。すなわち、畿内庄内系土器や近江・東海系土器が流入という形

をとるのに対して、布留系土器や山陰系土器は在地土器相をその根底から変節させるがのごとくに在地土器と取りかわっている。北陸を含む西日本において在地土器から布留系土器の転換にあたっては、山陰系土器が大きな役割をはたしている可能性が強く、各地域の転換期土器とともに山陰系土器が伴出する例が、畿内や北部九州でも比較的多く確認されていることは興味深い現象である。[52] 古府クルビ期を定型化した布留型甕や小型精製土器群を主要な組成とする土器群（小若江北式）の北加賀での定着化以前におくとするなら、前述した布留系甕の出土状況からこの期の土器相は新旧２相に分かれる可能性が強い。ただ、この期の土器相は個別遺跡や遺構によって様相差が大きく、その取扱いは慎重を要するが、古相にあっては、在地系土器の残存度が高く、新相においてはほぼ布留系、山陰系土器に限られてくることがその一応の目安となろう。

第 6 表　北加賀における甕形土器変遷表

	布留系								V様式系	庄内系	山陰系	東海系	近江系	在地系
	IA	IB	IIA	IIB	IIC	IID	IIIC	IIID						
月影I														
月影II														
古府クルビ														
高畠														

さて、他地域との併行関係であるが、畿内では西岩田遺跡Ｂトレンチ河川１・馬場川遺跡Ｔ地点、穂積遺跡ＳＫ44井戸など庄内式土器共伴期から坂田寺下層式、平城宮下層式の段階すなわち柳本編年[53]のＩ式期、纒向編年では３式新から４式期に、山陰では長瀬高浜Ｉ式期、[54] 東海では元屋敷式期に対応するものと考える。

また、この期を契機としていわいる「古墳」が出現することも大きな特色である。[55] この期の古墳としては出土土器からみて加賀市小菅波４号墳、[56] 宇気塚越１号墳、[57] 大槻11号墳、[58] 国分尼塚１号墳[59] などがあげられる。ただ、現在のところこの期にまで遡る石製腕飾類の製作遺跡が確認されておらず、前期古墳でも石製腕飾類を副葬しない古墳の段階と理解される。こうした意味でも、先にあげた前方後方墳を主体とした北陸の初期古墳の出現は畿内とそう前後しない時期であった可能性が極めて高いと考える。

高畠式期　前段階で顕現化した複雑な多様性が失なわれ、畿内布留系土器として定型化した段階。甕は布留系甕で占められ、定型化した小型丸底壺・鉢・小型器台などの小型精製土器や畿内型高杯が確実に器種構成の中に加わるなど、在地の自立性を示すものは土器組成の上では皆無である。このように、高畠式土器は斉一化した布留系土器主体の土器群であるところに大きな特色がありこの地方が畿内を中心とした政治圏に物身ともに面的に組込まれていったことを示している。それはまたこの地が数少ない玉製作地であったこととも無関係ではなく、石製腕飾類の生産がこの期を特徴づけるものとなっている。すなわち、石製腕飾類の工房址と考えられる加賀市片山津玉造遺跡[60] １・２・３・６号住居跡出土土器がこの期を遡るものではなく、この期の標式的土器群とした高畠遺跡９・10号土坑出土土器に玉造関係遺物が伴っている事実からも、畿内政権が石製

腕飾類を必要とした段階、[61]それを副葬品としてもつ古墳の築造時期がほぼこの期とみてよいと考える。

布留系土器以外に他地域との併行関係を対比しうる資料にめぐまれないが、畿内では、上ノ井遺跡溝、藤原宮内裏外郭ＳＤ912・同ＳＤ914などの小若江北式期、山陰では小谷式、長瀬高浜II期、東海では石塚式期に併行するものと考えておきたい。

(6) おわりに

地域における転換期の土器相を考える上で、在地系土器と外来系土器はその共伴関係において常に問題となる。北安江遺跡でのＣ16溝・Ｃ17溝における土器出土状態は、溝という性格もあり意識的に観察したが、かなり混然としたものであった。こうした溝出土の土器は土器編年上全く使用不可であるのであろうか。このような疑問につきあたる中で、南久和氏の一連の論攷[62・63]はこれらの問題をみごとに解消してくれるもので大いに勇気づけられた。いささか独断的ではあったが布留系甕の地域での展開をとおして、転換期社会の変革過程を追求した。北加賀での諸段階と他地域での併行関係も不完全で説明不足ではあるが提示した。諸先学の御批判・御叱正をいただければ幸いである。

なお、本稿は、先に発表した「北加賀における古墳出現期の土器について」の小稿の不十分さを少しでも補えることができたらという意図もあり、個別遺跡のまとめとしてはやや体裁の悪いものとなったが、先の小稿と合わせて御叱読いただきたい。

最後に、本稿を記すにあたって、田嶋明人、南久和、宮本哲郎、出越茂和、楠正勝の諸氏より格別の御教示を頂いたが、十分に生しきれなかったことを心よりお詫びしたい。

註

(1) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』第60巻第２号) 1974
(2) 米田敏幸「第８章考察第１節古墳時代前期の土器について」『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会 1981
(3) 米田文孝「弥生後期型甕から布留型甕へ」(『ヒストリア』第97号) 1982
(4) 註(1)文献に同じ
(5) 関川尚功「Ｖ考察篇第１章纒向遺跡の古式土師器－纒向１～４式の設定」『纒向』橿原考古学研究所 1976
(6) 藤井利章「第６章考察第５節発志院遺跡の布留式土器とその編年試案」『発志院遺跡』橿原考古学研究所 1980
(7) 安達厚三「第48次調査第２次朝堂院東朝集殿地域」『奈良国立文化財研究所年報1969』
(8) 註(5)文献に同じ
(9) 奈良県立橿原考古学研究所編『院上遺跡』 1983
(10) 註(6)文献に同じ
(11) 財団法人大阪文化財センター『西岩田』 1983
(12) 小山田宏一「第Ｖ章総括追記」文献(11)に同じ
(13) 東大阪市教育委員会『馬場川遺跡発掘調査概要Ⅳ』 1976
(14) 大阪府教育委員会『萱振遺跡発掘調査概要』 1983
(15) 八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』1981
(16) 註(2)文献に同じ
(17) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』 1956
(18) 阪田育巧「河内における布留式土器の一様相」『佐堂(その２－１)』大阪府教育委員会 1984
(19) 柳本照男「布留式土器に関する一試考」(『ヒストリア』第101号) 1983
(20) 金沢市教育委員会『金沢市南新保Ｄ遺跡』 1981

(21) 野々市町教育委員会『御経塚ツカダ遺跡』 1984
(22) 金沢市教育委員会『金沢市無量寺遺跡』 1984
(23) 金沢市教育委員会『金沢市無量寺B遺跡』 1982
(24) 金沢市教育委員会『金沢市南新保三枚田遺跡』 1984
(25) 橋本澄夫「金沢市下安原海岸遺跡の第1次調査」(『石川考古学研究会々誌』第18号) 1975
(26) 金沢市教育委員会『金沢市二口六丁遺跡』 1983
(27) 橋本澄夫・高橋 裕「金沢市古府クルビ遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書III』石川県教育委員会 1976
(28) 金沢市教育委員会『金沢市畝田・寺中遺跡』 1984
(29) 南 勉「金沢市押野西遺跡第2次発掘調査L－4土坑の概要」『金沢市二口町遺跡』金沢市教育委員会 1983
(30) 谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」(『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号) 1983
(31) 橋本澄夫「金沢市田中B遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書III』石川県教育委員会 1976
(32) 金沢市教育委員会『金沢市高畠遺跡』 1975
(33) 出越茂和氏の御教示による。
(34) 註(36)文献に同じ
(35) 東森市良「入門講座・弥生土器－山陰3」(『月刊考古学ジャーナル』No.192) 1981
(36) 青木遺跡調査団『青木遺跡発掘調査報告書III』 1978
(37) 石川県教育委員会『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』 1976
(38) 石川県立埋蔵文化財センター『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡発掘調査報告書』 1980
(39) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』第20巻第4号) 1974
(40) 大参義一「弥生式土器から土師器へ」(『名古屋大学文学部研究論集』XLVII) 1968
(41) 註(38)文献に同じ
(42) 三渡俊一郎「名古屋市見晴台遺跡と附近の弥生時代濠状遺構」(『古代人』40号) 1982
(43) 金沢市教育委員会『金沢市額谷ドウシンダ遺跡・金沢市無量寺B遺跡II』 1984
(44) 金沢市教育委員会『金沢市西念・南新保遺跡』 1983
(45) 註(38)文献に同じ
(46) 広島県教育委員会『神辺御領遺跡』 1981 E地点SD08遺構出土土器
(47) 福岡県教育委員会『三雲遺蹟III』 1982 イフ地区大溝上層出土土器
(48) 八王子市郷土資料館『三～四世紀の東国』1983
(49) 田中新史「出現期古墳の理解と展望」(『古代』第77号) 1984
(50) 鳥取市教育委員会『秋里遺跡I』 1976
(51) 古墳時代土器研究会『古墳時代土器の研究』 1984
(52) 「遺跡単位での在地土器と流入土器」『埋蔵文化財研究会第15回研究集会資料』 1984
(53) 註(19) 文献に同じ
(54) 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書III』 1981
(55) 石川県内では現在のところ古府クルビ式以前に遡る前方後方(円)形の墳丘をもつ墓の発見例はない。ただし、盛土をもつ方形周溝墓あるいは台状墓の類、すなわち「墳丘墓」に類する大型区画墓は月影式期およびそれ以前に存在することは確認されている。しかし古府クルビ式期を契機に、突出部を設ける「前方後方形」を呈する区画墓が出現することは墳墓構造上でも大きな画期であり、北陸の古墳時代はこの期をもって開始されると考えたい。こうした「古墳」と「墳丘墓」の違いをみる一例として、墳墓供献土器の相違があげられる。この手の「古墳」から出土する土器は、ほぼ壺と高杯に限定される傾向があり、中でもクシ描き文で加飾した中型有段壺や、椀状をなす杯部をもつ小型高杯など外来系と考えられる土器を供献している例が多いことが特徴的である。これに対してそれ以前の「墳丘墓」は、「在地型祭式土器」を主体に、甕など日常品の供献が多いことを特徴としている。こうしたことから、北陸にあっては、墓制の変革と土器祭式の変化が一体的なものであった可能性が高い。「前方後方形」という墳形の採用にあたっては、なんらかの地域の枠を超えるようなきわめて政治的な契機が存在したことは疑いえない。

(56) 小菅波遺跡発掘調査団『小菅波遺跡発掘調査ニュース』　1978　報告書未刊。
(57) 石川県教育委員会『河北郡宇ノ気町宇ノ気塚越遺跡』　1978
(58) 石川考古学研究会「鳥屋・高階古墳群分布調査報告」(『石川考古学研究会々誌』第20号)　1977
(59) 和田晴吾「石川県国分尼塚１・２号墳」(『月刊文化財』254号)　1984
(60) 加賀市教育委員会『加賀市片山津玉造遺跡の研究』　1963
(61) 初期畿内政権が、政治的連合性が強い地域同盟国家から、政治的統一性の強い国家へと性格を変節する段階、すなわち畿内政権による地方首長層への石製腕飾類の一元的配布がそれを物語るものと考える。いわゆる定型的とされる「畿内型古墳」の県下での造営はこの時点であったと考える。
(62) 南　久和「金沢市古府クルビ遺跡出土土器に認められる代謝現象について」『金沢市畝田・寺中遺跡』金沢市教育委員会　1984
(63) 南　久和「相対的編年の方法論に関する試論」『南久和著作集第１集』　1985

土器観察記録表

C16溝上層出土土器

図番号	器種	法量 (cm)	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第28図 1	甕 A Ⅳ	口 径24.4	ともに並	淡黄橙色	外反する有段口縁、擬凹線10条	外頸ヨコナデ、肩ハケのちヨコナデ、内口縁ヨコナデ、頸ハケ、肩ヘラ削り	外面に煤付着
第28図 2	〃	口 径20.4	やや不良 不良	茶褐色	外傾する有段口縁、擬凹線5条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口～頸ヨコナデ、肩ヘラ削り	〃
第28図 3	〃	口 径17.8	〃	黄灰色	外傾する有段口縁、擬凹線3条	外頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内口縁ヨコナデ、頸部ハケ、肩部ヘラ削り	
第28図 4	〃	口 径19.2	ともに並	淡橙褐色	外傾する有段口縁、擬凹線6条	外頸部ヨコナデ、肩ハケ、内口縁指頭圧のちヨコナデ、頸部ハケ、肩ヘラ削り	
第28図 5	〃	口 径19.4	〃	暗褐色	外反する有段口縁、擬凹線8条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケ、肩以下ヘラ削り	
第28図 6	〃	口 径18	並 良好	褐灰色	外反する有段口縁、擬凹線8～9条	外頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、肩部以下ヘラ削り	外面一部に煤付着
第28図 7	〃	口 径15.1 胴部径13.5	ともに並	淡黄褐色	外反する有段口縁、擬凹線6条	内外面頸ヨコナデ、外肩～胴ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、肩～胴ヘラ削り	
第28図 8	〃	口 径17.5	〃	桃褐～橙褐色 淡褐色	外反する有段口縁、擬凹線7条	外面頸部ヨコナデ、肩部ハケ、内面口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、肩部ヘラ削り	外面一部に煤付着
第28図 9	〃	口 径18.6	〃	淡黄褐色 暗褐色	〃	外肩以下ハケ、内口縁指頭圧のちヨコナデ、肩以下ヘラ削り	
第28図 10	〃	口 径17.3	〃	茶褐色	外傾する有段口縁、擬凹線7条	外頸部ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁部ヨコナデと指頭圧、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着、胎土中0.5～1㎜大の砂粒を含む
第28図 11	〃	口 径18.4	〃	淡茶褐色	外反する有段口縁、擬凹線5～6条	外頸部ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁指頭圧のちヨコナデ、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着
第28図 12	〃	口 径16.9	〃	暗褐色	外反する有段口縁、擬凹線8条	外面頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内面口縁部指頭圧のちヨコナデ、頸部ハケ、肩部以下ヘラ削り	
第29図 13	〃	口 径19.4	〃	淡褐～暗褐色 暗褐色	外反する有段口縁、擬凹線6条	外頸部ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁部ヨコナデと指頭圧、肩以下ヘラ削り	外面および内面の口唇部に煤付着
第29図 14	甕 A Ⅲ	口 径17.8	並 良好	淡橙色	外反する有段口縁、擬凹線4条	外頸ヨコナデ、肩ハケ、内口縁上位ナデ、下位ヨコナデ、頸ナデ、肩ヘラ削り	
第29図 15	甕 A Ⅳ	口 径21.2	ともに並	淡黄褐色	外反する有段口縁、擬凹線7条	外頸部ヨコナデ、肩部ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸部ハケのち一部ヨコナデ、肩部ヘラ削り	
第29図 16	〃	口 径18.6	やや不良 不良	橙褐色	外反する有段口縁、擬凹線6～7条	外頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内口縁部指頭圧のちヨコナデ、頸部ヨコナデ、肩部以下ヘラ削り	外面に煤付着

土器観察記録表

C16溝上層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第29図 17	甕 A Ⅳ	口 径18.9	並 不良	橙褐色 淡橙色	外反する有段口縁、擬凹線5～6条	外口縁一部ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着、全体にやや摩耗している
第29図 18	〃	口 径18	〃	黄橙色	外反する有段口縁、擬凹線8条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケのち一部ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着
第29図 19	〃	口 径17.4 胴部径18.6	ともに並	暗褐色	外反する有段口縁、擬凹線7条	外頸ヨコナデ、肩～胴ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケのち一部ヨコナデ、肩～胴ヘラ削り	
第29図 20	〃	口 径17.8 胴部径20.4	並（1㎜大の砂粒を含む） 並	淡黄褐色 黄橙～淡黄褐色	〃	外頸ヨコナデ、肩ハケのちヨコナデ、胴ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケのち一部ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着
第29図 21	〃	口 径17.6	やや不良 並	暗褐色	外傾する有段口縁、擬凹線9条	外頸ヨコナデ、肩～胴ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケのち一部ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	〃
第29図 22	〃	〃	ともに並	淡黄橙色 明褐灰色	外反する有段口縁、擬凹線5条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ナケ、肩以下ヘラ削り	外面一部に煤付着
第30図 23	甕 B Ⅳ	口 径16.5	並 不良	褐灰色	外傾する有段口縁	外口縁摩耗不明、頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口～頸ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着
第30図 24	〃	口 径17.9	ともに並	淡褐色 淡橙褐色	〃	外口縁～頸部ヨコナデ、肩部ハケ、内口縁～頸部ヨコナデ、肩部ハケのちナデ	〃
第30図 25	甕 B Ⅵ	口 径18.8	やや不良 不良	淡黄橙色	外反する有段口縁、口縁部内面は「く」の字に近い	外面ヨコナデ、内面口縁部ハケのちヨコナデ、肩部ヘラ削り	
第30図 26	甕 B Ⅰ	口 径13.8 胴部径12.2	〃	暗褐色	外反する有段口縁	外口～頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデ、肩上位ハケ、肩～胴ヘラ削り	外面胴部に煤付着
第30図 27	甕 B Ⅴ	口 径18.5	ともに並	〃	〃	外口～頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内口～肩部上位ヨコナデ、肩部以下ナデ	
第30図 28	甕 B Ⅳ	〃	やや不良 並	明橙褐色	〃	外面口縁～頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内面口縁部ヨコナデ、肩部以下ヘラ削り	外面に煤、内面に炭化物付着、内面肩部に接合痕あり
第30図 29	甕 B Ⅰ	口 径12.4 胴部径11.4	並 良好	暗黄橙色	〃	〃	外面煤、内面炭化物付着
第30図 30	甕 B Ⅱ	口 径12.2 胴部径11.2	やや不良 並	濁橙褐色	外反する有段口縁、口縁部内面は「く」の字に近い	外口～頸ヨコナデ、肩～胴ハケのち一部ナデ、内口縁ヨコナデ、肩～胴ヘラ削り	外面肩～胴部の一部に黒斑あり
第30図 31	甕 B Ⅶ	口 径32	〃	灰茶褐色 暗褐色	外傾する有段口縁、外口縁有段部にヨコナデによる稜をもつ、内口唇部にはねあげ状の肥厚をもつ	内外面口～頸部ヨコナデ、外肩以下ハケ、内肩以下ヘラ削りのち一部ナデ	胎土中1～2㎜大の砂粒を多く含む
第30図 32	〃	口 径28.7	〃	淡茶褐色	外傾する有段口縁、外面口縁有段部にヨコナデによる稜をもつ、内面口唇部に肥厚をもつ	外面口縁～頸部ヨコナデ、外肩部以下ハケ、内肩部以下ヘラ削りのち一部にナデ	外面肩部に斜行点文（右下り）を施す

土器観察記録表

C16溝上層出土土器

図番号	器種	法量 (cm)	胎土焼成	色調 外内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第31図 33	甕 C Ⅰ	口 径12.6	ともに並	淡褐色	「く」の字口縁	外口縁ヨコナデ、肩部摩耗不明、内口～頸ヨコナデ、肩部ハケのちナデと指頭圧	外面に煤付着内面肩部に接合痕あり
第31図 34	甕 C Ⅲ	口 径14.2	やや不良不良	淡茶色	「く」の字口縁、端部は面取り、内面でははねあげ状の稜をもつ	外口縁ヨコナデ、肩あらいハケ、内口縁ヨコナデ、肩上位指頭圧、肩部ヘラ削り	外面に煤付着
第31図 35	甕 C Ⅰ	口 径16	ともに並	暗灰褐色	外反する「く」の字口縁	外口～頸部ハケのち一部ヨコナデ、肩部以下ハケのち一部ナデ、内口縁ヨコナデ、肩部以下ヘラ削り	〃
第31図 36	甕 C Ⅴ	口 径18.2	〃	暗褐色	大きく外反する「く」の字口縁	外口縁上位ヨコナデ、口縁下位ハケ、頸部ハケのち一部ヨコナデ、肩ハケ、内口～頸ヨコナデ、肩ナデ	内面肩部に接合痕あり
第31図 37	甕 C Ⅰ	口 径15.2 胴部径20	〃	淡褐色	外反する「く」の字口縁、外面頸部上位に有段状の稜をもつ	外口縁ヨコナデ、肩部以下ハケ、内口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケのちナデ	〃
第31図 38	甕 C Ⅳ	口 径24.4	やや不良良好	〃	「く」の字口縁	外口縁ヨコナデ、肩ハケ、内口～肩上ヨコナデ、肩ヘラ削り	外面一部に黒斑あり
第31図 39	甕 C Ⅴ	口 径22.8	やや不良並	淡灰褐色淡黄褐～暗灰褐色	外反する「く」の字口縁	外口縁ヨコナデ、頸以下ハケ、内口縁ヨコナデ、頸以下ハケ	外口縁と内口唇に煤、外口縁に接合痕
第31図 40	甕 C Ⅱ	口 径16.9	やや不良不良	淡橙褐色暗褐色	「く」の字口縁、端部は面取り、外面では外下方への稜をもつ	外口～頸ヨコナデ、肩以下ハケのち一部ナデ、内口縁ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着
第31図 41	〃	口 径19.2	ともに並	暗褐色	「く」の字口縁、端部は面取り	外口唇部を除きハケ、内口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第31図 42	〃	口 径16.2	良好並	〃	外反する「く」の字口縁、端部は面取り、外面では外下方への稜をかすかにもつ	外口縁上位ヨコナデ、口～肩以下ハケ、内口縁ハケのちヨコナデ、肩部以下ナデ	外面に煤付着
第31図 43	〃	口 径17	〃	淡褐色	「く」の字口縁、端部は面取り、内面でははねあげにより稜をもつ	内外面口～頸ヨコナデ、外肩以下タタキ(左→右)、内肩以下ヘラ削り	〃
第31図 44	甕		ともに並	〃		外面肩部以下タタキ	
第31図 45	〃		〃	〃		〃	
第31図 46	〃		〃	〃		〃	
第31図 47	〃		〃	〃		〃	
第31図 48	〃		〃	〃		外面タタキ	
第31図 49	〃		〃	〃		〃	
第32図 50	甕 C Ⅵ	口 径18.6	やや不良並	黄橙色	やや内湾ぎみの「く」の字口縁、端部は面取り、内面ではわずかに肥厚する	外口～肩上位ヨコナデ、肩以下ハケ、内口～肩上位ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	外面煤付着、胎土中1～2㎜大の砂粒を含む
第32図 51	〃	口 径16.6	ともに並	暗褐色	「く」の字口縁、端部は面取り、内面でははねあげ状の肥厚(内上方)をもつ	外口～頸部ヨコナデ、肩～胴ハケ、内口縁ヨコナデ、肩ナデと指頭圧、胴ヘラ削り	
第32図 52	〃	口 径16.4	〃	〃	〃	〃	外面に煤付着

土器観察記録表

C16溝上層出土土器

図番号	器種	法量 (cm)	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第32図 53	甕 C Ⅶ	口 径17.1	ともに並	淡褐色	やや内湾ぎみの「く」の字口縁、端部は内傾面取り、内面では肥厚する	外面口～頸部ヨコナデ、肩部ハケ、内面口縁部ヨコナデと指頭圧、肩部ナデ	外面に煤付着
第32図 54	甕 C Ⅷ	口 径16.8	やや不良 並	淡茶褐色	「く」の字口縁、端部はやや内傾する面取り、内面では肥厚する	外口～頸部ヨコナデ、肩ハケ、内口縁部ヨコナデ、肩上位指頭圧、肩ヘラ削り	〃
第32図 55	甕 C Ⅹ	口 径19.8	並（1mm大の砂粒を含む） 並	茶褐色	「く」の字口縁、端部は不明瞭な内傾面取り、内面では肥厚する	外口縁ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ハケのちヨコナデ、肩ヨコナデと指頭圧、肩以下ヘラ削り	〃
第32図 56	甕 C Ⅶ	口 径15.6	ともに並	暗褐色	「く」の字口縁、端部は内傾面取り、内面では内下方への肥厚をもつ	外口～頸部ヨコナデ、肩～胴ハケ、内口～頸部ヨコナデ、肩ナデ、胴ヘラ削り	
第32図 57	甕 C Ⅷ	口 径15.8	〃	淡褐色	やや内湾ぎみの「く」の字口縁、端部は内傾面取り、内面では肥厚する	外口～頸部ヨコナデ肩以下ハケ、内口～頸部ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	
第32図 58	〃	口 径16.5	やや不良 並	淡橙色	〃	外口～頸部ヨコナデ、肩部ハケのちナデ、内口縁ヨコナデ、肩上位ハケと指頭圧、肩部ヘラ削り	
第32図 59	〃	口 径16.6	〃	淡橙褐色 明橙褐色	「く」の字口縁、端部は内傾面取り、内面では肥厚する	外口～頸部ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデ、肩ナデ、胴ヘラ削り	外面に煤付着
第32図 60	〃	口 径15	ともに並	暗灰褐色	〃	外口縁ヨコナデ、肩不明、内口～頸部ヨコナデ、肩ヘラ削り	〃
第33図 61	〃	口 径16.6	〃	暗褐色	〃	外口～頸ヨコナデ、肩ハケのちヨコナデ、胴ハケ、胴下位ハケ、内口縁ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	外面肩部に波状沈線あり
第33図 62	〃	口 径18.4	〃	褐色 淡黄褐色	〃	外口～頸ヨコナデ、肩～胴ハケ、内口縁ヨコナデ、肩ナデと指頭圧、胴ヘラ削り	外面肩部に波状沈線あり、内外肩部に指頭圧痕を残す
第33図 63	〃	口 径17.4	やや不良 不良	暗灰褐色	〃	内外面口～頸部ヨコナデ、外肩部以下ハケ、内肩部以下ヘラ削りと指頭圧	外面に煤付着
第33図 64	〃	口 径18.2	〃	黄橙色	〃	外口～頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内口～肩部上位ヨコナデ、肩部ヘラ削り	〃
第33図 65	〃	口 径17.7	ともに並	淡黄褐色	〃	内外面口縁ヨコナデ、外肩以下ハケ、内肩上位ナデと指頭圧、肩以下ヘラ削り	〃
第33図 66	〃	口 径15.4	〃	灰褐色 灰褐～淡黒褐色	「く」の字口縁、端部不明瞭な内傾面取り、内面は肥厚する	外口～頸部ヨコナデ、肩ハケ、内口縁ハケ、肩ヘラ削り	〃
第33図 67	壺 Ⅷ	口 径11 胴部径14.2	やや不良 並	橙褐色 暗褐色	内湾ぎみの「く」の字口縁、端部内面は肥厚する	外口～頸ヨコナデ、肩上位ハケのちヨコナデ、胴ハケ、胴下位ハケのちナデ、内口～肩ヨコナデ、胴ヘラ削りと指頭圧	〃
第33図 68	甕 C Ⅸ	口 径15.8	〃	淡黄橙色	〃	外面口縁～頸部ヨコナデ、肩部ハケ、内面口縁～頸部ヨコナデ、肩部ヘラ削り	〃

土器観察記録表

C16溝上層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第33図 69	甕 C Ⅸ	口 径15.8	やや不良 並	淡黄橙色	内湾ぎみの「く」の字口縁、端部内面は肥厚する	外口～頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内口～頸部ヨコナデ、肩部以下ヘラ削り	外面に煤付着
第33図 70	〃	口 径16	〃	明黄橙色	「く」の字口縁、端部内面は肥厚する	外口縁ヨコナデ、肩不明、内口～頸ヨコナデ、肩ヘラ削り	外面一部に煤付着
第33図 71	〃	口 径18.8	ともに並	淡 褐 色	〃	外口～頸部ヨコナデ、内口縁ヨコナデ、頸ハケのちナデと指頭圧、肩ヘラ削り	外面に煤付着
第33図 72	甕 E Ⅰ	口 径13	やや不良 並	橙 褐 色	受口状口縁	内外面ともにヨコナデ	〃
第34図 73	壺 Ⅰ	口 径21.8	やや不良（1～5mm大の砂粒を含む） 並	淡乳褐色 淡黄褐色	外反する有段口縁、端部面取り、外有段部は下稜をもつ、頸下位に突帯と斜行刻目、肩部に山形文、有段部に斜行刻目と竹管文スタンプ、口縁端部に棒状浮文（二本一組）4ヶ所	外面口縁端部ナデ、口縁部上位ハケのちナデ、下位ヨコナデ、頸部ハケのちヘラ磨き	胎土中の砂粒は、1～2mm大のものが多い
第34図 74	〃	口 径20.2	やや不良 並	褐 灰 色	外反する有段口縁	内外面ヨコナデ	外面に煤付着
第34図 75	〃	口 径20 胴部径36 （器高39推）	良 好 並	暗 褐 色	内湾する有段口縁、内面では無段に近い、胴部はほぼ球形、肩部に孔（4～6mm、1ヶ）あり、焼成後穿孔か	外口縁ヨコナデ、頸ハケ、肩～胴上位ハケのちナデ、中～下位ハケ、下位ハケのちヘラ削り、内口縁上位ヨコナデ、下位～頸ハケのち一部ナデ、肩～胴ハケ	内肩部と内外底部付近に接合痕、外胴下位に黒斑、内胴部は所々剝離している、内胴部に指頭圧痕あり
第34図 76	〃	口 径17.3	並 不 良	橙 色	外反する有段口縁、内面では無段に近い	内外面摩耗不明	
第34図 77	〃	口 径21.1	やや不良 不 良	淡 橙 色 淡 茶 色	外反する有段口縁	内外面ヨコナデ	
第34図 78	壺（底部）	胴部径13.5 底 径 1.5	ともに並	淡 茶 色		内外面ヘラ磨き、内面下位に指頭圧痕	外面赤彩
第34図 79	壺（頸部）		良 好 並	淡 褐 色	外面頸部に突帯と斜行刻目		〃
第35図 80	壺 Ⅰ	口 径20.4	やや不良 並	淡灰 茶褐色	外傾する有段口縁、端部は不明瞭な面取り、内面では無段に近い	外口縁ヨコナデ、頸ハケのち一部ナデ、内口縁ヨコナデ、頸ハケのち一部ナデ	胎土中1～2mm大の砂粒を多く含む
第35図 81	〃	口 径20.2	やや不良（1～2mm大の砂粒を含む） 並	〃	外傾する有段口縁、端部は不明瞭な面取り、内面ではほぼ無段	外面口縁部ヨコナデ、頸部ハケのち一部ナデ、内面口縁部ヨコナデ、頸部ハケのち一部ナデ	外面口縁の有段部に斜行刻目あり
第35図 82	壺	口 径19.8	やや不良 良 好	明褐灰色	内外面とも無段に近い有段口縁、外面口縁中位に沈線（幅4mm、1）	外面ヘラ磨きとナデ、内面ナデ	外面一部に煤付着、内面肩部に接合痕あり
第35図 83	壺 Ⅳ	口 径14.2 胴部径28.3	良 好 並	淡 黄 色 暗褐～褐灰色	外反する有段口縁、端部は不明瞭な面取り	外面と内口～頸ヘラ磨き、肩～胴ヘラ削りのち一部ナデ	外面赤彩、内面頸部に接合痕あり
第35図 84	壺 Ⅵ	口 径19.2	並 良 好	淡 茶 色	〃	外口縁ヘラ磨き、頸部ヨコナデ、肩ヘラ磨き、内ヘラ磨き	外面口縁部に擬凹線状の凹み3条あり
第35図 85	壺 Ⅳ	口 径15.2	ともに並	淡橙褐色	〃	内外面ハケのち一部ナデ	内面口縁部に炭化物付着
第35図 86	〃	口 径15.4	良 好 並	淡 褐 色	外反する有段口縁、外有段部に沈線2とやや斜行する刻目	外面口縁部ヘラ磨き、頸部ナデ、内面ヘラ磨き	内外面赤彩

土器観察記録表

C16溝上層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第35図 87	壺 Ⅳ	口 径14.2	並 不良	黄橙色 暗灰色	外反する有段口縁	外面ヘラ磨き、内面摩耗不明	
第35図 88	壺 Ⅰ	口 径12.4	〃	橙 色	〃	外口縁摩耗不明、頸ヨコナデ、内口縁上位摩耗不明、下位ヨコナデ、頸ヘラ磨き	
第35図 89	壺 Ⅴ	口 径10	良好 並	〃	〃	内外面摩耗不明	
第35図 90	壺 Ⅵ	口 径16.1	ともに並	淡茶色	外傾する有段口縁、内面は「く」の字状	外と内口縁ヘラ磨き、内肩部以下ヘラ削り	外面一部に煤付着
第36図 91	〃	口 径18.4	良好（1mm大の砂粒を含む）、並	茶褐色	外反する有段口縁	外面口縁部ヘラ磨き、頸部上位ヨコナデ、頸部以下ヘラ磨き、内面ヘラ磨き	外面煤付着、内面に炭化物付着
第36図 92	〃	口 径16.9 胴部径17.2	やや不良 並	明橙灰色	外反する有段口縁、内面では「く」の字状	外面ハケのちナデ、内面口縁部ヘラ磨き、肩部以下ヘラ削り	摩耗が著しい
第36図 93	壺	口 径10.9 胴部径24.2 底 径 5.2 器 高28.1	ともに並	灰褐～橙褐色 灰褐色	「く」の字口縁、肩はあまり張らない、胴部最大径は胴部中位にある、平底	外面口縁～胴部中位ハケ、胴部下半ナデ、内面口縁～胴部中位ナデ、胴部下半ナデ	外面に煤、内面胴部下位～底部に炭化物付着
第36図 94	壺 Ⅵ	口 径10.4	やや不良 並	灰褐～淡褐色 暗灰褐色	やや外反する有段口縁	外口縁ヨコナデ、肩摩耗不明、内口縁ヨコナデ、肩上位指頭圧、肩ヘラ削り	外面に煤付着
第36図 95	〃	口 径11.4	並（0.5～1mm大の砂粒を含む） 並	淡褐色	内湾ぎみの有段口縁	内外面ヨコナデ	内外面赤彩、胎土中には3～4mm大の砂礫も数個含まれる
第36図 96	〃	口 径11.8 胴部径13.7	ともに良好	茶褐色	内湾ぎみの「く」の字口縁	外口～頸ヨコナデ、肩以下ヘラ磨き、内口縁ヘラ磨き、頸ナデ、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着
第36図 97	壺 Ⅷ	口 径12.4	やや不良 並	淡橙褐色 明橙褐色	「く」の字口縁	内外面ヨコナデ	外部一部煤付着、内面肩部に接合痕
第36図 98	壺	口 径11.9	ともに並	黄橙色	外反する「く」の字口縁、端部は面取り、外面では外下方への稜をもつ	〃	胎土中0.5～2mm大の砂粒を含む
第36図 99	〃	口 径17.5	〃	淡茶褐色 淡褐灰色	大きく外反する「く」の字口縁	内外面ハケのちナデ	外面頸部に2次調整後の粘土貼付あり
第36図 100	壺 Ⅸ	口 径10	良好 並	淡褐色	外反する有段口縁、端部は不明瞭な面取り	内外面ヘラ磨き、ただし内面頸部は工具によるナデ	内外面赤彩、胎土中0.5～1mm大の砂粒を少し含む
第36図 101	〃	口 径8	ともに並	褐灰色	〃	内外面ヘラ磨き、内面頸部はナデ	
第36図 102	壺	口 径 8.1	やや不良 並	淡黄橙色	内湾ぎみの口縁、口縁上位施文、上から斜行刻目、櫛描文2、山形文、櫛描文7	〃	
第36図 103	〃	口 径10.6	並 良好	〃	内湾ぎみの口縁	内外面ヘラ磨き	
第37図 104	壺 Ⅱ	口 径13.8 胴部径27.8 底 径 6 （器高34推）	並（0.5～1mm大の砂粒を含む） 並	灰褐色	内湾ぎみの口縁、外面頸部に突帯と斜行刻目、肩部以下（櫛描文、山形文）×3、胴部は球形に近い、平底	内外面口縁上位ヨコナデ、下位ハケ、外頸部ヨコナデ、肩～胴ハケのちヘラ磨き、内肩指頭圧、胴ハケのちナデ	内面一部に黒斑あり、内面肩～胴部に接合痕あり、外面施文部赤彩

土器観察記録表

C16溝上層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第37図 105	壺 III	口 径15.8 胴部径25.2	並（1～2㎜大の砂粒を含む） 並	淡灰褐色	外上方へひろがる口縁、端部は面取り、外面では外下方への稜をもつ、胴部はほぼ球形	外面口縁～頸部ヨコナデ、肩部以下ハケのちナデ、内面口縁部ヨコナデ、肩部指頭圧、胴部ヘラ削り	外面一部に黒斑あり、胎土中には3～5㎜大の砂礫も少し含まれる
第27図 106	壺 VIII	口 径11.6	やや不良 良	褐 灰 色	内湾ぎみの口縁	外面ヘラ磨き、内面口縁部ヘラ磨き、肩部以下ナデと指頭圧	内口縁と外面赤彩、胴内面に接合痕
第37図 107	壺 IX	口 径 7.6 胴部径15.6	良 好 不 良	濁黄橙色	内湾ぎみの長い有段口縁、外面口縁部下位擬凹線3条	外面ヘラ磨き、内面口縁部上位ヘラ磨き、下位以下ナデ	内面口縁部上位と外面赤彩
第37図 108	壺 II		ともに並	淡 褐 色	外面櫛描文、山形文、櫛描文	外面ハケ、内面ナデ	外面山形文赤彩
第37図 109	〃		〃	〃	〃	〃	〃
第37図 110	〃		〃	淡黄褐色	外面山形文、櫛描文山形文	〃	
第37図 111	〃		〃	明 褐 色 暗 褐 色	外面櫛描文、山形文	〃	外面山形文赤彩
第38図 112	壺 III	口 径13 胴部径25.2 底径 5.6 器高30.6	並(0.5～1㎜大の砂粒を含む)、並	淡橙褐色	やや外反ぎみの口縁、胴部はやや縦長の卵形、平底	外面摩耗不明、内面口縁部ナデ、肩部ナデと指頭圧、胴部ハケのちナデ	胎土中には3～5㎜大の砂礫もごく少量含まれる
第38図 113	底部(壺)	底 径 5.8	並（2～3㎜大の砂粒含む）、並	暗 褐 色	平底、下面はやや凹む	内外面ハケ	外面に煤、内面に炭化物付着
第38図 114	底部(壺)	底 径 3.2	ともに並	〃	平底、下面は凹む	外ヘラ削り、内ナデ	外面に煤付着
第38図 115	底部(甕)	胴部径10.4 底 径 1.5	〃	〃	平底、胴部は縦長の卵形	外面ハケ、内面頸部ハケ、肩～胴部ヘラ削り、底部ナデ	〃
第38図 116	〃	底 径 2.5	〃	〃	やや不明瞭な平底	外ハケ、内ヘラ削り	
第38図 117	〃	底 径 1.6	並（1～2㎜大の砂粒を含む）、並	茶 褐 色	平底、下面はやや凹む	外面ハケ、内面ヘラ削り、底部は未調整	外面に煤付着
第38図 118	〃	底 径 2.2	ともに並	暗灰褐色	〃	外ハケ、内ヘラ削り	〃
第38図 119	〃	底 径 2	〃	茶 褐 色	〃	外面ハケ、内面胴部ヘラ削り、底部ハケ	〃
第38図 120	脚 台	脚台径 7.8	〃	暗 褐 色	内湾ぎみの脚台、端部はやや不明瞭な面取り	外底付近ハケ、脚台ナデ、内底工具によるナデ、脚台指による調整のちヨコナデ	外面に一部黒斑あり、脚台部に接合痕あり
第38図 121	〃	脚台径 6.2	並(0.5～1㎜大の砂粒含む) 並	淡茶褐色	比較的短い脚台、端部は面取り	脚台部内外面とも手指による調整、指頭圧痕あり	底部付近は摩耗不明
第38図 122	〃	脚台径 9.7	ともに並	茶 褐 色	外反ぎみの脚台、端部は面取り、上端は外上方への稜をもつ	外ヘラ磨き、端部ナデ、内底付近ナデ、底ヘラ磨き、脚台ヘラ磨きのち一部ナデ	
第38図 123	〃	脚台径11.4	やや不良 並	淡 褐 色	〃	外ヘラ磨き、端部はヨコナデ、内ナデ	
第38図 124	〃	脚台径 9.2	並 良 好	淡 橙 色	外反ぎみの脚台、端部は面取り、上端は外上方への稜をもつ	外面底部ハケ、脚台部ナデ、内面ナデ	脚端部に沈線1条
第38図 125	〃	脚台径 7.6	ともに並	淡茶褐色	外反ぎみの脚台、端部は面取り、胴部は球形か	外ヘラ磨き、端部ナデ、内胴～底ヘラ磨き、脚台上位ヘラ磨き、下位ヨコナデ	胎土中0.5～1㎜大の砂粒を少し含む

土器観察記録表

C16溝上層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第39図 126	高坏 II	口 径25	並 不良	黄橙色	やや内湾する体部と外反する口縁、境界部は屈曲し稜をもつ	内外面ヘラ磨き	
第39図 127	〃	口 径19.2	〃	橙褐色	やや外反する体部と口縁部、境界部は屈曲し、稜をもつ	〃	
第39図 128	高坏 I	脚部径13.1	〃	淡褐～橙褐色	直線的にのびる体部と口縁部、棒状に近い脚上位から下位へやや屈曲しつつ開く、透し穴は2孔1対（径5～6㎜、4）	外面ヘラ磨き、内面口縁～体部ヘラ磨き、脚部ナデ	
第39図 129	〃		やや不良 良好	淡橙褐色	やや外反する体部と口縁部、脚部は上位が棒状に近く、下位は外下方へ開く	〃	
第39図 130	高坏 II	口 径16	並 不良	淡黄橙色	内湾する体部と外反する口縁部、境界部は屈曲し、稜をもつ	外面ヘラ磨き、内面口縁部ヘラ磨き、体部ヨコナデ	胎土中に3㎜大の砂粒を数個含む
第39図 131	〃	口 径18	並（1～2㎜大の砂粒を含む）、並	淡茶褐色	〃	内外面ハケのちヘラ磨き、一部ナデ	外面一部に黒斑あり
第39図 132	〃	脚部径10.6	ともに並	淡橙色	やや内湾する体部と外反する口縁、境界部は屈曲し、稜をもつ、脚は外反する	外面ヘラ磨き、内面口縁～体部ヘラ磨き、脚部上位しぼり（痕）、下位ハケのちナデ	脚部の透し穴は2孔1対（径6～7㎜、4）
第39図 133	〃	口 径31	〃	淡茶褐～茶褐色	内湾する体部と外反する口縁部、境界部は屈曲し、稜をもつ	内外面ヘラ磨き	胎土中に1～2㎜大の砂粒を少し含む
第39図 134	〃	口 径21.7	やや不良 良好	明褐灰色 暗黄橙色	〃	〃	
第39図 135	〃	口 径21.1	並 良好	明褐灰色	〃	〃	
第39図 136	〃	口 径19.8	〃	淡黄橙色	〃	〃	口端部面取り
第40図 137	高坏 IV	口 径12	良好 並	淡褐色	やや外反する体部と口縁部、境界部は屈曲する（逆台形）	内外面ハケのちヘラ磨き	
第40図 138	〃		良好 不良	暗灰色	直線的にのびる体部と口縁部	内外面摩耗不明	
第40図 139	〃	口 径10.5 脚部径16.4 器 高10.6	並（1㎜大の砂粒を含む） 並	橙色	小さい体部と内湾する口縁、境界部は外面で屈曲、大きく外反する脚	外面ヘラ磨き、内面口縁～体部ヘラ磨き、脚部ハケのちナデ	脚部に透穴（径9㎜、3）
第40図 140	高坏 VI	脚部径12.1	ともに並	明黄橙色	ラッパ状に広がる脚部	外ヘラ磨き、内上位しぼり、中位ヘラ削り、下位ヨコナデ	
第40図 141	高坏 I		やや不良 良好	淡褐色	直線的にのびる体部と外反する脚部	外面ヘラ磨き、内面ナデ	外面一部に黒斑あり
第40図 142	〃		並（1～2㎜大の砂粒を含む）、並	淡茶褐色	外反する体部と脚部、脚部に透し穴（径6㎜、個数不明）あり	外面ヘラ磨き、内面体部摩耗不明、脚部上位ナデ、下位ハケ	胎土中3～6㎜大の砂礫を数個含む
第40図 143	高坏		良好 不良	淡黄褐色	外反する脚部、上位に沈線（幅2㎜、焼成後）あり	外面ヘラ磨き、内面上位しぼり（痕）、下位ハケのちナデ	
第40図 144	〃	脚部径13	並 良好	茶褐色	外反する脚部、端部面取り、上端はやや反転する	外面ヘラ磨き、内面上位しぼり（痕）、中位ナデ、下位ハケ	
第40図 145	〃	脚部径13.8	並 不良	橙褐色	外反する脚部、脚部に透し穴2孔1対（径5～8㎜、4）	外面ヘラ磨き、内面ナデ	

土器観察記録表

C16溝上層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の物徴	調整の特徴	備考
第40図 146	高坏	脚部径11.6	ともに並	明灰褐色	外反する脚部	外ハケのち一部ヘラ磨き、内ハケのちナデ	脚部に透穴、径7～12mm
第40図 147	〃	脚部径12.7	やや不良 不良	乳褐色	外反する脚部、脚部に透し穴（径8～18mm、4）あり	内外面摩耗不明	胎土中0.5～1mm大の砂粒を含む
第40図 148	〃	脚部径15.4	良好 不良	橙色	ほぼ直線的に大きく広がる脚部に透し穴（径12mm、3）	外面摩耗不明、内面は摩耗しているが、一部にハケあり	
第40図 149	脚(高坏)	脚部径13	ともに並	淡黄褐色	ほぼ直線的に広がる脚部	外ヘラ磨き、内ナデとヘラ状具痕	脚部に透穴3、径10mm
第40図 150	〃	脚部径12.2	良好 不良	淡茶褐色	ほぼ直線的に広がる脚部に透し穴（径12～14mm、3）あり	外面一部にヘラ磨き、内面上位ヘラ削り、下位ハケのち一部ナデ	外面一部に黒斑あり
第40図 151	〃	脚部径12	並 不良	淡橙色 黄橙色	外反する脚部、端部は不明瞭な面取り	外面ヘラ磨き、内面ナデと指頭圧	
第40図 152	高坏 I	脚部径12.2	やや不良（1～2mm大の砂粒を含む） 並	淡黄褐色	外反する脚部	外面ヘラ磨き、内面摩耗不明	胎土中3mm大の砂礫も数個含まれる
第40図 153	〃	脚部径12	並 良好	灰褐色	外反する脚部に透し穴（径7～8mm、3）あり	外面中～上位ヘラ磨き、下位ハケのちヘラ磨き、内面体部ヘラ磨き、脚部ナデ	
第41図 154	高坏	脚部径10.5	やや不良 並	淡黄橙色	脚部上位は棒状に近く、下位は外反する	外面ヘラ磨き、内面ナデ	
第41図 155	脚	脚部径9	ともに並	明褐灰色	外反する脚部に透し穴（径9mm、1、焼成後）あり	外面ヘラ磨き、内面上位ナデ、下位ハケ	
第41図 156	〃	脚部径11.4	良好 並	淡茶褐色	外反する脚、端部面取り、上端は反転	外ヘラ磨き、内上位ナデ、下位ヘラ磨き	
第41図 157	高坏	脚部径12.5	やや不良 不良	淡橙色	外反する脚、端部面取り、脚上位は肉厚	外面ヘラ磨き、内面ナデ	外面一部に赤彩（痕）
第41図 158	〃	脚部径11	ともに並	橙色	脚部上位はやや内湾し、下位は外反する	外面ヘラ磨き、内面ハケのちナデ	外面赤彩
第41図 159	脚	脚部径12.4	〃	橙褐色	外反する脚部、端部面取り、上端はやや反転する	外面ヘラ磨き、端部ナデ、内面上位ナデ、下位ヨコナデ	脚部に透し穴（径9mm、3）
第41図 160	〃	脚部径13	良好 不良	〃	外反する脚部に透し穴（径5mm、4）、端部面取り	外面ヘラ磨き、内面上位ヘラ削り、下位ハケのちナデ	内面一部に黒斑あり
第41図 161	〃	脚部径8.8	ともに並	淡明褐灰色	外反する脚部に透し穴（2段6×2）、径4mm、上位貫通2、未貫通4	外面ヘラ磨き、内面ハケのちヘラ磨き	
第41図 162	器台 III	受部径24.8	並（0.5～2mmの砂粒含む）、並	茶褐色	外反する体部と受部、境界部は屈曲し、弱い稜をもつ	内外面ハケのちヘラ磨き	内面受部端部赤彩
第41図 163	〃		やや不良 不良	黄橙色	外反する体部と脚部、脚部上位は棒状、体部と受部の境界部は屈曲し、稜をもつ	外面ヘラ磨き、内面体部ヘラ磨き、脚部上位ヘラ削り、下位ハケ	内外面赤彩
第41図 164	器台 II	受部径19.2	やや不良 並	淡褐色	棒状の脚上位と外反ぎみの体部、受部はやや外反、体部と受部の境界は屈曲、外受部擬凹線5～6条	外面ヘラ磨き、体部上位に一部ヘラ削り痕、内面体～受部ヘラ磨き、脚上位ヘラ削り、下位指頭圧	外面受部の擬凹線は、ヘラ磨きによってかなり消されている
第41図 165	器台 III	脚部径12.7	やや不良 不良	黄橙色	棒状に近い脚部上位、外反する体部と脚部下位、脚部上位両端で屈曲し稜をもつ	外面ヘラ磨き、内面体部と脚部下位ヘラ磨き、脚部上位摩耗不明	

土器観察記録表

C16溝上層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土焼成	色調外内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第41図 166	器台 II	受部径23.4 脚部径12.8 器高16.4	やや不良 不良	橙色	外反する体部と脚、直線的な受端部、体部と受部の境界は屈曲し、脚端部面取り	外面ヘラ磨き、内面体～受部ヘラ磨き、脚部ハケのちナデ	内外面赤彩
第42図 167	器台 I	受部径16.6 脚部径10.6 器高 9.5	やや不良 並	淡茶色	外反する脚部と受部、受端部は面取りで沈線（1）	外面ヘラ磨き、内面ナデ	
第42図 168	〃	受部径20 脚部径14 器高12.7	〃	淡茶褐色	外反ぎみの脚部と直線的な受部、受端部面取りで沈線2	外と内受部ヘラ磨き、脚上位ナデ、下位ハケのちナデ	内面脚部に接合痕あり
第42図 169	器台 IV	受部径 8.2 脚部径 9.6 器高 6.4	〃	淡黄褐色	内湾する受部と外反する脚部、脚端部は不明瞭な面取り	外受上位ヘラ削りのちナデ、下位～脚上位ヘラ削り、下位ハケのちヘラ磨き、内受ハケのちナデ、脚上位ナデ、下位ハケ	
第42図 170	〃	受部径 8.5 脚部径12.2 器高 8.4	良好 不良	淡褐灰色	内湾する受部と外反する脚部	外面ヘラ磨き、内面ナデ	
第42図 171	〃	受部径 8.1	並 良好	黄橙色	内湾する受部	内外面ヘラ磨き	
第42図 172	〃	受部径 8.4	良好 並	黄灰褐色	内湾する受部と外反する脚部	外と内受部ヘラ磨き、脚部摩耗不明	
第42図 173	〃		やや不良 並	橙色 淡橙褐色	やや外反する脚に透し穴2段1組3個所、（径10～16mm、6）	外面摩耗不明、内面上位ヘラ削り、下位ハケ	
第42図 174	〃	脚部径12.5	〃	淡明褐灰色	外反する脚部に透し穴（径12mm、3）	外と内受部ヘラ磨き、脚上位指おさえ、下位ハケのちヨコナデ	
第42図 175	〃	脚部径11.6	ともに並	淡褐灰色 黄灰色	外反する脚に透し穴、（径11～19mm、3）	外ヘラ磨き、内脚上ヘラ削り、下ナデ	
第42図 176	脚（器台）	脚部径10.6	やや不良 不良	黄灰色	外反する脚に透し穴、（径6～7mm、3）	内外面摩耗不明、内脚上位にしぼり（痕）	
第42図 177	器台 V	口径16.3	ともに良好	淡褐色	外反する体部と口縁部、境界部は屈曲する、端部面取り	内外面ハケのちヘラ磨き	内外面赤彩、涙滴形透し穴6組12個
第42図 178	〃	口径16.2 受部径12.3	ともに並	明茶褐色	棒状の脚上位と外反する下位、境界部は屈曲し稜をもつ、やや内湾ぎみの体底部と外反する垂下帯、外反する体部と口縁	外面ヘラ磨き、内面体部上位～口縁部ヘラ磨き、体部下位～体底部ナデ、脚部ナデ、垂下帯ヨコナデ	体部の涙滴形透し穴は4組8個
第42図 179	〃	口径20	やや不良 並	黄橙色	やや外反する体部と口縁部、口縁部に擬凹線13条	内外面ヘラ磨き	内外面赤彩、涙滴形透し穴8組16個
第42図 180	〃	口径18.6 受部径14.8	ともに並	淡橙褐色	やや外反する体底部、外反する体部と口縁部、外反する垂下帯、体底部、垂下帯、口縁部の各端部は面取り、口縁端は外下方への稜をもつ	外ハケのちヘラ磨き、体底部下面はハケのちナデ、内口縁ハケのちヘラ磨きと指頭圧、体～体底部ハケのちナデ、垂下帯内面ヨコナデ	涙滴形透し穴体部4組8個、垂下帯10個、体底部に円形透し穴3（径11mm）、外面赤彩
第43図 181	小型土器 IV	口径 9.2	〃	明褐灰色	外傾する有段口縁、内面では「く」の字に近い、外面擬凹線5条、肩は張らない	外面肩部以下ハケのち一部ヘラ磨き、内面口縁部ヘラ磨き、肩部以下ナデ	
第43図 182	鉢 II	口径 8.8 胴部径10.3 底径 1.8 器高 5.3	やや不良 並	黄橙色	内湾する体部と外反する口縁部、下面の凹むやや不明瞭な平底	外面ヘラ磨き、内面ナデ	内外面赤彩

土器観察記録表　　C16溝上層出土土器

図番号	器種	法量 (cm)	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第43図 183	小型土器	口径 6.2 胴部径 5.1 底径 0.9 器高 6.6	ともに良好	淡褐色	やや内湾する有段口縁、内面では「く」の字に近い、外面擬凹線2条、肩は張らない、不明瞭な平底	外面肩部以下ハケのちヘラ磨き、内面口縁部ヘラ磨き、肩部以下ナデ	
第43図 184	小型土器 VII	口径 5.4 底径 2.8 器高 4	やや不良 並	淡橙褐色	内湾する体～口縁部、不明瞭な平底	外面摩耗不明、内面ナデと指頭圧	外面黒斑あり
第43図 185	鉢 II	口径14.2 胴部径14.1	〃	橙色	内湾する体部と外反する口縁、境界部屈曲	外面ハケのちヘラ磨き、内面ヘラ磨き	
第43図 186	鉢 III	口径15.2	やや不良 良好	淡橙褐色	内湾する体部とやや外反する口縁部、端部は反転、境界部は屈曲し、稜をもつ	内外面ヘラ磨き	外面端部付近にヘラ状具痕あり
第43図 187	〃	口径13.2	ともに良	褐色	内湾する体～口縁部	〃	
第43図 188	小型土器 II	口径13 器高 7.1	良好 並	淡橙灰色 暗褐色	内湾する体～口縁部、境界部は屈曲し、外面ではやや凹む	〃	
第43図 189	鉢 I	口径10 胴部径 9.7	やや不良 不良	淡茶褐色	外反する有段口縁、擬凹線1～2条	外ナデ、内口縁ナデ、肩以下ヘラ削り	
第43図 190	小型土器	口径 7.8 胴部径10.3 底径 1.1 器高 8.2	ともに並	橙色	外反ぎみの有段口縁、胴部はやや縦に扁平な球形、下面のやや凹む平底	外面ヘラ磨き、内面口縁部ヘラ磨き、肩部以下ナデ	頸部に1対の孔（径4～6mm）
第43図 191	〃	口径 6.5 胴部径 8.9 底径 2.1 器高 7.8	やや不良 並	褐灰色	直線的にのびる短い口縁部、やや縦長の胴部、平底	外口縁部指頭圧、胴～底部ハケのちナデ、内工具によるナデ	
第43図 192	鉢 V	底径 1.4	良好 並	褐色	不明瞭な平底と直線的にのびる体部	外面ナデ、内面ヘラ削りのちナデ	底部に孔（径6～10mm）
第43図 193	鉢 III	口径11.4 底径 4.3 器高 6.8	〃	暗茶褐色	内湾する（椀状）体～口縁部、平底	外面ハケのちヘラ磨き、内面ハケのちヘラ磨きとナデ	
第43図 194	小型土器 V	口径 7.3 胴部径 8.5 脚台径 5.2 器高11.2	やや不良 不良	淡黄橙色 褐灰色	やや外反する有段口縁、胴部はやや縦長の球形、直線的に外下方へ広がる脚台	外面ヘラ磨き、内面口縁～底部ナデ、脚台ハケのちナデ	外面と、内面口縁部赤彩
第43図 195	〃	口径 7.4 胴部径10.7 脚台径 7.5 器高10.6	ともに良好	黄橙褐色	外傾する有段口縁、内面は「く」の字に近い、胴部は縦に扁平な球形、外反する脚、端部面取り	外面ヘラ磨き、内面口縁部ヘラ磨き、肩～底部ナデ、脚台部摩耗不明	外面赤彩
第43図 196	鉢 IV	口径17.2	良好 不良	〃	内湾する体部と直線的な口縁、境界部は屈曲し、稜をもつ	内外面ヘラ磨き	内外面赤彩
第43図 197	小型土器 I	底径 2.6	ともに並	褐灰色 淡茶褐色	内湾する体部、不明瞭な平底	〃	
第43図 198	〃	胴部径 7.6	ともに良好	褐灰色	内湾する体部、やや内湾する口縁部、丸底	外と内口縁ヘラ磨き、体部上位ナデ、下位ヘラ磨き	
第43図 199	〃		ともに並	暗黄橙色	内湾する体部	外ヘラ磨き、内ナデ	外面黒斑あり
第43図 200	鉢 IV	口径10.8	やや不良 不良	橙色	ほぼ直線的にのびる体部とやや外反する口縁部、境界部は屈曲、屈曲部に把手1、端部擬凹線3条	外面ヘラ磨き、内面体～口縁部ヘラ磨き、脚台部ナデ	
第43図 201	〃	口径 7.8	良好 並	黄橙色 淡橙色	内湾する体部と外反する口縁部、境界部は屈曲する	内外面ヘラ磨き	屈曲部に2段1組の斜行刻目

土器観察記録表

C16溝上層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第43図 202	鉢 Ⅳ	口 径12.1	ともに並	明褐灰色 橙 色	外傾する有段口縁、端部は不明瞭な面取り、内湾する体部	内外面ヘラ磨き	
第43図 203	小型土器	口 径 7.8	やや不良 並	暗 褐 色 褐 色	やや外反する「く」の字口縁、端部面取り、面はやや凹み、外面では稜をもつ	内外面口縁部ハケのちヨコナデ、肩部以下ハケ、内頸部指頭圧	外面に煤、内面に炭化物付着
第44図 204	〃	口 径13.5	ともに並	褐 色	内湾し直立する有段口縁、肩は張らない	外面ナデ、内面口縁部ヨコナデ、肩部以下ヘラ削り	外面煤付着
第44図 205	鉢		良 好 並	橙 褐 色 黄 橙 色	端部近くに孔（径13㎜）あり	内外面ヘラ磨き、端部はナデ	外面赤彩
第44図 206	鉢 Ⅵ	口 径29.3 胴部径39.2	やや不良 良 好	茶 褐 色	やや外反する有段口縁、擬凹線８条	外と内口縁ヘラ磨き、外胴下位にハケあり、内肩以下ヘラ削り	外面頸～肩部に逆U字状把手（１対）
第44図 207	小型土器 Ⅵ		ともに並	褐 色	尖底	外上位ハケ、下位ヘラ磨き、内ヘラ削り	
第44図 208	蓋 Ⅱ	鈕部径 3.6	〃	淡 褐 色	外反する体部、鈕端部面取り、上面凹む	外面ヘラ磨き、内面ナデ	
第44図 209	〃	〃	〃	〃	外反する体部、鈕端部は不明瞭な面取り、上面は凹む	外面ヘラ磨き、内面鈕部ヘラ磨き、体部ナデ	外面煤、内面体部炭化物付着
第44図 210	蓋 Ⅴ	口 径13.2 鈕部径 3.6 器 高 4.8	良 好 並	〃	外反する体部、鈕部上面は凹む	内外面ヘラ磨き	
第44図 211	蓋	口 径 6.6	良 好 不 良	乳 白 色	外反する体部	内外面ナデ	内外面赤彩
第44図 212	蓋 Ⅱ	口 径 9.4 鈕部径 2.7 器 高 4.2	ともに並	橙 褐 色	外反する体部、鈕端部面取り、上面は凹む	外面ヘラ磨き、口端部ヨコナデ、内面ナデ	胎土中１～２㎜大の砂粒を含む
第44図 213	蓋 Ⅴ	口 径 9 鈕部径 3.4 器 高 4.8	〃	淡橙褐色	外反する体部、鈕部上面は凹む	内外面摩耗不明	
第44図 214	〃	口 径 8.9 鈕部径 2.9 器 高 3	〃	橙 色 淡 橙 色	〃	〃	
第44図 215	蓋 Ⅳ	口 径 7.4 鈕部径 2.5 器 高 2.7	〃	明褐灰色 褐 灰 色	ほぼ直線的な体部、鈕部上面は凹む	内外面ヘラ磨き	
第44図 216	〃	口 径 8.7 鈕部径 2.2 器 高 3.4	良 好 並	暗 褐 色	〃	〃	
第44図 217	蓋 Ⅴ	口 径 8.6 鈕部径 2.4 器 高 3.9	やや不良 並	橙 色	やや外反する体部、鈕部上面は凹む	〃	内外面赤彩
第44図 218	蓋 Ⅲ	口 径 8.7 鈕部径 4.3 器 高 4.1	並 良 好	黄 橙 色	ほぼ直線的にのびる体部、鈕部上面は凹む	〃	
第44図 219	〃	口 径 8.8 鈕部径 3.6 器 高 3.6	ともに並	淡 褐 色	ほぼ直線的な体部、鈕端部は不明瞭な面取り、上面は凹む	外面ヘラ磨き、内面鈕部ヘラ磨き、体部ナデ	
第44図 220	蓋 Ⅶ	口 径11.4 鈕部径 5.4 器 高 5.8	やや不良 不 良	橙 色	内湾する体部、鈕部上面は凹む	内外面鈕部ナデ、内外面体部摩耗不明	
第44図 221	〃	口 径12.2 鈕部径 3.9 器 高 5.4	良 好 並	淡茶褐色	内湾する体部、鈕端部は反転する面取り、上面は凹む	内外面ヘラ磨き	
第44図 222		口 径12.1	ともに並	黄 橙 色	やや内湾する体部	外面ヘラ磨き、内面工具によるヨコナデ	
第44図 223	蓋 Ⅸ	口 径 4.5 鈕部径 2.4 器 高 4.1	〃	淡黄橙色	直線的な体部、内下方へのびる口縁、平坦（やや凸）な鈕	外面ヘラ磨き、内面ナデ	
第44図 224	蓋		〃	〃	円錐状の体部、鈕部に孔（径５㎜）	外面摩耗不明、内面ヘラ磨き	

土器観察記録表

C16溝下層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第45図 1	甕 A Ⅳ	口 径21.8	並 不良	淡褐灰色	外反する有段口縁、擬凹線6条	外頸部ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデ、肩上位ハケ、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着
第45図 2	〃	口 径19.8	ともに並	淡黄褐色 淡橙褐色	外反する有段口縁、擬凹線7条	外頸ヨコナデ、肩ハケ、内口縁ヨコナデ、頸ハケのちヨコナデ、肩ヘラ削り	胎土中0.5～1㎜大の砂粒を含む
第45図 3	〃	口 径18.6	並(0.5～1.5㎜大の砂粒を含む) 並	淡黄褐色	外反する有段口縁、擬凹線5～6条	外頸部ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁部ヨコナデ、頸部ハケのちヨコナデ、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着
第45図 4	〃	口 径18.8	ともに並	灰褐 色	外反する有段口縁、擬凹線10条	外面頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内面口縁部ヨコナデと指頭圧、頸部ヨコナデ、肩部以下ヘラ削り	外面一部に煤付着
第45図 5	〃	口 径18 胴部径19.3	〃	淡黄褐色	外反する有段口縁、擬凹線7条	外頸ハケのち一部ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケ、肩以下ヘラ削り	
第45図 6	〃	口 径19	〃	淡 褐 色	外反する有段口縁、擬凹線7～10条	外頸部ヨコナデ、肩ナデ、内口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ、肩ヘラ削り	
第45図 7	甕 A Ⅰ	口 径10.6 胴部径10.1	やや不良 並	淡橙褐色	わずかに内湾する有段口縁、擬凹線3～4条	外面頸部以下ハケとヘラ磨き、内面口縁～頸部ヨコナデ、肩部以下ヘラ削り	
第45図 8	〃	口 径11 胴部径11.6 底 径 1.5 器 高12.1	やや不良 〃	黄灰褐色 （一部橙色） 明褐灰色	外傾気味の有段口縁、擬凹線5条、胴部最大径は上位にあるが肩はあまり張らない、やや不明瞭な平底	外頸～肩ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデ、肩以下ヘラ削りのちナデ	外面に煤付着
第45図 9	甕 A Ⅳ	口 径13.6	ともに並	褐 灰 色	外反気味の有段口縁擬凹線6条	外頸ヨコナデ、肩ヨコナデのちハケ、内口縁ヨコナデ、頸ヨコナデ、肩ヘラ削り	
第45図 10	甕 A Ⅱ	口 径18.4	〃	暗 褐 色	外反する有段口縁、擬凹線7条	外頸部ヨコナデ、肩ハケ、内口縁部ヨコナデと指頭圧、頸部ハケ、肩ヘラ削り	
第45図 11	甕 A Ⅳ	口 径18	並(0.5㎜大の砂粒を含む) 並	淡茶褐色	外反する有段口縁、擬凹線11条	外頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内口縁部ヨコナデ、頸部ハケのちヨコナデ、肩部以下ヘラ削り	
第45図 12	〃	口 径18.8	〃	〃	外反する有段口縁、擬凹線8条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケのちヨコナデ、肩以下ヘラ削り	外面一部に煤付着
第46図 13	〃	口 径19.8	ともに並	淡灰褐色 淡 褐 色	外反する有段口縁、擬凹線9条	外頸部ヨコナデ、肩ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸部ハケのち一部ヨコナデ、肩ヘラ削り	外面に煤付着
第46図 14	〃	口 径18.2	やや不良 不 良	橙 灰 色	〃	外頸部ナデ、肩以下ケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	

土器観察記録表

C16溝下層出土土器

図番号	器種	法量 (cm)	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第46図 15	甕 A Ⅳ	口 径18 胴部径21.9	並 不 良	淡茶褐色 暗 褐 色	外反する有段口縁、擬凹線11条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケのちヨコナデ、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着
第46図 16	〃	口 径16.7	〃	暗 褐 色	外反気味の有段口縁擬凹線6～7条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ヨコナデ、肩ヘラ削り	〃
第46図 17	〃	口 径18.6	ともに並	淡黄褐色 淡 橙 色	外反する有段口縁、擬凹線7～9条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケのちヨコナデ、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着、胎土中0.5～1㎜大の砂粒を含む
第46図 18	〃	口 径17.4	〃	淡黄褐色	外反する有段口縁、擬凹線9条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケのち一部ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	
第46図 19	〃	口 径17.8	〃	暗 褐 色	外反する有段口縁、擬凹線11条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケのち一部ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	
第46図 20	〃	口 径18.5	やや不良 並	淡 褐 色	外反する有段口縁、擬凹線10条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケのち一部ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着
第46図 21	〃	口 径19.4	並(0.5㎜大の砂粒を含む) 並	淡黄橙色	外反する有段口縁、擬凹線7～8条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ヨコナデ、肩ヘラ削り	外面一部に煤付着
第46図 22	〃	口 径19.6	ともに並	暗 褐 色	外反する有段口縁、擬凹線3条	外頸部ヨコナデ、肩ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸部ハケ、肩ヘラ削り	外面に煤付着
第46図 23	〃	口 径19.5	並(0.5～1㎜大の砂粒を含む)、並	淡茶褐色	外反する有段口縁、擬凹線10条	外頸ヨコナデ、肩ハケ、内口縁部ヨコナデと指頭圧、頸ハケのち一部ヨコナデ、肩ヘラ削り	〃
第47図 24	甕 B Ⅰ	口 径12	ともに並	明褐灰色	外傾する有段口縁	外口縁～頸部ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁部ヨコナデと指頭圧、頸部ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	〃
第47図 25	甕 B Ⅳ	口 径14.2 胴部径14.4	やや不良 並	橙 色 淡 褐 色	〃	外口～頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケのち一部ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	
第47図 26	甕 B Ⅲ	口 径15.4	〃	淡 橙 色 淡赤褐色	内湾する有段口縁	外口縁～頸ヨコナデ、肩ハケのちナデ、内口縁～頸ヨコナデ、肩ヘラ削り	
第47図 27	甕 B Ⅳ	口 径17.6 胴部径18.8	良 好 並	淡褐灰色 茶 褐 色	外反する有段口縁	内外面口～頸ヨコナデ、外肩以下ハケのち一部ナデ、内肩以下ヘラ削り	外面一部に煤付着
第47図 28	甕 B Ⅴ	口 径14.2	ともに並	灰 褐 色	〃	内外面口～頸ヨコナデ、外肩ナデ、内肩ヘラ削り	
第47図 29	〃	口 径16.2	並 良 好	暗茶褐色 淡茶褐色	〃	内外面口～頸ヨコナデ、外肩ハケ、内肩ヘラ削り	外面に煤付着

土器観察記録表

C16溝下層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第47図 30	甕 D I	口 径16	ともに並	暗褐色	外反する短い有段口縁、内面は「く」の字に近い	外口縁～肩ヨコナデ、内口縁ヨコナデ、肩ヘラ削り	外面に煤付着
第47図 31	〃	口 径17	〃	淡茶褐色	直立する短い有段口縁、内面は「く」の字に近い	外口～頸ヨコナデ、肩ハケ、内口縁ヨコナデ、口縁下位に一部ハケ、肩ヘラ削り	外面に煤付着、胎土中0.5～1㎜大の砂粒を含む
第47図 32	甕 D II	口 径14.3	良好 並	茶褐色	外反気味の短い有段口縁、内面は「く」の字に近い	外口縁～頸ヨコナデ、肩ハケ、内口縁ヨコナデ、頸ハケのち一部ヨコナデ	外面に煤付着、胎土中1㎜大の砂粒をごく少量含む
第47図 33	〃	口 径11.2	やや不良（1～2㎜大の砂粒含）、並	暗褐色	直立する短い有段口縁、内面は「く」の字に近い	外口～頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内口～頸部ヨコナデ、肩部以下ヘラ削り	外面に煤付着、胎土中には3～5㎜大の砂粒も含まれる
第47図 34	甕 B I	口 径11.8 胴部径10.9 底 径 1.8 器 高11.1	やや不良 不良	明黄褐色 暗褐色	外傾する有段口縁、肩はあまり張らない、底部は不明瞭な平底で、比較的肉厚	外面口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内面口縁～頸部ヨコナデ、肩部以下ヘラ削	外面一部に煤 内面一部に炭化物付着
第47図 35	甕 E II	口 径12	並（金雲母を含む） 並	淡黄橙色	「S」字状口縁、端部の引き出しが比較的強い、口縁部有段部分にヘラ先による施文あり	外口縁ヨコナデ、肩ハケ（左下り）、胴ハケ（右下り）、のち頸ハケ（ヨコ2～3）、胴上位ハケ（ヨコ6～7）、内口縁ヨコナデ、頸ハケ、肩以下強いナデ	
第48図 36	甕 C Ⅳ	口 径23.1	ともに並	暗褐色 淡黄橙色	「く」の字口縁、端部面取り、外面では下方へのかすかな稜	外ハケ、端部ヨコナデ、内ナデ、口縁一部にハケが残る	
第48図 37	〃	口 径20.3	やや不良 不良	淡橙色 明褐灰色	「く」の字口縁、端部は不明瞭な面取り	外口縁ヨコナデ、肩部ヘラ削り、内口縁ハケ、肩部ナデ	頸部に接合痕あり、内面に黒斑あり
第48図 38	甕 C II	口 径18,9	〃	淡黄橙色	外反する「く」の字口縁、端部面取り、外面では外下方への稜をかすかにもつ	外面口縁端部ヨコナデ、外面摩耗、ハケか、内面ハケ	外面に煤付着
第48図 39	〃	口 径16.0	並（1～2㎜大の砂粒を含む）、並	灰褐色	「く」の字口縁、端部面取り、外面では外下方への稜をかすかにもつ	外面ハケ、ただし端部はヨコナデ、内面口縁部ハケ、肩部以下ハケのちナデ	外面に煤付着 内面肩部に接合痕あり
第48図 40	〃	口 径18	並 不良	暗灰褐色	「く」の字口縁、端部は面取り、外面では外下方への稜をかすかにもつ	外面口縁部ヨコナデ、肩部ハケのち一部ナデ、内面口縁部ハケ、頸部ナデと指頭圧、肩部ハケのちナデ	外面に煤付着
第48図 41	甕		ともに並	淡茶褐色		外タタキ、内ナデ	〃
第48図 42	〃		並 不良	茶褐色 暗褐色		外面タタキ、内面ナデ	外面一部に煤付着
第48図 43	甕 C I	口 径14	ともに並	暗褐色	「く」の字口縁	内外面ヨコナデ	外面に煤付着
第48図 44	〃	口 径13.2	〃	暗灰褐色	〃	外口縁ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデ、肩以下ナデ	外面に煤、内面に炭化物付着
第48図 45	〃	口 径14.2			〃	外口縁部ハケのち一部ナデ、肩以下ハケ、内口縁部ナデ、肩以下ヘラ削り	
第48図 46	甕 C III	口 径16	並 良好	茶褐色 灰褐色	外反する「く」の字口縁、端部は面取り、外面では外下方への稜をかすかにもつ	外面ハケ、ただし端部はヨコナデ、内面口縁部ハケ、肩部以下ハケのちナデ	外面一部に煤付着、頸・肩部に接合痕あり

土器観察記録表

C16溝下層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土焼成	色調 外内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第48図 47	甕 C Ⅵ	口 径18	並 不 良	淡黄橙色	内湾気味の「く」の字口縁、端部面取り、内面でははねあげ状の、外面では下方への稜をもつ	外面口縁部ヨコナデ、肩部摩耗不明、胴部ハケ（タテ→ヨコ）、内面口縁～頸部ナデ、肩部以下ヘラ削り	外面に煤付着
第48図 48	甕 C Ⅳ	口 径16 胴部径21	ともに並	褐 色	「く」の字口縁、内面は肥厚する	外口縁～頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデ、下位指頭圧、胴ヘラ削り、一部指頭圧痕	外面に黒斑あり
第49図 49	壺 Ⅰ		やや不良 不 良	橙 色 淡橙褐色	有段口縁、擬凹線4条以上、外面頸部に突帯と斜行刻目	外面頸部ハケのちナデ、内面頸部摩耗不明、一部磨きが残る	外面に煤付着
第49図 50	壺 Ⅴ	口 径13.6	やや不良 並	灰 褐 色	外反する有段口縁、擬凹線14条	外頸～肩ヨコナデ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ヨコナデ、肩ヘラ削り	外面に煤付着 胎土中0.5～2mm大の砂粒を含む
第49図 51	〃	口 径12 胴部径16.2	並 良 好	〃	外反する有段口縁	外調整不明、内口縁ヨコナデ、肩ヘラ削り、胴ナデ	外面に煤付着
第49図 52	壺 Ⅵ	口 径14	やや不良 良 好	淡 橙 色	外反する有段口縁、口縁部下位に擬凹線2条	外口縁～頸部ヘラ磨き、肩以下ハケのち一部ヘラ磨き、内口縁部ヘラ磨き、頸部ハケのちヘラ磨き、肩以下ヘラ削り	
第49図 53	〃	口 径13.4	ともに並	淡灰褐色	外傾気味の有段口縁	外口縁摩耗不明、頸部ヘラ磨き、肩部以下摩耗不明、内口縁～頸部ヨコナデ、肩部以下ナデ	外面に煤付着
第49図 54	壺 Ⅰ	口 径15.7	良 好 並		外反する有段口縁	外面口縁ヘラ磨き、頸部ハケのちヘラ磨き、内面ヘラ磨き	外面に一部煤付着、内外面赤彩
第49図 55	壺 Ⅴ	口 径11.4	ともに良好	淡 茶 色	外反する有段口縁、口縁下位擬凹線4条	内外面ヘラ磨き	
第49図 56	〃	口 径12	良 好 不 良	淡茶褐色	外反する有段口縁	外面口縁部ハケのちヘラ磨き、頸部ヘラ磨き、内面ヘラ磨き	
第49図 57	〃	口 径10.6	ともに並	淡黄褐色	〃	外ヘラ磨き、内口縁～頸部ヘラ磨き、肩以下ナデと指頭圧	外煤、内炭化物付着、内頸部に接合痕
第49図 58	壺 Ⅳ	口 径13.8	〃	黄 橙 色	〃	外口縁ヘラ磨き、端部ヨコナデ、頸ナデ、内口縁～頸ヘラ磨き口縁端部ヨコナデ、肩部ヘラ削り	
第49図 59	〃	口 径12.8	やや不良 良 好	褐 灰 色	外反する「く」の字口縁、端部は幅の広い面取り、外面では外下方への稜をもつ	外面口縁部ヨコナデ、ただし下位はナデ、内面ナデ	外面に煤付着
第49図 60	〃	口 径11.8	ともに並	暗 灰 色	内傾する有段口縁、内面は「く」の字状	外口縁～頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁～頸ハケのちナデ、肩以下ヘラ削り	
第49図 61	壺 Ⅵ	口 径15.8	〃	暗 褐 色	外反する有段口縁、内面は「く」の字に近い、端部は面取り	外口縁～頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデ、頸ハケ、肩以下ヘラ削りのち工具によるナデ	内面頸部に接合痕あり
第50図 62	壺 Ⅳ	口 径 7.7	並 不 良	淡 茶 色	内湾気味の口縁	外面ヘラ磨き、内面口縁上位ヘラ磨き、下位～頸部ヨコナデ	内面口縁部に接合痕あり

土器観察記録表

C16溝下層出土土器

図番号	器種	法量 (cm)	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第50図 63	壺 Ⅷ	口 径11.5	並 不良	橙褐色	内湾気味の「く」の字状口縁	外ヘラ磨き、内口縁ヘラ磨き、肩ナデ	
第50図 64	壺 X	口 径 7.4	やや不良 不良	黄橙色	口縁部に注ぎ口あり	外ナデ、内口縁～肩ナデ、胴ヘラ磨き	
第50図 65	壺 II		ともに並	淡褐色 灰褐色	上から櫛描文、山形文、櫛描文、山形文	内外面ハケ	山形文赤彩
第50図 66	〃		〃	淡褐色 淡灰色	上から、山形文、櫛描文、山形文	外面ハケ、内面不明	
第50図 67	壺	口 径 6.4	良好 並	明褐灰色	直立する口縁	外面ヘラ磨き、内面ハケのちナデ、口縁端部はヘラ磨き	
第50図 68	〃	口 径15.8	やや不良 並	淡橙褐色	外反する口縁、端部は面取り、ヘラ状具による右下がりの沈線が多数めぐっている	外面ハケのちヨコナデ、内面ハケのち一部ヨコナデ	
第50図 69	壺 X	口 径 5.2 胴部径12.4	やや不良 良好	明褐灰色 淡茶褐色	やや偏平な球形の胴部と丸底	外面ヘラ磨き、内面口縁部ヘラ磨き、胴部ナデ、底部付近ヘラ磨き	肩部上位に2孔一対（径4～6mm，4）の孔あり
第50図 70	壺		ともに良好	暗褐色	外面ヘラによる施文	内面ナデ	
第50図 71	壺 Ⅳ	胴部径15.6	良好 不良	淡褐色	扁平な球形の胴部	外ヘラ磨き、内肩指頭圧、胴ナデと指頭圧、底ハケ	外面赤彩
第50図 72	底部(壺)	底 径 4.6	良好 並	褐灰色	平底	外面ヘラ磨き、内面ハケのちヘラ削り	
第50図 73	〃	底 径 5.8	やや不良 並	淡灰茶褐色	〃		外面に接合痕あり
第50図 74	脚台	脚台径 7.6	ともに並	淡茶褐色	外反ぎみの脚台、端部は面取り	外面ヘラ磨き、内面底部ヘラ磨き、脚台部ナデ	胎土中1～2mm大の砂粒を含む
第50図 75	〃	脚台径 6.6	ともに良好	淡橙褐色	外反する脚台、端部は面取り	外底部ナデ、脚台ヘラ磨き、内底部ヘラ磨き、脚台ナデ	
第50図 76	〃	脚台径 9.3	やや不良 不良	灰褐色	内湾ぎみの脚台、端部は不明瞭な面取り	内外面ナデ	外面煤、内面炭化物付着
第50図 77	底部(壺)	底 径 3.2	良好 並	淡灰褐色	平底、下面はやや凹む	外面ヘラ磨き、内面ナデ	胎土中0.5～2mm大の砂粒を少量含む
第50図 78	底部(甕)	底 径 3.1	ともに並	淡褐色	平底	外ハケ、内ヘラ削り	外面に煤付着
第50図 79	脚台	脚台径 8.3	並 良好	淡灰褐色	外反する脚台、端部は面取り、上端は外上方へのかすかな稜	外面ヘラ磨き、ただし端部はナデ、内面ナデ	外面一部に煤付着
第50図 80	〃	脚台径 8	ともに並	淡橙褐色	外反する脚台、端部は不明瞭な面取り、上端は外上方への稜をかすかにもつ	外底部調整不明、脚台ヨコナデ、内底部調整不明、脚台上位ハケ、下位ナデ	脚台部上位に接合痕あり
第50図 81	脚	脚部径13.8	〃	淡褐色 淡橙褐色	外反する脚、端部は不明瞭な面取り、端部上面はやや反転する	外面ハケのちヘラ磨き（端部を除く）、内面底部ヘラ磨き、脚部上位ナデ、下位工具によるナデ	
第50図 82	脚台	脚台径11	並（1～2mm大の砂粒含む） 並	灰白色 淡黄褐色	外反する短い脚台、端部は面取り	外脚台上位ヘラ削り下位ハケ、端部ナデ内底ヘラ削り、脚台ハケのちナデ	外面一部に煤付着、内面脚台部に接合痕あり
第50図 83	〃	脚台径14.3	やや不良（1～2mm大の砂粒を含む） 並	茶褐色 灰褐色	短い脚台	外面脚台部上位ヘラ磨き、下位ヨコナデ、内面底部ヘラ削り、脚台部ヘラ磨き、ただし端部はヨコナデ	胎土中には3mm大の砂粒も含まれる

土器観察記録表

C16溝下層出土土器

図番号	器種	法量 (cm)	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第51図 84	高坏 I	口 径24.8	やや不良 良好	明灰褐色	内湾ぎみの体部と外反する口縁、端部不明瞭な面取り、境界部は屈曲し外面では稜、口縁端部沈線1	内外面摩耗不明	
第51図 85	〃		ともに並	橙褐色	外反する体部と口縁部、境界部分では屈曲し、外面では稜をかすかにもつ	外口縁ヘラ磨き、体～脚工具によるナデ、内口縁～体ヘラ磨き、脚しぼり(痕)	
第51図 86	〃	口 径21	やや不良 並	淡黄橙色	内湾ぎみの体部と外反ぎみの口縁部、境界部分は屈曲し、外面では稜をもつ	外面口縁部ハケのちヘラ磨き、体部ヘラ磨き、内面ヘラ磨き	
第51図 87	〃	脚部径13.2	良好 並	明褐灰色 褐灰色	内湾ぎみの体部と外反する口縁部、境界部分は屈曲する、外反する脚部	外ヘラ磨き、口縁部に一部ハケが残る、内口～体部ヘラ磨き、脚ハケのちナデ	内面脚にヘラ記号(×)
第51図 88	高坏 II	口 径22.5	良好 不良	黄橙色	内湾する体部と外反する口縁部、端部は不明瞭な面取り、境界部分は屈曲し、内外面とも稜をもつ、外反する脚部	外面ヘラ磨き、ただし口縁端部はナデ、内面口縁部ヘラ磨き、体部ハケ、脚部ナデとしぼり(痕)	脚部に透し穴(径7～9㎜3)
第51図 89	〃	口 径22.8	良好 並	茶褐色	内湾する体部と外反する口縁部、端部はやや凹む面取り、境界部分は屈曲し、内外面とも稜をもつ、(内面ではかすかである)	外面口縁部ハケのちヘラ磨き、体部ヘラ磨き、内面ヘラ磨き	外面に煤、内面に炭化物付着
第51図 90	〃	〃	ともに並	暗茶褐色 淡橙褐色	内湾する体部と外反ぎみの口縁、境界部は屈曲し内外面とも稜をかすかにもつ	内外面ヘラ磨き	
第51図 91	〃	口 径20.4	〃	橙褐色	内湾する体部と外反する口縁部、境界部分は屈曲し、外面では稜をかすかにもつ	〃	外面一部に黒斑あり
第51図 92	〃	口 径20	〃	淡茶褐色	内湾ぎみの体部と外反する口縁部、境界部分は屈曲し、外面では稜をもつ	内外面ハケのちヘラ磨き	胎土中 0.5～2㎜大の砂粒を少量含む
第51図 93	〃	口 径18	良好 不良		内湾ぎみの体部と外反する口縁部、境界部分は屈曲し、外面では稜をもつ	内外面ヘラ磨き	内外面赤彩
第51図 94	〃	口 径18.1	良好 並	淡褐色	内湾する体部と外反する口縁部、境界部分は屈曲し、外面では稜をもつ	〃	〃
第52図 95	〃	口 径16.8	並(0.5～1㎜大の砂粒含む)、並	橙褐色	内湾する体部と外反する口縁部、境界部分は屈曲し、外面では稜をもつ	〃	胎土は3㎜大の砂礫を2～3個含む
第52図 96	高坏 III	口 径16	やや不良 良好	淡橙色	小さい体部と内湾する口縁部、端部は面取り、境界部分は屈曲する	外口縁ヘラ削りのちヘラ磨き、端部ナデ、体部ヘラ削り、内ヘラ磨き	
第52図 97	高坏 IV	口 径13.5	ともに良好	淡黄灰色	外反する体部と口縁部(逆台形)、境界部分は屈曲する	内外面ヘラ磨き	
第52図 98	〃		良好 並	淡茶褐色	ほぼ直線的な体部と口縁部(逆台形)、境界部分は屈曲し、外面には斜行刻目をもつ	〃	

土器観察記録表

C16溝下層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第52図 99	高坏 V	口径14.5	やや不良 並	淡茶褐色 灰褐色	内湾ぎみの体部と外反ぎみの短い口縁、境界部分は屈曲する	内外面ヘラ磨き	
第52図 100	高坏 I		並 良好	黄橙色	外反する脚部、脚体部の境界部分は肉厚	外ヘラ磨き、内体部ヘラ磨き、脚ナデ	
第52図 101	高坏	脚部径13.5	良好 並	淡灰褐色	外反する脚部、脚部に透し穴（径5～6㎜、3）	外ハケのちヘラ磨き、内脚上位しぼり、下位ハケのちナデ	
第52図 102	〃	脚部径11.6	〃	淡黄褐色 淡橙褐色	外反する脚部	外面ヘラ磨き、内面脚部ナデ	外面に黒斑あり
第52図 103	〃	脚部径11.1	ともに並	橙色 明褐灰色	外反する脚部、端部はわずかに反転する	外面ハケのちヘラ磨き、内面ナデ	外面赤彩
第52図 104	〃	脚部径12.8	ともに 良好	明褐灰色	外反する脚部、脚部に透し穴（径3～4㎜、2）	外面ヘラ磨き、内面脚部上位ナデ、下位ハケのちナデ	
第52図 105	高坏 III	脚部径13.8	並 不良	淡褐色 灰褐色	外反する脚部、脚部に透し穴、3孔一対、下位に2、上位に1、（径11～12㎜、6）	外面ヘラ磨き、内面脚部上位ヘラ削り、指頭圧、下位ハケのちナデ	
第52図 106	高坏 IV	脚部径14.8	並（1～2㎜大の砂粒を含む）、並	褐色	外反する脚部、脚部に透し穴（径4～12㎜、4）	外面ハケのちヘラ磨き、内面上位ナデ、下位ハケ	内面に黒斑あり
第52図 107	高坏	脚部径11.8	良好 並	淡茶褐色	外反する脚部、脚部に透し穴（径6～9㎜、3）	外面ヘラ磨き、内面ナデ	
第52図 108	〃	脚部径13	やや不良 不良	淡橙褐色	外反する脚部、脚部に2孔一対の透し穴（径5～6㎜、4）	外面ヘラ磨き、内面脚部ナデ、ただし端部にハケが残る	
第52図 109	高坏 I	脚部径13.5	並 良好	黄橙色	外反する脚部、脚部に透し穴（径7～8㎜、3）	外面ヘラ磨き、内面体部ヘラ磨き、脚部ナデ	
第52図 110	高坏	脚部径11.7	ともに並	淡橙褐色	外反する脚部、脚部は不明瞭な面取り	外ヘラ磨き、内体ヘラ磨き、脚ナデ	
第52図 111	高坏	脚部径15	並 不良	明褐灰色	外反する脚部、脚部に透し穴（径5～6㎜、3）	外面ヘラ磨き、内面ナデ	外面一部に煤 内面一部に炭化物付着
第52図 112	高坏 III	脚部径14.7	やや不良（1～2㎜大の砂粒含む） 並	乳褐色	外反する脚部、脚部に透し穴（径15～20㎜、3）	外面ヘラ磨き、内面ハケのちナデ	胎土は3～5㎜大の砂礫を多量に含む
第52図 113	〃	脚部径13	ともに並	橙褐色 淡橙褐色	内湾気味の脚、端部不明瞭な面取り、脚に2孔一対の透し穴（径14～23㎜、4）	外面ヘラ磨き、内面上位にナデとしぼり（痕）、下位ハケ	外面一部に黒斑あり
第52図 114	〃	脚部径11.3	並 良好	淡黄橙色	内湾気味の脚部、端部は不明瞭な面取り、脚部に透し穴（径14～20㎜、4）	外面ヘラ磨き、内面上位にナデとしぼり（痕）、下位ハケのち一部ヨコナデ	〃
第53図 115	高坏	脚部径12.6	良好 不良	茶褐色	外反ぎみの脚部、上位は棒状に近い、端部は不明瞭な面取り	外面ハケのちヘラ磨き、内面上位ナデ、下位ハケ、端部ナデ、	外面赤彩、脚部に透し穴（径6㎜、1未貫通）
第53図 116	脚	脚部径12.8	ともに並	暗褐色	外反ぎみの脚部、端部は面取り	外面ヘラ磨き、内面ハケのちナデ	外黒斑と赤彩 内炭化物付着
第53図 117	〃	脚部径11.5	ともに 良好	淡橙褐色	外反する脚部、端部は面取り	内外面ヘラ磨き	外一部煤、内一部炭化物付
第53図 118	〃	脚部径11.9	やや不良 不良	橙色	外反する脚部、端部は不明瞭な面取り	内外面摩耗不明	脚部に透し穴（径8～13㎜、4）

土器観察記録表

C16溝下層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第53図 119	脚	脚部径12.8	良 好 並	橙 褐 色	外反ぎみの脚部	外面ハケのちヘラ磨き、内面上位ナデ、下位ハケ	外面に煤付着
第53図 120	〃	〃	並 良 好	黄 橙 色	ほぼ直線的な脚部、脚部に透し穴（4）	外面ハケのちヘラ磨き、内面ヨコナデ	
第53図 121	器台 II	受部径24	やや不良 良 好	明褐灰色	内湾ぎみの体部と外反する受部、端部面取り、境界部は屈曲外面では稜、外面受部に擬凹線3条	内外面ヘラ磨き	擬凹線はヘラ磨きにより一部消されている
第53図 122	器台 V	受部径17.2	〃	淡黄褐色	外上方へ直線的にのびる体底部、外反ぎみの垂下帯	外面ヘラ磨き、内面ハケのちヘラ磨き	体部に涙適形透穴6組12個
第53図 123	〃	受部径13.5	〃	橙 色 黄 橙 色	外上方へ外反ぎみにのびる体底部、体部に涙滴形透穴6組12	内外面ヘラ磨き	外面赤彩、外面に化粧土
第53図 124	〃	受部径13.2	やや不良 不 良	淡茶褐色	外上方へやや内湾ぎみの体底部、外反する脚部と垂下帯	外面ヘラ磨き、内面体底部ヘラ磨き、脚部ナデ	脚部に透し穴（径5㎜、4）
第53図 125	脚（器台）	脚部径12.6	並（0.5～1㎜大の砂粒を含む） 並	茶 褐 色	外反する脚部、上位は屈曲し、外面では稜をもつ、端部は反転する面取り、透し穴（径5～9㎜、4）	外面ヘラ磨き、内面ヨコナデ	内外面とも一部に黒斑あり外面赤彩
第53図 126	〃	脚部径 7.6	良 好 並	黄橙褐色	棒状の脚部上位から直線的にのびる受部と脚部下位	外受～脚上位ヘラ磨き、下位ハケのちヘラ磨き、内受摩耗不明、脚ハケのちナデ	内外面煤付着
第53図 127	〃	脚部径10.2	並 不 良	淡橙褐色	逆円錘状の脚上位と外下方にのびる下位、端部は反転したのち外下方へ若干屈曲	外面ハケのちヘラ磨き、ただし端部はナデ、内面ナデとしぼり（痕）	
第53図 128	〃	脚部径16.1	ともに並	暗灰褐色 灰 褐 色	棒状の脚上位と外反する下位、境界部は屈曲し、外面では稜をもつ、端部は面取りでわずかに反転	外面ヘラ磨き、内面ナデ	外面に煤付着
第53図 129	〃	脚部径12.4	良 好 不 良	橙 色 淡 橙 色	外反する脚部、上位は屈曲し、外面では稜をもつ、端部はわずかに反転	内外面摩耗不明	脚部に2孔1対の透し穴（径4～5㎜、4）
第53図 130	〃	脚部径13.9	ともに並	淡橙褐色 暗 褐 色	外反する脚、端部下面も面取りで、わずかに反転、沈線1	外面ヘラ磨き、内面ハケのちナデ	外面に煤、内面に炭化物付着
第53図 131	〃	脚部径15.8	やや不良 不 良	淡茶褐色 暗茶褐色	外反ぎみの脚部、透し穴（径10～11㎜、3）	外面ヘラ削りのち一部ヘラ磨き、内面上位ヘラ削り、中位ハケ、下位ナデ	
第53図 132	脚	脚部径12.2	ともに並	淡 橙 色	棒状に近い脚部上位と外反ぎみの下位、透し穴（径6～10㎜、3）	外面ハケのちヘラ磨き、内面上位ナデとしぼり（痕）、下位ハケのち一部ナデ	
第54図 133	鉢 I	口 径 9.8 胴部径 9.6 底 径 1.2 器 高 9.8	並 不 良	淡黄橙色	外傾する有段口縁、擬凹線7条、底部は平底に近く、下面はやや凹む	外面頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内面口縁部ヨコナデ、肩部以下ナデ	
第54図 134	〃	口 径13	ともに並	暗 褐 色	外傾ぎみの有段口縁擬凹線6条	外頸ナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデ、肩以下ヘラ削りのち一部ヘラ磨きか	
第54図 135	〃	口 径12.7 胴部径10.5 底 径 1.8 器 高 9.3	並 不 良	橙 色	外反ぎみの有段口縁肩は張らない、底部は平底で、下面はやや凹む	外口縁～頸ヨコナデ、肩以下ハケのちナデ、底ヘラ削り、内口縁ヨコナデ、肩以下ヘラ削りのちナデ	

土器観察記録表

C16溝下層出土土器

図番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第54図 136	鉢 I	口 径11.6 胴部径10.5	並 不良	暗褐色	外傾する有段口縁、やや下位に胴部最大径をもつ	外面口縁～頸部ヨコナデ、肩部以下ナデ 内面口縁部ヨコナデ肩部以下ヘラ削り	外面に煤付着
第54図 137	鉢 II	口 径12.2	やや不良 不良	淡黄橙色 明黄褐色	ほぼ直線的にのびる体～口縁部、境界部分は屈曲する	外面摩耗不明、ヘラ磨きか、内面口縁部ナデ、体部ヘラ磨き	
第54図 138	〃	口 径16	ともに、やや不良	淡橙褐色	内湾ぎみの体部と外反する口縁部、境界部分は屈曲し、外面では稜をもつ	外面口縁部ヘラ磨き体部ハケのちヘラ磨き、内面ヘラ磨き	外面に煤付着
第54図 139	〃	口 径19.9	ともに並	淡黄褐色	内湾ぎみの体部と外反する口縁部、境界部分は屈曲する		内外面化粧土胎土は0.5～1㎜大の砂粒を含む
第54図 140	小型土器 IV	口 径 9.6	〃	明褐灰色	外傾する有段口縁、内面では「く」の字状	内外面ヘラ磨き	外面に煤付着
第54図 141	小型土器 VI	口 径10.4 器 高 8.6	やや不良 並	暗褐色	外上方に広がる体部と内湾ぎみの口縁部丸みを帯びた尖底	内外面ハケのちヘラ磨き	外面一部黒斑胎土は1～2㎜大の砂粒を含む
第54図 142	〃		ともに並	明茶褐色	外上方に広がる体部尖底	外ヘラ削り、内上位ヘラ磨き、下位ナデ	
第54図 143	鉢 V	底 径 3.7	〃	淡褐色	外上方に広がる体部平底、底部に孔（径4～7㎜）	外面ヘラ磨き、内面工具によるナデ	外面に煤付着
第54図 144	〃	底 径27	〃	暗褐色 淡褐色	外上方に広がる体部平底	外面ナデ、内面ヘラ削り	底部に孔（径13～14㎜）
第54図 145	〃	口 径17.2	〃	灰茶褐色	内湾する口縁～体部	外面口縁部ヨコナデ体部ハケ、内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り	外面に煤付着胎土は0.5～2㎜大の砂粒を含む
第54図 146	〃	口 径17.6 底 径 4.2 器 高10.6	〃	褐色	内湾ぎみの口縁～体部、端部は不明瞭な面取り、平底、底部に孔（径11～12㎜）	外ハケのち一部ナデ内口縁ヘラ削りのちナデ、端部はハケ、体部はヘラ削り	
第54図 147	〃	口 径15 底 径 9 器 高10	〃	灰褐色 暗褐色	内湾する口～体部、端部は不明瞭な面取り	外面ハケ、内面ヘラ削り、ただし口縁部は内外面ヨコナデ	底部に孔（径9～11㎜）
第54図 148	小型土器 VII	口 径 4.5 底 径 2.5 器 高 3.1	ともに 良好	明褐灰色	内湾する体部、端部はやや反転	外口縁指押さえのちハケ、体上位ハケ、下指押さえ、内ハケ	外面一部に黒斑あり
第54図 149	〃	口 径 7.5 底 径 3.6 器 高 4.8	ともに並	淡黄橙色	内湾する口縁～体部不明瞭な平底、椀状	外体部ハケのちヘラ磨き、底部ナデ、内ナデ、口縁端部は内外面指押さえ	
第54図 150	〃	口 径 6.7 底 径 4.9 器 高 4.2	〃	淡褐灰色	底～体部の境界部でやや屈曲、平底	外ナデ、内口縁～体部ナデ、底部ハケ	
第54図 151	〃	口 径 3.9 底 径 3.3 器 高 2.7	並 良好	淡黄橙色	平底	内外面指によるナデ	胎土中1～3㎜大の砂粒を多量に含む
第54図 152	〃	口 径 4 底 径 2.4 器 高 4.2	ともに並	淡茶褐色	内湾する口縁～体部やや不明瞭な平底	内外面ナデ	胎土中1～2㎜大の砂粒を少量含む
第54図 153	鉢 III	口 径 3.3 底 径 3.3 器 高 4.8	〃	淡茶色	内湾する口縁～体部下面がやや凹む平底、椀状	内と外口～体部ヘラ磨き、外底部付近ヘラ削り、下面ハケ	
第54図 154	〃	口 径11.4 底 径 4.8 器 高 6.5	良好 並	茶褐色	内湾する口縁～体部平底、椀状	外面ヘラ磨き、ただし、体部にハケが残る、内面ヘラ磨き	胎土中0.5～1㎜大の砂粒を少量含む

土器観察記録表

C16溝下層出土土器

図番号	器種	法量 (cm)	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第55図 155	鉢 III	口 径13.6	ともに並	淡黄褐色	内湾する体部と外上方にのびる口縁、境界屈曲、端部面取り	外ヘラ磨き、端部ヨコナデ、内口縁ヘラ磨き、体部ヘラ削り	外面一部に黒斑、外面赤彩
第55図 156	〃	口 径13.8	良 好 不 良	橙 色 暗灰褐色	内湾する口縁～体部、椀状	外面摩耗不明、内面ヘラ磨き	外一部煤、内一部炭化物付
第55図 157	〃	口 径12.9	並 不 良	淡 褐 色	内湾ぎみの口縁～体部、椀状	外面口縁部ヨコナデ体部ハケのちヘラ磨き、内面ヘラ磨き	
第55図 158	〃	口 径11.8	良 好 並	淡茶褐色	椀状、端部付近やや屈曲	内外面ヘラ磨き	外面一部黒斑
第55図 159	鉢 IV	口 径 7.8	〃	淡黄褐色	外反する口縁部、体部との境界部に把手		
第55図 160	鉢 III	口 径11 脚部径 6.1 器 高 7.1	やや不良 並	黄 橙 色 黄茶褐色	椀状の体部と短かい脚台、両端は面取り	外口縁ヨコナデ、体部以下指によるナデ内口～体部ヘラ削り脚台ナデ	外面に黒斑
第55図 161	小型土器 III	口 径 9.2	ともに並	灰 褐 色	「く」の字口縁	外と内口縁ヘラ磨き肩部以下ナデ	外面に煤付着
第55図 162		口 径10.3 胴部径13.5 底 径 2.3 器 高14.4	やや不良 不 良	橙 色 淡黄褐色	短い有段口縁、端部は内傾の面取り、肩は張らない、平底、下面はやや凹む	外ヘラ磨き、内口縁ヨコナデ、肩～胴上位ハケのちナデと指頭圧、下位ナデ	
第55図 163	鉢 IV	口 径 9.9	やや不良 並	淡橙褐色 淡黄褐色	直線的な体部と口縁部、端部は外反、境界部は屈曲	外ハケのちヘラ磨き内口縁上位ヨコナデ下位ナデと指頭圧、体部ハケのちナデ、脚摩耗不明	
第55図 164	蓋	口 径 7.1 鈕部径 3.3 器 高 2.9	〃	淡茶褐色	外反する体部、鈕端部は面取り、上面は凹む	内外面ナデ	
第55図 165	蓋 III	口 径 8.2 鈕部径 4.4 器 高 3.6	ともに並	淡 橙 色 黄 橙 色	外反する体部、鈕部上面は凹む、口縁端部は面取り	外ヘラ磨きのちナデ両端部はナデ、内鈕部上位と体部下位ヘラ磨き、鈕部下位と体部上位ナデ	
第55図 166	蓋 VI	口 径 9.2 鈕部径 3.6 器 高 3.9	良 好 並	暗 褐 色	直線的な体部、鈕部上面外側がやや凹む	内外面ヘラ磨き	
第55図 167	蓋 VIII	口 径 9.1 鈕部径 2.1 器 高 5	やや不良 並	黄 橙 色 橙 色	内湾する体部、鈕部上面は凹む	外鈕部指押さえ、体部以下ハケのちヘラ磨き、内ヘラ磨き	内外面赤彩
第55図 168	〃	口 径11 鈕部径 5.8 器 高 7.4	良 好 並	淡 褐 色	内湾ぎみの体部、鈕端部は面取り、上面は凹む	外ヘラ磨き、ただし体部上位に一部ハケが残る、内ヘラ磨き	
第55図 169	蓋 V	口 径 8.6 鈕部径 2.5 器 高 3.5	〃	黄 橙 色	ほぼ直線的な体部、鈕部上面は凹む、口縁端部は面取り	外ヘラ磨き、口端部ナデ、内鈕部と体部上位ナデ、下位ハケ	
第55図 170	蓋 V	口 径 9.1 鈕部径 1.9 器 高 3.9	並 不 良	明茶褐色	外反する体部、鈕部上面は凹む	内外面ヘラ磨き	
第55図 171	〃	口 径 8.8 鈕部径 2.7 器 高 4.4	ともに良	橙 褐 色	直線的な体部、鈕部上面は凹む	〃	外面に黒斑
第55図 172	〃	口 径10.8 鈕部径 3.8 器 高 5.1	やや良好 良 好	黄 橙 色	ほぼ直線的な体部、鈕部上面は凹む	内外面ナデ	
第55図 173	蓋 VIII	鈕部径 5.1	良 好 並	淡橙褐色 褐 色	内湾する体部、鈕部上面は凹む	内外面鈕部指によるナデ、外体部ハケのちナデ、内体部工具によるナデ	

C16溝下層出土土器

図番号	器種	法量 (cm)	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第55図 174	蓋 Ⅷ	口 径10.4 鈕部径 4.5 器 高 5.4	並 不 良	淡茶褐色	内湾する体部、鈕部上面は凹む	内外面ヘラ磨き、ただし外面境界部分指押さえ	
第55図 175	〃	口 径11.8 鈕部径 4.6 器 高 7.4	ともに並	褐灰色 暗茶褐色	〃	内外面ナデ、ただし外面鈕部は指押さえ口縁端部はヨコナデ	外面に黒斑
第55図 176	蓋 Ⅵ	口 径10.6 鈕部径 3.1 器 高 5.5	〃		直線的な体部、口縁部でやや外反、鈕部上面はやや凹む	内外面ヘラ磨き	内外面赤彩
第55図 177	蓋 Ⅰ	口 径16.7 鈕部径 2.9 器 高 7.2	並 良 好	黄橙色 暗褐灰色	ほぼ直線的な体部、鈕部上面は凹む	外面ヘラ磨き、内面ナデのちヘラ磨き	
第55図 178	蓋 Ⅷ	口 径10.8 鈕部径 5.3 器 高 8.1	良 好 並	茶褐色	内湾する体部、鈕部上面は凹む	内外面ヘラ磨き、内鈕部下位と体部上位は指押さえ	

C17溝出土土器

図番号	器種	法量 (cm)	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第56図 1	甕	口 径18	並 良 好	黄橙褐色	外反する有段口縁、擬凹線 9 ～10条	外頸ヨコナデ、肩ハケ、内口縁指頭圧のちヨコナデ、頸ハケ、肩ヘラ削り	外面に煤付着
第56図 2	〃	口 径20 胴部径25.3	ともに並	淡黄褐色	外反する有段口縁、擬凹線 9 条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケのち一部ナデ、肩以下ヘラ削り	〃
第56図 3	〃	口 径19.2 胴部径22.6	やや良好 良 好	黄橙褐色	外反する有段口縁、擬凹線10条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ハケのちヨコナデ、肩以下ヘラ削り	〃
第56図 4	〃	口 径18.2	並 良 好	〃	外反する有段口縁、擬凹線 9 条	〃	〃
第56図 5	〃	口 径17 胴部径18.8	〃	淡茶褐色	外反する有段口縁、擬凹線 8 条	〃	〃
第56図 6	〃	口 径16.8	〃	橙褐色	外反する有段口縁、擬凹線 9 条	内外頸ヨコナデ、内口縁ヨコナデと指頭圧、肩ヘラ削り	
第56図 7	〃	口 径18	やや良好 良 好	淡茶褐色	外反する有段口縁、擬凹線10条	外頸ヨコナデ、内口縁ヨコナデと指頭圧頸ハケ、肩ヘラ削り	外面に煤付着
第56図 8	〃	口 径15.4	並 良 好	黄橙褐色	外反する有段口縁、擬凹線 8 条	外頸ヨコナデ、肩ハケ、内口縁～頸摩耗不明、肩ヘラ削り	
第56図 9	〃	口 径18	〃	〃	外反する有段口縁、擬凹線 9 ～10条	外頸ヨコナデ、肩摩耗不明、内口縁ヨコナデ、頸ハケ、肩ヘラ削り	外面に煤付着
第56図 10	〃	口 径19	〃	〃	外反する有段口縁、擬凹線 7 ～ 8 条	外頸ハケのち一部ヨコナデ、肩ハケ、内口縁ヨコナデ、頸ハケ、肩ヘラ削り	
第56図 11	〃	口 径18 胴部径19.4	〃	〃	外反する有段口縁、擬凹線 8 条	外頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデ、頸～肩上位ハケ、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着
第56図 12	〃	口 径22	〃	〃	〃	外頸ヨコナデ、肩ハケ、内口縁ヨコナデ頸ハケ、肩ヘラ削り	〃
第57図 13	〃	口 径24	ともに並	茶褐色	外傾する有段口縁、外有段部にヨコナデによる稜、口端面取り、面はやや凹み、外面は外上方への稜	外面口縁～頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内面口縁～頸部ヨコナデ、肩部以下ヘラ削り	〃

土器観察記録表

C17溝出土土器

図番号	器種	法量 (cm)	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第57図 14	甕	口 径16.5	ともに並	暗灰褐色	内湾ぎみの「く」の字口縁、端部は不明瞭な内傾面取り、内面では肥厚する	内外面ヨコナデ	外面に煤付着
第57図 15	〃	口 径14.6	並 不良	橙褐色	内湾ぎみの「く」の字口縁、外端部に沈線	〃	〃
第57図 16	〃	口 径16.6	ともに並	暗褐色	やや内湾する「く」の字口縁、端部は内傾面取り、内面では肥厚する	外口～頸ヨコナデ、肩ハケ、内口縁ヨコナデ、肩指頭圧、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着、外面肩部に波状文
第57図 17	〃	口 径17.8	〃	〃	内湾する「く」の字口縁、端部内傾面取、内面では肥厚する	内外口縁ヨコナデ、外肩ハケ、内肩指頭圧、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着
第57図 18	〃	口 径15.9	やや不良 並	明黄褐色 暗褐色	内湾ぎみの「く」の字口縁、端部は不明瞭な内傾面取り、内面では肥厚する	外口～頸部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内面口縁ヨコナデ、肩指頭圧、胴ヘラ削り	外面一部に煤、内面に炭化物付着
第57図 19	高坏	口 径10.8	ともに良	淡褐色	椀状、やや肉厚	〃	
第57図 20	小型土器	胴部径 5.9 底 径 1.1	良好 不良	橙色	不明瞭な平底、胴部は扁平な球形	外面摩耗不明、内面胴部ナデ、底部ハケ	
第57図 21	鉢	口 径15.3 (器高6.7推)	良好 並	茶褐色	丸底椀状の体部、やや内湾する口縁部、境界部では屈曲し、内面では稜をもつ	内外面ヘラ磨き	
第57図 22	甕	口 径15.4	ともに並	淡黄褐色	外反する「くの字」口縁、端部面取り、上端はつまみあげ	外摩耗不明、内口縁ヨコナデ、頸ハケのちヨコナデ、肩ヘラ削り	
第57図 23	〃	口 径17.7	やや不良 並	淡黄色 茶褐色	「く」の字口縁、端部は不明瞭な内傾面取り、内面では肥厚する	外面口～頸部ヨコナデ、肩部以下ハケのちナデと指頭圧、内面口縁ナデ、肩指頭圧、胴部ヘラ削り	外面に煤付着
第57図 24	〃	口 径17.8	ともに並	暗褐色	内湾する「く」の字口縁、端部は内傾面取り、内面では肥厚する	外面口～頸部ヨコナデ、肩部ハケ、内面口縁ヨコナデ、肩部指頭圧、肩ヘラ削り	
第57図 25	〃	口 径16.2	〃	〃	〃	内外口～頸ヨコナデ、(外面頸部にハケが残る)、肩以下ハケ、内肩以下ヘラ削り	〃
第58図 26	〃	口 径19.6	〃	〃	〃	外口～頸部ヨコナデ肩部以下ハケ、内口縁ヨコナデ、肩指頭圧、胴部ヘラ削り	外面に煤付着
第58図 27	〃	口 径17.8	やや不良 並	褐色	やや内湾する「く」の字口縁、端部は内傾面取り、内面では肥厚する	外口～頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデ、肩ナデと指頭圧、胴ヘラ削り	
第58図 28	〃	口 径17.1	〃	明黄橙色 淡黄褐色	内湾する「く」の字口縁、端部は丸みをもち、内面では肥厚する	外面口縁部ナデ、肩部以下ハケ、内面口縁～頸部ヨコナデ、肩部以下ヘラ削り	〃
第58図 29	〃	口 径11.6	並(1～2mm大の砂粒を含む) 並	茶褐色	受口状口縁、外有段部はヨコナデによる稜、口端部は不明瞭な面、面はやや凹む、内面では肥厚する	外面口～肩上位ヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデ、頸～肩上位ナデ、肩指頭圧胴ヘラ削り	〃
第58図 30	壺	口 径14.8 胴部径20.7	やや不良 並	橙色	外反する有段口縁、擬凹線10～11条、器壁は厚い	外頸～肩ハケのちヨコナデ、肩以下ハケ、内口縁ヨコナデと指頭圧、頸ヨコナデ、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着

土器観察記録表

C 17溝出土土器

図番号	器種	法量 (cm)	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第58図 31	〃	口 径14.2	ともに並	茶褐色	外反する有段口縁	外面口縁ヨコナデ、頸ハケ、内ヨコナデ	内面に一部黒斑あり
第58図 32	〃	口 径19.4	やや不良 不良	明黄橙褐	〃	外面摩耗不明、内面ヨコナデ	
第58図 33	〃	口 径10.3 胴部径13.7	並 良好	茶褐色	外傾する有段口縁	外ヘラ磨き、内口～頸ヘラ磨き、胴ナデ	
第58図 34	〃	口 径14.7	良好 並	橙色	やや外反する口縁、端部面取り	外面ヘラ磨き、内面口縁部ヘラ磨き、肩部ナデと指頭圧	35と同一個体か
第58図 35	脚台(壺)	脚台径13.6	〃	淡茶褐色	外反する脚台、端部は不明瞭な面をもつ	外ハケのちヘラ磨き内底部ハケ、脚台ヨコナデと指頭圧	34と同一個体か
第58図 36	器台	受部径 8.2 脚部径11.5 器 高 7.9	並 良好	黄橙色	内湾する受部と外反する脚、透し穴（径10～14mm、3）	外面ヘラ磨き、内面受部ヘラ磨き、脚部ハケのち一部ナデ	外面受部に一部指頭圧痕あり
第58図 37	〃	受部径 8.6	ともに並	〃	直線的にのびる受部	外ハケのちヘラ磨き、内受部ハケのちヘラ磨き、脚ヘラ削り	
第58図 38	高坏	口 径18	〃	〃	小さい体部と内湾する口縁部、境界部の屈曲はやや不明瞭	内、外面ヘラ磨き	内外面赤彩

C－6溝出土土器

その他の遺構出土土器

第59図 1	甕	口 径15.8	ともに並	淡橙色	外反する有段口縁、擬凹線9条	外頸部ヨコナデ、内ヨコナデと指頭圧	
第59図 2	蓋	口 径14.1 鈕部径 4.1 器 高 5.3	並 不良	淡褐灰色 褐灰色	外反する体部、鈕部上面は凹む、鈕端部は不明瞭な面取り	外面ナデ、内面ヘラ磨き	
第59図 3	〃	口 径14 鈕部径 3.8 器 高 4.9	ともに並	淡茶褐色	やや外反する体部、鈕部上面は凹む、鈕端部不明瞭な面取り	内外面ヘラ磨き	外体部上位と内口端部に煤内体部上位に炭化物付着
第59図 4	小型土器	口 径 6.6 胴部径 7.1 底 径 3.4 器 高 4.6	やや不良 並	黄橙色	体部は椀状、口縁端部は水平面取り、底部は平底、下面はやや凹む	内外面ナデ	外面底部に煤付着
第59図 5	脚(高坏)	脚部径13.6	並 やや不良	淡褐色	外反する円錐状の脚、中位に透穴(径9mm、個数不明)		

C－11溝出土土器

第59図 6	甕	口 径16.4	ともに並	褐色	「く」の字口縁、端部は内傾面取り、内面は肥厚する	外口～頸ヨコナデ、肩～胴ハケ、内口縁ヨコナデ、頸指頭圧、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着

C－12溝出土土器

第59図 7	甕	口 径15.8	やや不良 並	淡橙褐色	「く」の字口縁、端部は不明瞭な内傾面取り、内面は肥厚する	外口～頸ヨコナデと指頭圧、肩以下ハケ、内口～頸ヨコナデ、肩以下ヘラ削りのち一部ナデと指頭圧	外面口縁部の一部に黒斑あり

C－18溝出土土器

第59図 8	小型壺	口 径11.6 胴部径14.2 底 径 1.6 器 高11.5	やや不良 良好	橙色	外反する「く」の字口縁、端部面取り、内面はねあげ状の稜、外面外下方への稜、胴部は楕円、底部は下面の凹む平底	外口～頸ヨコナデ、頸部に工具痕、肩～底部ハケのちヘラ磨き、内口縁ヨコナデ、肩～胴ヘラ削り、肩部に指頭圧痕	

土器観察記録表
C－18溝出土土器

その他の遺構出土土器

図番号 図版番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第59図 9	底部(壺)	底径 2.2	ともに並	淡茶褐色	平底、下面は凹む	外面ヘラ磨き、内面下からハケ、ヘラ削り、ヘラ磨き	
第59図 10	鉢（台付）	口径15.6 底径 8.2 器高 7.9	〃	淡黄褐色	体部は椀状、底部は低い脚台状の平底	外ヘラ磨き、底下面不明、内口端部ヨコナデ、体部ヘラ削り	胎土中1～3㎜大の砂粒を含む

竪穴状遺構出土土器

第59図 11	甕	口径15.6	ともにやや不良	淡褐色	「く」の字口縁、端部は内傾面取り、内面では肥厚する	外口～頸ヨコナデ、肩以下ハケ、内口ヨコナデ、肩上指頭圧、肩以下ヘラ削り	外面に煤付着
第59図 12	〃		ともに並	淡茶褐色	「く」の字口縁、端部内面は肥厚する	外ヨコナデ、内口縁ヨコナデ、肩部ナデ	〃
第59図 13	〃		〃	茶褐色	「く」の字口縁、端部は内傾面取り、内面では肥厚する	内外面ヨコナデ	〃

包含層出土土器

第61図 1	甕	口径11.6	ともに並	黄橙色	やや内湾する「く」の字口縁	外口～頸ヨコナデ、肩ハケ、内口～肩上位ヨコナデ、肩ナデ	I 108区、胎土中0.5～2㎜大の砂粒含
第61図 2	〃		並 良好	淡茶褐色 淡褐灰色		外面タタキ、内面ヘラ削り	J 105区
第61図 3	脚台	脚台径 9.2	やや不良 並	淡褐色 淡黄褐色	外反する脚台、端部は不明瞭な面取り	外面ハケ、端部はヨコナデ、内面ナデ	
第61図 4	壺	口径21.5	〃	淡黄褐色	外反する有段口縁、屈曲部に竹管文スタンプあり	調整は摩耗不明	H 107区、胎土は0.5～2㎜大の砂粒含
第61図 5	高坏	口径21	並 不良	〃	内湾する体部に外反する口縁部、境界部は屈曲し有段	内外面ヘラ磨き	内外面赤彩、外面一部に黒斑あり
第61図 6	〃	口径18.8	やや不良 不良	淡橙色	内湾する体部と口縁部、無段	内外面摩耗不明	
第61図 7	〃	口径16.9 脚部径 9.5 器高12.4	並 やや不良	〃	小さい体部に内湾する口縁、境界は屈曲し有稜、脚は円錐状	〃	脚部に円形透穴（9～11㎜、3）
第61図 8	脚	脚部径12.5	ともに良好	淡黄褐色	外反する円錐状の脚部、端部は面取り	外ヘラ磨き、内上位ヘラ削り、下位ナデ	H 107区 外面赤彩
第61図 9	蓋	口径 3.4 鈕部径 0.9 器高 1.6	ともに並	淡茶褐色	外反する体部、鈕部上面は凹む	内外面ナデ	

その他の土器（1～11はC16溝出土）

第62図 1	甕	口径16	並 不良	淡灰褐色	内傾する幅の狭い有段口縁、端部は内面でははねあげ状、擬凹線2条	外口縁部ヨコナデ、肩部以下タタき、内口縁部ヨコナデ、肩部以下ナデと指頭圧	下層出土
第62図 2	〃	口径17.4	並 良好	暗灰褐色 茶褐色	外反する「く」の字口縁、端部面取りと不規則な押え	外面ハケ、内面口縁部ハケ、肩部以下ナデ	下層出土 外面に煤付着
第62図 3	〃	口径15.6	ともに並	淡橙褐色 暗褐色	「く」の字口縁、ただし受口状の屈曲をもつ、端部面取り、面下位にやや斜行する刻目、頸部に刻目	外面ナデ、内面上位ナデ、下位ハケ	上層出土

土器観察記録表

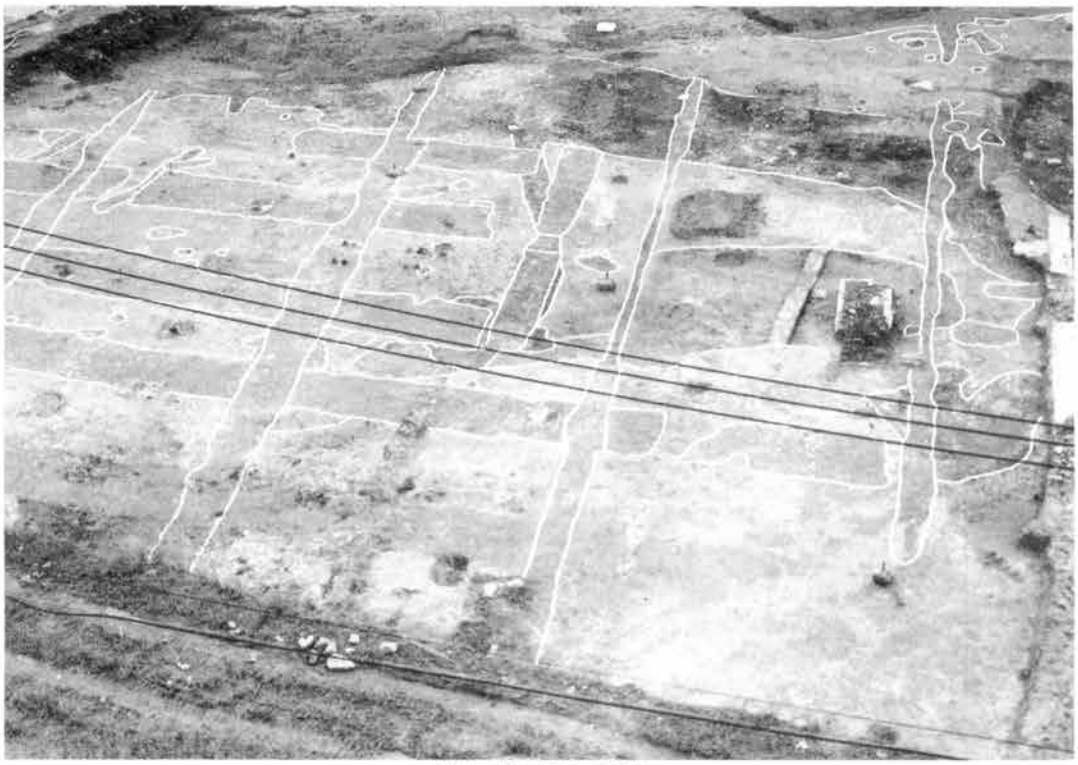
その他の土器（1～11はC16溝出土）

図番号	器種	法量（cm）	胎土 焼成	色調 外 内	器形の特徴	調整の特徴	備考
第62図 4	甕	口径13.8 胴部径15.4	やや不良 並	褐灰色 淡茶褐色	外反する「く」の字口縁、端部面取り、面は凹み内面でははねあげ状の稜をもつ	外面口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内面口縁～頸部ヨコナデ、肩部以下ヘラ削り	上層出土
第62図 5	甕(片口)	口径15.5 胴部径15.4	並（1～2㎜大の砂粒を含む）、並	茶褐色	外反する「く」の字口縁、端部面取り、片口	外面口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内面ハケ	下層出土
第62図 6	甕	口径11.8	やや不良 並	淡黄褐色	外反する「く」の字口縁、端部面取りで刻目あり	外ハケのち一部ナデ、内口縁ハケのちナデ、肩以下ナデ	〃
第62図 7	〃	口径15	やや不良 不良	黄橙色 橙色	外反する「く」の字口縁	外口縁ナデ、頸指頭圧、肩以下ハケのちナデ、内口縁ナデ、肩以下ハケのちナデ	〃
第62図 8	鉢	口径13.3 胴部径11.4	並 やや不良	褐灰色 淡褐灰色	外反する「く」の字口縁、端部面取り、面には工具による沈線（1）あり	外面口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内面口縁部ナデ、肩部以下ヘラ削り	〃
第62図 9	甕		並 不良	淡茶褐色	やや外反する口縁、端部は波状、外面上位斜行刻目	内外面ナデ	上層出土 外面に煤付着
第62図 10	底部	底径 5.4	ともに並	淡黄褐色 灰褐色	平底	外面ハケ、底部付近ヘラ削り、内面ハケのちナデ	上層出土、外面に煤、内面に炭化物付着
第62図 11	高坏	脚部径10.6	やや不良（1～2㎜大の砂粒を多く含む） 並	淡褐灰色	外脚上位に5条（以上）、中位に4条の沈線、沈線は一本ずつ施され、らせん状にまわる可能性あり、下位に2個以上の透穴（4または6か）	外面ハケ、面取りを施した端部はヨコナデ、内面上位絞り（痕）下位ヘラ削り	上層出土、外面端部に黒斑あり
第62図 12	甕	口径17.9	良好 並	褐色	外やや下方へ大きく外反する「く」の字状口縁、端部面取り、内面頸部では内やや上方への稜をもつ		D 109区 pit62出土
第62図 13	壺		やや不良（1㎜大の砂粒含） 良好	黄灰色	外反する口縁、外面の器壁を二段にえぐり、凸部に棒状工具で半円状の施文	内外面粗いハケ	包含層出土、波状口縁になる可能性あり
第62図 14	甕		並 不良	淡茶褐色	外反する「く」の字口縁、端部面取り、下位に斜行刻目	外面ハケ、内面ナデ	包含層出土

北安江遺跡俯瞰（セントラル航業提供）

遺跡の全景（遺構検出時――東より）

遺跡の全景（遺構検出時――西より）



遺構の検出状況（東部）

遺構の検出状況（西部）

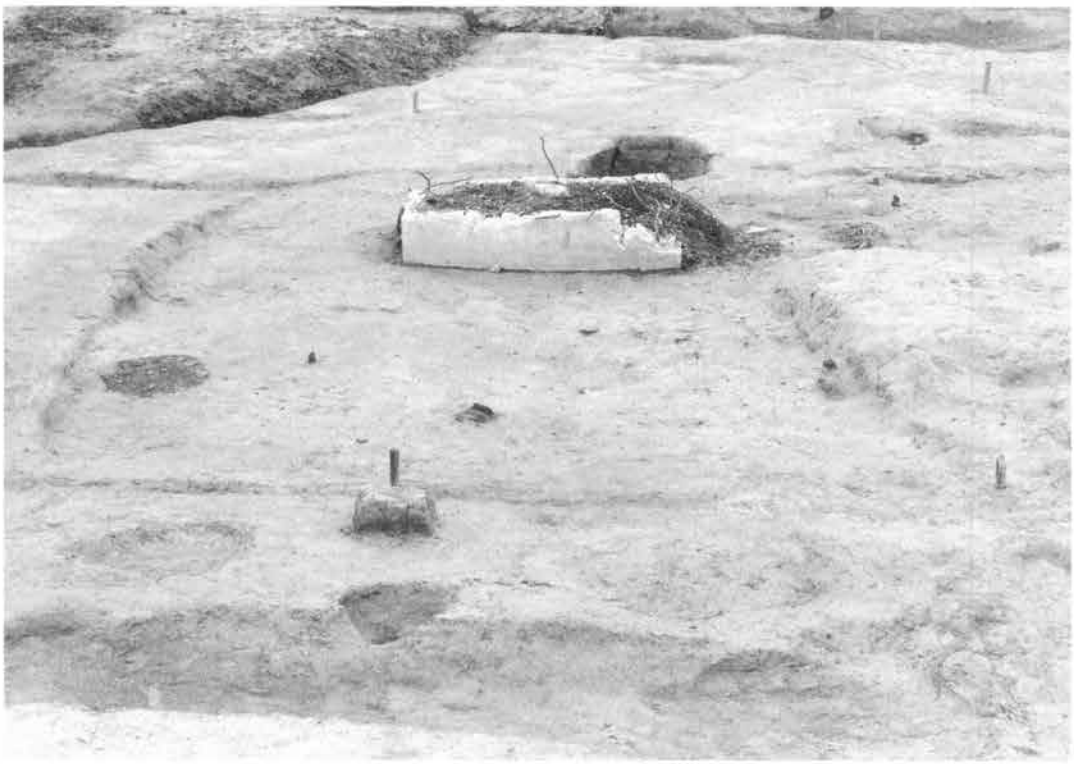
遺構検出後の全景（南東より）

遺構検出後の状況（東より）

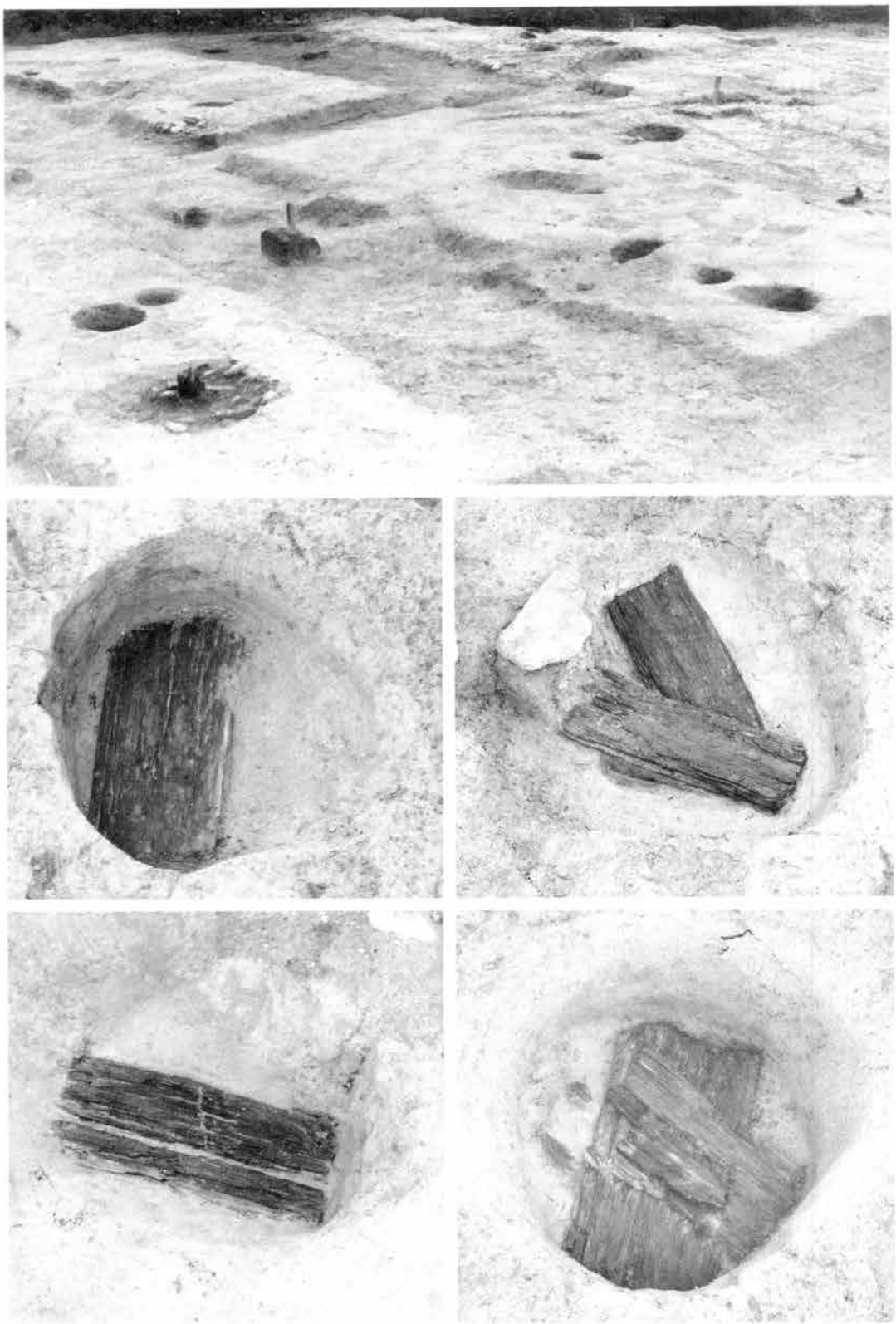
A８溝・A９溝・A10溝・C16溝全景（北西より）

B溝群全景（北より）

調査区北西部（A11溝・竪穴状遺構――南より）



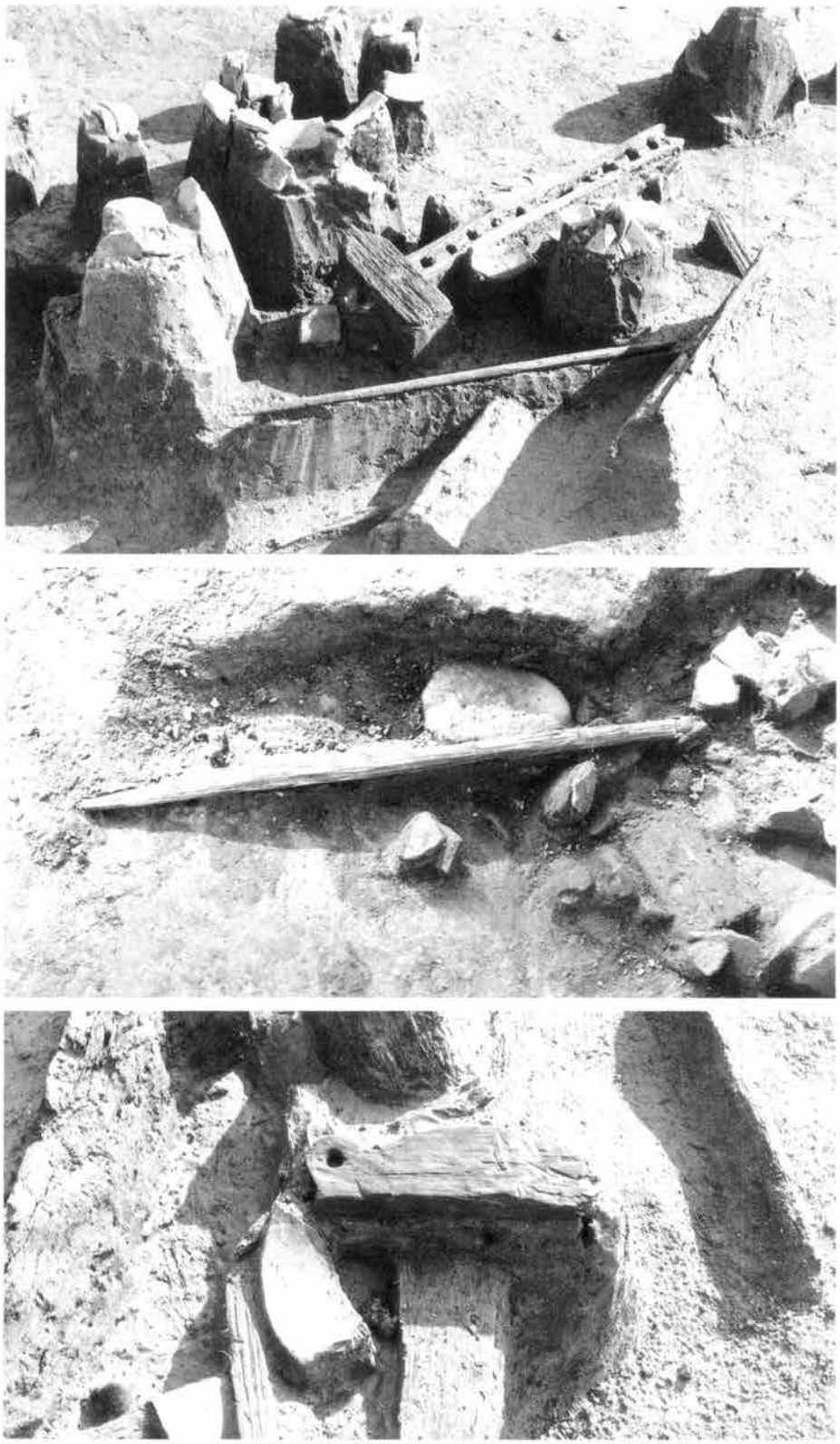
竪穴状遺構（南より）



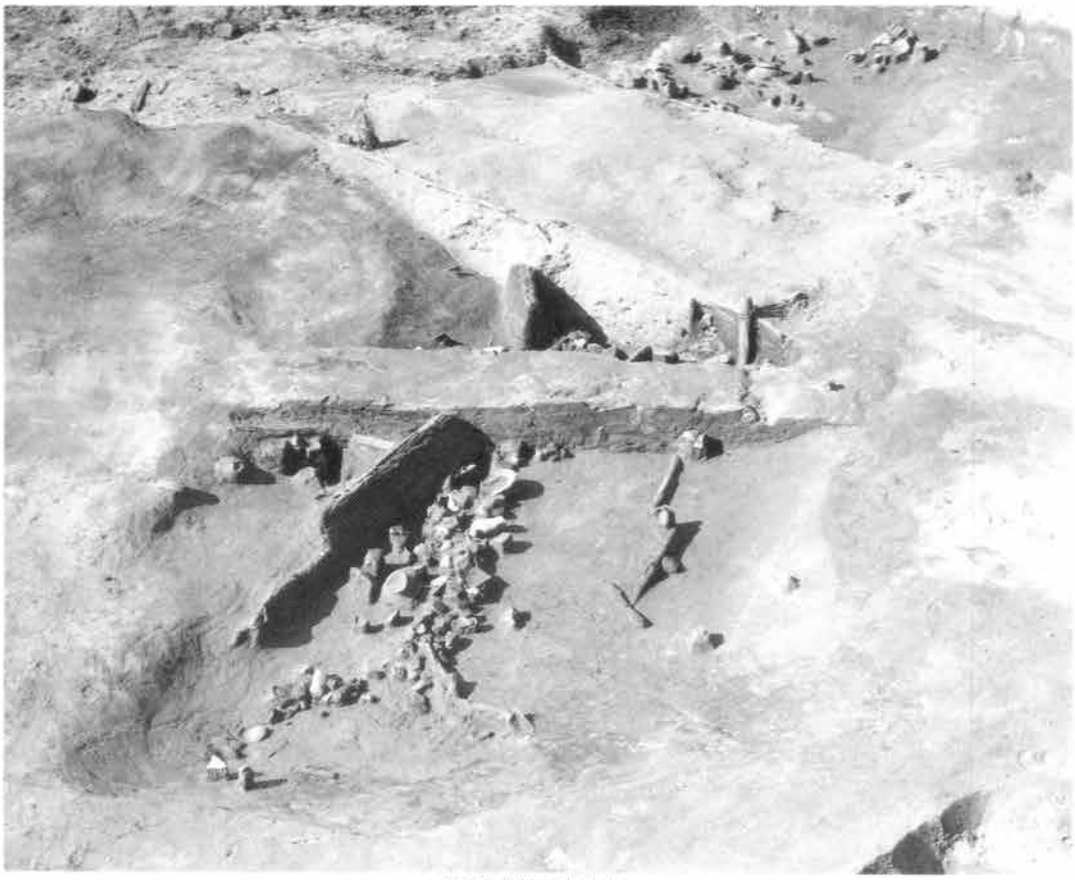
1号掘立柱建物跡とその柱穴

上―C16溝土器出土状態（下層）下―同溝堆積土層断面

上・中・下－C16溝遺物出土状態



上・中・下－C16溝遺物出土状態



C17溝全景（南より）

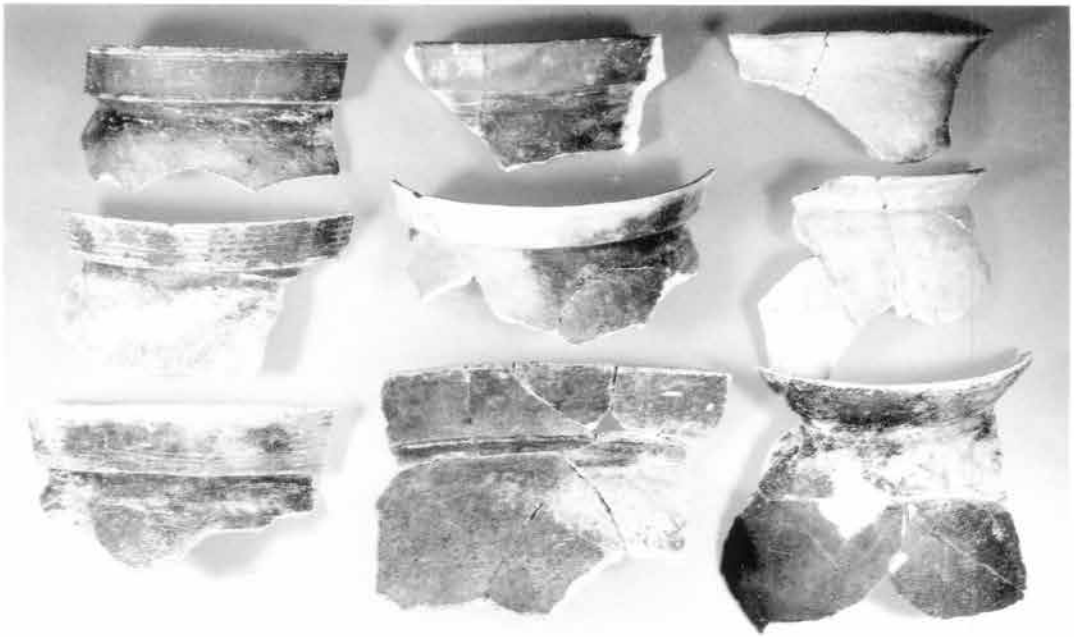
C17溝遺物出土状態

第２次調査区表土除去作業風景（東より）

第２次調査区第１地点検出の近世溝(北より)

第２次調査区第２地点弥生中期土器出土状況

第２次調査区第２地点遺物出土状況(東より)



29－19

31－43

47－35

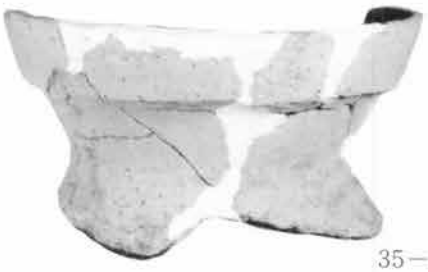
48－48

47－35

C16溝出土土器

37－104

34－73



35－81

34－75

35－83

36－93

36－102

C 16溝出土土器

51－88

42－180

36－136

40－137

41－166

40－139

42－168

42－170

C 16溝出土土器

44－206

55－162

54－135

50－69

43－182

43－200

44－193

55－163

C16溝出土土器

33－67

43－195

45－ 8

43－194

54－133

43－190

C 16溝出土土器

54－141

43－183

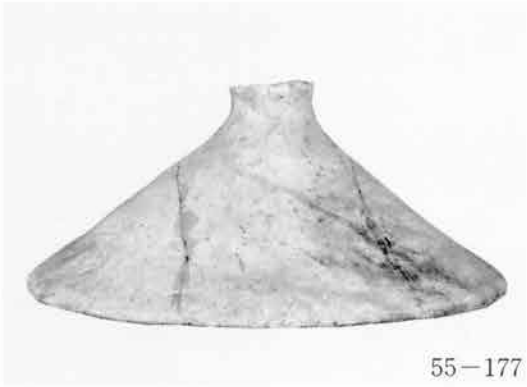
43－198

54－149

43－188

43－184

C 16溝出土土器


55－177

44－217

44－221

44－223

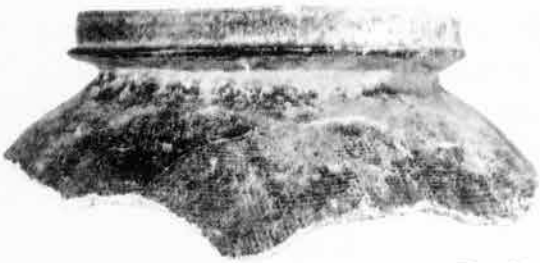
55－175

50－65

55－167

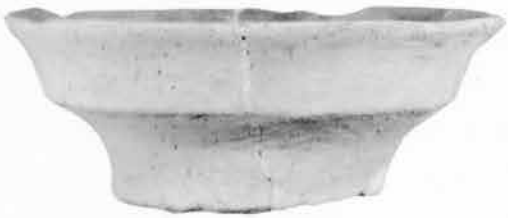
42－179

C 16溝出土土器



58－29

58－34



58－32

58－33

58－30

58－31

58－36

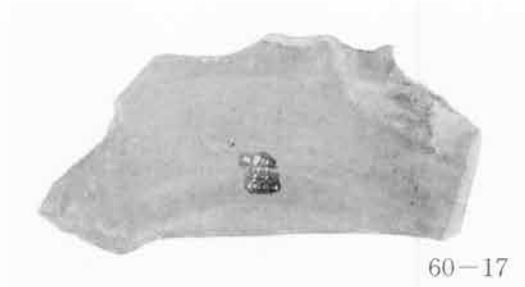
C 17溝出土土器

62－13

59－11

62－11

61－10

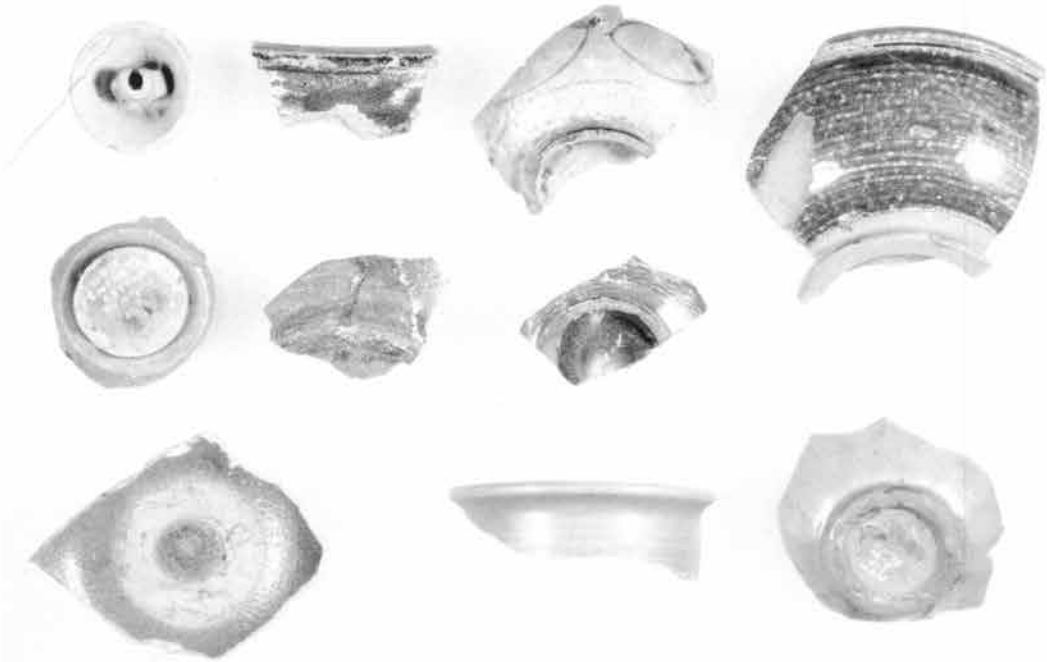

60－17

59－8

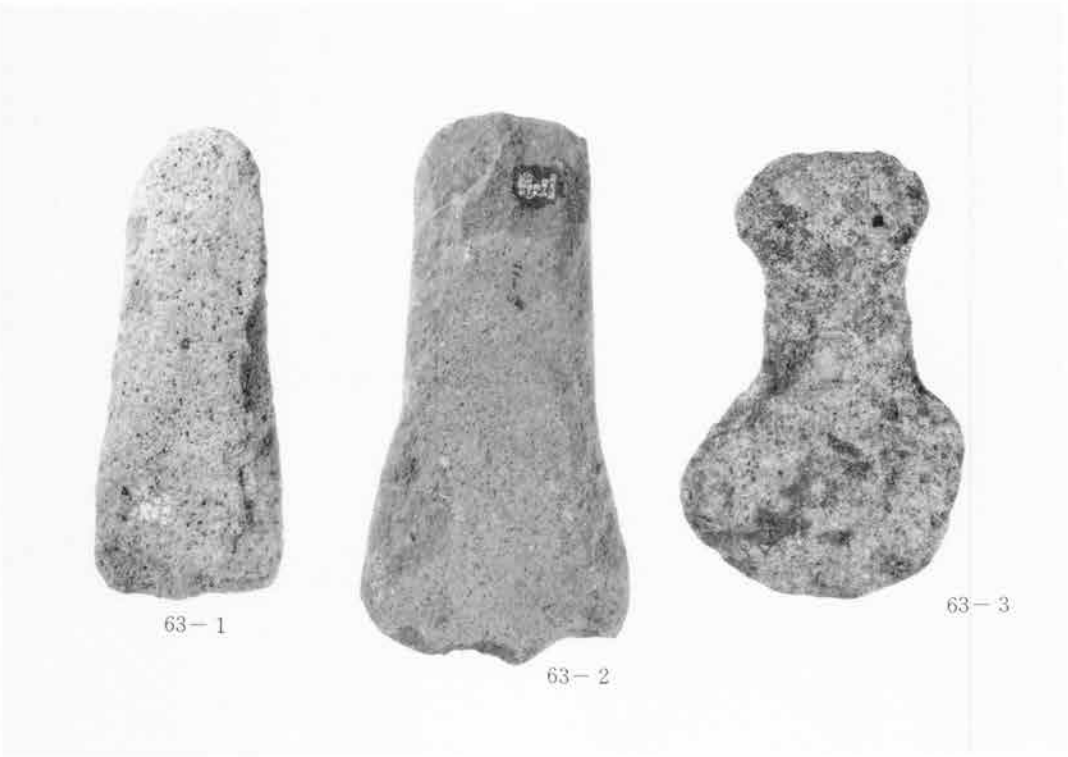
44－205

C16溝・C18溝・竪穴状遺構・C1溝・包含層出土土器

須恵器・珠洲焼・越前焼



中・近世の陶磁器類



上－打製石斧(縮尺1/3) 中－磨石・敲石(縮尺1/3) 下－管玉・勾玉(縮尺 実大)

66－1

70－1

66－2

66－3

66－7

66－4

66－5

66－6

左上－穂摘具形木製品（縮尺2/3）左中－鍬・すりこぎ状木製品等（縮尺1/3）
右上－手網（縮尺1/4）下－火鑽臼・火鑽棒（縮尺 実大）

金沢市 北安江遺跡

金沢勤労者プラザ建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行　昭和60年3月30日
発行者　石川県立埋蔵文化財センター
金沢市米泉町4丁目133番地
TEL (0762)43—7692
印刷所　北国書籍印刷株式会社
金沢市泉本町2丁目155番地